
水沢夢
[イラスト]春日歩
俺、ツインテールになります。17
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。17

水沢　夢

イラスト　春日　歩


水沢夢
[イラスト]春日歩
俺、ツインテールになります。17

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


観束総二
トゥアール
津辺愛香
神堂慧理那
イースナ


テイルブルーの魂は今
ここに結集した!!

目次

水沢夢
[イラスト]春日歩

俺、ツインテールになります。17

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）

主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

トゥアール

異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

イースナ

善沙闇子（いいすなあんこ）の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。
普段はストーカーで引きこもり。

観束未春（みつかみはる）

総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

津辺愛香（つべあいか）

総二の幼馴染。テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、
ネタにされると激しく怒る。

神堂慧理那（しんどうえりな）

総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

桜川 尊（さくらがわ みこと）

慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

16巻までのあらすじ

人間の趣味嗜好などが結晶化した精神エネルギー・属性力を狙う異世界の組織・アルティメギル。その組織に属する怪人・エレメリアンたちから世界の平和を守るべく、ツインテールへの愛・ツインテール属性を核に作られた空想装甲「テイルギア」をまとって戦う観束総二たち、ツインテイルズの戦いは続く。

エンジェルギルディに異世界へ連れ去られたトゥアールは、消滅しかける中で失ったはずのツインテールへの愛を手にする。そして奇跡のツインテールを結び、最後のツインテイルズ・テイルホワイトとして覚醒。長き戦いと復讐の旅に終止符を打った。

アルティメギル組織図

各異世界の侵攻部隊



ドラグギルディ部隊

隊長：ドラグギルディ

隊員：スワンギルディ、スパロウギルディなど

総二たちの世界に初めて侵攻してきた部隊。

- **リヴァイアギルディ部隊**　隊長：リヴァイアギルディ
- **クラーケギルディ部隊**　隊長：クラーケギルディ
- **タイガギルディ部隊**　隊長：タイガギルディ

ドラグギルディが倒されたことで侵攻部隊に増援された各部隊。
いずれも現在までに隊長がツインテイルズに倒されている。

■その他（引退戦士など）：ケルベロスギルディ



反逆者　フェニックスギルディ
ペガサスギルディ

組織に反旗を翻すなどしたエレメリアンたち。



アルティメギル首領

全エレメリアンの頂点に立つ絶対の存在。



離反

首領直属戦士 ダークグラスパー

四頂軍や各侵攻軍の統率者。
後に離反し、
テイルブラックとなる。

アルティメギル四頂軍（しちょうぐん）

神の一剣（ゴー・ディア・ソード）



隊長：エンジェルギルディ
元隊長：アポロギルディ など
戦女神：ヴァルキリアギルディ

ツインテイルズと激闘を重ねてきたアルティメギル最強部隊だが、
マーメイドギルディが己の野望のために乗っ取っていたことが明かされた。

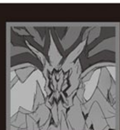
死の二菱（ダー・イノ・ランヴァス）



隊長：ティラノギルディ
右牙（ライトファング）の副将：プテラギルディ
左牙（レフトファング）の副将：トリケラトップギルディ

一般兵に至るまで強力な処刑部隊。隊長のティラノギルディはツインテイルズを壊滅寸前まで追い込む強敵だったが、覚醒したレッドに敗北した。

貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）



隊長：ユグドラシルギルディ
副隊長：ラフレシアギルディ
マンドラゴラギルディ

総二たちが訪れた異世界で総力戦を繰り広げた部隊。結束力が強い。

美の四心（ビー・ティフル・ハート）



隊長：ビートルギルディ
副隊長：アラクネギルディ
隊長補佐：スタッグギルディ

ダークグラスパーと共に参戦した部隊。永い死闘の末、完全敗北した。

プロローグ

それぞれの思い。

朝早くから続いた仕事も、夕方でようやく一段落。善いい沙すな闇あん子こちゃんのお帰りじゃ。

アイドル稼業も楽ではないが……どれだけ戦いが激化しようとも続けてきたライフワークじゃ。弱音を吐いてはおれぬ。

後の事務処理をメガネドンに任せると、わらわは総そう二じたちの学校へと向かう。

ツインテール部部室に入ると、珍しく慧え理り那なが一人だけで座っておった。

「おや、総二たちはまだ来ておらぬのか？」

「こんにちは、イースナさん。観み束つか君たちは、ホームルームが長引いて少し遅れると連絡がありましたわ」

いい加減、慧理那もイースナと呼び捨てにすればよいものを……。とてもそうは見えんが、わらわより四つも年上なんじゃぞ。

「世界有数のお金持ちのお嬢様と世界トップレベルのアイドルが、二人だけで密会じゃ。ちょっとしたスクープじゃのう」

わらわは椅い子すに腰を下ろし、慧理那へと悪戯いたずらっぽく笑いかけた。

「ふふふ。しかも、その二人ともが世界的アイドルのテイルレッドのお友達なのですわよね」

ふむ、慧理那の言うとおりじゃ。

わらわのファンたちも、わらわがテイルレッドの友達だと知ったら驚くじゃろうな。

「身体からだは大事無いか、慧理那。一昨日おとといの戦いはホンット大変じゃったからのう……しかも受けたダメージの大半が味方から食らった攻撃って、そうそうないぞ」

一昨日は野暮用で別世界にまで乗り込んで、激しい戦いを繰り広

げた。傷は負ったが……その分いいこともあったので、帳消しじゃがな。

「ええ、津つ辺べさんは昨日きのうお辛つらそうでしたが……わたくしは何ともありませんわ」

　慧理那も頑固じゃから辛いとは言わんじゃろうが、結構痛みは残っておるじゃろうな。慧理那と同じぐらい攻撃を受けたわらわがそうだから、間違いない。

　さて……せっかく慧理那と二人きりなので、わらわは前々から思っていたことを聞いてみることにした。

「ところで……慧理那は最近、総二を見ていて何か変化に気づかぬか？」

「えっ……観束君の、ですか？」

「総二がな、何か最近ますますかっこよく見えるんじゃよなー。何でかな、顔形がそうそう変わるはずもないのになー」

　これはとりあえず前置きじゃ。そんな理由、自分でもわかっておるからのう。

　──好きになればなるほど、同じ顔でもかっこよく見えるもんじゃろ？

「……わたくしもそうですわ。観み束つか君を見ると、以前よりもどきどきしますもの。息が荒くなるのを、止められませんもの──」

　そうか。慧え理り那なも……同じなんじゃな。ならば、本題じゃ。

「慧理那は……この先、総そう二じとどうなりたい？　一八歳で結婚するのがお家うちのしきたりなんじゃろ？」

　しばしの沈黙の後、慧理那は穏やかに微ほほ笑えんだ。

「お母様は観束君を信頼なさっていますし……結婚することが確かならば、もう年齢にはこだわらなくていいと仰おつしやっていますわ。どちらかというと、観束君が未いまだにわたくしとの結婚を本気に受け取ってくださらなくて……。もちろん、現状に不満はない

のですが」

　やはり慧理那も、拒こばんでおるのじゃな。無理に関係を変えてしまうことを。

　最近、ふと思うのじゃ。漠然と考えてしまうのじゃ。

　不安とは違う。怖いわけではないが……この先、わらわたちはどうなるのじゃろう、と。

　なまじ、戦いの区切りが見えてきてしまったせいで……戦いが終わった後のことを考えてしまうようになった。

　戦いは終わって欲しい……が、わらわたちの関係はずっと変わってほしくない。

　わらわは……いつまでも、みんなと一緒にいたいのじゃ──

◇

　放課後。ツインテール部部室には、わたくしとイースナさんの二人きり。

　そこでイースナさんに観束君とこの先どうなりたいかと尋ねられ、ふと考えたのです。

　わたくしは、観束君が初恋の相手です。それ以外の恋を知りません。

　だからわたくしは、この先を知りません。この、燃えるように熱い感情……恋の先に何が待っているのか。

　そして自分で知らないから、求めることすらできないのです。

「わたくしは、皆さんに比べて魅力がありませんから……あまり多くを望むことは、許されないような気がして……」

「そんなことないじゃろ……傍はたから見てると総二にとってめちゃくちゃ特別な存在じゃぞ、お前」

「それを仰るなら、イースナさんには特別甘いというか、優しいですわよ、観束君」

　二人で笑い合う。

　そしてわたくしは、自分にとって一番わかりやすい例え話を出しました。

「……わたくしの好きなヒーロー番組でも、仲間内で一人の女性を巡って複数の男性が争うということが描かれていたことがあります。本当は……争うはずなのですわよね。同じ男性を好きになったのですから」

「じゃが──」

「……ですが。わたくしたちなら……ツインテイルズなら、そこで争う必要はないのではないかと……思ってしまっているのです」

　イースナさんの言葉を遮さえぎるように言ってしまいましたが、イースナさんは嬉うれしそうに微ほほ笑えんでくださいました。

「ふふん。そうこなくてはな。ま、貧乳あたりは反発しそうじゃが……言うてあやつもトゥアールのことめっちゃ好きじゃからな、最終的にはわらわたちと同じ考えになると思うぞ」

　それを聞いて、わたくしはイースナさんの思いを悟りました。

　今の関係を、無理に変えたくない。

　わたくしと、同じことを考えてらっしゃったのですね……。

　人間がいる限り生まれ続けるエレメリアンとの戦いに完全な終わりはないが、大幹部を倒し続けた先に区切りはある。トゥアールさんとイースナさんが度たび々たび仰おつしやられていたことです。

　そして今、その区切りが見えてきました。

　だからふとその先を考えてしまったイースナさんの気持ち、よくわかります。

　わたくしは恋の先を知らない。いえ……知らなくてもいいとさえ、考えてしまいます。

　この幸せな時間が、ずっと続いてくれるのならば。

　わたくしたちは人々の心の輝き──属性力エレメーラを守り、戦ってきました。

　けれど属性はあまりにも多く、まだまだわからないことだらけです。

　その未知の可能性の中に……それはあるのでしょうか。

　愛と恋を成就させ、なおかつ多くの大切な人たちともずっと一緒にいたい。

　そんな欲張りな願いを体現した属性は、あるのでしょうか。

　今のわたくしのこの思いを、何という属性と呼ぶのでしょうか……。

「お、総そう二じたちが来たようじゃぞ」

　防音構造のお陰で足音は聞こえないはずなのですが、イースナさんはそう仰います。

　果たして部室のドアが開き、観み束つか君たちが入ってきました。

　笑顔で手を振る彼の顔を見て──今日も、強く思うのです。

　この素敵な日々は、素晴らしい時間は、ずっと変わって欲しくない。

　わたくしは……いつまでも、みなさんと一緒にいたい──

第一章　ツインテールにモテたい。

　放課後、繁華街にエレエリアンが出現。俺とブルー、イエローの三人で出撃した。

　ブラック──イースナは仕事だ。最近激闘続きで、仕事をセーブしてくれていたみたいだから……それが解決した今は、思う存分アイドル活動に専念してもらわないとな。

『エレメリアンは転送ポイントから南東へ三〇〇メートルの地点です！　皆さん、今日も頑張ってくださいね!!』

「ああ、ありがとう！」

　活いき活きとしたトゥアールの声が、通信越しに聞こえる。これから戦場へ向かうというのに、俺たちはつい安あん堵どの表情を浮かべてしまう。

　トゥアールが元気になって……本当によかった。

　ビルとビルの間を飛び跳ねて移動していると、トゥアールのオペレートどおり眼下にエレメリアンを発見した。

「ぬふふ前髪が短いねえ……もっと伸ばそうねえ……目が隠れるくらいにねえ」

「きゃ──────気持ち悪い──────っ!!」

　人集りの中で、何やら騒いでいる。

　そして何やらキモがられている。

「そこまでだ、みんなから離れろ!!」

　俺が着地し、エレメリアンの前に立ちはだかると、周囲から歓声が起こる。

「ぬふふテイルレッド……。……おっと、この口調はいけないのだった……」

　仕切り直すように咳せき払いするエレメリアン。

「俺はシーオッタギルディ……目隠れ属性ヒドウンアイの戦士

だ!!」

　シーオッタギルディか。うん……名前の通り、ラッコのように小さくぷにっとしてそうな手に、胴長でモコモコな身体からだと、どこか頼りない外見だ。愛あい嬌きようはあるんだけどな……。

「それでだな！　えーと、その……何だ……」

　そんであいつ、名乗りが済んだかと思えば、また言葉に詰まってるぞ。

「モケー」

　見かねたように、後ろに控えていた戦闘員アルテイロイドの一体が小さな紙片を差し出した。

「ふむ……まずは褒ほめるのか……『今日も可か愛わいいぞ、テイルレッド!!』」

　そしてその小さな紙片に目を落とすや、棒読みでそんなことをのたまったかと思えば……俺にニヤリと笑いかけた。あれカンペだよな、多分……。

「昨日きのう出た奴やつと同じで、何か妙に着飾ってるわね……」

　シーオッタギルディを見て、ブルーが怪け訝げんな表情を浮かべた。

　確かに、昨日戦ったエレメリアンもそうだったのだが、こいつも普通のエレメリアンと比べておかしな格好をしているのだ。

　手首には高そうな腕時計。五本の指全てに、シルバーのリング。それらと全く統一感を感じない金色のネックレス。薄いスモークのサングラス。

　極めつけは……ラッコのくせに、肩からボリュームたっぷりのファーをかけている。

　俺もお洒しや落れは全然得意な方じゃないが──

「ダサ……」

ブルーが忌き憚たんのない感想を漏もらす。うん、何か頑張りすぎてダサいんだよな……。

「全部、人間世界の服飾品のようですが……ああ見えて何かの武器なのでしょうか」

イエローは、自分と同じく着ているものが武装になる可能性を警戒しているようだ。

シーオッタギルディは俺たちの様子など気にせず、自身の属性の主張を始めた。

「目隠れっ娘この神しん髄ずいは、他者からその円つぶらな目が完全に見えなくなるまで前髪で隠れることにある……片側だけ隠すスタイルもよいが、俺が好きなのはやはり……両目とも前髪で隠れてしまうスタイルだ!!」

『ちょっとわかります。特に小さい女の子がやると、健けな気げな感じが強調されていいんですよねフへへ』

トゥアールの嬉き々きとした趣味丸出しのオペレートを聞いて、大きく溜ため息いきをつくブルー。しかしその表情には、どこか「仕方ないなあ」という優しさがある。

俺があらためて凝視すると、シーオッタギルディはぎこちないウインクをしてきた。

「何だこいつ……薄気味悪いな……」

「テイルレッド……お前は前髪を伸ばそうと思ったことはないか！」

「え、いや……特には……って、おっと！」

シーオッタギルディは言うが早いか突然こちらへ駆け出し、俺の前髪に手を伸ばしてきた。

俺は咄とつ嗟さにブレイザーブレイドを出現させ、切っ先を突きつける。ならばと爪つめを伸ばし、ブレイドへと打ちつけてくるシーオッタギルディ。

「目隠れ属性ヒドゥンアイはツインテールと両立できる……ツイン

テールのためにもやってみぬか、テイルレッド！　そして世界に目隠れの良さを発信するのだ!!」

「ツインテールをダシに使うな！　目が前髪で隠れたら、前が見えなくて危ないだろ!?」

「いいや心配無用！　見えるのだ、目隠れっ娘は！　ここぞという時には髪の毛から瞳ひとみが透ける仕様なのを知らぬのか!!」

　し、知らない……仕様ってなんだ。心しん眼がんでも体得してんのか、目隠れっ娘とやらは。

　かくいう俺も、五感を失ってもツインテールで敵を捉えたりはできるが……同じような理屈なのか。

「とにかく、一般人にそんなことを強要するな!!」

　上段からのブレイザーブレイドの斬きりつけを、クロスさせた爪つめで受け止めるシーオッタギルディ。こいつ、小ちっちゃな手の割りには結構な力持ちだぞ。

「レッド、わたくしたちも──」

「「「モケー」」」

　周囲に控えていた戦闘員アルテイロイドたちの後ろから、さらに追加で数十体の戦闘員アルテイロイドが出現。

　ブルーとイエローはギャラリーを退避させながら、戦闘を始める。

『ギャラリーも多いですし、戦闘員アルテイロイドもどんどん投入されてきています……ここは周りへのファンサービスも兼ねて、強化形態で一気に決着をつけましょう、レッド!!』

　弾んだ声でオペレートをしてくるトゥアールに了解を返し、俺は進化装備エヴォルブアームズ・プログレスバレッターをフォースリヴォンへと装着した。

　ライザーチェインへと形態変化チエインカスタムすると、ギャラリーから歓声が起こる。

「そのように装そう甲こうを追加するのなら、前髪も盛って目を隠してはみぬか!?」

「どんな理屈だよ！」

「目隠れではにかむお前は……ええと……きっと美しいぞ、テイルレッド!!」

　またカンペみたいなの見てたどたどしく柄がらにもないことを言ってくるんだが、あれはもしかしてナンパでもしているつもりか!?

　こいつにはもう、話は通じそうにないな……。

「完全解放ブレイクレリーズ!!」

　フォーラーチェインの飛ひ翔しようの軌跡が円柱型の結界・オーラピラーとなり、シーオッタギルディを拘束バインドした。

　再びライザーチェインにチェンジし、バックパックを最終噴射ファイナルブーストさせて突撃する。

「ライジングブレイザ―――――――――ッ!!」

　両手に握り締めたブレイザーブレイドツインによる同時斬ざん撃げきで、シーオッタギルディの胴体に八の字の斬ざん痕こんが刻まれた。

「ぐああああああああああああああああもはや前が見えん―――――ッ!!」

　断だん末まつ魔まの叫びを上げ、爆発するシーオッタギルディ。

　こいつは神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士じゃなかったけど、戦闘力はそれなりにあった。

　残存部隊も着実に力をつけてきているってわけか……。

　しかし、気になることがある。

　シーオッタギルディ含め、二日連続で一般兵のエレメリアンが現れたのだが……そのどちらもが、先ほどのように俺をナンパするよ

うな言動をしてきたのだ。

　いつものことのようで、何かが違う。無理にやっているせいでぎこちないというか。

　こいつらが似通った行動をする時って、大体が何らかの作戦の一環なんだよなあ……。

「レッドた────ん上結びのツインテールも可か愛わいいよ──────っ！」

　ギャラリーに声援を送られ、俺は手を振って応こたえる。そしてちょうど強化限界時間の二二秒が近くなり、ツインテールを元の中結びに戻した。

　ノーマル、ライザー、フォーラー、アルティメット。

　一度きりのものなどイレギュラーな形態を除く俺の全形態を一般市民に披露しているため、こうして戦いの中で形態変化チエインカスタムを見せることはお着替えの一環として認知されているようだ。

「あ、終わったー？　あたしたちもモケー倒し終わったわー」

　欠伸あくび交じりにランスを空薙なぎするブルー。

「終わりましたわ……はぁはぁ……」

　そして気がつけば、イエローは全武装を脱衣パージしている。夢遊病者のようにふらふらと近づいてくると、俺にしがみついてきた。

「レッドたんから離れろー！　最近まともになってきたと思ってたのに!!」

　ギャラリーに注意され、はっとするイエロー。

「仰おつしやるとおりですわ！　イメージ回復に努めてきたのに、油断しましたわ!!」

　悔恨が滲にじむのは言葉だけで、イエローの表情はますます緩み、俺に抱きつく力はさらに強さを増していった。期せずしてイエ

ローに目隠しをされ、俺はよろめいてしまう。

「はいはいもう帰るわよ……」

　ブルーは眠そうな声のまま俺ごとイエローを抱かかえて飛ひ翔しようし、戦場を後にした。

　みんな、ちょっと気が緩んでしまっているな。

　無理もないか。ほんの二日前に、俺たちはとてつもない激闘を終えたばかりなのだから。

　ツインテイルズにとって最も因縁深い相手、最凶のエレメリアンとの闘いを。

　アルティメギル最高科学者──マーメイドギルディ。

　彼女は、自分の欲望のためならば手段を選ばない恐ろしい怪人だった。

　ツインテイルズへの卑ひ劣れつな作戦の数々は言うに及ばず、仲間であるエレメリアンの利用、監禁、洗脳、改造など……悪行は枚まい挙きよに暇いとまがない。

　そしてその非道ぶりは、最終闘体エンジェルギルディへと進化したことで、ついに極まった。同じ科学者として目をつけていたトゥアールを、別の世界へと連れ去ったのだ。

　ツインテール属性でありながらツインテールを憎んでいたエンジェルギルディは、やがてツインテール属性そのものを消し去ろうとする。星一個まるごとを研究施設として改造し、自分一人で野望を叶かなえようと暴走し始めたのだ。

　それは……アルティメギルへの叛はん逆ぎやくも意味していた。

　俺たちは奴やつの要よう塞さい惑星・ビエルプラネットにおいて、凄すさまじい戦闘を繰り広げた。

　その闘いの最中、エンジェルギルディは生命いのちの危機に晒さらされていたトゥアールを巧妙に拐かどわかしてエレメリアンに改

造し、自身の手て駒ごまにしようとまでした。

　そんな非道の怪人の野望に待ったをかけたのは、誰だれあろう——トゥアール自身だ。

　ツインテール属性を捨て去り、二度とテイルギアもまとえず、ツインテールにすることもできなかったはずのトゥアール。

　しかしそれでも……属性力エレメーラを失ってなお、彼女の胸にはツインテールへの愛が残っていた。小さな小さな思いが、少しずつ育はぐくまれていた。

　その愛の存在をトゥアールが自覚したことで、大いなる奇跡は起こった。

　トゥアールは最後のツインテイルズ・テイルホワイトへと覚かく醒せい。ついにエンジェルギルディを撃破し、因縁に終止符を打ったのだ——。

　あの日のテイルホワイトの勇姿を思い出しながら、俺は地下基地へと帰投。ブルー、イエローとともに、変身を解除した。

　転送ゲートの部屋からコンソールルームへと移動し、ドアを開けた瞬間——

「お帰りなさいませぇん、あ・な・た♡」

　トゥアールが勢いよくジャンプし、俺に飛びかかってきた。

「うわっ……トゥアール!?」

「トゥアールちゃんになさいます～？　トゥアールちゃんになさいます～？　それともぉ～、トゥ・アー・ル・ちゃん？」

　俺に抱きついて身をくねらせるトゥアール。

　問いかけ全てで声こわ音ねとアクセントに変化をつけるという小技を披露しているが、その実三択に見せかけた一択だった。

「浮かれすぎじゃボケエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ

エエエエエ!!」

「ニイヅ━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━マ!!」

　俺が何かを言うより先に、戦車砲じみた衝撃波を伴った愛あい香かの鉄拳がトゥアールのボディへ炸さく裂れつ。トゥアールは、頭から天井へと突き刺さった。

　今日はまた、一段とすげえ音したぞ……。

「すごいですわ……今までは首から上が天井に埋まるぐらいでしたが、今回は膝ひざ上までめり込んでいます！　津つ辺べさんの技が進化している証拠ですわ!!」

　冷静に分析してはるわ生徒会長はん。

「～～～～～、～～～～～～～～……」

　トゥアールはめり込んだまま、唯一自由な足をばたつかせる。

　その反動で体を捻ひねると、さながらネジを逆回しにする要領で、深く埋め込まれた天井から生還を果たした。

「フッ……この技の冴さえは即ち、悔くやしさの裏返し。負け犬の嫉しつ妬とは心地ここちいいですねぇ～、愛あい香かさん？」

　白衣の埃ほこりを払いながら、ドヤ顔で愛香を挑発するトゥアール。

「最近テンション高くてつき合ってらんないわ……！　今日はもう帰ろ、そーじ！」

　俺の腕を掴つかんで歩き出し、基地を後にしようとする愛香。

　するとトゥアールは愛香の手を軽く叩たたき、掴んでいる俺の腕を放すように促うながした。

「総そう二じ様の幼馴染おさななじみであることに免じて多少のお触りは許してあげますけど～、自じ粛しゅくしていただけませんか～？」

　外国人のような大おお仰ぎょうな仕草で首を振ると、これ見よが

しに肩を竦すくめるトゥアール。

「はぁ!?」

　多分に苛いら立だち交じりの声を上げる愛香へ、トゥアールはさらに煽あおりを強めていく。

「私、総二様からキスしてもらいましたしー、されちゃいましたしー。もう愛香さんの入り込む余地はないっていうかー、ルートが決定したっていうかー。ねー、総二様っ」

　その言葉でとあることを思い出して気恥ずかしくなり、俺は身を縮める。

　死への恐怖に怯おびえるトゥアールが、俺に言ったのだ。「キスも経験したことがないまま死にたくない、キスをすれば元気が出ると思う」と。

　俺はトゥアールの力になりたい一心で、自分からトゥアールにキスをした。

　しかしトゥアールはビエルプラネットから帰還した後、そのことを何度も何度も愛香たちに吹ふい聴ちようして回っているようなのだ……。

「むー…………」

　俺の方を見て、何な故ぜか頬ほおを膨ふくらませる慧え理り那な。

　トゥアールは俺なんかにキスをされても嫌そうにしている様子はないし、俺もあの時はあれでよかったのだと思っているが……こんなふうに愛香とのじゃれ合いの度たびに持ち出されるのは堪こたえるなあ……。

「総二様～、蛮族が怖いです～またちゅーで元気出させてくださいなっ☆」

「えっ!?」

　ぎょっとする俺目掛け、飛びかかってくるトゥアール。

「☆がうぜえええええええええええええええええええええええええええええええ!!」

　愛香は迎撃しようと拳こぶしを振りかぶったが――それは、空くうを切った。

「私がどれだけ愛香さんの攻撃を受け続けてきたと思っているんですか？」

　白衣を翻ひるがえし、アイススケーターが氷の上を滑るような運足で愛香から距離を取るトゥアール。あれが本当に、科学者のフットワークか……!?

「私は常に進化し、前へと進み続けています。ちゅーもできずに過去に留とどまったままの愛香さんのパンチでは、遥はるか前を歩む私に届かないのは道理です」

「へー……やるじゃん」

　トゥアールの動きを見て、苛いら立だちを重ねるどころか感心したように笑う愛あい香か。

　俺も復活したトゥアールの戦闘スタイルを見た時度肝を抜かれたことは、記憶に新しい。何とテイルホワイトは、徒と手しゅ空くう拳けんでの肉弾戦を得意とする戦士だったのだ。

　だからだろう。ここ数日、愛香のツッコミにこれまで以上に遠えん慮りょがなくなっているのは。

　愛香は怒りを静めたようだが、今度は闘志が刺激されたようだ。ボクサーのように軽やかなステップを刻み、身体からだを温めていく。

「うっわ、ぴょんぴょん飛び跳ねても全くおっぱい揺れないですねこの人」

　愛香を指差して笑うトゥアール。

　けど、愛香のツインテールは揺れてるぜ。

「しっ…………!!」

　トゥアールの動きを見切ったのか、愛香は一足飛びで距離を詰め、閃せん光こうのようなジャブを顎あご先へ見舞う。

「揺れッッ……」

　トゥアールは脳を揺さぶられ、膝ひざから崩れ落ちた。

「……トゥアールさん……本当に元気になりましたわね」

「ああ。そうだな……」

　慧え理り那なは、二人のやりとりを見て感心していた。俺も同意する。

　トゥアールは、強い。

　テイルホワイトに変身できたことで、ツインテールを再び手にはしたが……それは、変身している間だけ許される一時的なものだった。だがトゥアールはそれをぬか喜びだったと嘆くどころか、確かな希望として受け取った。

　どれだけ年月がかかろうとも自分の力でツインテールを取り戻すと、あらためて誓ったんだ。そこに俺たちは、彼女の心の強さを見た。

　そんなトゥアールの活躍によって、エレメリアンの中でも度外れた異端、エンジェルギルディ──何をしてくるかわからない邪悪は滅び去った。

　残っているのは今までどおり、誇りと自らの属性への愛を重んじる純粋な戦士たちだろう。どれほど相手が強かろうと、俺たちも真っ向から戦い抜くだけだ。

　そういう意味では、アルティメギルとの戦いにおける最大の山場は越えたのではないか──と、俺たちは考えていた。

　しかし完全決着を迎えたエンジェルギルディ絡みの一件で、今でも後を引いているものが一つだけある。

「……唯ゆ乃の……」

　俺は隣の慧理那にも聞こえないような小声で呟つぶやき、虚空を

仰ぐ。

　エンジェルギルディは、戦いの最中に俺たちへと告げてきたのだ。

　フェニックスギルディが……結いわ翼ばね唯ゆ乃のが、首領との対決に敗れて死んだと。

　未いまだに唯乃の安否はわかっていない。俺にだけ「しばらく会えない」と夢で告げてきたことも、今にして思えば別れの挨あい拶さつだったと取れなくもない。

　それでも俺は、唯乃が生きていると信じている。あいつはその名の通り、不死身の戦士だからな。

　唯乃といえば……彼女に師事したという戦士・スワンギルディの行方ゆくえも気がかりだ。

　あいつはエンジェルギルディとの戦いで、計らずも俺たちを助ける形となった。そのせいでエンジェルギルディの怒りを買い、異世界へと飛ばされてしまったのだ。

　あいつもしぶとさは筋金入りだ、またすぐに舞い戻ってくるとは思うが……。

　……何か俺、エレメリアンの心配をしてばかりだな。

　世界を守るためにエレメリアンと戦っている俺たちツインテイルズだが……多くの局面で、そのエレメリアンに助けられているんだよな──。

◇

　総そう二じは戦いが峠を越したのではと安あん堵どしていたが……あながち間違ってはいなかった。

　アルティメギル基地の大ホール内では、屈強な戦士たちがいつになくくたびれた様子を見せている。覇は気きの欠片かけらもない。

　ホール内に立ち込めるどんより淀よどみきった空気を見れば、彼らが戦意を喪失してしまったのではないかと思うことだろう。

　その理由は、モニターに映し出されているシーオッタギルディの映像にある。

　だが彼らは、出撃した戦士が負けて意気消沈しているのではない。基本、ツインテイルズに負け続けている彼らが、今さらそれぐらいでへこたれたりはしない。

『何だこいつ……薄気味悪いな……』

　今モニターに表示されたように、テイルレッドが今まで以上に気持ち悪そうにエレメリアンを見てくるようになったせいだ。

　あんな蔑さげすむような眼めで見られては、まるで自分たちが変質者、不審者のようではないか。

　しかも、その原因を作ったのは彼ら自身ではない。

「うーん、まだちょっとモテ力が足りなかった感じ？　めちゃんこ頑張んなきゃだよねぇ」

　このめちゃんこふわっとした感想でシーオッタギルディの戦闘を評した、上司の指示にあるのだ。

　彼は最近この基地にやって来た、神の一剣ゴー・デイア・ソードを名乗る戦士・ポセイドンギルディだ。誰だれ憚はばかることなく、アルティメギル一のイケメンを自称している。

　着任早々、自分の指導を受ければモテモテになる──などと調子のいいことを言って残存軍の戦士たちのハートをガッチリ掴つかんだまではよかった。

　だが、ちょっと講習を受けた程度でモテモテになれるのなら、人間の男も女も苦労はしていない。案の定、ポセイドンギルディ言うところのモテグッズで武装したシーオッタギルディが、あの有様だった。

　戦士たちは、口々に弱音を吐き始める。

「テイルレッドへどんなに熱烈な愛を囁ささやこうと、返って来るのは容よう赦しゃ無き斬ざん撃げきなのだな……」

　そうぼやいた戦士の腕につけたパワーストーンが、虚むなしく音を立てる。

「テイルレッドの剣を受けるのならばまだいい。昨日きのう出撃した奴やつなど、テイルブルーの拳けんをこれでもかと受けていたからな……」

　さらに別の戦士は、筋きん骨こつ隆りゅう々りゅうの肉体にそぐわぬ可か愛わいいデコレーションシールを身体からだ中じゅうに貼っている。

「テイルブルーは昔からテイルレッドの保護者面をしてくるからな、忌いま忌いましい……！」

　この戦士に至っては、通販で買ったフェロモン香水を一瓶びん全部頭からかぶったせいで、ホール中に甘ったるい香りを振りまいている。

　つまるところ、ポセイドンギルディのモテアドバイスはことごとく空回り。エレメリアンたちは今も、紛まがうことなき非モテのままだった。

　それは雨粒が天から地へ落ちるのと同じぐらい、当然のことであった。

　むしろモテようと足あ掻がき始めたせいで、かえってテイルレッドに気持ち悪がられているではないか。

　それでもそこは「やっぱやめましょうよ」と言えない縦社会、体育会系組織。

　ポセイドンギルディは決して自分たちをからかっているのではなく、真剣にアドバイスしてくれているのがわかっているので、なおさら意見できないのだ。

「ポセイドンギルディ殿……やはり、テイルレッドという本番に挑む前に、身近な女性に我われ々われの成長したモテ度をチェックし

ていただきたいのですが……」

　戦士たちが、もっともな意見を提案する。

「そういえば、最近エンジェルギルディちゃんを見かけないのですが……また研究室にこもって、何ぞ発明でもしておられるのでしょうか」

「あ、エッちゃん？」

　ポセイドンギルディは自他ともに認める陽キャだけあって、エレメリアンを○○ちゃんと呼ぶ。その陽キャは、からっとした表情で──

「あいつなら、ツインテイルズに倒されちったけど」

　とんでもないことを暴露した。

「「「えええええええええええええええええええええええええええええ!?」」」

　戦士たちは一斉に飛び上がり、のけぞり、ある者は腰を抜かした。

「エ、エンジェルギルディちゃんが……ああああああ……」

　この消沈ぶりは、テイルレッドにキモがられたことの比ではない。

　むさ苦しい男の園に長らく咲き誇っていた、一輪の花。

　闘う漢おとこたちの心を癒し続けたのが、マーメイドギルディ……そしてエンジェルギルディだったのだ。

　ほとんどの戦士が、彼女の本性をついに知らぬままでいられたのは、ある意味幸せなことかもしれない。

「まーそういうこともあるっしょ！　切り替えてこーぜ!!」

　エンジェルギルディが消えた今となっては、ポセイドンギルディのこの底抜けの明るさが残存部隊の救いだった。

「で、では……スワンギルディの行方ゆくえをご存じありませぬ

か。あ奴やつも最近姿を見かけぬのですが、まさか……」

　エンジェルギルディの本性を知る数少ない残存軍の戦士。参謀スパロウギルディは、縋すがり付くようにしてポセイドンギルディに尋ねる。

「ああ。あいつのことなら心配いらないよ、ハッちゃんが様子見に行ってるし」

　ハッちゃん……神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士、ハデスギルディのことだ。

　無事を確認することができ、ほっと胸を撫なで下ろすスパロウギルディ。

「とにかくエッちゃんの仇かたきを取りてーってんなら、なおさらテイルレッドをナンパしまくって、オトしてやんねーと。それが俺らにできる唯一の供養だろ？」

　確実に他にも供養の方法はあると思うが、ポセイドンギルディの言葉はいちいち全てが自信満々なので、戦士たちもつい納得してしまう。

　エレメリアンの真剣マジナンパという奇妙な侵略は、さらに苛か烈れつを極めようとしていた。

◇

　帰りのホームルームが終わり、俺と愛あい香か、トゥアールは部室へ向かおうと席を立つ。

　トゥアールは教室を出る時に出入り口で振り返ると、元気よく手を挙げた。

「皆さん、さっようならー！」

　トゥアールに挨あい拶さつされ、一瞬きょとんとしていたクラスの女子たちだったが、

「うん、またね、トゥアールさん！」

　程なく笑顔で挨拶を返してきた。

「…………………………何で未いまだにみんな、私をさん付けするんでしょうか……」

「あんたが総そう二じ様とか呼んでるのも、みんな何でって思ってるわよ……」

　愛あい香かにツッコまれながら、トゥアールは肩を落とした。

　でも一時期無理をして周囲に明るく振る舞っていたトゥアールが、今は自然な笑顔になっている。クラスのみんなにも、それが何となくわかるみたいだな。

　ツインテール部部室には、慧え理り那なとイースナが先に着いていた。桜さくら川がわ先生とメガ・ネは……来てないみたいだ。

　慧理那とイースナは、まるで何か秘密を共有し合うかのように、お互いを見やって微ほほ笑えむ。

　仲良しではあるのだが、この二人だけでお喋しやべりをしている光景は、意外と珍しいかもしれない。

　俺は彼女たちに笑顔で手を振ると、部室の中へと入っていった。

「さーて、今日は何の会議をしましょうか！　最近エレメリアンが妙に色気づいている理由でも考えてみましょうか!?」

　学生鞄かばんを壁の棚に置くや、元気よく議題を提示するトゥアール。

「トゥアールさん、最近すごく嬉うれしそうですわね！」

　慧理那にトスを上げられたトゥアールは、張った胸で頭が見えなくなるほど大きく仰のけ反ぞった。

「何たって総二様とちゅ――――――しましたからねちゅ――――――――!!」

　まだ言ってる……。もう勘弁してくれ、トゥアール……。

「なんでちゅーくらいでこんなマウント取ってくるんじゃこやつ!?　女子高生なのに子供みたいなことを……!!」

　イースナはそう言った直後、

「……女子高生……あっ……」

　何やら奥歯に物が挟まったような呟つぶやきに変わった。

「何ですかイースナ、あなたにわざわざ確認してもらうまでもなく私は女子高生です。それにあなただって、初めて総二様テイルレッドとちゅーした時は自慢していたでしょう」

　長机に座ってから、愛香は無言でトゥアールを見ていたが……やがて、落ち着いた口調で語りかけた。

「ねえ、トゥアール」

「ちゅー？」

　愛香の呼びかけに、ちょっと浮かれすぎた返答をするトゥアール。

「──あたしと勝負しない？」

　唐突な提案に、トゥアールは椅い子すごとバックジャンプして距離を取った。

「ひいっ！　い、いいじゃないですかキス自慢するぐらい！　どんなに脅されようが、あと数か月は自慢し続けますからね!!」

「そうじゃなくて！　いや、それもあるけど……」

　どうやら浮かれているお仕置きをされると勘違いしたようだが、愛あい香かの意図は違うようだ。

「あたし、あんたと真剣に手合わせしてみたいのよ。……テイルホワイトと」

「えぇ……」

　ドン引きするトゥアール。

　愛香は慧え理り那なにもイースナにも唯ゆ乃のにも、仲間が増える度たびに「手合わせをしたい」的に勝負をふっかけていたのだが……俺が見るに、今回はその真剣度が別格に感じる。

「ね――――、トゥーアールー。やーろーうーよー、やーろーうーよー」

　子供が駄々をこねるように、長机をぺしぺしと叩たたく愛香。

　音はぺしぺしなのに、机にヒビが……。



「甘えた声を出さないでください気色悪い！　あと誤解されるので、ちゃんと〝戦やろうよ〟と言っているとわかりやすいトーンにしてもらえますか⁉」

　自分の本気度を訴えるようにじっとトゥアールを見つめる愛香。

　今まで勝負を持ちかけた時は、相手が嫌だと言ったら結構あっさり引き下がっていた。なので今回は、かなり本気なのだろう。

　俺と慧理那とイースナは、黙って成り行きを見守ることにした。

「えっと……そうだ、キスです！　テイルホワイトに変身するためには、総そう二じ様とキスをするプロセスが必要不可欠です！　それでもいいんですか⁉」

「そんなんしなくても変身できるって。ちょっとやってみよ、ね？」

　瞳ひとみから光の消えた愛あい香かが、トゥアールに無茶振りをする。

「助けてください総二様────蛮性にサイコ要素が加わって手に負えません────っ‼」

　トゥアールに拒否され続け、愛香は深く息を落とした。

「聞いて。あたしね、メタルエレメリアンの群れを鉄拳でかっ飛ばしてくホワイトを見て、すっごくわくわくしたの──」

　大切な思い出を呼び起こすように、そっと瞳を閉じる愛香。俺も同じだぜ。

「それで思ったんだ──ああ、こいつと思いっきり殴なぐり合いたい、って……」

　すまない、やっぱ俺も同じじゃなかったぜ。

「ね……やろ？　トゥアール」

　愛香は頬ほおを紅潮させながら立ち上がり、トゥアールににじり寄っていく。

　トゥアールは椅い子すから転げ落ち、冷や汗を流しまくりながら後あと退ずさっていく。

「ああああああの愛香さん、女の私が言うのも変ですが……今結構可か愛わいい感じになってるので、その台詞せりふは総二様に言ってあげた方が――」

「ヤ。トゥアールとやりたいのっ」

　慧え理り那なが拗すねる時のように、ぷうっと頬を膨ふくらませる愛香。

「ぎゃあああああああああああホワイトと闘いたすぎてテンションの回路が焼き切れてらっしゃるあああああああああああああああああああああ!!」

　見ている俺も変な汗かいてきた。

　多分愛香の脳で、アドレナリンが変なスイッチ入れちゃったんだろうな……。

　ちょうどその時、転送ロッカーの扉が開き、仕事終わりのメガ・ネが部室に入ってきた。

　イースナがメガ・ネに手招きをし、来て早々に一仕事頼む。

「メガ・ネ、あの貧乳をしっかり録画しておけ。これ、後で映像見せたら恥ずかしすぎて大気圏外までぶっ飛ぶやつじゃ」

「え？　ええんかなぁ……」

　それは許してやれ……飛び上がるだけで済むならいいけど、下手すりゃ悶もん死しするぞ。

「いいですか、愛香さん……テイルホワイトにはあと何回変身できるか、私にもわからないんです」

　埒らちが明かないとばかり、トゥアールも真剣な面差しで愛香を諭さとし始めた。

「もしかすれば、あと一度だけが限界かもしれない。だったら私は、その一度を最後の戦いのために取っておきたいんです」

　トゥアールはエンジェルギルディとの戦いの後、俺に同じことを言った。まるで、誓いを立てるかのように。

　その一度とは、アルティメギル首領との戦いのことなのだろう。

「愛あい香かさんとのスパーリングで変身回数を消費して、肝心な時に変身できないのでは……元も子もありません。わかってください」

　ここまで言われれば、愛香も納得せざる得ないかと思いきや――

「残りのエレメリアンは、あたしが皆殺しにしてあげるからぁー。そうすれば、心おきなくあたしと戦えるでしょーっ？」

　愛香の変なテンションは、続行されていた。

「こやつ、甘えた顔のままこんなことほざくから恐ろしいわ」

　イースナでさえたじろぐ変貌っぷりなのだから、相当だぞ。

「わ、わかりました！　とにかく、もう少し私のブレス……テイルブレスレボリューションの解析が進むのを待ってください！　安定して変身できる確証が持てたら、ちゃんと勝負を受けますから!!」

「ホントっ？　約束よ！」

　やっと普通に戻った様子の愛香を見て、ほっと胸を撫で下ろすトゥアール。

　落とし所としてはそこしかないよな……愛香はその約束、果たされるまでずっと覚えてるだろうけど。

「勘違いしてますけど、私は愛香さんと違って変身前はごく普通のか弱い女の子なんですからね！　蛮族の戦闘欲を日常生活に持ち込むのは無しにしてください!!」

『オモシロイジョウダンダ……』

「うおっ!?」

　幻聴が頭に響き、俺は天井を、壁を見渡してしまう。

「どうした総そう二じ、そんな幽霊の声でも聞いたような顔をしおって」

　エスパーじみた洞察力のイースナに気遣われる。

　今、部室から……いや、校舎全体から響くようにツッコミが聞こえたような気がした。

　二人のじゃれ合いで破壊され続けたせいで、校舎に怨念が染しみついているとかじゃないよな……。

「けれど、きっとテイルホワイトが人々の前で戦う姿を披露したら、それはすごい人気者になられるのでしょうね……。それに引き換えわたくしは、昨日きのううっかり脱いではぁはぁしまいましたから、また世間の皆さんに不信感を懐いだかれているでしょうね……」

　うっかり脱いではぁはぁしまったって台詞せりふが日常生活でしれっと出てくるのがツインテイルズなのだが、慧え理り那なは昨日きのうの失態を気にしているようだ。

「気にするなって慧理那、すぐに挽回できるさ」

「そうよ、レッドとシルバー以外、世間の評判なんてどっこいどっこいなんだから。どうせトゥアールも何やかんややらかして、人気最下位になるだけだって」

　数分前とは転生したレベルで別人じみた普通さで、愛あい香かがフォローする。

　トゥアールは何か反論しようとした様子だったが、藪やぶ蛇へびになってまたホワイト関連の話題になるのを恐れたのか、口を噤つぐんでいた。

「昨日の戦いは、ニュースで報道されてるのかのう」

　慧理那が気になっているからだろう、イースナが備品のテレビの電源をつける。

　流れているのは、夕方のニュース番組だ。男女二人のキャスター

がテーブルに座っている。

『さて、いよいよ明後日あさつてはバレンタインデーですが……』

「お、よかったな慧理那、昨日の戦いのことはあまり引っ張ってないやもしれんぞ。ほれ、テレビの話題はバレンタイン一色じゃ」

　イースナが得意げにテレビの画面を指差すが──

『バレンタインデーといえばテイルレッドたんですね』

　国営放送のニュースキャスターが、真ま面じ目めな口調で恐ろしい原稿を読み上げていた。

　何でもかんでもテイルレッドと結びつけすぎだろ、この世界……。

『先日テイルレッドちゃんが「大切な人のために可か愛わいくなりたい」と発言したことが、世界中で大きな波紋を呼んでいます』

　女性キャスターの方が、やはり真面目な顔で淡々と告げる。

　それを聞いて、俺の背中を冷や汗が伝う。

「………………俺、そんなこと言ったっけ」

「あれでしょ、ＹＯＵヨウ　ＴＵＩＥチユーイに投稿してるエレメリアンと戦った時」

　愛香に言われて思い出した。

　トゥアールを元気づけるために、可愛い幼女の仕草を研究してたんだった。

　それで、動画投稿をやってるエレメリアンにどういう子が可愛いと思うか質問しちまったんだよな……。

　そこまで考えて、俺ははっとした。

「もしかして最近、エレメリアンがやたら格好つけて俺に迫ってくるのって……」

「そのせいじゃない？　あのピッグギルディとかいう奴やつも、

レッドが言ったこと曲解してたもんね。自分たちがモテてるって」

　自じ業ごう自じ得とくだ、と言わんばかりに呆あきれ顔の愛香。

　計らずして「何な故ぜエレメリアンが色気づいているのか」という、トゥアールが提示した会議の議題が結論づけられてしまった。

『大切な人とは、誰だれのことなのでしょう。テイルレッドたんに好きな男の子ができたのではと指摘する識者もいるようですが──』

『世界遺産のテイルレッドちゃんに好きな男の子が……もしそれが本当なら、大変なことですね』

　男女のキャスター二人が、真剣な顔で話し合っている。

　どこそこの国で大事件が起きましたみたいなトーンでテイルレッドのことを話題にされるの、すげーバツが悪いんだけど……。

『仮にその男の子とお付き合いするとなった場合、国連常任理事国の過半数の承認を得た後、審査を希望する人間全員の面接を通過する必要があると思われますが』

『しかしそれでは、ほぼ全人類が審査員に名乗りを上げるのではないでしょうか』

　俺が男の子とお付き合いするかどうか、そのために何が必要かを、本人の承諾も得ずに勝手にシミュレーションしている……。

　恐ろしくなり、リモコンを引っ掴つかんでテレビの電源をＯＦＦにした。

「テイルレッドとお付き合いをするためには、世界中の人々の許可が必要というムードなのですわね！」

　うふふ、と楽しげに微ほほ笑えむ慧え理り那な。

　いや当人はうふふじゃないですわよ。

　さすがに全人類相手取った面接は、俺も受かる気がしない。

「すでにわらわが総そう二じの恋人じゃから……事後承諾になるのう、国連よ」

　イースナは黒画面となったテレビへ、世界を相手取るかのように不敵な笑みを向ける。

「そんな大勢によってたかって審査されるなんて面倒くさいっての、まったく……」

「どうして愛あい香かさんが当事者ヅラで苦笑してるんですか、図々しい!!」

　しかもさらっと、俺が世界遺産に登録されてなかったか。この調子じゃ俺の知らない間にどこの何に登録されてるかわかったもんじゃないぞ。

「ですが、そうですよ！　いよいよ明後日あさつてはバレンタインデーですね!!」

　バレンタインの到来を喜ぶトゥアールを見て、俺は胸が熱くなる。

　先週バレンタインデーが話題に出た時──自分の死期を悟っていたからか、トゥアールは空元気を出している様子だった。

　けれど無事にこうして、みんなでその日を迎えられるんだからな。

「おっ、ちょうどいい話をしているな」

　部室にやって来た桜さくら川がわ先生は、俺たちがバレンタインデーの話をしているのを聞いて交ざってきた。

「奥様と、バレンタインデーの話をしてきたんだ。校内が浮かれる雰囲気になるよう、教師陣もしっかりサポートするように、とな」

　……普通、浮かれないように釘くぎを刺すところだと思うんだが、理事長……。

「せやな、総そう二じ君にはいつもイースナちゃんがお世話になっとるし……ウチもちゃあんとチョコあげるで～。楽しみにしといてな！」

「ははは、ありがとうメガ・ネ」

「「「□□□□□□!!」」」

　俺がメガ・ネに礼を言うと、ようやく和なごんだはずの部室内にまたピリッとした空気が立ち込め始めた。

「み、みんなどうしたんだ、何か妙にシリアスな雰囲気になってるけど」

　トゥアールは寂しげに顔を伏せ、神妙な口調で語った。

「これは……二月一四日が終わった後、この場にいる何人かは人間ヒトの形を保てていない可能性がありますね……分子レベルで分解し、消滅している人もいるかもしれません。バレンタインデーとは、そういうものです」

　バレンタインデーって、そういうものなの……!?

「うむ、私もお前には助けられているからな、とびきりの義理チョコをやるから楽しみにしていろ」

　メガ・ネと同じ保護者組の桜さくら川がわ先生は、そんな空気の中でものんびりとした口調で言った。

　俺はやはりメガ・ネの時と同じく、礼を伝えておく。

「尊みこと……」

　俺にチョコを渡すと言った桜川先生を、慧え理り那なは神妙な表情で見つめていた。

　何だろう、自分のメイドさんが他の人間にチョコを渡すのが面白くないとか……？　いや、慧理那に限ってそんなこと、なあ。

　俺が何かを気にするまでもなく、慧理那はすぐに皆との談笑に戻った。

　そういや、気にするといえばエレメリアンの動向だ。

　最近テイルレッドに変な迫り方をしてくるあいつらだ、バレンタインデーにかこつけてまた大暴れしなきゃいいんだが……。

◇

　総二たちがスタートゥアールで移動する際に極彩色のトンネルと表現していた、世界と世界を繋つなぐ道。その中のとある一つのトンネルの只ただ中なかで、一人の戦士が足あ掻がいていた。

　エンジェルギルディの攻撃で異空間に飛ばされた、スワンギルディだ。

　彼は別の異世界に辿たどり着くこともできずに、彷徨さまよっていた。

　空間移動能力を持たないスワンギルディではそこから脱出することはできず、やがて果てるはずだった。

　しかし──どれだけ時間が経たとうと、彼は決して諦あきらめなかった。

　多くの戦士に師事し、心を育はぐくみ続けた彼だからこそ、これほどの絶望的な状況でも抗あらがい続けることができたのだ。

　そして数日が経過した今、その闘志がついに結実した。

「ッ…………うおおお……おおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

　スワンギルディの身体からだが激しく発光し、集束。一条の光線となって、トンネルの壁へと放たれた。

　異空間に穴が穿うがたれ、ブラックホールに吸い寄せられるが如ごとく、スワンギルディの身体が呑のみ込まれていく。

　その一瞬だけ背中に翼が広がったのを──彼自身気付いてはいなかった。

「……はぁ、はぁ……こ、ここは……」

　総そう二じたちの住む地球以上に、水が星の表層のほぼ全てを覆

おおっている世界。未知の場所へ、スワンギルディは降り立っていた。

　これからどうするかを考えるよりも先に、スワンギルディの背に声がかけられた。

「見事だ、スワンギルディ」

　驚いて振り返るスワンギルディ。

「ハデスギルディ殿……！」

　彼の背後に立っていたのは、女神ソーラ、そしてツインテイルズとの戦いの後、行方ゆくえをくらませていた神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士──ハデスギルディだ。

「脱出に手間取るようであれば、また私が手を貸そうかと思っていたのだが……その必要はなかったようだね」

　ハデスギルディは世話焼き気質で、ダークグラスパーの師匠を買って出た過去もある。

　一人でエンジェルギルディの要よう塞さいへ乗り込みたいというスワンギルディの願いを叶かなえ、支援したのも彼だった。

「ハデスギルディ殿……。部隊を離れての単独行動、その上、結果的にツインテイルズの味方をすることになったこと……責を負う覚悟はできております」

　生き真ま面じ目めに頭を下げるスワンギルディに、ハデスギルディは苦笑を禁じえない。

「なに。私もエンジェルギルディのやり方には思うところがあった。君が彼女に一泡吹かせたのは、痛快ですらあったよ」

「見ておられたのですか……」

「君を送り届けたついでに見届けたくてね。古い知り合いの行く末を」

　古い知り合い……エンジェルギルディのことだろう。

　スワンギルディは自分の手の平を見つめた後、ハデスギルディへと向き直った。

「……私は今、何を……どうやってこの世界へと辿たどり着いたのでしょう……」

「君は地力で異空間の壁を破ったのだ。どうやら、無意識に放った一撃のようだがね……。単独での世界移動など、上位のエレメリアンのさらにごく一部しかできぬ秘技。その片へん鱗りんを掴つかんだというわけだよ、君は」

「わ、私がそのような……」

「君に伝えたアルティメギル五大修練、最後の一つ──その成果が今、芽吹いたのかもしれないね」

　はっと息を呑のむスワンギルディ。

「アルティメギル最終修練──ツインテール・ソ・ノモーノウ」

　そして、噛かみしめるようにその修練の名を紡つむぐ。

「そうだ。それは五大修練最難関にして、エレメリアンという種、そのものの奥義でもある。ツインテールを愛し、ツインテールを奪い……そして、ツインテールを目指す我われ々われエレメリアンにとって……ね」

「〝自分自身でツインテールを体現せよ〟……理屈はわかるのです！　しかし私にはどうしても、ツインテール属性となることが叶かなわず……!!」

「……いや、まだ完全にはわかっていないようだね。完全なツインテール属性になるのではない」

　ハデスギルディは面おも持もちを厳しくすると、

「ツインテール属性ではない二つの属性を極めることで、属性そのものをツインテールとするのだ」

　そこまで言われても、まだスワンギルディには概要が掴めない。これまでの変態的な修練の数々に比べ、あまりにも難解な内容だ。

　悩むスワンギルディへ、ヒントを与えるように優しく語りかけるハデスギルディ。

「ある意味、ツインテイルズはこの修練をさらに高度な次元で達成できているのかもしれないよ。だからエンジェルギルディは彼女たちにこだわり……そしてその力の本質を見抜けず、敗れた」

「私が目指す戦士たちが……ツインテイルズが、既にその高みにいるというのですね……!!」

　決意を新たにするスワンギルディ。

「スワンギルディ——君はもうとっくに最終闘体になれるだけの修練を収めた。後は、己が内側にあるものを如い何かにして爆発させるかだ。君はもっと、変態になるべきだぞ」

「……はい……!!」

「基地までは私が送ろう。君の帰りを、部隊の者たちが待っている」

　ハデスギルディは、エレメリアンの中でも特に変態性を重んじる戦士だ。彼にとって一番の激励を送ったのだ。

　しかし生き真ま面じ目めな若者にとっては、何よりのプレッシャーだろう。

　多くの先輩エレメリアンたちに、数々の試練を与えられてきたスワンギルディ。

　その成長の旅路は今、終わりを迎えようとしていた。

◇

　ハデスギルディはスワンギルディを基地へと送り届けた後、基地

内のとある部屋の前へと立ち寄っていた。

　今や主を失った、エンジェルギルディの研究室だ。

「エンジェルギルディ……」

　二度と開かぬ部屋のドアに向けられた瞳ひとみには、どこか未練のような悲哀が漂っている。

「……生きたいように生きたのだ。君も悔いはないだろう……」

　長い時間ドアを見つめ続けた後、静かに嘆息。

　視線を切って立ち去ろうとしたハデスギルディは、廊下の先に一体の戦士の影を認めた。

　神の一剣ゴー・デイア・ソードの正装である白ローブをまとっているが、ところどころが布で隠しきれないほど大きく隆起している。

　そしてそれ以上に、抑えきれぬほどの闘気が発散されていた。

「──スワンギルディ、といったか。汝なんじの世話焼き気質は昔からだが……それでも、あのような変態性に乏しき若造に目をかけるとは珍しい」

　頭部を覆おおうフードの奥から聞こえてくるのは、不気味な声こわ音ねだった。

　男性のものか女性のものか判別がつきづらい、何重にもぶれた声だ。

　戦士たちを聖布ヴエール越しに畏い怖ふさせる、首領の声に近い。

　どうやらこの戦士は、ハデスギルディがこの基地へスワンギルディを送り届ける様子を観察していたようだった。

「戦いで後れを取ったとは聞いていたが、隠居でも考え始めたか、ハデスギルディ」

「ふむ。隠居か、それも悪くはないが……スワンギルディは先が楽

しみな戦士なのでね。私以外にも、多くの強戦士たちが何かを感じたのだろう……皆、彼へと指導しているよ」

　ハデスギルディはその声に気け圧おされることもなく、飄ひようう々ひようとした言葉で応おうじる。

「ワシらのように力を極めすぎた戦士は、もはや自身の成長を楽しめぬ。ゆえに未知のポテンシャルを秘めた若者を見守ることが、大きな娯楽というわけか」

　白ローブの戦士も、スワンギルディに何かを感じてはいたのかもしれない。それ以上追及しようとはせず、話題を変えた。

「まあ、それはどうでもよい。重要なのは、首領様の娯楽たわむれだ。お前だけではない……あのアポロギルディまで手傷を負わされるとは、いよいよ首領様の御目に適かなう戦士が現れたというわけだな」

「首領様のご命令は『テイルレッドをアルティメギルの女神として迎え入れよ』──これがなかなか骨でね。実際に見て初めてわかるよ。テイルレッドの強さと可か愛わいさ、そして──」

　あえてその先を言わず、ハデスギルディは白ローブの戦士に向き直った。そのまま戦士の全身をスキャナーで走査するように、視線を移ろわせていく。

　彼の十八番おはこ。相手の変態の度合いを見極め、数値化する能力だ。

「フッ……変態値七〇万か。錆さび付いてはいないようだね」

「無論。変態とは常に活いき活きとしているからこそ価値がある。錆びた変態など……それはただのゴミよ」

　あなた変態ですね、と言われながら、それを堂々と誇る胆力。

　この戦士がただ者ではないことを、如によ実じつに物語っている。

「だが、心したまえ。我われらの敵、テイルレッドの変態値は────二〇〇万だ」

　ハデスギルディは、我わがことを誇るかのような喜色交じりの声で伝える。

　強く、可愛く、そして変態。

　それがテイルレッド……首領の求める女神なのだと。

「ほう。それはそれは……」

　白ローブの戦士はくっくっと笑い、肩を震ふるわせた。その震えは、全身へと伝でん播ぱしていく。強敵を知った武者震いだ。

　しかし尋常を超えたそれがもたらすのは、もはやただの震動ではなかった。全身から空気へ……そして空気の分子までもが激震ふるえ始めた。

　やがて周囲の大気がプラズマ化し、弾はじけ……爆はぜていく。

　爆発を浴びながら涼しい顔をしているハデスギルディの前で、戦士はフードの奥の双そう眸ぼうを光らせた。

「──そんな変態がいると聞いて、見に行くなと言う方が無理な話よ」

　自らが変態であるがゆえに、変態に惹ひかれずにはいられない。

　哀しくも誇り高き生命体、エレメリアンの性さがであった。

　白ローブを勇ましく翻ひるがえし、立ち去る戦士。

　その背中を、ハデスギルディは頼もしげな眼まな差ざしで見送る。

「ついに征ゆくか。我ら神のエレメリアン、最後の戦士───ゼウスギルディよ」

第二章　ツインテールのバレンタイン。

放課後の屋上で、俺は一人佇たたずんでいた。

静かだ。この屋上は普段からほとんど人が来ないが、まだ寒さ厳しい二月ではなおさらだろう。

今日は愛あい香かたちがまた女子だけの会議を開くらしく、みんなで先に地下基地に行ってしまった。部室に俺一人で行くのも何なので、何となくここに立ち寄ったというわけだ。

ぶっちゃけ、ちょっと寂しくはあるのだが……ツインテイルズ関係者は俺以外の全員が女子なのだ、たまには男子を抜きにした時間も必要だろう。

こういう時は俺も、一人の時間を有効に使うべきだな。

──もちろん、ツインテール修行をするのだ。

俺がツインテール修行をしているところを愛香に見られると、何な故ぜかいつも心配そうな顔をされるからな……。

「ツインテール……」

空を見つめながら精神統一し、俺は静かに瞳ひとみを閉じた。

エンジェルギルディの要よう塞さい・ビエルプラネットにおいて、俺は強敵アポロギルディと一騎討ちを果たした。

その時は俺が何とか勝ったが、あちらもまだ真価を見せてはいないようだった。

次に会う時は、さらに壮絶な戦いになるかもしれない。俺も今以上に強くならなければ。

トゥアールの起こした奇跡を見て……俺は、ツインテールの無限の可能性をあらためて強く感じた。

もっともっと、ツインテールを見たい。感じたい。そう思うようになったんだ。

「──ツインテール……」

　校舎内にいるツインテールの気配……それはかなり前から探知器のように探ることができていた。今の俺なら、街一つの範囲でツインテールを感じることも難しくはないだろう。

　けれど、それでも足りない。目標は、世界だ。そして、宇宙だ。

　周囲にいるツインテールだけではない、この世の全てのツインテールを自力で感じ取れるようにまでなれば……新たな扉が開くのではないだろうか。

　こんなことを愛香に言うと、その扉は開くなと言われそうだが……俺は開く。

「はっ……!?」

　すぐ近くにツインテールの気配を感じ、俺は目を見開いた。

「ねえ、あれ……」

「一年の観み束つか君だよね……」

　屋上の出入り口へ視線をやり、ぎょっとする。

　たまたまやって来たのだろう。女生徒が二名、俺の方を見てひそひそ話をしているではないか。制服のラインの色からして上級生……そのうちの一人が、下結びのツインテールだ。

　しまったな……放課後の屋上で男子生徒が風にそよがれて一人佇たたずみ、ツインテールと呟つぶやきながら虚空を仰いでいたら、ちょっと変な奴やつだと思われてもおかしくはない。

　ただでさえ俺は、学校行事の度たびに何かと悪目立ちしているのに……。

「可か愛わいい顔してるよね、やっぱ……」

「うん、ああしてるといい感じ……」

　うう、笑われてるのかな。恥ずかしいけど……仕方ないよな。

　こんな俺だからこそ、世界中の人たちの心を守ることができているんだから。

女子たちは、小走りでその場を後にする。

油断した……。この時期の屋上にも、絶対に人が来ないわけじゃないんだよな。

「これ以上周りから好奇の目で見られないように、気をつけないと……」

しかし一分後、俺はツインテール修行を再開していた。

◇

総そう二じが学校の屋上でツインテールっているその頃ころ。

観束家の地下基地では、総二を除いたツインテイルズ女子メンバーが集まっていた。

愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、イースナ。四人はテーブルに座り顔を見合わせながら、難しい顔をして考え込んでいる。

彼女たちの座るテーブルから一歩下がったところに、尊みこととメガ・ネが立っていた。

度たび々たび開催されるこの「女子会」、参加条件が学生のみの場合もあるので、今日は参加できて尊は嬉うれしそうだ。

二月一三日の放課後──議題は当然、明日のバレンタインデー当日についてだ。

そして、開催場所が部室ではなくいきなり基地なのにも理由がある。

「……あのさ……」

お見合いをしていても埒らちが明かないと踏んだのか、愛香が均衡を破った。

「みんなで一緒にチョコ作ろって集まったのに、どうしてこんなピリピリした空気になってんの……？」

　地下基地には様々な施設が設置されており、その中にはちょっとしたキッチンもある。そこを使ってみんなでチョコを作ろう、という話だったはずなのだが……。

「確かに一緒に作ろうと提案はしました。しかしそれは即ち、互いの〝チョコ手の内〟を見せ合うということに気づいてしまったのです……!!」

　大真ま面じ目めな顔で答えるトゥアール。

「アホくさ。どうせ今年はここにいる全員がそーじにチョコ渡すんでしょ？　牽けん制せいし合ったって仕方ないじゃない……あたしは気楽に作るわよ」

　そんな愛あい香かをトゥアールはジト目で見つめ、

「いいですか慧え理り那なさん、あれがもっとも警戒すべき女の言動です。自分は気合い入れてませんよー、というポーズで周囲の油断を誘い、その実全力で勝負をかける。女という生き物のあざとさ・ずるさ・したたかさを煮詰めて型に入れて冷やすと、愛香さんになるのです」

「勉強になりますわ」

「深読みしすぎよ！　会長も間違った知識吸収しないで!!」

　しかしタイミングを計っていたのはトゥアールも同じようで、勢いよく立ち上がってホワイトボードの前へと移動した。

「愛香さんの仰おつしやるとおり、今年の総そう二じ様はこれだけ多くの女の子からチョコをもらうのです。だからこそ、生半可なチョコでは周囲に埋もれてしまうのは必至！」

　言うが早いか、トゥアールはホワイトボードにペンを走らせていく。

「バレンタインデーに大事なのは、どれだけおいしいチョコを渡せるかではありません！　どれだけインパクトの強い渡し方をできるか、それこそが勝利の方程式なのです!!」

　バレンタインと書いた後、それに＝イコールで結んで膨大な量の数式を殴なぐり書きしていく。素人しろうとには解読が困難だが、それだけ複雑なのだということがわかる。

「そのためなら全裸チョココーティングだろうと何だろうと、派手なことをやったもん勝ちです！　この会議は、親睦会ではありません……これから全力で戦い合うという、決意表明の場です!!」

「えっ……トゥアール、あたしと戦う気になったの!?」

　うきうきしながらテイルブレスを構える愛香。ホワイトと戦いたいという願いは、簡単には諦あきらめきれないらしい。

「ヒェッ……やっぱ呼ぶんじゃありませんでした、この蛮族……」

　コーティングと聞いて、慧理那がおずおずと手を挙げる。

「あの、実はわたくしも、お母様にそうしろと言われていたのです……は、裸になって、チョコを体に塗って、観み束つか君の元へ向かいなさいと……それが礼儀だと……」

「すでに我わが子へバレンタイン奥義を継承していたとは、相変わらず油断も隙すきもありませんね慧え夢むさんは……」

「ふーむ。確かに、手の内を見せ合うことになってしまったのう。わらわは可か愛わいいチョコを一つと、それとは別に……やはり裸チョコをするつもりじゃった」

「あんたまで!?」

　呆あきれる愛あい香かへと、自慢げに頷うなずくイースナ。

「ただ全身をチョコで塗ったくるだけでは芸がない。わらわは、右胸・左胸・お股またのみをチョコで覆おおった、総そう二じに最も馴な染じみ深い三点トリプルコートスタイルでゆく！　名付けて、思い出のイースナちゃん大作戦じゃ!!」

　拳こぶしを天に衝つき上げ、堂々と宣言するイースナ。それを聞いた愛香は白目になってよろめく。

「総二くんと初めてちゅーしたんが、その格好の時やもんねえ」

　メガ・ネの声は、アルバムをめくって我わが子の写真を見る母のように優しかった。

「思い出チョコ……素晴らしいアイディアですわ！　それではわたくしは、服を全部脱いだ上で首輪と鎖だけチョコで作ればよいのですわね!!」

　目をきらきらと輝かせながら、恐ろしいアイディアを思いつく慧え理り那な。

「よくないわよ！　こいつらに毒されすぎだからね、会長!!」

「お、お嬢様……せめてイースナと同じように、隠すところは隠すべきでは……」

　尊みことも倫理的には止めたいが、慧理那の決意を邪魔したくもないという、教育者と従者との両立場で揺れているようだった。

「そうだ、尊もわたくしと一緒に裸チョコいたしましょう！」

　ずっと後ろに控えている尊を手招きし、ハイレベルなムチャ振りを放つ慧理那。

「いえいえいえいえ私はもうそういうことができるほど若くありませんので！」

「ですが、尊より年上のお母様は、何度も観み束つか君の前で脱ぎましたわ！」

　それを言われるとぐうの音も出ないだろうが、それでも尊は丁重に断る。

　慧理那はなおも食い下がろうとするが、愛香が待ったをかけた。

「っていうか、どうして裸チョコで話が進んでんのよ、もっと普通にチョコ渡そうと思わないわけ!?」

「世の殿方たちは、チョコが食べたいんじゃなくてチョコを食べた後で裸になってくれる女の方を食べたいんですよ！　ならばチョコを食べればダイレクトで裸の女に辿たどり着く裸チョコは、無駄のない合理的なスタイルと言えるじゃありませんか!!」

「世にも最悪な理論だわ……!!」

　ついに頭を抱かかえる愛香。対照的にトゥアールは、何か閃ひらめいたようにポンと手を叩たたいた。

「去年までは、愛香さんと未み春はる将軍しか総二様にチョコをお渡していないはずですよね？」

「あと、あたしのお姉ちゃんね」

　トゥアールはガッツポーズを取り、愛香を煽あおるように胸を揺らす。

「その、家族やそれに近い三人だけ！　つまり、今まで義理チョコしかもらっていなかった男の子が、今年初めて本命チョコを受け取るのです……これは大変価値のあることですよ！　総二様の本命チョコ童貞を奪うのは、この私です!!」

「待ちなさいよ！」

　愛あい香かは制止の後、頬ほおを赤らめながら咳せき払いする。

「ほ、本命チョコは……あたしが毎年あげてたんだから……毎年……」

「ペッ」

　リピートを用いて語られる愛香のスイートメモリーに、しかめっ面で唾だ棄きするトゥアール。

「本命と認識されていないなら、それは本命チョコではありません！　空回りチョコです!!」

「ご高説のお礼に、あんたを空で回してやるわ」

「すくりゅ――――――――――っ!!」

　トゥアールを回転させながら天井へ投げ飛ばす愛香。

　滞空時間が長い。天井スレスレで、トゥアールはいつまでも回り続けている。

　ちょっとしたシーリングファンのような趣おもむきだった。

　愛香の発言で不安になったのか、慧え理り那なはイースナに相談する。

「わたくし、男の子にチョコをあげること自体が初めてなのですが……イースナさんは、ご経験がありますか？」

「ダークグラスパー時代に手下のエレメリアンどもに義理チョコ配ろうと思ったのじゃが……エロゲの方が喜ぶと思って義理エロゲ配ったのじゃ。けど、あまり喜ばれなかったのう……あげ甲が斐いのない奴やつらじゃった」

「私が天井ギリで回転してる間に義理エロゲとかいうパワーワードを生みだしてるんじゃありません!!」

　息も絶え絶えに天井から生還するトゥアール。

「あの、参考までに……津つ辺べさんは去年まで、どんなチョコを渡されていたのですか？」

　愛香は恥ずかしそうに身をよじりながら、

「………………去年は……手作りのハート型……」

　何とか言葉を絞り出した。

「それをもらって何も察せず幼馴染おさななじみを続行しておるって、もう完全に脈なしじゃろ」

「何よぉっ！　……………………何よ……」

　愛香の声が、みるみる活気を失っていく。

「だ───っ、軽い冗談じゃろう、マジ凹へこみするやつがおるか!!」

　予想以上にしゅんとしてしまった愛香を見て、慌あわてふためくイースナ。

　愛香はたまに妙に打たれ弱いところがあるのを、イースナもわかってきているようだ。

「津辺さんも、わたくしたちと一緒に裸チョコしましょう！　きっ

と観み束つか君も喜んでくれますわ!!」

「うんやる…………じゃなくて！　あたしは普通の本命チョコ渡すから!!」

　うっかり同意しかけ、慌てて訂正する愛香。

　精神的に追いつめられるとトゥアール寄りの行動も受け容いれそうになることが多い──これも最近の愛あい香かの傾向だ。

「困りましたね……。愛香さんが全身にチョコを塗りたくって『これが本当の板チョコ』とかやられたら、面白度が限界突破しすぎて私たちでは太た刀ち打ちできません……」

「そんなに板チョコになりたいなら遠えん慮りよしないで言ってよ、喜んで協力するから」

「ひいいいいいいいいいいいいいいいいい蛮族チョコレート工場絶賛稼働中!!」

　肉厚の鋼鉄をペラ紙レベルまで圧縮しかねない人力プレス器が、トゥアールを板チョコにせんと押し潰つぶしていく。

「チョコを作るのかトゥアールを加工するのかどちらかにしないか、津つ辺べ」

「尊みことはん、みんなと一緒に話し合いに参加せんでええの？　いつも、こういうのにはむしろ交ざりたがっとったから……」

　自分と同じに後ろで控えているだけの尊を気遣い、慧え理り那なたちに交ざるきっかけを作るメガ・ネ。

「生まれてこの方三十年近く男の子にチョコなんて渡したことがなくて、気がついたら結婚したくて仕方がなくなっていたような私では、アドバイスをしてあげることもできないしなあ……むしろ義理チョコ同士、私たちで作戦会議でもしないか、メガ・ネさん」

「それはええけど、ウチも男の子にチョコあげるの、初めてなんやけどなあ」

　哀愁にツインテールを揺らす尊へ、メガ・ネも自信なさげに応おうじる。

「はぁ、はぁ……そ、総そう二じ様をあまりお待たせするわけにもいきません。結局手の内は晒さらし合ってしまいましたし、ここは平等にいっせーので作り始めましょう。裸チョコの他に普通のチョコを作るという、イースナのアイディアを採用ということで」

　這ほう々ほうの体ていで提案するトゥアールに、自信たっぷりにふんぞり返るイースナ。

「うむ、真ま似ねっこしてよいぞ。思い出補正がある分、一番強いのはわらわじゃからな」

「ハッ……！　裸チョコの戦闘力を決めるのは、何よりもスタイルです！　それを思い知らせてあげますよ、お子ちゃまスタイルのイースナ!!」

　全員でコンソールルームを後にし、キッチンスペースへと移動する。

　そこは学校の家庭科室ほどの大きさがあり、複数基のユニットキッチンが完備されている。六人でものびのびと調理ができるのだ。

「尊が材料を持ってきてくれていますので、皆さん遠慮せずにお使いくださいね！」

「ウチも持ってきたでー」

　材料はすでに用意されていたので、すぐにみんなでチョコを作り始めた。

「こうして、湯煎……を、すればいいんですわね、尊」

「あっ……焦げてしもうた。メガ・ネ～、新しいチョコ取って～」

　チョコ作りが初めての慧理那とイースナは、それぞれ尊、メガ・ネがサポートしている。

「お嬢様……これは、観み束つかが喜びそうですね！」

「うふふ。尊みことはどういうものにしますの？」

「私は、大きめのにしてみんなで食べられればよいかな、と」

「そ、そうですか……」

　尊の提案に、慧え理り那なはやや困惑したような表情を浮かべる。

　そして、愛あい香かは……毎年総そう二じに手作りチョコを渡しているだけあって、慣れた手つきだ。

　意外に料理の上う手まいトゥアールも、空中にウインドウを投影し、レシピを確認しながらスムーズに作業を進めていく。

　キッチンはそれぞれの思いがカカオの匂いと混ざり合い、ほのかに香るような、微ほほ笑えましい空間となっていた。

　溶かしたチョコに各自一工夫加え、思い思いの形に型を取ったら、後は冷蔵庫で冷やす。固まるのを待って、デコレーションをすれば完成だ。

　だが、その間にやることがある。

「さーてここからはプラスα、本番に備えて裸チョコの練習をしましょう。慧理那さん、全裸で向き合ってチョコの塗りっこしませんか？　もちろんハケを使ってくまなく……」

　トゥアールを軽くチョップ（※当社比）すると、愛香は慧理那を説得に回った。

「会長。初めてチョコを渡すなら、裸とか首輪とか、妙なことは絶対しない方がいいって！　その方が気持ちが伝わると思うから──え？」

　言っている側そばから妙な気配を感じ、背後を振り返る愛香。

　トゥアールが下卑た笑みを浮かべている。その隣に設置された巨大な鍋のような機械が、今まさに中身をひっくり返そうとしているところだった。

「隙すきありです愛香さん！　アンチアイカシステム一七号！　アイカアマクスール！　必殺のチョコフォンデュトラップを受けなさい!!」

　鍋のような機械から放たれた大量の茶色い液体が、愛香の頭上へ

と降り注いだ。

「ぷわっ……何よこれ……フォンデュどころかファウンテンじゃない!!」

　熱くはないようだが、それはチョコレートの洪水。頭から浴びた愛香は、息苦しそうに手足をばたつかせた。

「ゲハハハハハ油断しましたね！　今日のほのぼの会議は、全てこの瞬間のため！　みんなで一緒にチョコ作ろーねなどと甘い雰囲気に絆ほだされて、警戒を怠おこたったのが運のツキです!!」

「ほのぼのしてたか……？　津つ辺べとか、序盤から闘気剥むき出しだったが……」

　冷静に突っ込む尊だが、悲しいかなテンションがガン上がりしているトゥアールには届かない。

「ＡＡＳアンチアイカシステムのＡＡＳアイカアマクスール……今回はとても語ご呂ろがいいですわ!!」

「言われてみれば……よく気づくのう、慧理那」

　狙ねらったネーミングではないのだろうが、性能自体は会心のもののようだ。

　いつもならあっさり機械を破壊してトゥアールに逆襲する愛あい香かが、まとわりつくチョコに翻ほん弄ろうされている。

「ぐ、ぐぎぎ……めっちゃネバネバする……!!」

「それは水飴以上の粘度と素材にこだわった高級チョコの美お味いしさを両立させています……いくら愛香さんの怪力でも、脱出は困難です！」

「ネタ発明かと思いきや、今までのアンチ貧乳システムの中でもかなり完成度が高いのではないか？」

　苦戦する愛香の姿を見て、イースナは感心したように頷うなずく。

「あの、チョコの質量がどんどん増えていっているように見えるの

ですが……」

　慧え理り那なが指差した先では、チョコがすでにキッチンの天井に届く程の大きさに膨ふくれ上がっていた。その中心では、愛香がますます動きづらそうにもがいている。

「いいところに気づきましたね慧理那さん！　アイカアマクスールは空気を取り込んで膨張する機能があり、最大で二五メートルプール一面分の容積まで膨れ上がるのです！　さすがの愛香さんもそれだけの質量を背負っては身動きすらままならないでしょう!!」

「くっ……!!」

　質量を増し続けるチョコが強固な縛ばく鎖さとなり、愛香の動きを封じ込めていく。

　愛香もパンチやキックで一時的にチョコを突き破るのだが、液体の強み、流れ落ちるチョコが穴を即座にふさぎ、ますます脱出を困難にする。

「……あたしのツインテールこんなベットベトにして、そーじに怒られるわよ!!」

「何で自分のツインテールを総そう二じ様の所有物みたいに語るんですか厚かましい！　じゃれ合いの末にそうなったと言えば、総二様も笑顔でスルーしてくださいます!!」

「…………じゃあ、じゃれ合おうじゃないの……!!」

　ここで愛香は予想外の行動に出た。残った全ての力を振り絞り、チョコをまとったままトゥアールに突進したのだ。

　張力の限界でトゥアールの手を掴つかむことに成功し、ネバネバに取り込む愛香。

「ぎいやあああああああああああぬめぬめチョコ怪人が……お助け――っ!!」

「今からあんたもそのチョコ怪人よ……!!」

　助からないのなら、せめて相打ちで大将首は取る。サムライの魂たましいがそこにあった。

　最強の発明は、相手に使われれば最大の脅きよう威いになる――七までナンバリングを重ねる間に何度か思い知ったはずのその弱点を、トゥアールは今回も克服できていなかったのだ。

「いやああああああベトベトする……ベトベ……ちょっと、私の服がチョコに持ってかれて片乳まろび出ちゃってるんですけど!?　どーして愛香さんは総二様がいない時に限って私にエロい格好させるんですか!!」

「あたしの服もとっくにビリビリ破れて脱げてるわよ……ちょっと、こっち来ないでよ、こんな格好であんたと引っ付きたくないっての!!」

　確かにトゥアールは片乳が出てしまったが、それも一瞬のこと。

　もりもり増殖していくチョコによって、二人は乳どころか身体からだ全部が呑のみ込まれていく。

　それはさながら、コールタールのプールで溺おぼれる様を連想させた。

「あかん。このままチョコが膨張し続けたら、ウチらも取り込まれてまうで！」

　メガ・ネは慧え理り那なとイースナ、尊みことを避難させようとキッチンの外へ誘導する。

　避難しようとした尊は、誘導員のように愛あい香かたちへと手を振った。

「こらー、お嬢様たちがせっかく作ったチョコが冷蔵庫ごと潰つぶれてしまうだろう。お前たちも外に出ろー」

　注意されたからなのか、はたまた膨張するために空気を求める特性ゆえか、チョコ愛香トゥアールもキッチンのドアを壊して廊下へと流れ出た。

「新生物、チョコレリアンの誕生じゃ……!!」

「誕生してしまいましたわ……！　そして彼女たちは、何ど処こへゆくのでしょう――」

曲がり角に隠れた慧理那たちをスルーし、チョコレリアンは這はうように廊下を進んで行く。

行く当てもなく、彷徨さまようように──

◇

慧理那から会議が終わったとメールをもらい、俺は部室の転送ゲートから地下基地へと向かった。

ところがコンソールルームに顔を出してみたはいいものの、誰だれの姿もない。

不思議に思っていると、奥の区画へと進む方のドアから甘い匂いが漂ってきた。

「あっ……もしかして、みんなでチョコを作ってるのか？」

今年は女の子の友達がたくさん増えたし、明日は今まで生きてきた中で一番チョコもらえるかも！　……なんてな。

瞬間、俺のこめかみを電流のような衝撃が貫いた。

「……！　……何だ、この異様な気配は……!?」

慣れ親しんだ愛香のツインテールの気配を感じたはずが……何かが違う。

俺は言い知れぬ予感に突き動かされ、コンソールルームの出口へ駆け出す。

奥へと続く廊下の明かりが、明滅を繰り返している。

ぐっぽぐっぽと響いてくる、不気味な音。背せ筋すじを昇る怖おぞ気け──。

ゆっくりと廊下を進んで行くと……突き当たりの曲がり角から、それは姿を見せた。

巨大な茶褐色の塊かたまり――蠢うごめく不定形の化け物が。

「ソージ……」

「ソウジサマ……」

「「タスケテ……タスケテ……」」

「どあああっっ!?」

それはまるで、地獄の底から這はい出た妄念の塊かたまり。

無数の霊魂が凝縮し、生への未練で現世へと飛び出してきたかのような……茶褐色の死霊。

沈没した船に浸水した海水が津波の如ごとく押し寄せ、その状態で粘り気を帯おびて固まってしまったかのような異様だった。

飛沫しぶきすらもが粘性を帯び、弾はじけることなく氷柱のように屹きつ立りつしてる。

ぬちゃぬちゃと不気味な音を立て、不定形のナニカが俺へと迫ってきた。

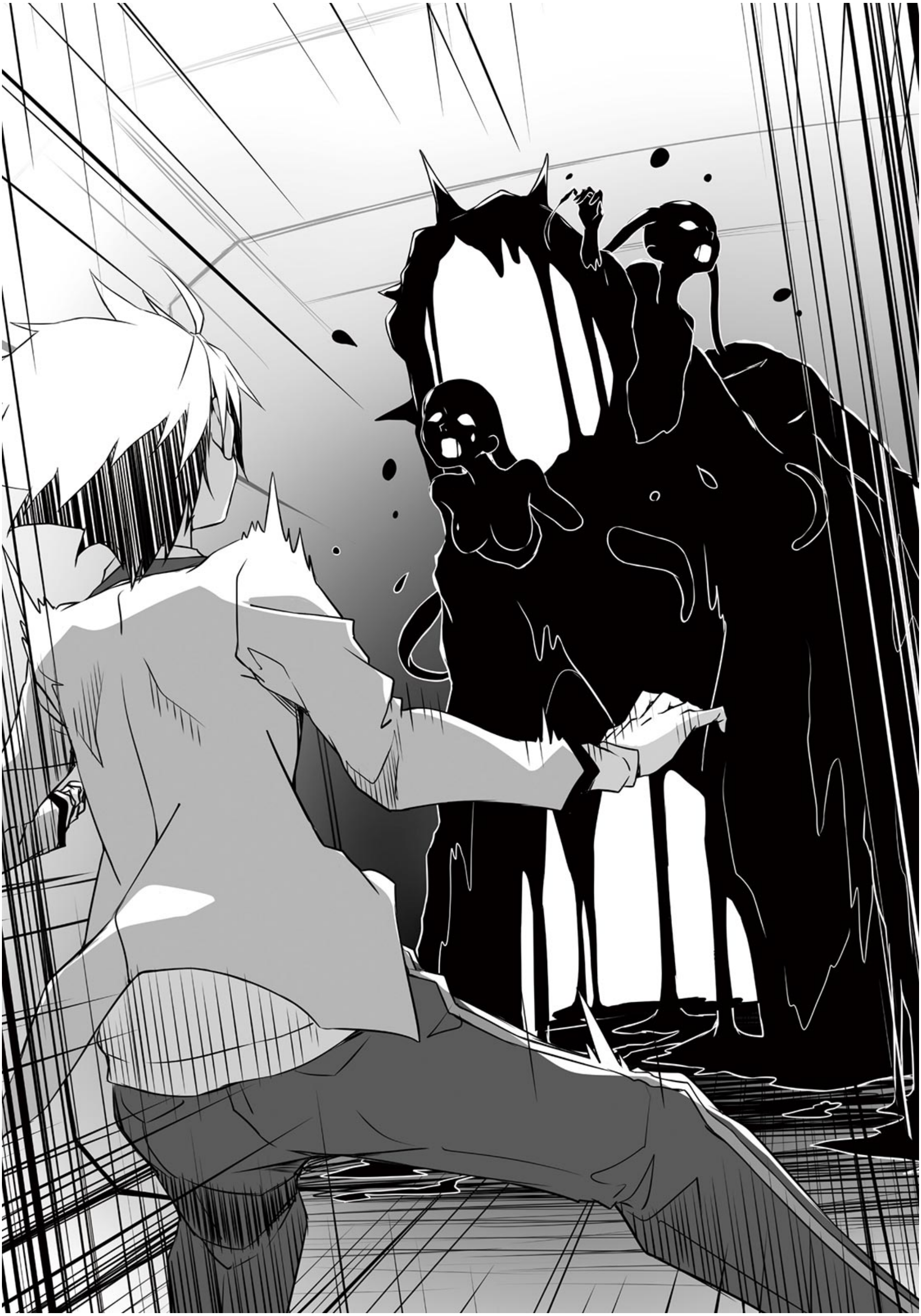
「「ダシテ……ダシテ……」」

これが死霊だというのなら、中から聞こえる掠かすれた声は、さながらその死霊の呻うめき。

「あ……あ……」

原始の本能が危機感を呼び起こし、俺を一歩、二歩と後退させられていく。

しかし怪物もまた、ゆっくりと俺へと近寄ってくる。



　俺は踵きびすを返し、廊下を走り出した。

　何な故ぜだ……完かん璧ぺきな防御システムを誇るツインテイルズ基地に、何故こんな化け物が⁉

　俺より先に来ていたみんなは、無事なのか⁉

　みんなの安否が気になり、俺は廊下をひたすら走る。

　その間も地下基地の廊下いっぱいに広がる、甘い香り。怪物が追いかけてくる。

「チョコ……⁉　まさかこれは、チョコなのか⁉」

　しかし限度を超えた甘い香りは、鼻腔を侵食する暴力そのものだ。

　走った先で、小さな人影を見つけた。

「うーむ……バレンタイン当日を前に、総そう二じがトラウマを負ってしまう……あのクトゥルフじみた化け物を見てなお、チョコ欲しいと言える男がおるじゃろうか……」

「うう、裸チョコの先を越されてしまいましたわ……」

「確かに貧乳もトゥアールも中でとっくに服脱げておるけど、人間のカタチそのものが脱げてしまっとるからのう……あれはもう、裸チョコの範はん疇ちゆうではないのじゃ」

　廊下の曲がり角から頭だけを覗のぞかせ、慧え理り那なとイースナがこちらの様子を窺うかがっている。

　どうやら、先んじてあの怪物から逃げ果せていたらしい。

「えっ……あれ、愛あい香かとトゥアールなのか⁉」

　だったら話は別だ。あの茶褐色は、俺に助けてと言った。

「ツインテールが助けを求める声に──背を向けることはできない‼」

　拳こぶしを握り締め、覚悟を決める。蠢うごめくチョコへと俺が

突撃しようとすると──

「いや、あれ貧乳とトゥアールがいちゃいちゃした結果ねちゃねちゃしとるだけじゃから、気にせんでよいぞ」

「あ、そうなのか」

　ほっとしたのも束つかの間ま、チョコの塊かたまりは俺たち目掛けて這はいよってくる。

「桜さくら川がわ先生とメガ・ネは!?」

「あやつらは別方向じゃ。おそらくあの怪物──チョコレリアンは、総二を発見した以上、そちらに向かうことはないじゃろう」

「だったら逃げるぞ、二人とも！　このままじゃチョコに呑のみ込まれるっ!!」

　俺はのほほんとつっ立っているイースナと慧理那を左右の脇わきに抱かかえ、廊下を走り出した。

「「ニゲナイデ……マッテ……」」

　あああああああああああ追ってくるよチョコ!!

　俺が……俺が悪かったんだ。

　こんなツインテール馬ば鹿かの俺がチョコをたくさんもらえるかもなんて考えたから、罰が当たったんだ───!!

　後に、あのチョコ怪人──チョコレリアンそのものが、アンチアイカシステムだったということを聞かされた。

　最近アンチアイカシステムでけっこう白星挙げてないか、トゥアール。今回はダブルノックアウト扱いかもしれないが……。

　　　◇

　バレンタインデーの前日。それは男の子をやきもきさせる、罪深い日。

　そしてここにも、明日チョコをもらえるかを一喜一憂している、ピュアな少年の心を持った者たちがいた。

「明日はバレンタインデーだが……テイルレッドは我われらにチョコをくれるのだろうか……」

「敵同士とはいえ、テイルレッドは義に篤あつい幼女。くれると信じたいが……」

「何を弱気な。俺たちは義理チョコでよいと妥協しておるのだ、もらえぬ道理はあるまい」

　──世界を侵略している、異形の怪人たちである。

　哀しきまでの雄おす密度。アルティメギル基地大ホールは、そわそわしている大男たちの熱気で軽く霧がかかるほど暑苦しさが高まっていた。

「テイルレッドがこの基地の場所を知らぬ以上、代表で誰だれかが出撃して受け取ってくる必要がある。しかし問題はチョコの数だ、この大人数だからな……」

「テイルレッドは幼い……お小遣いにも限りがあるはずだ。経済的負担をかけぬためにも、我らが準備したチョコを一旦彼女へと手渡し、それを再度我らへ渡してもらう……。これでいくべきだと思うが、どうか」

「ここにいる数百体全員分を一度テイルレッドが手にするのか!? そんな手間はかけさせられんぞ!!」

「アイドルの握手会など、一日で何千人と捌さばくこともザラよ。テイルレッドほどの人気者なら、数百個程度は文字通りものの数ではあるまい!!」

　そして、交わされている会話が虚むなしすぎて涙を誘う。

捕らぬ狸たぬきの皮算用の例として、国語辞典に追加したいやりとりだった。

「おっ、みんな今日も元気だねー。何の会議してんのー？」

そんなむさい空間に、チャラくて線の細そうな声が響く。

ポセイドンギルディはホールに入ってくるや、戦士たちに駆け寄られた。

「おお、ポセイドンギルディ殿……。あなたほどの陽キャであれば、バレンタインにチョコをもらうのは当然でありましょう！」

「我われら、テイルレッドにチョコをもらうためにはどうすべきか話し合っていた次第で……」

「……………………え、う、うん……当然っしょ。バレンタインどころか、何だったら月イチでチョコもらえっし。チョコもらいすぎて、余したチョコで家建つくれーだし」

「しかし、目がとてつもない速さで泳いでおられるが……」

「そこが基地の中だろうと、いついかなる時でも敵に襲おそわれないか目配せしてるわけよ、俺くらいのイケメンだと」

回答までに看過できない長尺で間があろうと、不審すぎる動揺を見せようと、ポセイドンギルディの武勇伝を信じた戦士たちは憧あこがれの視線を送る。

そしてそれがポセイドンギルディを増長させる、悪循環だった。

「そんじゃあさあ、明日は俺がクルマ出してやっから、何体か一緒に行こうぜー。古典的でも、やっぱナンパの華はイカす乗り物っしょ～」

「おお、ポセイドンギルディ殿の愛機！　さぞやスーパーなカーなのでしょうな!!」

「だいぶスーパーだぜ～？　ちょっと丸くて空飛ぶ感じのクルマ。お前ら送った後、俺も出張でばっからしっかりお手本にしなよ？　俺がテイルレッドにチョコもらうとーこー」

イケメンの大胆不敵な宣言に、戦士たちのボルテージも上がっていく。

そのままポセイドンギルディは、二時間にもわたって長々と講釈を垂れ始めた。

「うっわ男くさ！　もー、すぐ空気籠こもるよなこの部屋、ちゃんと換気しろよな～」

そんなことをしている間に、次の訪問者が現れる。

ビエルプラネットでテイルレッドと激闘を繰り広げた小さな強戦士、アポロギルディだ。

何やら、サンタのように大きな袋を背に担かついでいる。

「むおっ……こ、これはアポロギルディ殿……むさ苦しくて申し訳ない……!!」

懸命に手で空気を扇あおぎながら、畏かしこまる戦士たち。

幼女に「男くちゃい」と揶や揄ゆされ、むしろ興奮している様子な戦士がちらほらといるのが、救えない。

「まあいーや。明日は用事があるから、今日配っとくなー」

アポロギルディは袋を下ろして手を突っ込むと、掴つかんだ何かを勢いよく放り投げた。

「ほれ、チョコあげるぞー。みんな受けとれー」

節分の豆まきよろしく宙を舞ったのは、小さく個装されたチョコレートだった。

戦士たちはわっと声を上げ、落下点へと殺到する。

「おおおおおおおおおおおおおアポロギルディ様！　我らが女神!!」

一般兵らしからぬ高速移動を発揮し、複数個のチョコをゲットする者まで現れ始めた。

アポロギルディの戯たわむれが、戦士たちを強くしているよう

だった。

「あははー、喧けん嘩かすんなってー！　いっぱいあるぞー!!」

「「「ください！　ください！　チョコをください!!」」」

　キャンキャン吠ほえ、我われ先にと幼女の放るチョコに群がる巨漢たち。

　戦いに生きた兵つわものの顔つきも誇りも、一ひと欠片かけらの茶褐色であっさりと霧む散さんしていく。

　そこにいるのは、歴戦の戦士ではない。慧え理り那なも真まっ青さおの犬どもであった。

「ふ、ふぅーん……や、や、やるじゃん、アッちゃん」

　モテぬ男たちに囲まれてヒーローだったポセイドンギルディだが、しょせんイケメンでは幼女には勝てない。絶対的な世界の真理に歯は噛がみをすることとなった。

「いいよー。明日はイケメンの真骨頂を見せてあげるからさぁ」

　悔くやしがりながら、何か良からぬことを企たくらむように目を光らせるのだった。

◇

　瞼まぶたの奥で、茶褐色の怪物が蠢うごめく。

　俺は夢の中でまで、巨大なチョコに追いかけられていた。

「──チョコっ!?」

　自分の悲鳴に自分で驚き、俺は跳ね起きた。

　息を乱しながら、ここが自分の部屋であることを確認して安あん堵どする。

　昨日きのうの出来事がよほど心に傷を残しているのか、咄とつ嗟さに出る悲鳴までもが茶褐色に染まっていたようだ。

　ベッドに置かれた目覚まし時計を見ると、時間は朝の六時。少し早いが、寝直してもまたうなされそうだな。

　俺は額ひたいの汗を拭ぬぐおうと腕を上げる。やけに粘っこい感触と、それに伴う妙な音。

「ぬちゃ？」

　思わず反はん芻すうしてしまったその音の出所は、程なく察しがついた。

「…………ごめんなさい……」

　布ふ団とんがもぞもぞと動き、中からイースナが出てきたからだ。

　俺は咄嗟に、壁際のリモコンで部屋の電気を点つける。

「うおっ……!!」

　布団を剥はぐと、ベッドシーツの真ん中が茶褐色に染まっていた。……ビジュアル的にきっついなこれ！

　そしてイースナは、ほぼ全裸。

「総そう二じさんに、チョコ、あげようと思って……胸とお股またにチョコ、塗ったの……」

「待て、俺の読解力が足りないのか？　今の説明、前後でちゃんと繋つながってたか!?」

「でも、体温のこと、考えてなかった……。チョコ、溶けちゃった……ごめんなさい……」

　さっきイースナが説明した部位からチョコが溶け落ちていて、俺の手にもチョコがべったりとついている因果関係が不明だが……それよりこの季節に朝早くから裸でいたら、風か邪ぜを引いてしまう。



「チョコをくれるのはありがたいけど、どうしてそんな格好なんだ……」

「…………だって、これ、思い出の、スタイル、だから……」

　確かにダークグラスパーと初めて戦った時、装そう甲こうを吹き飛ばされたイースナは三枚のシールで身体からだを隠して退却した。その後も何度か同じような格好をしていたし、イースナにとっては思い出深いのかもしれない。

　ただそれを、男の俺の前でやられても恥ずかしくて困るんだよなあ……。

　俺が視線の遣やり場に困っていると、イースナはにへら、と笑った。

「ちょ、ちょっとだけ、残ってる、から……舐なめて、いいよ」

「あ、えーと、うん」

　俺は自分の手の平についたチョコを舐め、それでよしとしてもらうことにした。

　厚意でやってくれたことだし、これ以上何か言うのもな。

「観み束つか君……」

　勉強机の横に常設されている犬小屋から、慧え理り那なが現れた。

「え、慧理那!?」

　俺とイースナの会話が一段落するタイミングを計っていたのだろうか。

　…………やはりほぼ裸で、チョコが首から下にべったりとついている。

「……わたくしも、思い出のワンちゃんスタイルで犬小屋の中ではぁはぁしていたら……チョコの首輪と鎖が吐と息いきの熱で溶けてしまいましたわ……」

「服着てからしゅんとしてくれ、頼む」

「形は崩れてしまいましたが、味は問題ないと思いますので………………さあ」

　子犬がお腹なかを見せるようなポーズで、膝ひざ立ちで俺に近づいてくる慧え理り那な。

　慧理那の方のチョコは俺の手に着いていない……どうする！

　せっかくチョコを作って（？）くれたというのに、受け取らないわけにはいかない。俺は意を決して慧理那に指を伸ばし、一番チョコが多くついている首のところから掬すくい取った。

「ひゃうん！」

　できるだけ素肌には触れないようにしたのだが、無理だったようだ。慧理那に甲かん高だかい声を上げられ、俺までひゃうんとなる。

　人肌に温ぬくもったチョコパートIIを味わい、俺は感謝を伝える。

「お、おいしかったよ……ありがとう、二人とも」

　それを聞いて、二人は嬉うれしそうに互いを見合った。

　慧理那もイースナも、自分の思い出にまつわる格好が特殊だっただけで、チョコをくれたこと自体は感謝すべきだ。

　それに昨夜ゆうべＵＭＡのモンゴリアンデスワームみたいな見た目と大きさのぬめぬめチョコを目まの当たりにした身としては、多少溶けていることなんて全然気にならないしな。

「イースナの気配は察知しにくいから、気付くのが遅れるのよね、もう……!!」

　窓が開いたかと思うと、制服に着替えたモンゴリアンデスワームの中の人……もとい愛あい香かが部屋に入ってきた。

　シーツのチョコに塗まみれた部分を踏まないようにベッドに足を着いて、床に着地する。

「ほら二人とも、早くシャワー浴びてきて！」

「ど、どうせなら、総そう二じさんに、シャワー浴びてこいよ、って、言われたい……」

　しかし、いつまでもチョコまみれのままではいられないからだろう、

「じゃ、じゃあ、慧理那、一緒に浴びよう……」

「ええ、ご一緒しますわ！」

　イースナは慧理那を誘って部屋を出て、浴室のある一階へと降りていった。

「そーじ、昨日きのうは――」

　俺に何かを言いかけた愛香だったが、二度見をする勢いで出入り口へと振り返る。

　この冬の流行の最先端だと言わんばかりのドヤ顔で、全身ラバースーツのようにテカテカした茶褐色でキメたトゥアールが、身体からだをくねらせながら部屋に入って来たのだ。

「……総二様、この間は私の生命いのちを救ってくださって、ありがとうございます……。あなたにできる恩返しといったら、この身体からだ全てを捧げることだけです。そのために精一杯作りまとったこのチョコは、人肌では溶けませんが唾だ液えきで溶ける、つまり舐なめ舐めしてもらうことで柔やわ肌はだが曝さらけ出されていくのです……さあ、トゥアールちゃんが皮膚呼吸できなくなる前に、存分にぺろぺろ、テイルレッドちゃんに変身して、も一つぺろぺろ、最後には私もうっかり総そう二じ様の総二様をぺろぺひいいいいいいいいいいいい愛あい香かさんがいるうううううううううううううう!!」

「長いのよ台詞せりふがッ!!」

　簡潔なツッコミと強烈な打拳で、チョココーティングされたまま天井に突き刺さるトゥアール。

「そーじ……昨日きのうはごめんね、変なチョコ見せちゃって」

　現在進行で自分の後ろにチョコがぶら下がっていることは気にせず、愛香は殊勝な態度で謝ってきた。

「俺はいいけど、愛香たちの身体は大丈夫なのか？」

　愛香は自分の腕を顔に近づけ、すんすんと鼻を鳴らした。

「ねえ……大丈夫？　あたしチョコくさくない？　いっぱいシャワー浴びたけど……」

「大丈夫、いつもの愛香の匂いだよ」

　心底ほっとしたように微ほほ笑えむ愛香。一晩中チョコ漬けでは、気になるのも無理はないか。

　天井から抜け出したトゥアールが、てらてらした身体で俺に迫ってきた。

「慧え理り那なさんやイースナばかりずるいです！　お願いします総二様、私も裸チョコ同盟としてせめて……せめて一舐めを!!」

「指で取れない仕様にしたあんたが悪いんでしょ、諦あきらめなさい!!」

　俺は舐めるのが指先とかなら……と提案したが、愛香に止められて断念した。

　あれも一応トゥアールが作ってくれたチョコなのだから、ほんの少しでも味わうのが礼儀だと思うんだが……。

　こうしてバレンタインデーの朝は、慌あわただしい始まりとなった。

　　　◇

　結局トゥアールは専用の剥はく離り液を使って、しぶしぶチョコを落とすことにしたらしい。

　俺が愛香と一緒に一階に降りてリビングに向かう途中、浴室の方

からおかんじみた声が聞こえてきた。

「イースナちゃーん、そろそろ出発せな。もー、また裸んぼさんで歩いて!!」

「さ、さっきからずっと、裸んぼさん……だったから、いいの……」

　メガ・ネとイースナのほのぼのしたやりとりが、脱衣所で行われているようだ。

　リビングやキッチンに、母さんの姿はない。

　もう喫茶店に行ってるのか？　だとしたら、今日はかなり早いな。

「お待たせしましたわ。シャワーをお借りして、すみません」

　俺がリビングで待っていると、シャワーを終えた慧え理り那ながやって来た。ピシリと制服を着込み、当然、完かん璧ぺきにツインテールが結ばれている。

　ジャージ姿のイースナと一緒にリビングにやって来たメガ・ネは、手首をドライヤーにしてイースナの髪の毛を乾かしている。そんな細かい変形もできたんだ……。

「さっき未み春はるさんに朝ご飯頼まれたから、今日はウチがみんなの分作ったるからな～」

　メガ・ネは黒いマイエプロンを着けると、キッチンへと向かう。

　そして、鼻歌交じりに料理を始めた。実に平和だ……。

　どんな時短法を駆使したのか、あっという間に人数分のトースト、ベーコンエッグ、サラダにスープまで用意し、キッチンのテーブルに並べていくメガ・ネ。

「はいこれ、自家製のジャムやで」

　続けて、お腹なかの異次元収納箱からジャムの瓶びんを取り出していく。

　しかも、ベーコンはカリカリなのに卵は絶妙な半熟具合、サラダはドレッシングのノリがよくなるように、野菜の水切りが完璧に為なされている。女子力……いや主婦力……いやさ、おかん力が高いな……。

「わあ、このジャム美お味いしい！」

「ええ、科学者の目にはブルーベリージャムが染しみ渡ります……！」

　愛あい香かもトゥアールも、食事の時はおとなしくしているんだよな。ますます平和だ。

「なんかいいよなぁ……みんなでこうして朝ご飯食べるのって」

「そうですわよね、観み束つか君！　みんなで一緒が楽しいですわよね!!」

「また、こうやって、食べる……!!」

「あ、ああ」

　俺が何気なく言った言葉に慧理那とイースナが予想以上に強く同意してきて、少し驚く。

　まあ、誰だれだってそう思うよな。

　こんな時間が、ずっと続けばいいって。

　朝食を終えてみんなで食器を片付け終わった後、メガ・ネが俺の元へとやって来た。

「総そう二じくん、はいこれ。ウチからもチョコや。いつもイースナちゃんと仲良うしてくれて、ありがとうなあ」

「ありがとう、メガ・ネ。こっちこそ、いつも助けられてるよ」

　メガ・ネから渡されたのは、デフォルメされたイースナのイラストが描かれた小箱だった。

　その優しいタッチに、思わず顔が綻ほころんでしまう。

「そ、それじゃあ、総二さん……また後で……」

　メガ・ネに身支じ度たくを調えてもらい、イースナは仕事へと向かった。今日は善いい沙すな闇あん子こも、バレンタインイベントがあって忙しいらしい。

「あれ、もしかして今年総そう二じ様が普通のチョコをもらったのって、メガ・ネさんが初めてじゃ……!!」

「皆さんは、普通のチョコの方はいつお渡しするのですか……？」

「難しいところね……一番に渡したかったのは山々だけど、最後の方が印象に残るかも知れないし……」

　トゥアールと慧え理り那な、愛あい香かが小声で話し合っている。

「さて、俺たちもそろそろ登校しないとな」

　慧理那は迎えに来た桜さくら川がわ先生と先に出発したが、俺は朝早く喫茶店に行っている母さんのことが気になった。そこで、愛香とトゥアールと一緒にちょっとだけ顔を出してみることに。

　案の定というか、そこは朝からとんでもない賑わいを見せていた。

「あっ総ちゃん、見て見てーお客さんがバレンタインフェア開いてるのよー」

　母さんの言う通り、店にはバレンタイン用の装飾が施ほどこされ、チョコをブレンドしたらしきコーヒーなどが振る舞われている。

　この店の営業時間は、もうこの店の息子である俺すらわからない。

「とうとう客主導でフェアまで開かれるようになったのかよこの店……」

「順調に闇やみの資金エナジーが貯まりつつあるわ……」

　右目を手の平で隠しながら、不穏しかない台詞せりふを独りごち

る母さん。

　ここまで来たら、自分の家の喫茶店がどこまで行くのか見届けたいぐらいだ。

「やあ総二くん、今日は私たち常連客みんなからのチョコをプレゼントするよ」

　男性客が俺にチョコを渡そうとしてくることを不思議に思っていると、本人たちから説明があった。

「ははは、逆チョコという奴やつさ。まあ、普通は男性が女性にあげるものなんだけどね！」

　じゃあ、俺じゃなくて愛香やトゥアールにあげればよいのでは……。

「総二くーんチョコあげるよ～」

　常連である魔法少女を自称しているＯＬさんも、俺にチョコをくれた。自分にしか見えないマスコット妖精が肩に乗っているらしい人だ。やっぱ俺には見えない。

「オイルフィールドアゲマス」

　そして、油田くれるおじさんの申し出は丁重に辞退させていただく。

「本当はテイルレッドちゃんにもあげたいんだけど、彼女に会うのは時間を超えるよりも難しいからね。私の安らぎの場所であるこの店の息子、総二くんに受け取ってもらうよ」

　時間移動している設定のおじさんが、俺を見ながら残念そうに頬ほおを掻かく。

「……おや、銀髪の子……何か雰囲気が変わったね」

　母さんの淹いれたチョココーヒーを飲んでいるトゥアールを見て、常連客のおじさんが顎あごを撫なでた。

「いいことだよ。変わるべきことは変わり、そして変わらぬべきことは、変わらない……それが青春さ」

「変わらぬべきこと、ですか」

　妙に達観したふうなアドバイスをされ、その意味を少し考えてしまう。

　いや、この人たちのことだからノリで言ってるんだろうけど、トゥアールの変化にしっかり気づいたり、細やかな配慮のできる人たちだから……ちょっと気になったんだ。

　普通の会社員。何か妙に貫禄のある外国のおじさんたち。老いも若きも関係なく、この店では本当の自分をさらけ出している。

　店が賑わっていくことを成長と呼ぶかはともかく……この店も、ツインテイルズと一緒に成長してきたようなものだ。成長は、変わるということだと思う。

　じゃあ、変わらない方がいいことって、どういうものなんだろうな……。

　常連客の人たちからもらったチョコもメガ・ネのものと一緒に家の冷蔵庫に保管させてもらい、あらためて出発する。

　通学路の学生たちが浮き足立っているように感じるのも、バレンタインならではか。

　俺が道ゆく人たちを観察していると、後ろで愛あい香かとトゥアールがひそひそと話していた。

「ある意味助かりましたね……メガ・ネさんだけでなく、喫茶店の常連客の皆さんが義理チョコを配ってくださったおかげで、総そう二じ様のチョコトラウマは軽減されたようです。これはぐっと本命チョコを渡しやすくなりましたよ!!」

「なんであたしらの尻しり拭ぬぐいをあの人たちがしてくれてんのかしらね……」

　俺が振り返ると、二人は同時に笑顔で手を振ってきた。仲がいいなあ。

「それにしても、逆チョコか……俺も愛香やトゥアールたちにあげ

た方がいいか？」

「いいいいいいいいいいいいいいいいいいいから、いいの！　そーじは、もらう側で！　ね!?」

「そうです、それにそうしたらホワイトデーにもお互いに贈り合うことになって、有り難がたみが薄れちゃいますよ!?」

　俺も聞き方が悪かったか。あげた方がいいか、なんて言ったら、遠えん慮りよされるに決まってるもんな。トゥアールの言うことも、もっともだし。

　学校まで半なかばほどの距離で、メイドさんと合流した慧え理り那なが待ってくれていた。

「実は、メイドたちが観み束つか君にお話があるということで……」

　慧理那に紹介されるように進み出たメイドさんたちが、俺を取り囲んだ。

「総二きゅ～ん」

「はいチョコあげる！　いつも慧理那お嬢様のこと、ありがとうね！」

　愛あい香かは表情を険しくし、メイドさんたちへと駆け寄ろうとしたようだが、彼女たちが俺に感謝の言葉を伝えると足を止めていた。

　そっか……バレンタインって、俺が思っている以上に気軽に感謝を伝えられる日なのかもな。クリスマスほど畏かしこまらなくて済むから、このメイドさんたちもそうだけど一年近く付き合いができた今の季節が丁ちよう度どいいタイミングなのかも知れない。

　イベントごとって、俺たちが思っている以上によく考えて設定されているのかも。

「荷物になるといけないから、また後で届けるねっ☆」

　メイドさんたちが一通り俺にチョコを渡し終えたところで、ボブカットのメイドさんがまとめてチョコを預かった。

　こういう細やかな気配りは、さすが神しん堂どう家のメイドさんだと感じる。

「ね～、早く神堂家こっちに来なよ～。慧え理り那なお嬢様だけじゃなくて、おねーさんたち全員ついて来るんだゾ♪」

　しかしそのボブカットのメイドさんは、そんなことを俺に耳打ちすると、そのままふぅっと耳に息を吹きかけた。どんどん俺へのからかいが遠えん慮りよなくなってきてるような……。

「こらお前たち、観み束つかが困っているだろう。あと津つ辺べ、電柱に握力だけでヒビを入れるんじゃあない」

　メイドさんたちを窘たしなめながらも、桜さくら川がわ先生は一ひと際きわ大きな箱を俺に差し出してきた。

「そういうわけで、私からもお前にチョコだ。昨日きのう津辺とトゥアールがチョコのお化けになって力尽きた後、キッチンに戻って作業を続けてな」

　桜川先生は、俺たちの見ている前で箱の蓋ふたを開けてしまった。

「ははは、手作りチョコを男に渡すなど生まれて初めてだから、張り切ってしまったよ」

　中身は……三段の、デコレーションチョコケーキ……！

　しかも、ウェディングドレスの布地を意識したような、繊せん細さいな模様が刻まれている。

　箱も模様が細かくあしらわれたお洒しゃ落れなデザインだなあと思ったが……よく見ると、婚こん姻いん届とどけだった。

「メイド長っ！　頑張りすぎです！　もっと軽めに！　こんなん先に渡したら、お嬢様が萎い縮しゅくしちゃうじゃないですか！」

「そうですよ、だいたいなんで今中身を見せるんですか!!」

「……力作だから、見て欲しくて……」

「なんで可か愛わいいんですかメイド長は!!」

部下のメイドさんたちに何やら怒られているようだ。

「桜川先生……こんなすごいチョコ、ありがとうございます！」

俺がお礼を言うと、桜川先生は元気を取り戻したようだった。

「これも大荷物だから、メイドたちのチョコと合わせて後で家に届けよう。それに観束は、今年は結構たくさんの女の子からもらうんだろう？」

「そんな、そーじにチョコあげるのなんてあたしたち身内だけですって」

「だからそれはその通りだろうけど何で愛あい香かが俺の代わりに言うんだよ……」

俺の謙けん遜そんに先んじて全否定する愛香。デジャヴだ。

ところが──学校についた途端、俺の想像だにしなかったことが起こり始めた。

「観み束つか君～これ、チョコ！　受け取って!!」

まずエントランスに入る前に、上級生の女子にチョコを渡された。

あっ……この前屋上で見かけたツインテール……の、先輩だ！

どうして面識のない人からチョコをもらうのか不思議に思いながら脱靴場へ入り、下駄箱の蓋ふたを開ける。すると、靴を取り出せないぐらいにチョコが詰め込まれていた。

「うわっ……!?」

思わず声を上げてしまった。今どき下駄箱にチョコ!?

土産みやげ売り場よろしく、小分けにするための紙袋まで入っている親切設計だ。

「何でええええええええええええええええええ!?　そーじ、中学の時とか義理チョコも友チョコももらってなかったのに!?」

「今までは愛香さんが女よけになっていたはずなのに、その神通力が通じなくなってるほど、総そう二じ様の魅力が高まってきているということなんでしょうね……」

「な……あたしのせいで今までそーじがモテなかったって言いたいの!?」

「そうは言いませんけど、四六時中女の子が隣にいる男の子に告白できる人なんて、普通そうはいませんよ」

「そ、そうかもしれないけど……」

「この世界では、もうツインテール好きはマイナスになりません。重重重度のツインテール好きというハンデが薄れてさえしまえば、総二様は童顔で身体スペック高くて、ツッコミ力＝トーク力もあって、誰だれとでも分け隔へだてなく接する優しい男の子……。しかも秋は体育祭で大活躍しましたし……学生の頃ころって往々にして、イベントで目立った男子がモテるじゃないですか」

「学生の頃……って、何過去の話みたいに言ってんのよ、現在進行で巻き起こっている危機でしょ!?」

「え、ええ。そ、え、そうでしたね……」

　離れた場所で、愛香とトゥアールが何やら言い合っている。

　今朝からあんなんばっかりだな、あの二人。

　教室に辿たどり着くと、クラスの男子たちが俺の持つ紙袋に目をやり、呪じゅ詛そのような枯れた声を絞り出してきた。

「……そのぐらいまでいくとさ、もう羨うらやましいとも思うことすら烏お滸こがましく感じるぜ……」

「へへへホワイトデーに破産するがいいぜ」

　……確かに、一か月後のお返しを想像すると恐ろしいな、この量。

「やったぁ……『いつでもテイルレッドたん』で、バレンタインテイルレッドたんが実装されたぞー……。ホワイトデーのお返しで破産するより、ソシャゲでレッドたんに貢いで破産する方がよほど建

設的だぜ……！」

　虚うつろな目でスマホの画面をタップする男子。

　貢いでいる先は俺テイルレッドじゃないんだが……。しかも、建設的なのか、それ。

「ちょっと愛あい香か、あたしたちは味方だけど……やばいよ、他のクラスの子とかけっこう観み束つか君にあげるって言ってる子いるよ!?」

「しかも、ガチめなのもちらほら……」

「……そーじを好きな女の子が何人増えたって、あたしは誰だれにも負けるつもりはないから」

　きゃ――、と歓声が上がっている。

「よく言ったわ愛香！」

「はい、クラスの女子の皆さんー！　私！　私も応援して欲しいんですけどーっ!!」

　トゥアールが自分を指差してぴょんぴょんと飛び跳ねている。

　俺は持ちっぱなしだったチョコ入り紙袋を仕舞おうと、教室の後ろにある個人ロッカーを開けた。

　しかし、鞄かばんや教科書などを仕舞うので限界なその収納スペースにもまた、みっちりとチョコの箱や袋が詰め込まれていた。

「な、何でこんなことに……」

　いくら何でもおかしい、この学校は一年間で一番悪目立ちした男子にチョコを配る校則でもあるのか!?　桜さくら川がわ先生の話じゃ、理事長がチョコをあげるのを推奨してたみたいだが……。

　この先の人生で二度とチョコなんてもらえないような気がしてきたぞ、俺……。

◇

「バレンタインで浮かれている人が多いですけどー、先生たちの迷惑にならないように済ませてくださいね～」

　帰りのホームルームで、担任の樽たる井い先生が今日もかったるそうに注意になっていない注意事項を伝える。

　というか今日に限っては、チラッチラ俺の方を見て言っていたような……。

　チャイムが鳴った瞬間愛香は席を立ち、俺の手首をガッチリと掴つかんだ。

「さっ！　超速で部室行くよ！」

「えっ⁉　おい待て、何で──」

　俺の抗議も聞かず、愛あい香かは走りだした。

　教室から女子たちの「愛香頑張れー」という声が聞こえた気がするが、それもすぐに置き去りにする速度で愛香は俺を引っ張っていく。

「あっ！　観み束つかく──」

　廊下で別のクラスの女子の声が聞こえるや、愛香はさらにスピードを上げた。

　俺の上履きが、徐々に床に擦こすれて熱を帯おび始める。

「いい⁉　絶対に後ろを振り返っちゃダメ！　さもなきゃ死ぬわよ‼」

「そんなどこぞの神話みたいな制約にいつの間に縛られたんだよ⁉」

　部室棟を走る頃ころには、俺はもう両足の踵かかとを床に擦りつけて引きずられていた。

　ツインテール部の部室に入り、ドアを閉めたところで、ようやく愛香は俺の手首を離したのだった。

「ごめんねそーじ……え、えーと、エレメリアンが出現する予感がしたの」

「何だって!?　それなら耳打ちでもしてくれれば、俺だって自分で走ったのに……」

　しかし、愛香がエレメリアンの出現を察知するとは珍しいな。トゥアールが来てくれれば、すぐにでも分析してもらえるんだが……。

「やってくれましたね愛香さん……」

　噂をすればなんとやら。トゥアールが遅れて部室にやって来た。

　しかし、何な故ぜか大きな紙袋を両手に二つ提げていた。

「私一人で廊下を歩いていたら、『これ観束君に渡してください』ってこんなにチョコ預けられちゃいましたよ!!」

　糾きゆう弾だんするように愛香へ紙袋を突きつけるトゥアール。

　何とそれは、俺に渡されるはずだったチョコだという。

「わ、悪かったってば。あたしもちょっとテンパっちゃって……」

「……まあこれで私も？　いつも総そう二じ様の近くにいる女の子って、全校生徒に認識されてるとわかったわけですけど？」

「はいはいよかったわね」

　長机の上に置かれた紙袋、その中に詰められたチョコの数を見て、俺はもはや恐怖さえ感じた。

「教室にも、もらったチョコ置きっぱなしだしな。今年はどうしてこんなにたくさん……」

　あまりの現実感の無さに、俺は一つの仮定に辿たどり着く。

「まさか、テイルレッドの正体がバレたわけじゃないよな!?」

「そんなわけないでしょ」

　俺が不安を口にすると、愛香は大おお仰ぎように手を振って一い

つ蹴しゅうした。

「そーじが色んなことを頑張ってる姿、たくさんの女の子が見てるってこと。特に渡す相手がいなかったら、そういう人に気軽にあげる子もいるでしょ。バレンタインって、身構えて本命チョコ渡すだけの日じゃないんだから」

　知り合いじゃなくても気軽に、か。そういうものなのか。

　愛あい香かたちにいわゆる「今どきの女の子の常識」を説かれる度たび、俺は自分が情けなくなる。こんな時に戸惑うばかりで、気の利いた反応も返せない自分は……つまらない男なのだと。

　何かにつけて「女の子は恥ずかしくないのかな」などと考えてしまうのは、今の時代にはもう古いんだろうな……。

「──もちろん、真剣な気持ちで渡す子だって、たくさんいるんだろうけど」

　ツインテールを抱き締めるように身を縮め、か細い声でそう呟つぶやく愛香。

　俺は何な故ぜか、その姿に見とれてしまっていた。

「愛香さんが真剣な顔つきになると、背後に回り込んでおっぱい出したくなるトゥアールちゃんですこんにちは」

　愛香の背後で、トゥアールが自分の制服のボタンを外し始めた。

　ノールックで背後に拳こぶしを放ち、トゥアールを壁にこんにちはさせる愛香。

「あのね、そーじ……あたしは、今年──」

「エレメリアン出現です」

　電子妖精・とぅあるんが長机の上に投影され、エレメリアン出現を告げる。

「愛香の言ったとおりだったな……すごいじゃないか愛香、どうし

てエレメリアンが現れるってわかったんだ!?」

「あ！　そうだったあはは……えーと、気配がね、した気がして……」

　妙に落ち着かない態度の愛香は、はっとして振り返った。

　部室のテレビが勝手に点つき、どこかの街の映像が映し出されている。

　アルティメギルがまたぞろ電波ジャックをして、世界中に映像を配信しているのか！

『ふはははははははは、喜べ！　我われ々われからチョコのプレゼントだ、人間どもよ!!』

　街中には、数体のエレメリアン。

　そして空には巨大な物体が浮遊しており、そこから大量のチョコが地上に降り注いでいる。

　人間を傷つけないようにだろう、チョコは重力を無視して非常にゆっくりと落下していた。

「何やってんのよあいつらあああああああああああああああああああああああああ!!」

　愛香はテレビに駆け寄り、フレームを握り潰つぶさんばかりの勢いで掴つかみかかる。

「そもそもクリスマスのプレゼントなんかと違って、バレンタインにチョコをあげる文化って全世界に根付いてるわけじゃないよな。チョコ配っても、ポカーンな国も多いだろ」

「私の世界では世界中で広まっていますし、異世界を巡るうちにアルティメギルの中で定番イベントとして根付いたんでしょう。そういうものは多いですよ」

　俺の疑問に、トゥアールが説明する。

　あの物量だ、世界中に配るというのはハッタリではないだろう。

　そこへ、息を切らしながら慧え理り那なが部室に入ってきた。

「お待たせしましたわ！　今、スマホの画面などにもエレメリアンが映って、学校中の皆さんが大騒ぎなさっています……!!」

　やはり、生徒たちもこの映像を見て困惑しているようだ。

「元々空気読むような奴やつらじゃなかったけど、今日ばっかりは絶対に許せない……！」

　愛あい香かはＴＶ画面を睨にらみ付けると、憎にく々にくしげに拳こぶしで空くうを薙ないだ。

「行くわよみんな！　テイルオン!!」

　基地に行く前からブルーに変身し、雄お叫たけびを上げて転送ロッカーに入っていく愛香。

　俺と慧理那は頷うなずき合うと、レッドとイエローに変身し、後を追った。

◇

　現場近くへ転送された俺たちは、手近なビルの屋上へ移動する。そして目に飛び込んできたのは、ＴＶの画面越しに見た巨大な円盤だった。

「近くで見るとデカさがやばいな……まるっきり地球に攻めて来たＵＦＯじゃないか」

　空力を完全に無視した、バームクーヘンのようなフォルム。白に発光する完全な円柱だ。

　窓も、噴射口も、部品の継ぎ目すら見当たらない。

　アルティメギルの科学技術で作られた乗り物は、まさに人が思い描く未確認飛行物体、ＵＦＯそのものだった。

「何の属性を狙ねらっているのでしょう……エレメリアンがあのよ

うな乗り物を使って現れるのは、かなり珍しいですわね」

　確かに。貴の三葉ノー・ブル・クラブの奴らがバイクやらバギーに乗ったりしてたけど、あれは一軍団まとめてレディースみたいなもんだったからな。

　転送ゲートで出現して以降は、基本的に歩行かちで行動するエレメリアンたちが、飛行物体で乗り込んできた。

　これだけでもかなり警戒すべきことだというのに──やっているのは、サンタクロースよろしく無差別にチョコを配っているだけだ。

　大勢でもって押し寄せておいて、何が本当の目的なんだ。

「！　まさか……神の一剣ゴー・デイア・ソードの最終攻撃か!?」

　俺は、真っ先にそれが思い浮かんだ。

　エレメリアンが同時に何体も出現するのは、一つの軍が最後の戦いと定めた総攻撃である場合が多い。

『ですが、神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンが総攻撃に来たという感じではないですよ。どちらかというと、弱い部類に入るかと……。戦闘中に進化することもあるので、油断はできませんが』

　基地で分析しているトゥアールも、判断を迷っているようだ。

「よし。二人とも、ここは周囲に被害が及ばないように、慎重にい──」

　俺が注意を促うながそうと振り返ると、ブルーが素早く胸元にパッドを入れていた。

「えっ待」

「っんの……ボケどもぉ────────ッ!!」

　そして俺の制止も虚むなしく、大おお鯨くじらを銛もりで突く海人よろしく槍やりを逆さに構えてビルの屋上から地上に落下していく。

「はっ……!?」

　見上げれば、そこにブルー。ウェイブランスエクシードの一撃で、早くも一体のエレメリアンが爆散した。

「なにい!?　テイルブルーが開幕修しゆ羅らだと!?」

　いきなり空から、しかもエターナルチェインで現着したブルーを見て、エレメリアンたちが怯おびえ出す。

　慌あわてて後を追い地上に降り立った俺とイエローの前で、ブルーはさらにヒートアップしていく。

「ふざけんじゃないわよ！　よりによってバレンタインデーに現れるなんて、あんたたちは今、全ての乙おと女めを敵に回したわ……あたしが全員ブッ潰つぶしてやるから!!」

　威い嚇かくするように頭上で槍を振り回すブルーを見て、エレメリアンたちがたじろぐ。

「馬ば鹿かな!?　この夜や叉しやはどの面ツラを下げて世界中の乙女の代表を名乗って!?」

「な、何という説得力のなさだ……！　これほど憎しみで歪ゆがんだ形相でかばわれては、バレンタインデーもリアクションに困ってしまうわ!!」

　明らかに普段と違う侵攻を警戒している俺たちと違い、もはやブルーはエレメリアンの殲せん滅めつしか頭にないようだった。

「よせ！　今日は人間の属性力エレメーラを奪いに来たのではない！　俺たちは、ただテイルレッドからチョコをもらいたいだけなのだ!!」

「だからこうして、先に我われらからチョコを配っておるのがわからぬか!?」

　白旗をあげかねない勢いでブルーに弁明するエレメリアン。

　しかも、何やら目め眩まいがしそうな内容をのたまっている。そりゃわからぬて……。

　ブルーは一瞬だけ考えこんだものの、

「……つまり、略奪でしょ！」

　すぐにランスを構え直した。

「そんな……純粋にチョコが欲しいと願うこの心を、人は略奪と呼ぶというのか!!」

「何な故ぜだ……何故モテないだけで、こんな悲しみを味わわねばならんのだ――――っ!!」

　むくつけき筋肉を脈動させ、怪人たちがおいおいと嗚咽おえつを漏もらす。

　な、何か見てて哀しくなってきた……。

「待てブルー、チョコをやれば帰るってんなら、俺がそいつらに……」

　だがブルーは、厳しい目つきで振り返り、俺を諌いさめた。

「いい、今のあんたは女の子の代表として人前に出てるのよ。侵略者に屈してチョコをあげるなんていう姿を、世界中の女の子に見せたら駄目!!」

　ブルーはエレメリアンに対して冷徹な面もあるし、個人的な憤りで暴れることも多いが……こういうふうに、ぐうの音も出ない正論をぶつけてくる時がある。

「……そうですわよね。チョコをあげるその意味をこそ、わたくしたちが守らなければ!!」

　隣で聞いていたイエローも、晴れやかな表情で同意した。

　しかしその時、周囲がまた騒がしくなり始めた。

「「「レッドちゃ――ん！　チョコあげる――っ!!」」」

　いかん、退避していた一般人のお姉さんたちが、チョコを手に押し寄せてくる！

　今日俺と会うかなんてわからなかっただろうに、なんで用意して

んだよ!!

「はいはいはいはい散りなさい、今からここはエレメリアンの葬儀場よ!!」

　ブルーが威い嚇かくするように槍やりを振り回すと、ギャラリーたちは一目散に逃げていった。

　すでにこれだけの数のエレメリアンだというのに、さらに増えてきているようだ。一般人に近くで見物されるのは危険だからな。

「こいつらエレメリアンがどうしてもチョコが欲しいってんなら、ドラム缶いっぱいに湯煎した熱々のチョコでもぶっかけてやればいいのよ！」

　昨日きのう自分があんな目に遭っておいてその発想が出てくるのがすごいよな、ブルーは。

「レッドがやってくれるならそれでも全然よいぞ！　くれい!!」

　嫌すぎる即答をされ、俺は後あと退ずさる。

　普段はすげー誇り高い奴やつらなのに、たまに次元を超えた卑ひ屈くつさになるよな。

「チョコ……チョコ……チョ――――コ――――」

「うわああああああああああああああ!?」

　エレメリアンたちが目を血走らせながら、両手の平を俺に差し向けて迫ってくる!!

　慌あわてる俺とは裏腹、ブルーは冷静に対応を始めた。

「属性玉エレメーラオーブ──体操服属性ブルマ！　髪紐属性リボン！　頬属性パフ!!」

　エターナルチェインの特殊能力、属性玉エレメーラオーブの複数同時発動だ。

「うおっ……槍が追いかけてき……ぐわあああ!!」

　体操服属性ブルマの重力操作で加速したランスが、髪紐属性リボ

ンで飛び翔しよう能力を強化。類属性バフの効果で空中跳弾し、次々とエレメリアンを薙なぎ倒していく。

　その間にも、チョコは絶え間なく降り注ぎ続けていた。

「……いつまで降ってるんだこのチョコ、もう雨か雪と同じだな」

　空から降ってくるチョコに意識が向き、俺は上空の円盤を見上げる。

　ちょうどその時━円盤目掛けて、雷が落ちたように見えた。

　不思議に思っていると、チョコとは違う妙な発光体が次々と円盤から飛び出してきた。

「何ッ!?」

　チョコに幻惑されるように薄ぼんやりとしていた俺の意識が、一気に覚かく醒せいする。

　飛来したのは、属性力エレメーラ奪取のリング……それも、十基以上だ！　建物の軒下に隠れている人たちへ的確に狙ねらいを定め、唸うなりを上げて急降下してくる！

「ヴォルティックブラスターッ!!」

　イエローがで西部劇のガンマンよろしく早撃ちを披露し、迫って来ていた属性力エレメーラ奪取のリングを次々に撃ち落とす。

「お前ら……チョコ配りで油断させておいて、あれを人々に放つのが目的だったのか!!」

　俺はエレメリアンたちを問い詰めるが、何を言っているのかわからないという困惑顔で見返された。

「あれだよ、空の円盤だ！　あの円盤で、本当にやろうとしていたことだっ!!」

「？　あの円盤は、チョコを運ぶための車だが。今は誰だれも乗っていないはずだぞ」

　属性力エレメーラ奪取のリングが飛んできたところを見ていな

かったのか、エレメリアンたちの答えはのんびりとしたものだ。嘘うそを言ってるようには見えない。

　だとすると、さっき船に直撃したように見えた雷……あれが原因か？

「とにかく、チョコをくれれば円盤ごと帰る！　チョコをくれ、テイルレッド!!」

　全然気にしている様子がない。一般兵だからか、無人飛行機が属性力エレメーラ奪取のリングを大量にばらまく爆撃機と化したその恐ろしさを、こいつらは理解していないんだ……!!

　ブルーは俺とイエローに振り返ると、上空の円盤を指差した。

「こいつらは任せて！　あたし、デカブツの相手は苦手だから……あっちはよろしく！」

「嫌すぎる……よりによって何な故ぜバレンタインに貴様と対たい峙じせねばならんのだ！　板チョコのような胸をしおって!!」

『いやあああああああああああああギャグセンスがエレメリアンとかぶったいやあああああああああああああ!!』

　通信越しに基地でトゥアールが絶望にまみれている声が聞こえる。多分、同じギャグを愛あい香かに言ったんだろう。

「…………どいつも、こいつも……」

　一方、ブルーさんが絶望をもたらす存在へと変貌しました。現場からは以上です。

「ウォラァ、四列に並べ――ッ！　順番に片づけてやるわあああああああああああ!!」

「「ぎゃああああああああああああああああああああああああ!!」」

　一人ずつかかってこい、ならまだわかるが、四人ずつでいいと豪語するとは……。

　名乗る暇ひますら許されず、一般兵と思おぼしきエレメリアンた

ちが空高くかっ飛ばされていく。

『初めから四列縦隊で捌さばくとか、列整理力半端ないですねこのイベントスタッフ……』

　手を握る代わりに空にブッ飛ばしてくれる、血塗られた握手会に参加してしまったエレメリアンたち。会場に木霊こだまするのは、嬉うれしくない方の悲鳴だ。

「よしイエロー！　エレメリアンはブルーに任せて、俺たちはあの円盤を何とかしよう!!」

「はい！」

　属性力エレメーラ奪取のリングの次弾が、いつ発射されるともわからない……急がないと！

『高層ビルが密集している街中です、生半可に撃墜して墜落させたら大惨事になります……レッドとイエローの共同作業で、跡形もなく消し飛ばしてしまってください!!』

「了解だ！」

「共同作業……共同作業ですわ、はぁはぁ……」

　トゥアールの指示で何な故ぜか早くも息を荒らげているイエローが心配だが、あの円盤はすぐにでも破壊しなければ。

　チョコの配布は一段落したようだが、街はすでに結構な惨事になっている……建物も道路もチョコまみれだ。

　だがそういった直接的な被害より、あの円盤をいつまでも世界に見せ続けてはいけない。

　俺たちツインテイルズは、エレメリアンが徒に人間の生命いのちを奪おうとしないことは承知の上だが……属性力エレメーラについてほとんど知らない世界の人たちは、あくまで奴やつらの行動の積み重ねでそこまで凶暴な侵略者ではないと認知しているだけだ。

　空を隠すほどの巨大な円盤の出現。

　それは映画やフィクションで描かれ続けてきた、宇宙などの外世

界からの侵略の象徴だ。

　あの円盤はエレメリアンの意図とは裏腹に、世界中の人たちに侵略の恐怖を植え付けてしまうだろう。

　アルティメギルだってそういった人間の心理を理解しているからこそ、徹底して効率重視の作戦を練り上げてきたはずなのに……何故ここに来て、タガが外れてしまったんだ。

　俺は円盤にほど近い高層ビルの壁面を駆け上がり、屋上に着地した。

　イエローはというと、装そう甲こうを組み合わせた合身巨大砲ユナイトウエポンをジェット機のように飛ばし、それに掴つかまって屋上までやって来た。

「……間近で見ると、かなりの大きさですわね……!!」

　彼女の言うとおり、円盤の落とす影が悠ゆう々ゆうと屋上を覆おおい隠している。

　合身巨大砲ユナイトウエポンを見て戦法を思いついた俺は、すぐにブルーへと通信した。

「ブルー！　ランスを借りて大丈夫か!?」

『オッケー持ってって！　今は拳こぶししか使ってないから!!』

　現場の状況を想像すると恐ろしいが、了承は得た。

「属性玉エレメーラオーブ──三つ編み属性トライブライド!!」

　俺は三つ編み属性トライブライドを発動し、ブレイザーブレイド、飛来してきたウェイブランス、合身巨大砲ユナイトウエポンを融合させる。

　ツインテイルズが誇る合体巨砲、フュージョニックバスターの完成だ。

　俺とイエローとで左右をそれぞれ支ささえ、真ん中のグリップを一緒に握る。

　ツインテールをアンカーにしてビルの屋上に突き立てたイエローが、合図をした。

「フュージョニックバスター！　ファイヤーですわ!!」

　三色の螺ら旋せん波光がほとばしり、一直線に青空を走る。

　円盤はあたかも危機を察知したかのように、再び属性力エレメーラ奪取のリングを放ち始めた。

　しかしフュージョニックバスターはそれらのリングを消し飛ばしながら直進し、最後には円盤の中心に大穴を開ける。そこから亀裂が入っていき、円盤はバラバラに分解した。

　しかし、細かい破片になっても元の大きさが大きさだ。

　地上に降り注いでいく大質量の瓦が礫れきは、一片たりとも取りこぼせない。

「仕上げだイエロー、装甲ふくを着ろ！　チェンジ……フォーラー!!」

「はふん、了解ですわ……!!」

　陶とう酔すいした表情で装甲を呼び戻したイエローは、装着と同時に砲門を全展開した。

「飛べ、セイバーッ!!」

　フォーラーチェインの高速飛ひ翔しようから勢いをつけて放たれたブレイザーセイバーが、飛び散った残ざん骸がいをさらに細かく切り刻んでいく。

「完全脱衣形態フルブラストモード……全弾発射!!」

　そしてイエローの全武装が宙を舞う円盤の残骸をロックし、一斉射。轟ごう音おんと共に放たれた砲弾や光線が、一片逃のがさず灼やき潰つぶしてゆく。

　まさに、共同作業。俺とイエローの息の合ったコンビネーションで、円盤はついに跡形もなく消し飛んだ。

　眼下から、歓声が聞こえる。

　俺たちがＵＦＯを破壊したのを見届けた人々だろう。

　完全に宇宙人映画で地球の勝利を知った民衆のノリだが……喜び、騒いでくれる方がありがたい。侵略の象徴は、俺たちが確かに撃破した。

　よく聞いていると、私のチョコ受け取ってー、とか勝利に関係ない台詞せりふも多いが……。

「俺はブルーの所に戻る……イエローはここで一休みしていてくれ！」

「わ、わかりました。回復したら、わたくしもすぐに向かいますわ……」

　そう返しながらよろめいているのを見ると、俺が「待て」をしておいて正解だった。

　イエローの武装の装弾数は気力次第……裏を返せば、今のように長々と連続発射を続けると、かなりの体力を消しよう耗もうするからな。

　俺はフォーラーチェインのまま地上へ急降下し、着地と同時にツインテールを中結びへと結び直す。

「お見事。惚ほれ惚れする手際だったねぇ」

　そんな俺を、まるでタイミングを計っていたように地上で待ち構えていたエレメリアンがいた。

　拍手をしながら悠ゆう然ぜんと近づいてくるのは──

「──ポセイドンギルディ！」

　ビエルプラネットで相対した、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士だった。

属性玉 −設定資料− 05

13 眼鏡属性（グラス）

持ち主 メガ・ネプチューン=Mk.Ⅱ など

グラスギアを生成する神眼鏡や、メガ・ネの核として使用される。イースナは子供の頃、奇跡が起こり自分の眼鏡が変身アイテムに進化したと思っていたが、神眼鏡誕生にはトゥアールのテイルギアの技術に触発されたペガサスギルディの密かな力添えがあったようだ。無論それをブラッシュアップしテイルギア相当の力に高めたのは、イースナの努力が大きい。

14 男の娘属性（ガールズボーイ）

持ち主 アラクネギルディ など

テイルギアの新装備"属性玉多重変換機構"の起動・維持に使用される。うまく発動できれば二つの属性を同時に使える男の娘属性の特性に目をつけ、新装備に使用しようとしたトゥアールだったが、それだけでは出力が安定しなかったため、性転換属性とハイブリッドさせることで課題をクリアした。

15 性転換属性（トランスセクシャル）

持ち主 スネイルギルディ

男の娘属性と同じく、属性玉多重変換機構の起動・維持に使用される。特に装備の出力の安定を賄っている。なお、属性玉多重変換機構は二つの属性のどちらでも起動可能だが、ブルーとイエローは戦闘中にどちらかが男の娘属性を使えばもう一方は性転換属性を使うよう、何となく分けているようだ。あくまで、何となくなのである。

第三章　四人目の神。

　気さくに手を挙げ、歩み寄ってくるポセイドンギルディ。

「ハロー、テイルレッド。マイネームイズイケメン」

　おっと初しよ手てからだいぶウザいぞ。

　何な故ぜ、英語の教科書で最初のページに載ってるレベルの自己紹介を……。しかもその場合アイアムだよな、多分。

「はぁ～い、この世界のみんな。俺はアルティメギル一のイケメン、ポセイドンギルディさ。君たちの心の一番優先度の高いところに、以後お見知り置きを」

　ポセイドンギルディは撮影をしていると思おぼしき戦闘員アルティロイドへと向き直ると、仰ぎよう々ぎようしいポーズで傲ごう慢まんな自己紹介を始めた。

　侵攻の様子を世界中に生中継し始めたのは、自分の存在をアピールするためか。

　じゃあ、さっきの冷徹な奇襲もこいつの指示だっていうのか……。

「一般兵の部下を陽動にして、自分は円盤を使って属性力エレメーラの無差別奪取か！　スカしてるわりに、やることが姑こ息そくじゃねえか!!」

「え、なになに？　知らないけど……君が壊した円盤がどうしたの？　あれ、俺の愛車の一つだったんだけど、盛大にやってくれたね～」

　きょとんとして俺を見てくるポセイドンギルディ。嘘うそを言っている感じはしない。

　しかも、自分の愛車？　を破壊されたというのに、恨むどころか楽しげですらある。

　こいつも違うのか……!?　おい、どんどん話がキナ臭くなってきたぞ。

俺は、先ほど円盤に直撃した雷のことを思い出していた。

ポセイドンギルディほどの実力者が関わっている作戦で、それを出し抜く力の持ち主。

それは──同じ神のエレメリアンではないのか。

「おっ……しめしめ、テイルブルーいないじゃん！」

挨あい拶さつを終えたポセイドンギルディは、ブルーが離れたところでエレメリアンたちの相手をしているのを確認。

「テイルレッド……ちょっと……ちょっと」

俺に、小さく手招きをする。

「何だよ……」

「ほいほい。これ、手に持って」

そして戦闘員アルテイロイドの撮影機器の死角になるよう、後ろ手で俺に小箱を渡してきた。

げっ、すっげーファンシーな包装紙にリボン。

「まさか、お前まで俺にチョコ……」

「しっ！　他のコらに聞こえるっしょ！　そのまま、ね？　ね？」

俺が箱を手にしたのを見届けると、ポセイドンギルディは大きく後ろに跳躍。そして何食わぬ顔で、俺へと歩み寄ってきた。

「えっ、それチョコじゃん！　ウッソ、マジィ!?　俺にくれんの、テイルレッド!?　いや～イケメン冥みよう利りにつきるわ～!!」

とどめに、深夜の通販番組の外国人じみたオーバーリアクションでこれだ。

「はあっ!?」

当然俺は、困惑たっぷりに声を上げてしまう。

人差し指を口くち許もとに当てて必死にしーっ、しーっ、とア

ピールしてくるポセイドンギルディ。

「頼むよ……みんなにチョコなんてしょっちゅうもらってるって言っちゃったからさぁ……。話の流れで、テイルレッドからも軽くもらえるって」

「お前、部下に見栄張ってんのか!?」

「まあ別に本気出せば君からチョコもらうなんて朝飯前だけどさ、コスパ悪いじゃん？　お願いで済むならそっちの方がいいよね～」

　汗ダラダラで虚勢を張るポセイドンギルディ。

　ティラノギルディといい、普通にしていれば人望が集まる素養は持っているのに自爆していくエレメリアンが多いのは、どうしてなんだろうな。

「そんじゃ、サンキュー！　俺からのホワイトデーのお返しは──まあ、その時までこの世界が無事だったら、ってことで」

　最後にぞっとするような薄ら笑いを浮かべ、ポセイドンギルディは転送ゲートの中へと消えていった。

　お返しをする日は一か月後。その時までにこの世界を侵略する、と言う意思表示か。

　底抜けに剽ひよう軽きんなくせに、肝心なところではちゃんと大幹部やってやがる。

「……上等だ。その時は引き続き平和な世界で、堂々と言い返してやるぜ。お返しなんていらねえ、ってな」

　俺は決意を拳こぶしに握り締める。

『ブルーは今エレメリアンを全体撃破して、イエローも回復したようです。レッドへの援護が間に合わなかったですね……』

　トゥアールから通信が入る。幹部エレメリアンと一人で対たい峙じした俺を気遣っていたようだが……話をしただけで終わったからな。

「いや、大丈夫。どの道こんな街中でポセイドンギルディとやり合

うわけにはいかない。あいつもそれがわかってるから、とっとと退散したんだろう」

　円盤は壊したが、街に降り注いだチョコはそのままだ。属性力エレメーラで作られたりしたもんじゃないだろうし、当然か。

「みんなー、このチョコは食べないでね～！　俺からチョコはあげられないけど、気持ちはみんなにあげるからー!!」

　俺がそう言って大きく手を振ると、街の人たちは歓声とともに手を振り返してきた。

　こうしてさりげなく注意しておけば、大丈夫だろう。エレメリアンが配ったチョコなんて大人は警戒するだろうが、子供は拾って食べたりするかも知れないからな。

　俺は人々にしっかりとそう伝え、ブルーの元へと向かう。

　結局、リングを放ってきた奴やつはわからず仕舞いだった。エンジェルギルディがいなくなっても、まだ予想もできないような作戦を繰り出して来る奴は残っているってことか。

　しばらくは、現場で対たい峙じした敵以外にも注意を払わないとな……。

◇

　基地に帰投し、変身を解除した俺と愛あい香か、慧え理り那なは、思い思いに重たい息を吐いた。

　トゥアールに迎えられてコンソールルームに入りながら、力無く椅い子すに腰を下ろす。

「今日は大変だったな……」

　俺がついそう零こぼすと、隣に座る愛香がジト目でこちらを見てきた。

「……『気持ちはみんなにあげるからー』って……」

「総そう二じ様、ああいう魔性の台詞せりふめっちゃ上う手まくなりましたね」

　対面のトゥアールもそれに続き、ニヤニヤしながら俺をからかってくる。

「えっ……別に意識したわけじゃないんだぞ!?」

　敵が予想外の戦法を取ってきたことより、真っ先にそれを話題にされるとは……。

「ただ、今回はな……やり過ぎなくらいでもいい、人々の注意を俺に……テイルレッドに向けたかった」

「ん……そうだよね……」

　愛香も俺の気持ちをわかってくれたのだろう、それ以上何か言ってくることはなかった。

「今日と同じ作戦を、この先も行われたらと思うと恐ろしいですわね。地上のエレメリアンでわたくしたちの注意を引きつけておき、円盤などを飛ばして無差別に属性力エレメーラを奪う……」

　慧理那が危き惧ぐするとおりだ。円盤への対応があと少しでも遅れていたら、大変なことになっていた。

「作戦の脅きよう威い度から考えても、やはり神の一剣ゴー・デイア・ソードが最終侵攻を開始したと見て間違いないでしょう。名目上の隊長であるエンジェルギルディが倒れたのです、遅かれ早かれこうなっていたでしょうが……まさかあのチャラ男がこんな作戦の陣頭指揮を取ってくるとは」

「いや、それがそうとも言いきれないかもしれないんだ。ポセイドンギルディ自身、円盤にあんなものが仕込まれていたのを知らなかった。多分、あいつは作戦なんて何も考えてない」

　俺はトゥアールの意見に補足した。

「つまり……まだ他に、裏で糸を引いてる胡う散さん臭い奴やつがいるってこと？」

渋面で聞き返す愛あい香かに、俺はしっかりと頷うなずいた。

エンジェルギルディを倒した以上、卑ひ劣れつな手段を用いてくる奴はもういないだろうと思っていたけど……ちょっと怪しくなってきたな。

「元々、神の一剣ゴー・デイア・ソードはそういう奴らじゃろうが」

声が聞こえて振り返ると、コンソールルームの入り口にイースナが立っていた。

善いい沙すな闇あん子このアイドル衣装のままだ。急いで来てくれたんだろう。

「ヴァルキリアギルディを思い出してみよ。確かに誇り高い戦士じゃったが、首領を守るためならどんな卑劣な手段も辞さんかった。精神性の高さと用いる手段の悪あく辣らつさは、同居できるということじゃ」

誰だれよりも神の一剣ゴー・デイア・ソードの存在を恐れていただけあって、イースナの言葉は重い。

「……イースナの言うとおりだ。もう少し、気を引き締めていかないとな」

とはいえ、ビエルプラネットの激闘が終わってから、まだたったの数日なんだ。しばしの間心休ませる暇いとまもないのは、さすがに堪こたえる。

「今日の戦いも任せっきりで、すまんかった。何だったんじゃ、あの馬ば鹿かげたＵＦＯは……さすがに仕事を早抜けして駆けつけようかと思ったぞ……」

「イースナは仕事を優先してくれよ。奇襲を受けただけで、そこまで大した敵じゃあなかったからさ」

先ほどまでの話と矛む盾じゅんするが、愛香たちも何も言ってこなかった。

戦いの忙しさで、イースナがアイドルの仕事を全くできなくなる……そんな状況になったら、それこそ世界の危機の始まりだ。

「ＵＦＯが攻めて来たとかで、バレンタインライブもかなりバタバタして終わったからのう……世間はどんな反応をしとるんじゃ。ＯＰおつぱいトゥアール、モニターにニュース映してー」

　イースナは手慣れた感じでとぅあるんを呼び出すと、メインモニターに先ほどの戦闘を報道しているＴＶのチャンネルを映し出させた。

「ちっ……イースナの分際で洒しゃ落れた使い方をするじゃないですか。皆さんも、どんどんとぅあるんを使ってくださいね！」

　俺は起動コマンドが恥ずかしくてあまり使えてないんだよな、とぅあるん。

『チョコの代わりに気持ちをみんなにあげる──テイルレッドちゃんのこの可か愛わいい一言で、世界中がほのぼのしています』

　今見ているのはニュースではなく報道バラエティだが、女性キャスターがめっちゃ真ま面じ目めに読み伝えるので、本人は反応に困る。

　……ま、まあ、ほのぼのしてくれたんなら願ってもない。

『私も妻や娘からチョコをもらえなくなって久しいですが、テイルレッドたんがチョコをくれたと思えば元気になれますね』

　悲しいこと言わないでよ、コメンテーターさん……。

『一方、相変わらずテイルブルーは怖いようです』

　ブルーが槍やりをぐるぐる回してギャラリーを威い嚇かくしている映像が、スタジオのモニターに映し出された。

「せっかく世間の警戒が緩くなってきたのに、定期的に燃料投下するのう……」

「テイルレッドにセクハラしようとした女たちを散らしただけよ！　あんたアイドルやってんだから、〝剥はがし〟の必要性ぐらいわかってるでしょ！」

「槍振り回して暴れる剥がしなぞ、逆に剥がされてタイホッホじゃろ……」

　イースナに呆あきれられるも、愛あい香かは全くぶれない。

『さらに、イケメンを自称するエレメリアンが現れ、テイルレッドちゃんに無理矢理チョコを渡させるという許しがたい犯罪に手を染めました。こちらは視聴者の投稿映像ですが、自分の用意したチョコを一度渡している様子がはっきりと映っています』

『私もチョコをもらえなくなってすぐの頃ころは、自分で買ってきたチョコを一度妻や娘に渡したものですが……戻って来ずに食べられて終わりでしたよ』

　バレてっぞ、ポセイドンギルディ……。スマホが普及して人類皆ジャーナリストとも言われるこの時代に、自前のカメラだけ小細工したってダメってことだ。

　あとさっきからコメンテーターの人がいちいち悲しすぎる。

『テイルブルーは何をやっているのか、ああいう怪人こそ豪快にやっつけて欲しい、などの叱しつ咤た激げき励れいが集まっています』

　スタジオのキャスターは、今日の事件をそう締めていた。

　愛香は再びテイルレッドが愛あい嬌きようを振りまいている映像に戻った画面を見ながら、納得するように頷うなずいた。

「批判される筋合いはないけど、ごもっともよね。あいつはあたしが血祭りにしてやるから、安心しなさいっての」

　いや──今、批判じゃなくて叱咤激励って言ったよな。愛香は気づいてないみたいだけど……随分ニュアンスが違うと思うぞ。

　単に、ニュースキャスターが言葉選びを間違ったのかも知れないけれど……俺の勘違いでなければ、ブルーへの世間の態度は確実に軟化してきている。嬉うれしいじゃないか。

「……ねえ。エレメリアンの話は、明日にしない？　それより、今日は──」

　俺はもう少し今後の対策を話し合うつもりだったが、愛香はそんなふうに機先を制して椅い子すから立ち上がると、そのままコンソールルームを出て行ってしまう。

　てっきり疲れたから帰ったのかと思ったが、すぐに戻ってきた。

「えっと、そーじ……」

　手を後ろで組んで、妙にもじもじしている。

「渡せないチョコを後ろ手に隠して切なげに俯うつむくとか、そんな少女漫画ムーブ愛あい香かさんには似合わないのでやめてもらえますか!?　あなたはもっとこう、ゲラゲラな雰囲気で渡すべきです!!」

　トゥアールを鉄拳でＧｅｔＯｕｔゲラウさせつつ、愛香は両手を俺に突き出してきた。

「……はい！　あげる!!」

　ちょうど両手の平が隠れるぐらいの大きさの箱を差し出され、俺は一瞬考えこんでしまう。

　あ。そういえば、今年はまだ愛香からチョコもらってなかったんだった！

「いつもありがとな、愛香！」

「……嬉うれしいけど、喜んでいいのかな……何も変わってないってことだし……。でも、旦だん那なさんが奥さんからチョコもらってもそう言うだろうし……う～……」

　感謝の言葉を伝えたものの、愛香は何な故ぜか複雑そうな表情を浮かべていた。

「ねえ、そーじ。ここで開けてみてもらってもいい？」

　珍しいな、愛香がそんなこと言い出すなんて。去年までは一度もなかったけど……今年は何か変わったことをしたのかな。

　俺もツインテールを結ぶ練習で、リボンの扱いには慣れたものだ。箱に巻かれたリボンを指一本でスムーズに解ほどくと、慎重に箱の蓋ふたを開けていった。

「これは……！　ツインテール型のチョコか……!!」

　中から出てきたのは、ツインテールを象かたどったチョコレートだった。

　昨日きのうから色々なチョコを見たが、このチョコは格別だ。

「ふふん、わらわたちもあるぞ～、ほれ！」

「受け取ってください、観み束つか君」

　イースナと慧え理り那なも、同じように包装された箱を差し出してきた。愛香もそうだったが、わかりやすいようにだろう、みんな自分のギアと同じ色の箱にしているのがお洒しゃ落れだ。

「あれ？　イースナと慧理那とトゥアールは、朝のあれがチョコじゃないのか？」

「裸チョコとは別腹じゃ。総そう二じは、これが一番嬉しいと思ってな！」

「こちらは昨日、みんなで一緒に作ったのです！」

　そう言って頷うなずき合うと、イースナと慧理那は同時に箱の蓋を開けて中身を俺に見せた。

「おお、こっちも……！」

　おさげ状と下結びのツインテール……そうか、さっきの愛香はオーソドックスな中結びだったが、みんな自分のツインテールと同じ形に作ったんだな。

　イースナのチョコはツインテールの造形みならず、彼女の大好きな眼鏡めがねがホワイトチョコを使って描かれているおまけ付きだ。

「ありがとう、二人とも！」

「一番喜ぶと思ってな、と言うたものの、こやつマジでわらわたちが素っ裸の時より喜んでおるではないか。すっげー複雑じゃ」

　三人にあらためて礼を言いつつも、俺はトゥアールの様子が気になっていた。

　トゥアールも白い箱を手に持っているのだが、その箱に視線を落としたまま、立ち尽くしているからだ。

「…………あ」

　俺が今、力一杯喜んだことで……トゥアールを傷つけてしまったのかもしれない。

　ツインテール属性を失ったトゥアールは、ツインテールの形をしたものを作れない。

　仮面ツインテールを名乗っていながら、ツインテールを模した仮面さえかぶることができなかったくらいだ。

　俺は自分の思慮の足り無さを恥じ、力無く項うな垂だれた。

　そんな俺の様子を見たトゥアールは、にっこりと笑い、

「……じゃーん！　私も、ツインテール型のチョコ──作れました！」

　ドッキリに成功したといわんばかりの悪戯いたずらっぽい笑みとともに、箱の蓋ふたを開く。

　その中身に視線が定まり、俺は胸が震ふるえた。

「自分の手で、ツインテールの形の何かを作ったのは久しぶりですので、不格好になっちゃいましたけど……」

　確かに。お世辞にも、上じよう手ずとは言えない。

　左右の房が不揃ぞろいで、でこぼこで。格好いい装備品を無数に生み出すデザインセンスも、確かな料理の腕も持ち合わせているトゥアールが作ったにしては、幼稚園児が初めて作ったように不格好な形のチョコだ。

　けれどもそれは──確かにツインテールだった。

　ツインテールのチョコレートを、トゥアールは作ることができたんだ。

　テイルホワイトになった時に取り戻した束つかの間まのツイン

テールは……ほんの僅わずか、しかし確実に、トゥアール自身へも影響を及ぼし始めている。

「ありがとう。いいツインテールだ……!!」

「はい！　ここ最近で、一番の〝発明品〟です!!」

　笑顔のトゥアールへ、俺は万感の思いで頷うなずき返した。

　そしてその喜びは周囲に伝でん播ぱし、みんなも満面の笑みになっている。



　というか、愛あい香かに至っては──

「貧乳はホント、トゥアールのことになると涙もろくなるのう……」

「泣いてない！　カカオが目に染しみただけよ!!」

　イースナに指摘され、愛あい香かはツインテールもろとも頭を振り乱した。仮に涙があふれていたとしたら、飛んで行けといわんばかりに。

　こんなふうにツインテール絡みの話題をしている時、トゥアールは気を遣いながらも寂しそうに俺たちを眺めていた。

　愛香はそれを、ずっと隣で見続けてきたんだもんな……。

　これはテイルギアの力を借りずともいつか再び結べるであろう、自分自身のツインテールへの、最初の一歩なのだ。

　胸が熱い。人目も憚はばからず雄お叫たけびを上げて、拳こぶしを天に衝つき上げたい気持ちになった。

「けど、ツインテールのチョコなんて、もったいなくて食べられないな……」

　俺はテーブルに並べた四つのツインテールチョコを見比べ、嬉うれしい悲鳴をこぼす。

「駄目よ！　そーじに食べて欲しくてツインテールにしてるんだからね!!」

「エロいこと言いたいなら、遠回しにせず普通に言えばいいじゃないですか、愛香さん」

「変な意味なんて含めてない！」

　愛香とトゥアールがじゃれ合い始めたところで、コンソールルームに母さんがやって来た。

「あらあらお邪魔だったかしら～。こんなにたくさんチョコもらったら、母さんのはもういらないわねぇ……」

　テーブルの上に置かれたチョコを見て、母さんは寂しげに笑う。

「息子にチョコを渡さなくてよくなる日が来たわ……また一つ、母としての役目を終えたのね……」

　母さんはよよよ、と泣き真ま似ねをしながらも、フィルムでラッピングされたチョコを俺に渡してきた。まあ、もらうけどさ。

「お店に来た恋れん香かちゃんからも、チョコ預かってるわよ。それに総そうちゃん、お客さんからもいっぱいもらったでしょ～？」

　おまけに、学校でもらったチョコも抱かかえきれないほどたくさんあるしな……。

「観み束つかー。戦いが終わったみたいだから、私のチョコを持ってきたぞー」

　続いて入ってきたのは、桜さくら川がわ先生。今朝の巨大なチョコケーキと、メイドさんたちの分のチョコを持っている。

　そしてテーブルの上に並んだツインテール型のチョコ……特に慧え理り那なの黄色い箱を見て、嬉うれしそうに眼めを細めた。

「おっ、いいな、ツインテール型のチョコか！」

　いいですよね、ツインテール型のチョコ。

「では、私のチョコはみんなで食べよう。お茶を淹いれるか……いや、珈琲コーヒーの方が合うかな？」

　桜川先生は持参した人数分の皿をテーブルに並べる。

「ああっ……切り分けては駄目ですわ、尊みこと！」

　咄とつ嗟さに止めようとする慧理那だが、桜川先生はすでにチョコレートケーキにナイフを沈めてしまっていた。

「確かに、そんな力作にナイフ入れるところを見ると、すげーもったいない感じが……!!」

　俺も慧理那の気持ちはわかる。食べ物なのだからこうすることが正しいとはいえ、そこにかかった手て間ま暇ひまを考えると、な。

「もっと力の入ったウェディングケーキが、世界中で毎日切られているんだぞ。申し訳ないと思うなら、そろそろ観念して婚こん姻いん届とどけにサインをしろ」

　桜川先生はメイド服のエプロンのポケットに手を入れる。

「あれ、婚姻届を切らしてしまっているな……すまん観束、あとで渡す」

　婚姻届切らすって言葉を日常で聞く人生って、そうそうないだろうな。

　切らしているとはいうものの、俺に渡された分のケーキにはちゃんとプレートのように三角に折り畳たたんだ婚姻届が刺さっている。桜川先生にとっては、バレンタインデーでもいつもどおりに婚姻届が一番大きなウェイトを占めるようだ。

「そーじ、あたしたちの分のチョコも今日中に食べてもらうからね!!」

「わ、わかった……」

　本人に見守られながら、製作者と同じ形のツインテールを食べる──何とも気恥ずかしい時間が始まる。ああ、ツインテール甘くて美お味いしい……。

　終わってみれば、賑やかな一日だった。

　チョコも嬉うれしいけれど……こうしてみんなで笑い合える時間こそが、一番の贈り物だ。

　みんなのおかげで俺は今日も、ツインテールに溢あふれた時間を送っている。

　今年は、最高のバレンタインデーだったな──。

◇

「最悪のバレンタインデーであった……」

　アルティメギル基地ホールには、モテなさそうな怨えん嗟さの声が木霊こだましていた。

　戦いは、終わった。

　チョコは配れど、もらえず仕舞い。アルティメギルの戦士たちがバレンタインデーにもらったのは、テイルブルーのもたらす滅びだけであった。

　基地の大ホールへとやって来たポセイドンギルディは、その場にいる者たちがあまりにもどんよりとしているため、心配そうに声をかけた。

「え、みんなどしたん。テンション低くねー？」

「……バレンタインの失敗が尾を引いておりまして……戦意の衰弱止とめ処どなき次第……」

「やはりテイルブルーは恐ろしすぎます……あ奴やつがツインテイルズにいる限り、レッドへ思いを届けることなど、とても……!!」

「いや、また次頑張りゃいーじゃん！　君ら、モテたいんだろ？　そのために俺の指導を受けてきたんじゃん!!」

　しかしそんなポジティブさは、強者だから……イケメンだから持ちえる余裕に過ぎない。

「どうせ我われらのようなブサイクは、何をしようとモテはしないのです……!!」

　感情の遣やり場をなくしたように、投げやりに吐はき捨てるエレメリアン。

「□□□□！」

　ポセイドンギルディは歯は噛がみすると、そのエレメリアンの襟えり首をむんずと掴つかみ上げた。

「……確かにお前らは、俺みたいな超絶イケメンと比べればブサイクかもしんねーよ！」

　そして突き飛ばすようにして解放すると、へたり込むエレメリアンへ向け、さらに熱の入った言葉を手た向むけた。

「けどなあ……卑ひ屈くつさってのは、内側をどんどん醜みにくくしてっちまうんだ！　心までブサイクになっちまったら――終わりだぞ!!」

　熱いイケメン（自称）だった。

　普段はチャラさばかりが目立っているだけに、このギャップは戦士たちの心を掴むのに十分だった。

「ポ、ポセイドンギルディ殿……」

　へたり込むエレメリアンは、特に心を強く打たれた様子だ。

　しかし彼らの問題は心までブサイクというよりは、心だけがある意味ブサイクなところにあるので、ポセイドンギルディの説法は的外れもいいところだった。

「ちっ……わったよ。お前らのために、いいことを教えてやる」

　ポセイドンギルディは逡しゅん巡じゅんしつつも、恥を忍ぶように明かした。

「俺もテイルレッドにジャブで告コクったけど、保留にされちまった」

　ポセイドンギルディは、エンジェルギルディの要よう塞さい―ビエルプラネットにおいてテイルレッドと邂かい逅こうし、挨あい拶さつするような気軽さで告白している。

　その告白は保留どころかワン切りレベルで脈の無い断られ方をしたのだが、事実をありのまま伝えないのは一般兵を励ますため。決してイケメンのプライドが許さないからではない。

「おお、あなたもすでに告白を……!!」

「これまでテイルレッドは、全てのエレメリアンからの求婚を一いつ蹴しゆうしております！　保留にしてもらっただけでも、とてつもない快挙ではありませんか!!」

　ポセイドンギルディの目論もくろみ通り、一般兵たちがにわかに活気づく。

「イケメンだって百発百中とは限らねえのさ。だったら……」

「……我われらのようなブサイクは、その一〇〇倍は努力せねばなりませんな……!!」

　戦士の快こころよい返事に、ポセイドンギルディも思わずニヒルに笑う。

　そもそもポセイドンギルディがイケメンアピールをするまでは、彼ら残存軍兵士たちも自分を無む闇やみにブサイクと卑下してはいなかったのだが、思い込みというのは恐ろしい。

「よし。イケメンのお手本、今度こそ見せてやるよ。次は━ちょいマジで出撃いく」

　思いもよらぬ出撃宣言に、戦士たちはどよめき出す。

「……テ、テイルレッドをナンパなさると!?」

　チッチッチッ、とこれ見よがしに指を振るポセイドンギルディ。

「あんな優しい子、難易度低すぎて歯は応ごたえねーっしょ」

　今し方失敗談を語ったばかりのように思えるが、陽キャの辞書に話の整合性という文字はないのだ。

「━━━君らが怯おびえてるテイルブルー。俺がオトして骨抜きにしてやっから、見てな」

「な……しょ、本気でございますか!?」

　正気か、という言葉を呑のみ込んで言い直したあたり、彼らの常識力が垣間かいま見える。

「もっちろん。ポセイドンギルディ様にどこまでもついてきます、何なら一緒に戦います、基地に連れてって～、って言うまで完落ちさせるね」

　いやいやいやいやいや、と戦士たちは懸命に再考を促うながす。それ

は、あまりにポセイドンギルディの身が危険すぎる。漫画でいえば、意い気き揚ようう々ようと基地を出て行ったポセイドンギルディが、次のページで顔面中にタンコブと痣あざを作って帰還するコマが、ありありと想像できる。

「よーく見とけ。イケメンが本気を出せば、テイルブルーなんざ軽くメロメロにできるってこと、わからせてやるよ」

　この部隊史上、最も失敗するだろうという確信に満ちた作戦が今、幕を開けた。

◇

　バレンタインデーの戦闘から数日。

　散発的に一般兵のエレメリアンが現れたくらいで、穏やかな日々が続いていた。

　今日の放課後、ツインテール部部室に集まったのは俺と愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、桜さくら川がわ先生。特に会議をするでもなく、全員まったりとしている。

　俺は桜川先生に淹いれてもらった紅茶のお茶請け代わりに、バレンタインにもらったチョコを一摘つまみ。

　トゥアールの作ってくれた亜空間ロッカーのおかげで賞味期限を気にせず保存できるのはいいが、俺一人で消費できる量ではない。当然、愛香たちにも勧めてはいるが……あまり手を伸ばしてくれる様子がない。

「チョコ、一日に一箱食べても一年以上保もちそうだ……」

「まさかそーじがそんな、トラックの荷台いっぱいのチョコもらってるアイドルみたいな台詞せりふを言う日が来るとは思わなかったわ」

「生徒会でも話題になりましたわ、多分学園始まって以来の数のチョコをお一人でもらった生徒ではないかと。ですが、無理はしないでくださいましね、観み束つか君」

　上品に笑いながら、嬉うれしそうに語る慧理那。

「そうだぞ。私もあげておいて何だが、あまりチョコを食べ過ぎるなよ観束……肌が荒れるぞ。健康にいいとされているのは、もっとカカオの純度が高いものなんだからな」

　確かに、義務感で消費するのはくれた人たちに申し訳ない。そろそろインターバルを挟んでもいいかなと思ってきた。

「お前、男子高校生にしてはすごく綺き麗れいな肌をしているもんな。他の男子を見ていると、年相応にニキビができたりしているが」

　そう言うと、桜川先生は手の平で俺の頬ほおに触れてきた。

「うん、すべすべだ」

　そして、まるで子供の頭を撫なでるように頬をさすってくる。くすぐったい。

「ま――た尊みことさんはそうやってナチュラルに総そう二じ様に触る！　愛香さんに二~三回ぶっ飛ばされる間におっぱいを一触れさせるのがやっとの私に申し訳ないと思わないんですか!?」

「お前も普通に触ればいいだけだろうが」

　桜さくら川がわ先生は、心外だとばかりに反論する。

「え……いやだって、私だと愛あい香かさんが邪魔しますし……」

「あたしは別に、変なコトしなきゃ怒らないわよ。今までずっとそうだったでしょ」

「そ、そうかもしれませんけどぉ……」

　トゥアールは何も言い返さず、きゅっと唇くちびるを噛かんで俯うつむいていた。

　慧え理り那なも、何か思うところがあるような表情でトゥアールを見つめていた。

「ねえ、トゥアール。あんた──」

　愛香は、真しん摯しな眼まな差ざしでトゥアールを見つめる。

「──テイルブレスレボリューションの解析はまだ終わらないの？　早くホワイトと戦いたいんだけど」

「この流れで何な故ぜそんな血塗られた話題にシフトできるんですか!?　背景に点描のシャボンが散ってる甘酸っぱい少女漫画チックな話がしたいんですけど!!」

　そう言ってトゥアールが机を叩たたいたのがスイッチになったかのようなジャストタイミングで、とぅあるんが浮き上がった。

「エレメリアン出現です。あとブレスの解析は全く進んでいません」

　なんとサービス精神旺盛なＡＩか。エレメリアン出現の報のみならず、直前に呟つぶやかれた疑問にも答えてくれている。

「こ、こら、とぅあるん！　余計なこと言うんじゃありません!!」

「ふーん……」

　愛香に不満げに見られ、トゥアールがガタガタと震ふるえる。

「ど、ど、ど、どうしましょう総そう二じ様……いつまで私はあの血に餓えた狼おおかみにロックオンされ続けるんですか!?」

　愛香に怯おびえていたトゥアールだったが、

「──出現したのは、ポセイドンギルディです」

　とぅあるんが続けて告げたエレメリアンの名を聞いて、すぐに表情を引き締める。それは、俺たちも同じだった。

　すぐ様、ロッカーから地下基地へと転送。変身した俺とブルー、イエローが現場に向かう途中で、仕事場から駆けつけたブラックも追いついてきた。

「大丈夫か、ブラック！　無理してないよな!?」

「問題ない、諸もろ々もろメガ・ネに任せてきた！　まして、ポセイドンギルディが出たのではな!!」

　ブラックも、ポセイドンギルディは相当な脅きよう威いとして認識しているようだ。

「現れたのは大学のキャンパス内だということですが……大勢の人がいる場所な以上、また今日も戦うつもりはないのでしょうか……？」

「何とも言えないな。大学敷地内には開けた場所はある。少なくとも、学生の避難が終われば街中よりは被害を気にせず戦えるだろうしな」

　イエローの懸念に、俺はそう曖あい昧まいに返すしかなかった。

　何せあいつは、色々な意味で行動が突拍子もないからな……。

　転送ポイントから地上に降り立ち、現場の大学が近づいたところで、ブラックがポセイドンギルディを発見した。

「何っ……見よ！　あやつ、人間の女をナンパしておる!!」

　キャンパスの中心、遊歩道の只ただ中なかで、ポセイドンギルディは片っ端から女性に声をかけている様子だった。

　俺たちが到着し、女子大生たちが歓声を上げると、ポセイドンギルディはゆるりとこちらを振り向いた。

「やぁ～あ、遅かったじゃない、ツインテイルズ。この学校の女の子、全員コンプリートするところだったよ？」

「嘘うそだよー、その怪人、めっちゃ袖そでにされまくってたよー！」

　そう俺たちに言って、走り去っていく女子大生。

　情報提供感謝します。俺は心の中で敬礼する。

「あんた、片っ端から女に声かけまくってるけど……属性力エレ

メーラと関係あるわけ？」

「おっ、ちょうどいいや。次に会った時に教える約束だったよねえ、俺の属性」

　ポセイドンギルディはブルーの質問を好機とばかりに、そう答えた。おそらくビエルプラネットで俺が別行動を取った時にそういったことを話していたのだろう。

「俺の属性の一つは、ハーレムを愛する自由な心──多愛属性ハーレムさ」

　！　こいつも言った……！　さすがに三体も同じことを言えば、聞き違いはありえない。

　ハデスギルディ、アポロギルディ、そしてこのポセイドンギルディ……。

　全員、属性の一つとあえて言ったってことは──他にもあるのか⁉

「はーれむ……」

　その言葉を反はん芻すうするイエローを見て、ポセイドンギルディはウインクをした。

「君たちにもハーレムの素養はあると思うよ？　その鎧よろい、認識を撹かく乱らんする能力みたいなのがあるっぽいからわかりづらいけどさあ……俺、潜在属性を見抜くのめっちゃ得意だから」

「潜在属性じゃと……⁉」

　ブラックが怪け訝げんな表情を浮かべる。

「芽吹きかけの属性力エレメーラとか、属性力エレメーラとして結晶こそしていないけど、その人間の適性として存在するもの……潜在属性。堅い言い回しだと、〝その他の属性傾向〟とか呼んだりもするね」

『確かに、その言葉を口にするエレメリアンは初めてではありません。私も現役の時、何度か聞きました……』

　トゥアール……通信はありがたいが、現役時代とか口にするとブ

ルーが変身したトゥアール──ホワイトのことを連想してしてしまうぞ。

「多愛属性ハーレムってのは、その中心人物も、構成人物もどちらも平等に強く芽吹くもの……」

　ポセイドンギルディは実に芝居がかった大おお仰ぎような仕草で、俺、ブルー、イエロー、ブラックを順に指差していく。

「君らはどっちだろうねえ？　全員適性アリって感じなんだけど」

　……苦手なタイプだ。性格のチャラさや行動の自由さはどうでもいい。

　自分は心のプロフェッショナルだと。人間の心を覗のぞくことなんて造作もないことだと言わんばかりのエレメリアンが……たまにいるんだ。

「逆に安心したわ、わかりやすい属性で。うっわ、って感じはするけど、全然理解できないのよりはずっとマシだし」

　ブルーは俺のような警戒など見せず、むしろ戦意を昂こう揚ようさせている。

「それでそのハーレム好きさんは、今日もまたレッドにコナかけるつもり？　いい加減に諦あきらめなさいよ、しつこいわね」

「そうじゃ、本人の意志を無視して付きまとうなど、ストーカーか貴様は!!」

　戦闘中だからか、誰だれもブラックの発言にツッコまないな……俺がやるべきなのか……!?

「んー……テイルレッドもまたそのうち口説くけど。俺が今狙ねらってんのは──君かな」

　ポセイドンギルディが指差したのは──ブルーだった。

「………………はぁ？」

　当然、ブルーは怪け訝げんな顔になる。

「いや、だってテイルレッドはモテモテだろ？　そーいう子を労力かけてオトすってさぁ、コスパ悪いんだよね。先に難易度低そうなテイルブルーあたりから始めようってワケ」

「この神クソじゃな」

　シンプルかつ的確に神を冒ぼう涜とくするブラック。

「…………何の自慢にもならないけど、今までそこそこエレメリアンに告白だの求婚だのされてきたのよね……だけどその中でも、あんたが一番最低だわ」

　そしてブルーは怒りを通り越したのか、蔑さげすむような目で吐はき捨てた。

「や、そ、それはねーっしょ……見てのとおり俺、アルティメギルーのイケメンだよ⁉」

「少なくとも男型女型問わず、あんたより格好いい奴やつなんてごまんといたわ。むしろあんたは……はっきり言ってキモい」

「なあああっ⁉　……お、俺はキ、キ、キッ……キモくねーし！　イケメンだし‼」

　それが、殊ことの外ほか堪こたえたらしい。ポセイドンギルディは露骨に動揺し始める。

「あやつ、キモイとか言われるのを過度に恐れておるのう。自滅も狙えそうなぐらい心が脆もろい奴じゃ」

　悪口で追い込むってのはたとえ敵相手でも褒ほめられたやり方ではないが……確かに、ここまで実力と精神の不安定さが反比例しているエレメリアンというのも、そうはいない。

「お、俺は知ってるぞ！　君さぁ、人間からもエレメリアンからも怖がられてるんだろ？　けど俺なら、本当の君を見てあげられるんだよ？」

「本当のあたしを見てくれる人は、ちゃんといる。だからあたしは、どんな悪評が流れようと決して揺らぎはしない。あんたのナンパなんて願い下げよ」

『未いまだにニュースで流れる悪評見てめっちゃ基地で暴れることを、蛮族の世界では揺らぐにカウントしないんでしょうか……』

　トゥアールの通信が鼓膜に届く前に弾はじき返し、ブルーは断固たる態度でポセイドンギルディの申し出を否定した。

「へぇ……いい顔すんじゃん。それ、他の奴やつに見せんなよ？　俺専用だから……むぼっふ!!」

　ナンパの途中でブルーに掌しよう底ていを食らい、大きく吹き飛ばされるポセイドンギルディ。

　しかし地面に右手をついてバク転すると、スマートに着地。再びブルーの元へと歩み寄っていく。

「そんなムキになるってことは……お前、俺に気があるって気づいてる？　ぶべ!!」

「もー！　そんな言葉並べられたって何とも思わないって言ってんでしょ!!」

　今度は回し蹴げり。ブルーはポセイドンギルディに攻撃が効いていないことを危き惧ぐするよりも、そのしつこさに辟へき易えきし始めているようだ。

「……あの、わたくしがそういうことに疎うといだけなのでしょうか、ポセイドンギルディの〝なんぱ〟なる台詞せりふは、伝えたいことが全くわからないのですが……」

「安心しろイエロー、俺もそうだ……!!」

　クサい台詞を言っては吹き飛ばされるポセイドンギルディ。俺とイエロー、ブラックは、どう間に入っていいのかわからずにただその光景を見守っていた。

「なあ、頼むよ……つき合ってくれよ、なあ!!」

「しつっこいわね……何なのよあんた!?」

『ブルー、こうなったら割り切ってささっと心も股またも開いてあげてくださいよ！　アルティメギル基地に招待してもらえる絶好のチャンスですよ！』

「絶っっっっっ対にイヤ!!」

　トゥアールの通信へ反論する間にも、ブルーとポセイドンギルディの不毛なやりとりは続いた。

　ポセイドンギルディは、これだけやられても戦う意志を見せない。攻撃されても反撃することなく、ただひたすら前進してナンパを繰り返すだけだ。

「くっ……負けないぞ……！　イケメンには、ブサイクの道みち標しるべとなる義務があるんだ！」

　謎なぞすぎる高貴なる者の務めノブレス・オブ・リージユの名の下に、ブルーに向かっていくポセイドンギルディ。

「イケメンの俺が、希望を見せてやらなきゃ……！　基地のブサイクたちが安心して恋できねえんだよ!!」

　あいつまさか、基地にいる一般兵たちにブルーへ挑む姿を見せようとしているのか……!?

　徹底して個人主義、他部隊の奴やつとの連携なんてほぼ見せることのなかった神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士が、こんなことをするなんて……。

　その異様な執念を前に、最初はただ嫌悪を貼り付けていただけのブルーの表情が、次第に真剣なものへと変わっていった。

「俺は……！　イケメンだあああああああああああああああああああああああああっ！　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっ!!」

　雄お叫たけびを上げ、ブルーに突進していくポセイドンギルディ。

「ポセイドンギルディ、あんた──」

　飄ひよう々ひようとしたイケメンが見せた、泥くさいまでの熱い叫び。

　そんなひたむきさを目まの当たりにしたブルーは──

「うっさい」

「ギャ――――――――――――――――ス」

ただ、真顔で股こ間かんを蹴けり上げた。

「こいつ二度も……二度も神の股間を蹴りやがった!?」

イケメンイケメンと呻うめきながら、地面を転がるポセイドンギルディ。

「いや、おかしくねえ!?　普通オッケーするだろここまでしたら!!」

「するかアホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「お、おっかしいなあ、テイルブルーって他のエレメリアンの評価と違ってめっちゃチョロそうに感じたんだけど……」

ポセイドンギルディは、しきりにハテナマークを浮かべながら立ち上がる。

『エレメリアンとはいえさすがはチャラ男、ブルーのことを正確に分析できてますね。潜在属性を見抜くのが得意だという言葉……嘘うそではないようです』

トゥアールの通信を聞いたブルーは、こめかみをひくつかせながら進化装備エヴォルブアームズ・エターナルパッドを取り出した。

「……ったく、つき合ってらんないわ。まともに戦う気がないなら結構、こっちは最強変身チエインエヴォルブして一気に──」

その不穏な気配を真っ先に俺が察知したのは……先のポセイドンギルディとの一件を経て、伏ふく兵へいに注意するという心構えがあったおかげかもしれない。

「ブルーっ!!」

　俺はブルーの背後に言い知れぬ存在感を感じ、咄とつ嗟さに叫んだ。

「ッ──!?」

　遅れて気づいたブルーは、振り返り様にランスを薙なぐ。

　だが、それは耳障ざわりな音とともに弾はじかれた。

　背後に立っていた何者か。その周囲が陽炎かげろうのように歪ゆがみ、防御壁を形成していたのだ。

「──実に遅い。汝なんじのそのツインテール、振り返るまでに七度は切り落とせたぞ」

　陽炎が薄らぎ、中から姿を現したのは──白ローブの戦士だった。

　不自然なほどに声がぶれており、余計に不気味さを際立たせている。

　不敵な挑発に、ブルーは自身のツインテールの無事を確かめるように一撫なでし、後方へと跳躍した。

「加えて、ツインテールの梳すかしが甘い。それほどぼさぼさでは、とても戦闘態勢が整っているとは言えぬな」

　そんな見当違いな挑発をしてきた戦士に対し、俺は怒りを猛たけらせる。

「ふざけるな、ぼさぼさだと!?　ブルーのツインテールはいつだってさらさらだ!!」

「あ、ありがと、レッド……」

　束つかの間まの安あん堵どを見せるブルーをさらに追い打つように、謎なぞの戦士は続けて言う。

「髪にただ櫛を通しただけで満足しているから……未熟だと言うのだ。髪の毛とは──」

「ゼーッちゃん。そっちを語り聞かせるのは、まだダメっしょ」

　ここで、先ほどまでの気勢を削そがれ立ち尽くしていたポセイドンギルディが口を開く。声こわ音ねこそ相変わらずチャラついてはいたが、そこには奴やつらしからぬ威圧感が内包されていた。

　奴の言うそっち、とは……何のことだ。

「……フン、ナンパの次はワシに説法か？」

「ちょっとさぁ、俺が頑張ってる時に割り込んでくるのはナシじゃない？」

「これは部隊の作戦行動ではない。汝の顔色など窺うかがう必要はあるまい、ポセイドンギルディ」

　ポセイドンギルディと対等に言い合っている。ということはこの白ローブの戦士も、神の一剣ゴー・デイア・ソードの幹部か。

　今まで戦ってきた部隊と比較すると、幹部格の戦士がかなり多いことになるが……それもやはり、神の一剣ゴー・デイア・ソードがアルティメギルの最強部隊だからなのか。

「ははーん。この前俺の円盤に妙な仕込み入れたのも、ゼッちゃんっしょ。せっかくのバレンタインに、余計なことしてくれちゃって」

　俺は、ポセイドンギルディの言葉が何を指しているのか、すぐに思い至った。

「属性力エレメーラ奪取のリングを円盤から発射させたのは、お前か!!」

　俺は白ローブの戦士に向き直り、あの日の凶行を糾きゆう弾だんする。

　やはりあの一件は……ポセイドンギルディと同格のエレメリアンが絡んでいたのか！

「何。チョコをあげるから帰ってくれなどという戯ざれ言ごとをのたまうのを見かけて、ついちょっかいを出したくなってな」

　白ローブの戦士は、周囲の空気を揺らめかせながら歩みを進めてきた。

「今やアルティメギルそのものの最終目標とまで持ち上げられる女神、テイルレッド。だが、これほど長く深い侵略を受けていながら、未いまだにその侵略者に情けをかけようとするとは……所しよ詮せんは子供。可か愛わいいものだ」

　それを聞いて、俺たちは全員、この戦士の危険度を立ちどころに理解した。それぞれの武器を手にして身構える。

　こいつは、終始冗談半分だったポセイドンギルディを相手にするのと同じようにはいかないぞ。

「さあ来るがよいツインテイルズども、ワシがそこなナンパ男に代わって汝なんじらの実力の程を見てくれるぞ」

　学生の避難は完了している。キャンパス内は遊歩道から広場を合わせれば、それなりの広さもあるが……それでもこいつらとガチでやり合うには、心こころ許もとない。

「望むところですわっ！」

　開戦の一発を放ったのは、イエローだった。

　胸装そう甲こうからミサイルを発射するも、やはり先ほどのブルーの攻撃と同じく、奇妙なバリアーに阻まれてしまう。

「手て応ごたえが全くありませんわ……！」

　ミサイルを発射し終えた胸パーツを脱衣パージするイエロー。

　謎なぞの戦士の態度に変化があったのは、その時だった。

　空気にさらされ、柔らかな音が聞こえてきそうな程弾む胸を見て、謎の戦士は何な故ぜか声を荒らげた。

「──無礼者！　神に脱衣を見せつけるとは、何たる不敬!!」

　イエローの脱衣に、困惑こそすれ怒りを向けてくる敵というのも、珍しいな……。

「そう言われた時、わたくしは常にこう返していますわ。『わたくしは、脱ぎたい時に脱ぐ』と……」

　イエローは、昨日きのう今日脱ぎ始めた初心者ではない。

　今さらエレメリアンにちょっと何かを言われたくらいでひるみはしないのだ。

「……何……汝は、神に刃向かってでも脱ぎたいというのか……!!」

　謎の戦士は怒ど声せいを静め、むしろ感心したような口調に変わる。

　イエローはその矜きよう恃じを証明するかのように、武装を発射していない部分の装甲まで次々に脱衣パージしていき、あれよあれよという間に全部脱ぎきってしまった。

「むむう、特に意味もなく脱ぐとは!!」

「ヒーローとは自由を愛する者。だからわたくしは、心の赴くままに脱いできたのです!!」

　…………とうとう神様に啖たん呵かを切ってまで脱ぐようになったのか、イエロー。

　彼女が初めて変身した日のことを思い出して、目頭が熱くなる。成長したな……。

「フン、どいつもこいつもテイルレッドばかり持ち上げておったが……現場に出で張ばってみれば他にわんさかいるではないか、変態たちが!!」

「「わんさか……？」」

　後ろめたいものがあるのか、ブルーとブラックは自分を指差して顔をしかめている。

「面白い……気に入ったぞテイルイエローとやら。汝なんじはワシの肢体カラダを見せるに値する人間のようだな」

　イエローの啖呵に感銘を受けたのか、戦士は頑かたくなにまとっ

たままだったローブの襟えりを鷲わし掴づかみにし、力強く放り捨てた。

　そしてその正体が、白日の元に晒さらされる。

「━━この、ゼウスギルディのな!!」

　ローブを脱ぎ去ったことで、変声機能のようなものが解除されたようだ。

　ワシという一人称なのも相まって、ローブを脱いで聞こえてくるのは完全に男の声だと思い込んでいた。しかし本来の声は、透き通った女性の声だったのだ。

「…………女!?　こいつも、女型のエレメリアン……!?」

　そして当然、その身体からだも。

　ローブを捨て去ってなお、その背にはためく外がい套とう。

　雷をそのまま纏まとったのかのような、全身にちりばめられた金色の装飾。

　ヴェールのようなパーツで目め許もとが隠れているが、その奥で力強く光る双そう眸ぼうがはっきりと透けて見える。

　五体の各所に、避雷針を思わせる鋭い棘とげが屹きつ立りつしている。避雷針と喩たとえはしたが、それらの針からは逆に、今にも雷が吹き荒れそうな禍まが々まがしさを感じる。

　奴やつが名乗ったとおりその様は、雷を操り世界を操り、神さえも操った、かの大神━━ゼウス。

　名だたる神話の神々の中でも、もっとも勇名を馳はせた一人だろう。

　そして感じる威圧感も、決して名前に負けぬ凄すさまじいものだった。

衝撃となって迸ほとばしるかのような奴の闘気を前に、俺たち全員が表情を険しくする。

しかしそんな中でただ一人、別の要因で表情を険しくしている戦士がいた。

「────また乳のデカい敵が……!!」

確かに、女性型のエレメリアンは胸の大きな奴やつが多いが、こいつは今まで見た中でも一番かもしれない。そんなところ、言われなければ気にもしなかったが……。

ブルーの怨えん嗟さの声を耳ざとく聞き取ったのか、ゼウスギルディは傲ごう岸がん不ふ遜そんに口くち許もとを歪ゆがめた。

「フッ……ワシの乳が羨うらやましいか。許そう、神とは人間に崇あがめられるのが仕事ゆえな。アルティメギルの女性型エレメリアンの中でも最大を誇るであろう、この乳を存分に拝はい謁えつせい」

ゼウスギルディの御お胸むねを拝謁賜たまわったブルーは、みるみる怒りのボルテージを上げていく。

俺が戦ったアポロギルディも、形態のバリエーションで身長や胸が大きくなるんだが……それはブルーに黙っておいた方がよさそうだな。

「エレメリアン最大ねえ、いいこと聞いたわ……つまりあんたをぶちのめせば、少なくともそれ以上のは出てこないってことね」

「それができぬゆえ、神は神なのだ。不敬な人間どもよ、心して聞くがよい……ワシの大いなる力の根源、属性の一つは──結婚属性ブライド!!」

不敵な笑みを浮かべながら、ゼウスギルディは宣言する。

「汝なんじらにとっても特別な存在であろう？　花嫁とは」

──複数の属性を持つことを匂わせたエレメリアンは、これで四体。

全員、神を名乗っている……線が繋つながってきたぞ。

「本当はポセイドンギルディの多愛属性ハーレムなどという唾だ棄きすべき不誠実な属性を説かれる前に汝らに語っておきたかった……。男は花嫁を求め、女は花嫁に憧あこがれる……これほどピュアで、原始的で、人間的な属性があろうか」

　いちいちポセイドンギルディを挑発するように振り返りながら、ゼウスギルディは誇らしげに属性を語る。

　そして俺の目の前まで近づいてくると、何度か頷うなずきながら俺の身体からだを、ツインテールへと視線を這はわせていった。

「……うむ。テイルレッドよ、マジで可か愛わいいな、汝。よし、結婚するぞ」

「は？」

「あんたもポセイドンギルディと同じ!?　っていうか、女性型のくせに何しれっと女の子のレッドに告白コクってんのよ!!」

「無礼な、誰だれでもよい不誠実なナンパと一緒にするな！　ワシはテイルレッドが可愛いと思ったからプロポーズした、ただそれだけよ!!」

「可愛いですが！　プロポーズというにはあまりに安易でしたわ!!」

　ブルー、そしてイエローに糾きゆう弾だんされても、ゼウスギルディはどこ吹く風。

「さあ我わが花嫁よ、『お受けします』はとびきり可愛い声で頼むぞ」

　おまけに、俺からの返答がＹＥＳだと思い込んでいる。

「お断りだ。結婚の大切さを説いているわりには、ポセイドンギルディと同じぐらい手当たり次第じゃないのか、お前」

　ならば俺本人が、はっきりと断るだけだ。今まで、ずっとそうしてきたようにな。

「フッ……身持ちの堅い幼女よ。求婚のし甲が斐いがあるわ!!」

　むしろ、断られて闘志を燃やすゼウスギルディ。俺は力が抜けてしまいそうになるが、猛烈に抗議してきた者がいた。

「ちょぉ──ちょぉ──ちょぉ──！　待ちなって、戦いに割り込むのはまだしも、それはＮＧっしょ！　俺は口説いてる女を横からかっ攫さらわれんのが、一番腹立つんだよ!!」

　自分の戦いを邪魔されつつもここまで我慢していた、ポセイドンギルディだ。

「汝なんじはテイルブルーを口説いている途中ではないか！　テイルレッドはワシが求婚する!!」

「馬ばッ鹿か、テイルブルーなんざゼッちゃんが邪魔しなきゃあと五秒でオチてたっての！　俺の本命はテイルレッドだぜ！」

　少なくても俺の横で話を聞いてるブルーは、あと五秒でお前を殴なぐりにかかりそうだぞ……。

「ねぇーツインテイルズも何とか言ってやってくれよ、こいついない方がいいっしょ？　けっこう古い付き合いなんだけどさ、いっつもこうやって俺のナンパの邪魔しにくんの」

　相当苛いら立だっているようで、俺たちにまで援護射撃を求めてくるポセイドンギルディ。

　ゼウスギルディは心外だと言わんばかりにそっぽを向き、

「仕方がなかろう！　多愛属性ハーレムと結婚属性ブライド……相反する属性を持つ貴様とワシは反目しあうが宿因！　誰だれが好き好んで相手にするか！　こっちこそ迷惑しているわ!!」

「「「おや……？」」」

　ブルー、イエロー、ブラックが何かに気づいたように口角を吊つり上げる。

　三者三様の笑みとともに、二体のエレメリアンを凝視する。

　さすがだなみんな……あいつらの弱点か何かを見抜いたのだろうか。俺は何もわからない……まだまだだぜ。

「痴ち話わ喧げん嘩かはその辺にしておきなさい、お気楽神しんども!!」

　俺たちが行動を決め倦あぐねていると、空高く声が響いた。

「誰だ!?」

　ゼウスギルディがすかさず振り返る。

　両腕を組み、白衣をたなびかせてそこに立っていたのは──

「私は復ふく讐しゆうの旅を終えた美少女──『テイルホワイトの中の人』!!」

　颯さつ爽そうと現れたのは……トゥアールだ。

　そして、適当極まりない二つ名を高らかに謳うたう。

　彼女が今つけているのは、これまでの仮面に似たデザインで、目め許もとだけを隠す小さなバイザー型のマスク。仮面舞踏会でドレスアップしたマダムがつけているような大きさだ。

　それは、彼女にとって復ふく讐しゆうの象徴でもあった仮面がエンジェルギルディ戦で砕けたのを機に、仮面ツインテールからは完全に卒業したという決意の表れなのだろう。

「ぬうっ……テイルホワイトの中の人だと……!?　貴様、何者だ!!」

　名乗りを聞いたゼウスギルディは、劇画調の表情で大おお仰ぎようにに驚く。



いや、だからテイルホワイトの中の人だって、自分でも言ってるだろ⁉

「それよりさぁ、痴ち話わ喧げん嘩かって何さ？　俺とゼッちゃんのこと言ってんの？」

「ウチの純粋なレッドちゃんにコナをかける痴ち女じよに物申そうとやって来てみれば、わっかりやすい追加キャラですねえ！　ゼウスギルディ、あなたさては──一番求婚したい相手は、ポセイドンギルディじゃないんですか⁉」

二大神目掛け、ビシリと指を突きつける中の人。

「は……ワシがっ⁉　何だそれは、初耳なんだが⁉　違うぞ！　結婚属性ブライドと多愛属性ハーレムで全っ然相性悪いんだがー‼」

俺が本当かどうか様子を窺うかがう前に、ゼウスギルディは大声で捲まくし立てて挙きよ動どう不ふ審しんになり始めた。本人が大事にしている神の威厳やら何やらが、瞬またたく間に吹っ飛んでいった。

「いや、何言ってるんだ……さすがにそれはないだろ」

俺は挑発にしても現実味がないことだと思ったのだが、

「ほえー、幼稚園児みたいにわかりやすいのじゃ……」

「わかりやすいですわ」

ブラックとイエローがうんうんと頷うなずいている。

「あはははは！　んなわけねーじゃん、俺らず───っと喧けん嘩かしてっからね！」

手を叩たたいて爆笑するポセイドンギルディ。

「そして自分への好意にはとことん鈍感、さすがハーレムの属性のエレメリアン……」

ブルーが俺とポセイドンギルディを交互に見て溜ため息いきをついた。何な故ぜだ……。

「結婚属性ブライドの神を愚ぐ弄ろうするとは、罪深き女よ！　そこになおれ!!」

　トゥアールの発言を侮辱と受け取ったのだろう、ゼウスギルディは肩を怒らせてトゥアールへと歩み寄っていった。

「ヴォルティックブラスター！」

　イエローはトゥアールの元へ行かせまいと、銃撃でゼウスギルディを足止めする。

　ゼウスギルディは避けもせず身体からだに着弾するがままに任せているが、それは陽動だ。

　死角から急迫したブラックが、ダークネスグレイブを振りかぶった。

「何ッ!?」

　驚きよう愕がくするブラック。完かん璧ぺきに捉えたと思った瞬間、ゼウスギルディが後ろを振り返らず背後へと突き出した手に、大おお鎌がまを受け止められたのだ。

「いくら虚実織り交ぜようと無意味ぞ。ワシに嘘は通用せん」

　ブラックの完璧なフェイント攻撃を悠ゆう々ゆうと見切り、ゼウスギルディは不敵に口くち許もとを吊つり上げる。

「結婚属性ブライドとは、何よりも誠実さを尊たつとぶ属性。ゆえにワシは、他者の嘘うそを看かん破ぱする能力に誰だれよりも長たけているのだ」

　嘘を見抜くだけ、と簡単に言うが、こと戦いにおいてそれは絶大なアドバンテージとなる。今のように、駆け引きを交えた動きを容た易やすく見抜かれてしまうからだ。

「……ポセイドンギルディが潜在属性……いわば真実を見抜き、ゼウスギルディが嘘を見抜く。いいコンビではないか、こやつら……」

　神眼鏡ゴツドめがねのブリッジを指で押し上げながら、ブラックが戦せん慄りつする。

「例えばそこな白衣の女よ。汝なんじも、実に多くの嘘をついているようだな」

　先ほどのお返しとばかりに、トゥアールへ挑発的な視線を向けるゼウスギルディ。

「清せい廉れん潔白なこの私が、嘘を!?　出で鱈たら目めも大概にしてください!!」

　トゥアールが自信たっぷりにそう言うと、ブルーがジト目で睨にらむ。

「いいや、機械で認識を撹かく乱らんしていない嘘ならば、容易く見抜ける。そうさな……汝、胸の大きさで仲間に嘘をついておるな？」

　フルフェイスではなく口許が見える簡易の仮面になったせいで、トゥアールが滝のように汗を流しているのがよく見えてしまう。

「え、マジで!?　ホントはＢカップとかなのに見栄張ってたの!?」

　拳こぶしを握り締め、声を弾ませるブルー。

　女性のカップサイズとか詳しくない俺でも、トゥアールがＢカップは無理がありすぎるとわかるが……。

「いや逆だ。本当はピッタリ一〇〇センチあるのに、九〇センチと嘘うそをついているのだ!!」

「わ――――――――――わ――――――――――っ!!」

　ゼウスギルディの眼前で両手を振り回し、必死に言葉を遮さえぎろうとするトゥアール。

　時すでに遅し、全部言われてしまったが。

「違うんですレッド！　だってどんなに美巨乳でも三桁けたいっちゃうと太ってるって思われそうだから……い、いいじゃないですか逆サバなんですから!!」

「なーるほど、それでことあるごとに自分のスリーサイズ口にしてたんじゃな……印象づけるために」

　妙に納得するブラック。

「やベーちょっと逆サバとか面白過ぎ！　あんたも口説きたくなってきたわ!!」

　ポセイドンギルディは笑い出すわ、俺たちは何とも言えない空気になるわ──そんな中、一人だけ別の空気になっていた。

「さんけた」

　この緊迫した戦場の只ただ中なかで、ブルーが幼稚園児のような舌足らずな声を出した。

　そして天を仰ぎ見て、からからに乾ききった笑い声を上げる。

「…………………………あんた……あたしたちを騙だましてたの？　友達だと思ってたのに……仲間だと思ってたのに──イヤよ、あたし、あんたを殺したくない……!!」

　え、どうしたんですかブルーさん、言葉とは裏腹にランスを腰だめに構えて。

　まるで任にん侠きよう映画でよく見る身体からだごとドスでぶつかっていくような必殺を狙ねらう体勢で、トゥアールに対たい峙じして……。

「落ち着いてください、ブルー！　ゼウスギルディの思うつぼですわ!!」

「大丈夫、エレメリアンはあたしが全部倒すから……それはそれとしてやっぱ目の前の三桁は滅ぼさなくちゃ……」

　自身も豊かな胸を持つイエローが説得に回るが、まあ今のブルーが聞くはずもなく。

「神託一つで惑い争う……人間のさもしさよ」

　してやったりな表情のゼウスギルディ。

「……ひどい、ひどいです……ささやかな嘘を暴き立てて得意になる……それが神を名乗る者のやることですか!!」

「汝なんじなあ！　現れた時ワシに言ったことをよく思い出してからものを言え!!」

　仮面ツインテール時代から、トゥアールがエレメリアンに舌戦で劣勢になるなんて、滅多にないことだった。そこもかなり異質な感じがするな、ゼウスギルディは。

「ブルー！　見た感じ、ゼウスギルディの胸の方が『中の人』より大きいぞ!!」

　俺はブルーの敵意を逸そらすため、口から出任せを言う。

「何てこと言うんですかレッドちゃん、私の方が大きくてきれいな形してますよ!?」

　その何てことはお前のために言ってるんだよお!!

「……三桁けたアッ……!!」

　予想どおり、ターゲッティングが切り替わった。戦いが神話の域に達した今でもブレず揺るがず、ブルーは今日も元気よくエレメリアンをブチのめしに疾走する。

「ふふん……神に反旗を翻ひるがえすか、憐あわれなヒトの貧乳よ！　見事なアルミ切り出しボディのノートパソコンのような胸をしおって……家電量販店の店頭に飾ってくれるぞ!!」

「くっ……!!」

　怒りで膂りよ力りよくを増したランスの突きも、ゼウスギルディには通用しない。穂先を拳こぶしで殴なぐり、あっさりと砕いてしまった。力も、挑発のクオリティも強大だ。

「レッド、イエロー！　ノーパソに続け！　はああっ！」

　ゼウスギルディの喩たとえを引用しつつ、ブラックが檄げきを飛ばす。

　そのまま勢いよくグレイブを振るうブラックに、俺もブレイドでタイミングを合わせて同時攻撃を試みるが、ゼウスギルディはビクともしない。ブルーが素手で殴りかかり、最後にイエローがブラスターを乱射するも、全ての攻撃がいなされてしまう。

「おいおいおい、だからやめなって。人払いができてるみたいだけど、一応ここ、学校よ？　俺らがガチで戦ったらどうなるか、ゼッちゃんもわかってるっしょ」

　俺たちの攻撃の射線にかかるのも厭いとわず、ポセイドンギルディが仲裁するように割って入ってきた。やはり俺と同じ危き惧ぐを、こいつも懐いだいていた。

「ゆえに、ワシは何もしていない。こ奴やつらの実力の程を見るだけと言ったはず」

「あんま困らせないでよ。せっかく俺が興味持ったツインテイルズの才能をここで潰つぶしちゃうのもさ……ね？」

　ポセイドンギルディの言葉には、徐々に苛いら立だちが滲にじみ出始めている。

「困らせるのはお互い様ではないか。汝なんじの属性は、存在そのものがワシの属性への挑発なのだからな……無論、それは汝にとっても同じやもしれぬが」

　俺たちを差し置いて、一いつ触しよく即そく発はつの雰囲気になる二大エレメリアン。

　しかし、冷戦も長くは続かなかった。

「……はいはい、俺が折れますから。今日は引くぞ」

　転送ゲートを出現させ、撤退を提案するポセイドンギルディ。

「じゃねー。テイルブルー、俺、まだ諦あきらめてねーから。次こそいい返事期待してるよん」

　最後にわざとらしく明るく振る舞い、ポセイドンギルディは去って行った。ゼウスギルディもそれに続き、ゲートの中へと消えていく。

　何がしたかったんだよ、などという悠ゆう長ちような感想は出てこなかった。

　いい返事なんてあるか、と言い返してやる余裕もなかった。

「あいつ、ハーレムの属性とか言ってたけど……それがどうして、俺たちに興味なんて持ったんだろう……」

　仲間たちに答えを求めるように振り返るが、俺と視線を合わせないように明後日あさつての方を向いていた。

「そ、それより、ゼウスギルディが相当強そうな方が厄介よ。ポセイドンギルディと違って好戦的っぽいし……」

「確かにそうだな……」

　ブルーの言うことももっともだ。それに、ポセイドンギルディの方もまだまだ実力を秘め隠しているようだ。それをいつ解放してくるかもわからない。

　総じてあの二体は、行動があまりにも予想できなさすぎる。

　一度、みんなでしっかり話し合った方がよさそうだな……。

◇

　ツインテイルズとの小競り合いの直後、アルティメギル基地へと帰還したポセイドンギルディ。

　ホールに向かおうと廊下を歩く彼の隣に、ゼウスギルディの姿もあった。

「は!?　何であんな空気になった後で俺と仲良く歩いてるわけ!?」

「ワシの勝手だ。汝なんじが勝手にワシの隣を歩いているのだ」

　ポセイドンギルディは深々と溜ため息いきをつき、それで気持ちを切り替えたようだ。

「ねえゼッちゃん、気付いた？　あくまで潜在属性、ポテンシャルがあるってだけなんだけどさぁ……ツインテイルズにはみんな、多愛属性ハーレムの素養があったんだ。けど、そん中でもテイルレッドがダントツなんだよ。つまり、多分あの子がハーレムの中心なワ

ケ。妙だよねぇ」

　チャラいナンパ男ではない。敵の情報を仲間と共有しようとする、したたかな戦士の貌かおがそこにあった。

「汝の喜ぶべきことであろう。忌いま忌いましいがな」

「いや、嬉うれしいけど、だからおかしいっつーか……だってあの子、幼女だよ？　アッちゃんが来たら意見を聞いてみたいところだねえ。テイルブルーたちに幼女属性リトルガールの片へん鱗りんがなかったら……ますますおかしいよね」

　二人揃そろって足を止め、向かい合う。

「考えてもみなよ？　幾千幾万のツインテールの戦士たち、その誰だれ一人として到達できなかった究極のツインテールへ、テイルレッドは辿たどり着いた。それどころか今や、俺たち神のエレメリアンと同等の力を備え始めてんだよ？」

「フ、同等かどうかはワシが決めることだがな」

「そういう存在になれる人間ってさあ、どういうコだと思う？　絶対普通じゃ無理だよね」

「で、何が言いたいのだ、汝なんじは」

　ゼウスギルディの言葉に棘とげはない。彼女も、言葉の先が気になっているようだ。

「才能や精神性だけじゃない、決定的な秘密があるのかもって思ってさ。テイルレッドが最強たり得る、俺たちですら思いもよらない秘密が──ね」

　終始疑問形で問いかけ続けながら、ポセイドンギルディの口ぶりの奥には、何らかの仮説がすでに組み立てられているかのような不穏さが漂っている。

　総そう二じが危き惧ぐしたとおり。

　人の心を見透かそうとするエレメリアンの中でも、このポセイドンギルディは最悪の存在なのかもしれなかった。

キャラクター名鑑 043

ポセイドンギルディ



DATA

身長：247㎝

体重：273㎏

属性力：多愛（ハーレム）属性+？

アルティメギルーのイケメンを自称する神のエレメリアン。陽キャ気質で、ナンパが趣味。ただし意外に心が脆く、イケメンが口癖なのは自分を奮い立たせる意味が大きいようだ。戦いに消極的だが、戦闘力は恐ろしく高い。得意の操作術を始めとし、凄まじい数の特殊能力を体得しており、対戦相手がどんな技を使っても初見で切って返せるほど。しかも、まだ秘めたる力を隠しているようだが……？

第四章

ツインテール・ブライド。

二大神エレメリアンとの邂かい逅こうから、数日後。

学校から帰った俺たちは、地下基地のコンソールルームに集まっていた。

集合をかけたのは、トゥアールだ。

「すみません皆さん、今日は大切な話がありましたので」

俺と愛あい香か、慧え理り那な、イースナにメガ・ネ、それに桜さくら川がわ先生と母さんも。ツインテイルズ関係者全員を集めてからの話ということは、かなり重要なものなのだろう。

トゥアールは、メインモニターに先の戦闘映像を表示。ポセイドンギルディ、そしてゼウスギルディの姿が、二分割で大きく映し出されていた。

「ポセイドンギルディにゼウスギルディ……神を自称する幹部エレメリアンが立て続けに出で張ばってきた以上、こちらも戦力増強が急務ですからね」

確かに、神の一剣ゴー・デイア・ソード──神の名を冠した軍団の中でも、幹部級の奴やつらは文字通り神に等しい力を備えた強敵たちだ。また一段と厳しい戦いとなるだろうからな……。

神の一剣ゴー・デイア・ソードの幹部、と考えたところで、俺はあるエレメリアンを連想した。

「戦力増強……。トゥアール、今日の話ってまさか」

俺が聞き返すと、トゥアールは肯定するように頷うなずいた。

「──エンジェルギルディが遺のこした、ツインテール属性の属性玉エレメーラオーブについてです」

トゥアールがそう発言した瞬間、部室内に緊張が走る。

　俺たちは、エンジェルギルディを撃破してツインテール属性の属性玉エレメーラオーブを手に入れた。

　しかしツインテール属性は、他の属性玉エレメーラオーブと違って属性玉変換機構エレメリーションでは使用できない。テイルギアのシステムそのものと干渉を起こすという理由だ。

　つまり、トゥアールに装備品として加工してもらう以外に活用方法がないのだが──

「……無理はしないでくれ、トゥアール。いくら強力な装備を作るための核になるからって……割り切れないことだってあるだろう」

　気にはなっていたが……俺たちは皆、回収した属性玉エレメーラオーブをどうするのかをトゥアールにあえて聞かなかった。エンジェルギルディのツインテール属性を加工しようとすることは、トゥアールにわざわざ辛つらい記憶と向き合わせるようなものだからだ。

　しかし、トゥアールの返答は意外なものだった。

「いえ、ご心配なく！　その属性玉エレメーラオーブを加工して、新しいブレスを造った事後報告です!!」

「そうなのですか!?」

　あまりにあっさりと告白され、真っ先に驚きの声を上げたのは慧え理り那なだ。

「エンジェルギルディという邪悪は、私が確かに無へと還かえしました。あとに残った属性玉エレメーラオーブは、単なる〝素材〟でしかありません」

　俺たちが続けて何かを言う前に、トゥアールは胸中を明かす。

「侵略者であるエレメリアンの技術や生命いのちを利用してでも、世界の平和と人々の心を守る。それが、私が自分自身に定めた誓いですから」

「ア、アルティメギルだって……人間を、利用してるんだから、おあいこだし」

　イースナにもっともなことを言われ、苦笑するトゥアール。

「とにかく、総そう二じ様の好敵手であるドラグギルディであれ、憎きエンジェルギルディであれ……遺のこった属性玉エレメーラオーブがツインテール属性なのは同じ。私は躊躇ためらわずに使います」

「トゥアールがそう吹っ切ったんなら……俺たちが口を出すことは何もないよ」

「うん。それでいいじゃん。むしろ、エンジェルギルディには散々苦労させられたんだから、ツインテール属性ぐらい遠えん慮りよなく活用させてもらわなくっちゃね」

　愛あい香かもほっとした様子だ。母さんも腕組みをしてうんうんと頷うなずいている。

　思い返してみれば━俺たちがツインテール属性の属性玉エレメーラオーブを手に入れたのって、ドラグギルディ以来だったのか。そこから今日まで、長かったな……。

「で！　本題はここからです。本当はここで、『これが新しいブレスです！』って胸を張ってお披露目できればかっこよかったんですが……」

　トゥアールは胸の谷間に手を差し込み、やけに勿もつ体たいつけながら何かを取り出していく。愛香に見せつけているのだろう。

「実は、製作中に問題が起こりまして……。完全なテイルブレスにはできなかったのです」

　案の定トゥアールはこめかみをひくつかせている愛香をバッチリ横目で確認しながら、取り出したものを長机の上へと置いた。

「水色の……テイルブレス？」

　俺たち全員の視線が、その一点に集中する。

　それはパステルブルーに近い、淡い空色をしたテイルブレスだった。

　鮮やかな蒼あおをした、テイルブルーのブレスとは明らかに違

う。より落ち着いた、優しい色だ。

「わあ……新しいテイルブレスですわ！」

　オルターという補助品を除けば、実に久しぶりな新テイルブレスに興奮を隠せない様子の慧理那。今にも触りたそうに、ブレスの近くで両手を彷徨さまよわせている。

「テイルブレスはいつ見ても綺き麗れいやなぁ。これで、何か問題があるんか？」

　メガ・ネも不思議に思っているようだが、確かに完成品にしか見えない。

「はい……見た目はちゃんとしていますが、機能的には不完全なんです」

　トゥアールはメインモニターに、テイルブレスの設計図らしきものを表示する。

「完全なテイルブレスとして製作できなかったのは、一度自分のツインテール属性を捨てたエンジェルギルディに問題があったのか……それとも、吹っ切ったと思い込んでいるだけで、私の心にまだしこりが残っているのか……」

　何が書かれているのか俺にはわからないが、トゥアールが指差したのはその横に配置されたテイルブレスの絵と、棒グラフのような表だ。

　俺たちが使う三色のテイルブレスの棒線が長くて、水色が短い。

　どうやら、他のテイルブレスと比べて出力が低いというのを表しているようだ。

「ご存じの通り、テイルギアは心の力で駆動する装そう甲こう。製作者も装着者も精神状態の影響をモロに受けますから」

　エンジェルギルディは、自分の属性として男子愛属性ボーイズラブを誇っていた。

　しかし皮肉なことに、倒された後に遺のこったのは彼女が忌いみ嫌っていたツインテール属性の属性玉エレメーラオーブだった。本

人が忌き避ひしていた以上、その属性玉エレメーラオーブに問題があってもおかしくはない。

「気にすることないじゃない。むしろ、新しいテイルブレスが造られるってこと自体、想定外のラッキーなんだから！　めちゃくちゃ興奮するわ！」

　母さんが明るく慰なぐさめると、トゥアールは嬉うれしそうに頷うなずいた。

「というわけで、新しいブレスを造ったものの、色々と制限付きのものなので……このブレスでできること、できないことを皆さん全員に知っておいて欲しかったんです」

　確かに、明確な弱点があるのなら、その情報は共有しておいた方がいいだろうな。

「まず単刀直入に言って、このブレス単体では変身できません……必要な出力を賄まかなえなかったのです。そこで私がホワイトになれた経緯を参考にして、他のブレスとリンクすることで起動するよう調整しました」

　つまり、起動に必要な〝火種〟を他から借りるということらしい。

　ホワイトの時も、俺とトゥアール両方の力を合わせることで初めてテイルブレスレボリューションが生成されたからな。

「そのせいで、やはりテイルホワイトと同じ不安材料──何度変身できるかわからないという点も同じになってしまいました。これも弱点と言えば弱点ですね」

　トゥアールは残念そうにブレスを一撫なでする。

「そしてその火種となるのが、愛あい香かさんのブレスなんです。旧型で付加機能が少ないために、こういう時は逆に汎はん用よう性が高いのがありがたいですね」

　なるほどな。初期に造られたギアにはギアで、強みがあるっていうことか。

「テイルブルーに変身している必要はありませんが、この新ブレス

は愛香さんがブレスをつけている状態でなければ起動できません。それが一番大きな制約の一つです……」

　愛あい香かはそれを聞いて、右手首のテイルブレスを可視化。まじまじと確認した。

「例えばブルーのブレスをメンテナンスしている時、代わりに出撃してもらう──なんて運用はできないってことか……」

　俺は、その制約が一番枷かせになりそうな局面を想像する。

「説明が長くなりましたが、これでだいたいの概要は把は握あくしていただけたと思います。というわけで……」

　ブレスを手にし、トゥアールは慧え理り那なの後ろに控えている桜さくら川がわ先生の元へと歩いて行った。

「受け取ってください。これは、尊みことさんのためのテイルブレスです」

「えっ……？　私なのか⁉」

「尊さん以外に、ツインテイルズに変身できる人はいないでしょう？」

「そうかもしれんが……うーむ、とうとう私専用のブレスまでできたのか。何か実感が湧わかんな……」

　そういえば今の今まで、新しく作ったブレスを誰だれが使うか考えていなかった。

　そりゃそうだよな、母さんにツインテール属性は無いし……何より桜川先生には、何度かアナザーテイルブルーとして戦った実績がある。

「本当は変身回数を一回も無駄にしたくはないのですが、テイルブレスオルターの時にぶっつけ本番で失敗しましたからね……起動実験は必要です。尊さん、早速お願いします」

「お、おお」

　桜川先生は右手首のカフスを外すと、代わりにテイルブレスを装

着する。

「では……テイルオン」

　変身自体はこれが初めてではないからか、ほとんど逡しゅん巡じゅんも見せずに、あっさりと変身機構起スタートアッ動略語プワードを口にする桜川先生。

　俺たち全員が見守る前で、その全身が水色の光に包まれた。

　その光はあたかもシャワーのように、コンソールルーム全体に降り注いだ。

　煌きらめく光をまとって現れた、アナザーテイルブルー。

「おお、これが……」

　桜川先生は、その新たなテイルギアの各所を見渡していった。俺たちも、その勇姿を目に焼き付ける。

　装そう甲こうがやや簡略化されているだけで、形は通常のブルーのものとほとんど一緒だが……今回のアナザーブルーには、これまでと大きな違いがあった。

「あっ……ギアの色が、水色になっていますわ！」

　やはり、真っ先にそれを指摘したのは慧理那だ。

「本音を言うと、まだツインテイルズにないパーソナルカラー……緑色などを採用して、ギアも新規造形でいきたかったところですが、ブルーのテイルブレスとのリンクで起動するという仕様上、近い色かつギアの形も同じになりました」

　それが実現してたら、テイルグリーンが誕生していたかもしれなかったわけか。確かにそれは見てみたかったかな。

「つまり、尊みことは今までどおりアナザーテイルブルーであるということですわね！」

「今までとの区別のために、カタログ表記の時だけは『アナザーテイルブルー（真）』ってしておきましょう!!」

　慧え理り那なと母さんが早くも名付け親になってしまっている。

「わあ、あえて日本語と交ぜるのがかっこいいですわ!!」

「矛む盾じゆんした名前っぽいのもいいわよね～」

　ところでカタログ表記ってなんだ、それもヒーロー知識か……？

「順番が逆になりますが……アナザーテイルブルーの変身アイテムということで、そのブレスをテイルブレスアナザーと名付けました」

　なるほど。俺たちツインテイルズはまずテイルブレスあってこその存在だが、すでに存在が確立されていたアナザーテイルブルーが逆に新しいテイルブレスへ繋つながったというのも、面白い話だ。

「様々な制約がついた代わりと言っては何ですが……前々から尊さんが困っていた、アンダースーツの露出度は抑え目にしてあります。それがデザインで手を加えられる精一杯でした」

「むしろその一点が一番ありがたいぞ。何なら、首から下の肌が全部見えなくなるぐらいにしてくれてもよかったんだが……」

「メ、メイドさん、気づいてないだけで、普段からけっこうメイド服の露出度、高いから……あんま気にしなくて、いいんじゃ……」

　イースナがボソリとツッコミを入れる。

「だが、えーと、力……？　を津つ辺べのブレスから引っ張ってくるということは、津辺が二人分疲れるということじゃないのか？」

　桜さくら川がわ先生は、そんな懸念を口にした。

「あたしは大丈夫ですよ、そのくらい」

「ブルーのパワーがダウンすることはありませんので、ご安心を。……ちなみに愛あい香かさん、何か変わった感じはありますか？」

　理論は完かん璧ぺきだがそれでも心配なのだろう、愛香に様子を尋ねるトゥアール。

「全然。起動するときピリッとしたりするかと思ったけど、それも

なかったよ」

　制約こそあるものの、新たなテイルギアの起動は無事に成功。トゥアールはほっと胸を撫なで下ろした。

　指を握ったり開いたり、肩を回したりと、新しいテイルギアの具合を確かめる桜川先生。

「素敵ですわ……これで尊も、わたくしたちといつでも一緒ですわね!!」

「いえ……私はあくまで、今までどおりお嬢様たちのサポートに徹します。必要な時、何なりと仰おつしやってください」

「…………そう、ですわね」

　慧え理り那なは何か言いたげに桜さくら川がわ先生を見ていたが、考えを振り払うかのように頭を振る。

　その時揺れた慧理那のツインテールが、俺に何かを訴えているように感じたのは、気のせいだろうか……。

「これで愛あい香かが戦えない時の代打じゃなくて、桜川先生が単独で変身できるようになったんだ。これほど頼もしいことはないな！」

　いずれにしても、戦いは厳しさを増す一方だ。敵も次から次に増援がやって来ている様子だが……俺たちツインテイルズだって、負けちゃいないぜ。

　この先の戦いに向けて、これ以上ない新戦力の誕生だな。

◇

　ブレスの完成した明くる日の放課後。

　ツインテール部部室で考え事（ツインテール）をしていた俺は、不意に桜川先生に話しかけられた。

「観み束つか。もしよければ今から三時間ぐらい、お嬢様の護衛をお願いできないだろうか」

「え？　いいですけど……何かあったんですか？」

　長机に座っていた慧理那、そして愛香とトゥアールも、桜川先生へと視線を集める。

　桜川先生は学校では理事長の護衛も兼任しているため、慧理那についてあげられない時間もある。ツインテール部にたまに顔を出せないのも、そのためだ。

　だから今日も何か、慧理那絡みの用事なのかと思ったが……。

「今日、隣の市に私用があってな。奥様にお時間をいただいた」

「おでかけですの、尊みこと？」

「ええ、すみません、お嬢様。そこで変わったデザインの婚こん姻いん届とどけを発行するそうですので、もらいにいこうかと」

「……そうですか……」

　慧理那はしばらく思案すると、

「せっかくですので、わたくしもついていきますわ！　観束君も一緒に行きませんこと？」

　そんな提案をしてきた。

「え……俺もか？」

　思わず聞き返してしまう。慧理那、一緒に出かけることで逆に俺が頼まれた護衛の手間を省こうってことか？

　いや、そもそも今の慧え理り那なには本来、そこまで徹底した警護は必要ない。

　慧理那は何な故ぜ、桜さくら川がわ先生の私用につき合うと言い出したのだろう……。

「よろしいでしょうか？　トゥアールさん」

「…………ええ。三人で行ってらしてください！　私は愛あい香かさんとお留守番してますので」

「ありがとうございます！」

　満面の笑みでトゥアールにお礼を言う慧理那。

　愛香は何か言いたそうだったが、ついて行くとも言わず、俺たち三人を見送った。

　全然普通のことのはずなのに……桜川先生の用事に俺と慧理那が付き合うって、すっげー新鮮だな。

　　　◇

　総そう二じが慧理那たちと部室を出て行った後、愛香は不思議そうにトゥアールを見た。

「トゥアール、やけにあっさりＯＫしたじゃない。私もついてきます、とか言い出すかと思った」

「慧理那さん、あれでけっこう総二様と二人だけでお出かけとかしてますし、今さらでしょう。だいたいそれを言うなら、愛香さんだって同じでしょうに」

「あたしそこまで嫉しつ妬と深くないでしょ、そーじと会長がお出かけするのに今までいちいち口挟んでないじゃない」

　トゥアールは何か言いたげに眼めを細めたが、口にはしなかった。

「今日は尊みことさんと三人でお出かけな分、むしろ安心だと思っていますので……この機会に」

「あたしだけに、なんか話があるってこと？」

「はい……あまり言いたくはないことなんですけど……ちょっと相談が」

　トゥアールは愛香の顔色を窺うかがうようにーいち瞥べつを送った。

「実は、その……………………あの日…………」

「ちょっとちょっと何の相談始める気よ!?」

「途中で言葉に詰まっただけです！　あの日っていうのは、エンジェルギルディを倒した日のことですからね!!」

　むしろ普段なら嬉き々きとして乗っかりそうな愛香のボケを全力で否定するあたり、トゥアールはかなり切せつ羽ぱ詰まっているようだ。

「あの日から、総二様に対してどう接すればいいか、わからなくなってきたんです……」

　いつになく神妙な表情で、トゥアールは愛香を見み据すえた。

「裸チョコとかやっといてそういうこと言う!?　あんたからマジのコイバナとか、雷でも降ってくるんじゃないかしら……」

「いつもどおりおっぱいとか押しつけても……何か不安になるんです。ほら、こんなに大きいおっぱいでも」

　トゥアールは自分の胸を手で持ち上げ、愛あい香かによく見せた。

「宇宙までブッ飛ばして欲しいならはっきりそう言ってくれない？」

　トゥアールの照れ隠しが露骨に下手なことで、幾分か愛香の怒りも抑え目なようだ。

「……今まで私は、ツインテールではないことにむしろ甘えていたのかもしれません。総そう二じ様が負い目を感じて……気を遣ってくださるのがわかっているから、どんなことでもできた。拒絶されないという打算があった」

「…………」

　トゥアールの言葉を聞きながら、何度か頷うなずく愛香。

「ツインテールに戻れるとわかって……もうほぼ全てが愛香さんたちと同じラインに立ってしまった。だから逆に、不安も感じるようになったのかもしれません……贅ぜい沢たくな悩みですが」

　愛香は重い嘆息の後、

「……馬ば鹿かじゃないの。本っ当に贅沢」

　長机に手をついて身を乗り出し、トゥアールを睨にらみ付けた。

「普通ね、今焦あせるべきはあたしたちの方なのよ？」

「え……？」

「トゥアールは、ツインテールにできない以外は完かん璧ぺきだった。はっきり言って、憧あこがれるぐらい。それが今……あんたは制限付きとはいえ、ツインテールにできるようになった。テイルホワイトのツインテールを見た時そーじ……レッドがどんなに目を輝かせてたか、わかる？」

　その時、同じぐらい愛香も喜んでいたのだが……当然、そんなことは口にしない。

「そ、それを言ったら愛香さんだって、胸が小さい以外は完璧だって総二様に……」

　愛香は再びトゥアールの胸元に視線を落として少しむすっとしつつも、

「たとえば会長、最近ちょっと焦ってるように見えない？　桜さくら川がわ先生の言動に妙に反応したり。今日だって、唐突に三人で出かけるって提案したりさ」

「かわゆいですけど、慧え理り那なさんらしくないですよね。逆にイースナなんかは、あえて大人ぶろうとしすぎてる感じはしますね……まあ、それは私のせいかもしれないですが」

　トゥアールは死を覚悟し世界を離れる前、イースナだけに全てを託した。

　それがイースナの精神的成長を大きく促うながしたことは、本人もわかってしまっているようだ。

「あたしもね、焦ってるかもしれないけど、それより嬉うれしいの。あんたが言うように、同じラインになったことが。もちろん、あんたに負けるつもりはないけどね」

　トゥアールは少しだけ頬ほおに朱を差しながら身を抱いだき、

「憧れていたって……考えるだけで怖おぞ気けが走りますけど、まさか愛香さんがエロい本性を徐々に解放し始めたのって、私の影きょ━━」

「解放してないっての！　てか、あたしはそんなにエロくない！　思春期の女の子の標準!!」

「えー、標準的な女の子に謝ってくださいよー」

　鼻を鳴らすと、頬ほお杖づえをついたままトゥアールから視線を逸そらす愛あい香か。

「早くテイルホワイトに安定して変身する方法、見つけなさいっての」

「見つけたとしても、愛香さんと戦うためではありませんからね」

　部室には、穏やかな時間が流れていた。

「………………ねえ。三桁けたってマジ？」

「まだ言ってるんですか!?」

　長い付き合いの二人だが……ツインテールへの希望を得たことによるトゥアールの変化を機に、また少し本音で語り合えるようになったのかもしれない。

◇

　向かう場所は、隣の市の市役所。

　桜さくら川がわ先生の運転で移動し、駐車場に長いリムジンを停とめた後、三人で市役所前の広場へと歩いていった。

「婚こん姻いん届とどけって、自治体ごとにデザインが違うんですか？」

　誰だれかに渡すものとは別に、桜川先生は独自に婚姻届をコレクションしているらしい。

「まあ、そこまで大きな違いはないが……たまに何かの記念や限定デザインのものがあってな、そういうものを見つけたらとりあえずもらいに行くことにしているんだ。休みをもらってな」

　桜川先生の、隠れた趣味ってところか。

「あれ？　休みって……今日もさっきまで、学校で授業やったり慧え理り那なの警護したりしてましたよね？」

「？　だから今、もらっているじゃないか。休みを」

「これ、休みじゃなくて休憩時間でしょう⁉」

　俺、自分の喫茶店以外でアルバイト経験ないけど、それでも桜川先生の勤務形態がちょっとおかしなことになっているのはわかる。

「……っていうか、桜川先生ってどういうふうに休日を取っているんですか？」

　他た愛あいのない世間話のつもりだったが、どんどん桜川先生の私生活が気になってきてしまう。

　今だって、私服に着替えるわけでもなし。下手しなくても、お目当ての婚姻届をもらったらそのまま慧理那と一緒に帰ってメイドの仕事を続行するのだろう。

「ん？　決まっていないぞ。むしろ今日のように、一人で外出する用事がある方が稀まれだからな、別にやりたいこともないし」

　いや、どっかに行く用事があるから取るもんじゃないよな、休みって……。

「他のメイドから聞きましたが、尊みことの有休はもう二〇〇日以上溜まっているそうで……。わたくしが至らないせいで、心配をかけているからですわ……」

小声で申し訳なさそうに言ってくる慧え理り那な。いや、慧理那のせいじゃないよな……。

理事長は桜さくら川がわ先生のことを本当の家族のように接している。いくら警護主任も兼ねているからとはいえ、一週間に決まった休みを一日も取らせないとは考えにくい。

桜川先生が、自分で望んでやっているのだろう。

前にもふと考えたことがあるが、桜川先生がここまで神しん堂どう家に尽くすのは、一体何な故ぜなんだろう……。

「おっ、会場が見えてきたぞ。市が開催する結婚相談会の受付で配るらしいんだ」

いいのかな、それに高校生二人でついてって。

緩んでいた桜川先生の口くち許もとが、咄とつ嗟さに引き結ばれた。

「！　お嬢様！　お下がりください!!」

桜川先生が慧理那を自分の背に庇かばったのと同時、周囲から悲鳴が上がる。

そして、今到着した俺たちとは反対に、こちらへとどんどん人が走ってくるではないか。

「観み束つか、エレメリアンだ！」

桜川先生がエレメリアンを目視したことを俺に伝え、その方向を指差す。

俺も人垣の間に悠ゆう々ゆうと立つ異形を確かに見たが──それは、思いもよらぬものだった。

「ゼウスギルディだ……あいつがどうしてここに!?」

ゼウスギルディは結婚相談会場の受付で、何かを語っているようだった。

しかも、奴やつの周囲がバチバチと放電している。人々が現れた

エレメリアンを見物しようとせず即座に逃げているのは、そのためか。

「ふむ……？」

　やばい。もたもたしているうちに、ゼウスギルディがこっちを見た！

「汝なんじら、よいツインテールをしておるが……もったいない、属性力エレメーラが全く無いではないか」

　しかも、慧理那と桜川先生のツインテールを不ぶ躾しつけに観察している……！

「ウワー、エレメリアン怖ーい、逃げよー」

　俺は二人の手を引き、怯おびえる一般人を装って走りだした。

「観束お前、相変わらず演技はいまいちなんだな……」

「すんません、自覚してるんで……」

　桜川先生に穏やかに駄目出しを食らい、軽く凹へこむ。

「わたくし、観束君とお出かけする度たびにエレメリアンに遭遇している気がしますわ……!!」

「まったくだ……ツインテイルズの宿命かもな!!」

　群衆に紛まぎれて逃げるふりをしながら、俺はトゥアルフォンでトゥアールに連絡する。

「トゥアール、そっちで確認できているか……エレメリアンが現れた!!」

『はい、ゼウスギルディですね！　今、愛あい香かさんも向かいました!!』

　隣を走って逃げていた人が、俺を二度見してきた。

　トゥアルフォンでの俺の通話は、他の人には古代ツインテール語に聞こえるから仕方がない……!!

トゥアールのナビに従い、俺たち三人は変身に適した人ひと気けのない場所へ。

「ようし、早速このブレスの出番だな！」

桜さくら川がわ先生は意い気き揚よう々ようとメイド服のカフスを外し、テイルブレスアナザーを可視化させた。

「けど相手は幹部エレメリアンです、桜川先生は危険かもしれないですよ……」

俺は敵の強さを懸念するが、桜川先生は譲らない。

「いいや、結婚を望む女性たちを狙ねらうなど、許してはおけん。私も戦うぞ！」

「ええ、一緒に戦いましょう、尊みこと!!」

慧え理り那なも喜んでいるし……何より、桜川先生にとって結婚がどれだけ大事なものか、俺たちはよく知っている。そんな心の輝きを守りたいという気持ちこそが、ツインテイルズの原動力なんだ。

今の桜川先生の闘志に、水を差すわけにはいかないよな。

「行くぞーテイルオン!!」

大声で叫ぶ桜川先生を、慌あわてて注意する。

「ちょっ、声！　人気はないですけど、一応こういう時はこっそり……」

「わたくしもテイルオン!!」

桜川先生のやる気が嬉うれしいのだろう、普段はこういう時ちゃんと慎重に行動する慧理那も、ウッキウキで高らかに謳うたい上げていた。

……もう開き直って、俺も叫ぶか。

変身完了した俺とイエロー、アナザーブルーが現場に戻る頃こ

ろ、基地から出撃してきた元祖ブルー……いや二代目ブルーとも合流を果たした。まあ、今後も普通にブルーでいいよな。

　俺たちの気配を悟ったのか、ゼウスギルディは外がい套とうを揺らしながら緩やかに振り返った。

「遅い到着だな、ツインテイルズ。奪おうと思えば走って逃げ果せた者どもも含めて、この場にいた全員の属性力エレメーラを奪い尽くせていたぞ」

「やってみろ。その属性力こころは、俺たちが必ず取り返す!!」

　くだらない挑発に俺が言い返すと、ゼウスギルディは新たなメンバーに気がついた。

「……む？　何だその色の薄いテイルブルーは。一人だけ随分年がいっているようだが」

「何をう。お前だってワシとか言って、お年寄りみたいだぞ」

　水色のテイルギアをまとった戦士・アナザーテイルブルーに指を突きつけられ、ゼウスギルディは愉快げに鼻を鳴らした。

「まあ、何人増えたとて同じこと。ツインテイルズが十人いようが百人いようが、ワシは一途を貫き通すまで。テイルレッド──汝なんじ、ワシと結婚せよ」

　凝りもせず、ストレートな言い回しだ。

「だから断るって言ってるだろう！　どうしてそこまで俺にこだわるんだよ!!」

「それは、ワシの結婚観にビビっとくるからだ。テイルレッド……汝は花嫁の資質に溢あふれている。さては、既に心に決めた者がいるな？」

　ゼウスギルディはまたしても、俺を探るような視線を向ける。

「……？　俺の心に在あるのは……常にツインテールだぞ」

「汝は……ツインテールと結婚するつもりかっ!!」

「ツインテールは髪型だ！　結婚できるわけがないだろう!!」

「ツインテールが好きではないのか!!」

「ふざけるな！　俺はツインテールが何よりも好きだ!!」

　ゼウスギルディと舌戦を繰り広げる。ブルーとイエロー、アナザーブルーがぼへーっと俺を見つめているが、仕方がない。

「ぬうう……狂気を孕はらんだクソ重い愛と中途半端な常識が同居しているとは……この幼女、不可思議すぎる!!」

「ポッと出の敵が的確にレッドを評してんじゃないわよ!!」

　え、的確……!?

「こんな奴やつの戯ざれ言ごと、これ以上聞く必要ないわ！　いくわよみんな!!」

　ブルーは俺たちにそう言い、ウェイブランスの切っ先をゼウスギルディの眉み間けんへと向けるように構える。

「…………ふむ」

　ゼウスギルディはそんなブルーの胸元に無遠えん慮りよな視線を向け、やがて失笑を漏もらした。

「フッ……。テイルブルーという戦士の胸の小ささ、天界まで音は聞こえていた。しかしこう実際に何度もまじまじと見ると……あまりに小さすぎて神のワシでも軽くビビるぞ」

「神あんたもその天界とやらも、あたしが全部滅ぼし尽くしてやるわ」

　ゼウスギルディが天界をどういう尺度で語っているかはわからないが、他の神様に罪は無いはずだが……。

　とにかく久々にブルーの目が、怒りと憎しみで紅あかく染まり始めている。

「━だが、汝のその小さき胸……ワシならば救えるが？」

　ゼウスギルディがそう口にした瞬間。

「……！」

　ブルーの瞳ひとみが、即座に正常な状態へと戻った。

「待って、ストップみんな、攻撃中止。もう少しこいつの話を聞きましょう。急せいてはことをし損そんじるわ」

　ブルーが俺たちへと掌てのひらを突き出して、制止を促うながす。

　攻撃態勢に入ってたのも、話を聞く必要もないと急せいたのも、ブルーだけなんだが……。

「確認しときたいんだけど。救えるって……大きくできる、ってこと？」

「無論」

　即答するゼウスギルディに、ブルーは疑いの目を向ける。

「ふぅ～ん。具体的に、どのくらい大きくできるわけ？　Ｄカップ？　Ｃ？　まさかＢで限界ですなんて言わないわよねえ、神サマ？」

　いや、疑っているというより、わざと挑発しているのか。

「神に不可能はない。汝なんじが望み願うならば、Ｋ……いやＮカップの福音とてもたらされるであろう」

「ちょ……え、マジ!?　Ｎ!?」

　怪しげな宗教の勧誘みたいな大たい言げん壮そう語ごに、まんまと気を引かれてしまうブルー。

「ブルー、騙だまされてはいけませんわ……そんなこと有り得るはずが……!!」

「そうだ。日常生活に支障が出ると思うぞ……」

『イエロー、アナザーブルー！　もはや私たちにブルーの願いを止めることはできません。っていうか他の部位が変わらずにＮカップになったらどんな見た目になるのか興味があるので、おとなしく見

けんに徹しましょう!!』

　動揺が、波紋のように仲間たちの間に広がる。

　正直俺も、ゼウスギルディの真意を計りかねていた。

　エレメリアンがブルーに施ほどこしをする理由はないのだが、こいつならやりかねない。

　悪意たっぷりに挑発してきたかと思えば、俺にもブルーにもイエローにも、興味を持った途端に戦意に先んじてフレンドリーさが顔を出す。

　それはゼウスギルディとポセイドンギルディだけではない。アポロギルディやハデスギルディにも、同じようなところがあった。

　今までに気付いた共通点が多すぎる……こいつら四体は本当に、ただ神の一剣ゴー・デイア・ソードの幹部というだけの繋つながりなのか？

「ワシはそれなりの数の弟子を取ったが、この技はそやつらにも指導し、実績もある。今いま頃ごろそやつらも、乳の小さな戦士を見つけては神の福音をもたらしていよう」

　俺が考えこんでいる間にも、ゼウスギルディの説法は続いている。

「よいか。ヒトに限らず、汝ら有機生命……動物は、電気信号に身体からだを支配されておる。ワシはその雷を以もつて、汝の乳を盛ってやろうと言うのだ」

　こいつ……ポセイドンギルディのナンパ気質を諫いさめていた割りに、自分の発言は怪しい通販商品の説明レベルの強引さだ。

「わかったから、早くやってみせてよ。ＮでもＱでもＷでもいいから」

　男の俺でもそれは破滅的にヤバいだろうとわかる領域を望むブルー。

「神を崇あがめよ、人間！　ふぅぅん……覇はッッ!!」

　ブルーの胸に、ゼウスギルディの掌てのひらから放たれた雷が直撃する。

「おいブルー！　エレメリアンの電撃なんて受けて、本当に大丈夫か!?　ツインテールが痺しびれたりはしてないか!?」

「うーん、大丈夫っぽい？」

　俺は不安になって尋ねるが、いまいち大丈夫かわからない返事が返ってくる。

　やがて雷が弱まり、完全に消え去った後……敵味方の垣根を越え、全員の視線がブルーの胸に集中する。

　しかし待てど暮らせど、ブルーの胸が膨ふくらむ気配はない。当然のように現状維持だった。

「ぬうう……こ、これは……！」

　ムキになったように、もう一度ブルーへと雷を放つゼウスギルディ。

　やはり、リプレイ映像のように同じ過程と結果が待っているだけだった。

「ちょっと、いつ大きくなるのよ」

　ブルーが苛いら立だち交じりに催さい促そくする。

「大きく……ならんのだ！　これほど力を込めたというのに、依然として恐ろしいほどの貧乳のままとは……！　やめてくれ、悲しくて汝なんじを直視できぬ!!」

　神話の神にまでサジを投げられ、ブルーの周囲に乾いた風が吹き荒すさぶ。

「――――じゃああんたの眼球いらないわね」

「あっぷ!!」

　危ない、と言う暇いとますら与えない超高速の刺し突とつを、紙一重で躱かわすゼウスギルディ。顔面に突き込まれたランスの青線

が空くうを切り、咄とつ嗟さに飛び退のいた残像がそれに続くほどの刹せつ那なだった。

「全っ然期待してなかったけど……これであんたがメッキの神様ってことが証明されたわね」

「違う。汝の貧乳が神の福音をも超えた呪のろいだということだ。これもまた、極点を極めた変態といえよう……まこと、面白き奴やつらよ」

「殺こーろそっと♡」

　ブルーさんブルーさんお願いですから落ち着いてください。

「よい殺気だ、久しく向けられたこともないゆえ心地ここちよい。すぐ近くに拓ひらけた場所がある。そこまで来い――!!」

　願ってもないことだ。ゼウスギルディの提案で、俺たちは近くの市民公園へ移動する。

　そして俺とブルー、イエローの三人はブレイド、ランス、ブラスター……それぞれの武器を構え、ゼウスギルディと相対する。

「えっと、武器を出すのは……リボンを触ってと。これこれ、ウェイブメイスだったな」

　アナザーブルーはフォースリヴォンを叩たたき、箒ほうき状の武装を引き抜いた。

　それはもう一つの水の武器、大型棍こん・ウェイブメイス。

　以前の戦闘から間隔が空あいたためか、アナザーブルーは武装を出すのに探り探りのようだ。

「せっかくの余興だ。結婚属性ブライドの神が、良妻の気配りというものを教えてやろう」

　ゼウスギルディが右手を一薙なぎすると、激しい震動とともにあたり一面が輝きだした。

「！　何だ……!?」

　俺は慌あわてて周囲を確認する。テイルギアによって強化された視力でようやく確認できるほどの距離……遥はるか離れた場所で、光の膜のようなものが立ち昇っている。

『これは……その公園の敷地ほぼ全てが、巨大な属性力エレメーラの壁に覆おおわれました！　皆さんを囲んでいるのは、直径二キロメートルの結界……いわば、ゼウスギルディのオーラピラーです!!』

「ち……直径二キロのオーラピラーだと!?」

　俺はトゥアールの分析を聞いて驚き、あらためて周囲を見渡す。

　俺たちツインテイルズのオーラピラーは、エレメリアンを捕縛するためのもの……複数相手をまとめて拘束バインドしたとしても、その大きさはせいぜい数メートル。

　これが奴やつのオーラピラーだとしたら、あまりにも桁けた違いすぎる!!

「何、結界と言っても動きに支障はあるまい。退路を拘束しばっただけなのだからな」

　確かにゼウスギルディの言うとおり、身体からだを戒いましめるような不快さは感じない。

「テイルレッドよ、アポロギルディとは心ゆくまで力をぶつけ合ったというではないか。ワシは、汝なんじの秘めた変態性を全て見たい!!」

　エレメリアンという精神生命体が強さを極めるとどうなるか……こいつらが一つの答えなのだろう。アポロギルディといい、自分の欲望願望に素直すぎるのだ。

「見せぬのなら、少しずつ追いつめてゆくぞ」

　ゼウスギルディは俺に向けて手にした杖つえを突き出すと、それを軽く振り下ろす。

　その直後、空から雷が降り注いだ。

　雷は俺の数メートル先に直撃。地面に空いた大穴は、雷が霧む散

さんするまでの間に俺のすぐ間近までその径を拡ひろげたのだ。

「チッ……やはり加減が難しい。罷まかり間違えれば、この星そのものを串刺しにしてしまうかもしれんな」

　ゼウスギルディは自分の杖を見つめ、不満げに舌打ちをする。

「これで手加減したつもりか、お前……!!」

　俺はハッタリであることを願い、地面に開いた穴へと視線を送る。奴が降り注がせた稲妻の直撃で穿うがたれた穴は、底が見えない。

「ワシの火力はアルティメギル最強だ。むろん、全知全能の首領様は別としてな……。そんな力を振るえば、あっさりと汝たちを壊してしまう」

　主神ゼウスをして別格だとまで言わしめるなんて……首領は神以上の存在だってのかよ。

　ついさっき、おふざけで電気でブルーの胸を大きくしようとしていた奴やつと同一人物とは、とても思えない……!!

「汝なんじらも見たであろう、我わが雷の美しさを。これがハーレムという煮え切らぬものとの違い！　たった一つに心注ぐがゆえに生み出される、大いなる輝きなのだ!!」

「そんな……あなたはそこまでハーレムを……多くの愛を注ぐことを否定するのですか!?」

　揺るぎなき信念を前に、イエローは思わず疑念を口にした。

「当然だ。ワシは曲がりなりにも女性型のエレメリアン。大勢の中の一体よりも、たった一体になりたいのは本能。汝らは違うのか!!」

　言葉を叩たたきつけるかのような問いを返され、ブルーがはっと息を呑のむ。

「ご高説は結構だが……そういう貴様は、結婚を望む女性たちに害為す存在だろう！　許してはおけん!!」

　アナザーブルーはバックハンドからの大振りで、ウェイブメイスを猛然と叩きつける。

　掌てのひらで受け止めたゼウスギルディの足が、地面に陥没していく。

　その時、奴の態度に変化が起こった。

「……!?　汝……素晴らしいぞ!!」

　アナザーブルーを凝視すると、ゼウスギルディは愉悦で口くち許もとを歪ゆがめた。彼女の強さを讃たたえたのかと思ったが──

「よい結婚属性ブライドを持っているではないか、色の薄いテイルブルー！　おお……わかる！　こうして間近にいると、汝のことが伝わるぞ！　なるほどな、年がいっているなどと言って悪かった。むしろ、円熟したと言うべきか……!!」

　興奮しているのか、早口でまくし立てるゼウスギルディ。

　不気味に思ったのか、アナザーブルーはゼウスギルディの手からメイスを強引に弾はじき、後方へ大きく飛び退すさった。

「言っておくが、こればかりは皮肉や嫌味ではない。ワシは本気で汝を賞賛しておる。確かに結婚属性ブライドは尊とうとく美しい属性だが……人間は年を経るに従い、そこに様々な不純物を交ぜる」

　しかしゼウスギルディは、なおもアナザブルーへと近づいていく。

「体裁、社会的地位、生活水準……花嫁への憧あこがれはいつしか、大きな打算を孕はらむようになる。無論それは仕方のなきことだが……汝は違う。それだけの年齢でありながら、今も童女のようにピュアな心を持っておる!!」

　熱を帯おびた言葉を向けられ、アナザーブルーはさらに後あと退ずさっていく。

「ツインテイルズの中で一番、純粋な結婚属性ブライドを持っているのは──汝だ!!」

　アナザーブルーが取り落としたウェイブメイスが、轟ごう音おん

を立てて地面にめり込む。

「違う！　よく見ろ、お前の目は節穴か！　私は結婚を焦あせっているだけだ！　私などよりも、この方こそ純粋な結婚属性ブライドを持っておられるはずなのだ!!」

　動揺しているのかもしれないが、いつも慧え理り那なにしているような口調でイエローを指し示してしまうアナザーブルー。

「いいや、大して感じぬ。おそらく、あのナンパ男が目をつけたとおり、ほとんどのツインテイルズはハーレム適性の方が高いはずだ」

　身体からだを掻かき抱いだき、震ふるえ始めるアナザーブルー。

「う、ううううう……何だこれは……テイルギアが……ものすごく重い……!!」

「どうしたどうした……ワシは心から賞賛したというのに、何な故ぜ不調を訴える!!」

　確かに、妙だ。エレメリアンからであろうと、俺は自分のツインテールを褒ほめられたら嬉うれしい。まして桜さくら川がわ先生ほど結婚にこだわってきた人がその思いの強さを賞賛されたというのに、どうしてここまで動揺してしまったんだ!?

「ううっ……こ、これは……」

　アナザーブルーは咄とつ嗟さに自分の手を見つめた。そこから全身にかけて、断続的な放電が広がっていく。あれは……変身を維持できなくなる前兆だ!!

『レッド！　アナザーブルーの変身が解けます！　オーラピラーでゼウスギルディから見えないようにしてください!!』

　トゥアールに言われ、俺はすぐさまオーラピラーを射出、アナザーブルーを包み込む。

　昔、ブルーが変身解除してしまいそうになった時に使った方法だ。

「ッ……人間の心の輝きを奪おうとするエレメリアンが……よりに

もよって人間の一番の幸せの一つである結婚に憧あこがれるなんて……ふざけないで！　あんたには結婚に憧れる資格だってありゃしないのよ!!」

　アナザーブルーを精神的に追いつめたと思っているからだろう、ブルーの言葉にはかなり棘とげが含まれている。

　それを聞いた瞬間、ゼウスギルディは豹ひよう変へんした。

「――――言うに事欠いて、貴様ら人間が我わが属性を否定するか」

　ゼウスギルディのヴェール越しの目が……紅あかに染まっていく。

　これまでずっと斜に構えた態度で俺たちを見下していたゼウスギルディが、初めて純粋な怒りを向けてきたのだ。

「産めよ増えよが神の慈悲ではあるが……神を侮辱した貴様らに繁栄など不要！　我が〝雷終神話ライスシヤワー〟によって消え去ってしまええぇい!!」

「な――――!!」

　俺は言葉を失った。ゼウスギルディが咆ほう哮こうと共に杖つえを衝つき上げた直後――周囲に、雷が雨霰となって降り注ぎ始めたのだ。

　その轟ごう音おん、その衝撃が、容よう赦しや無く俺たちのツインテールを震わせる。

　数あま多たの神話、伝承、果ては民話において等しく語られるように――人間は、本能的に雷を恐れる。

　それが数十、数百の条じようとなって空から降り注ぎ、そして一斉に俺たちへと襲おそいかかってくるのだ。この変幻自在の雷こそが、こいつの真骨頂なのか!!

　俺たちは最強変身チエインエヴオルブを完了させ、迫り来る悪夢と対たい峙じする。

　ゼウスギルディは、オーラピラーの中でアナザーブルーが変身解除しているなんて思いもよらないだろう……あの雷を直撃させるわ

けにはいかない!!

「みんな、アナザーブルーを守るんだ！　テイルカリバー、覚悟装填レゾリユードモード!!」

　俺はテイルカリバーを防御形態に変形させ、前面に展開。

「属性玉エレメーラオーブ、巨乳属性ラージバスト──」

「属性玉エレメーラオーブ──貧乳属性スモールバスト、涎属性スロバー、頬属性パフ、体操服属性ブルマ──」

　そしてイエローとブルーが、それぞれ属性玉変換機構エレメリーションを発動。

「「リフレクション・ギガバースト!!」」

　二人はそれぞれの力を融合させ、極大化した防御壁で攻撃に備える。

　しかし……防御で弾はじき飛ばした雷は、あらぬ方に飛んでいったかと思えばすぐに再襲来し、俺たちを責め苛さいなむ。

　まさか……雷が周囲二キロ四方の壁で跳弾して、乱反射しているのか!?

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

「ハハハハハハハハ……ハハハハハハハハハハハ!!」

　俺の咆ほう哮こうと、ゼウスギルディの高笑いが交こう錯さくする。

　周囲を覆おおい尽くすは、天地を食い破る魔龍の群れ。

　空が爆はぜ、大地が砕ける神雷の奔ほん流りゆうの中で、俺たち三人は懸命に防御に徹し続けた。

　耐えろ……俺たちが一歩でも動けば、桜さくら川がわ先生の生命いのちが危ない──!!

　ついに全ての雷が消し飛んだ頃ころ、三人ともが息を荒らげながら、立っているのがやっとの状態になっていた。

「いいぞ、よく耐えきった！　ハハハハハハ、ワシが……神が癇かん癪しやくを起こしても壊れなかったのは貴様たちが初めてだ！　ハハハハハハハハハハハ……!!」

『まだです、気をつけてください、皆さん！　周囲の空気がプラズマ化を起こしています……爆発に巻き込まれないように……!!』

　トゥアールが通信で注意を促うながす。

　雷が止やんでも、そこかしこで爆発が起こり続けているのはそのためか。地雷原に放り込まれたようなものだ。

「ハハハハハハ……ハハ……ハ……」

　天を衝つく哄こう笑しようが、途端に勢いを失っていく。

「…………しまった。またやってしまった。人間相手に大人げない……ああ……」

　まるで風船の空気が萎しぼむかのように、ゼウスギルディは意気消沈。

　肩を落とし、出現させた転送ゲートの中へと消えていった。

「……………………え？」

　俺がそのたった一言を絞り出すのにも、一体何秒かかっただろう。

　常軌を逸した超暴力の果てに、突とつ如じよの撤退。

　さすがに状況が呑のみ込めず、俺とブルーとイエローは、三人揃そろって呆ぼう然ぜんとしていた。

「あいつ、力を使い尽くしたとかじゃ、ないわよね……」

「遊んでいたようにしか見えませんでしたわ。むしろ、最後は何か自己嫌悪をしていたような……」

　二人の考察にも、覇は気きがない。

　……公園が一つ、丸々消し飛んでしまった。

ほんの遊びにしては、被害が大きすぎるだろう。

「ッ……アナザーブルーは！　無事ですの!?」

イエローに心配されてオーラピラーを解除する。傷一つなく、無事守ることはできたが……やはりアナザーブルーは変身解除して桜さくら川がわ先生の姿に戻り、気絶してしまっていた。

新生アナザーブルーの初陣は、何とも苦いものに終わってしまった──。

◇

アルティメギル基地に、久方ぶりにスワンギルディが帰還した。

「皆様、ご心配をおかけしました！」

大ホールへと足を踏み入れるや、不在が長引いたことを生き真ま面じ目めに詫わびるスワンギルディ。

「……ス、スワンギルディ？　また随分と傷だらけだが……」

迎えたスパロウギルディは、スワンギルディがいつにも増して身体からだ中じゅう傷だらけなのを心配する。

「いえ、大丈夫です。特訓によるものですので……それより、何やら人だかりができていますが……」

ホールの前面、登壇台の周辺に巨漢たちが集まっていた。不審に思うスワンギルディ。

「それが、見知らぬ女性型エレメリアンが突然やって来たのだ。しかもな……ううむ」

理由を語るスパロウギルディの歯切れが悪いため、スワンギルディは人垣の間からひょっこりと顔を出し、その中心にあるものを確認する。

「あー、またやってしまった……。何でワシはいつもああなの

だ……」

　そこには、ゼウスギルディが死んだような目つきで寝転がっていた。

　まさしく神の造形物といっても過言ではない均整の取れた肢し体たいをだらしなく床に投げ出し、ぶつくさぶつくさといじけ言を繰り返している。

「おまけに大見栄を切っておいてテイルブルーの乳を盛れなかった……今いま頃ごろ絶対馬ば鹿かにされてるだろうな、『あれで神（笑）』とかって……あー、死ーのうっと」

「あの調子で数十分、ネガティブを吐き散ら……言っておられるのだ。どう応対していいかわからずに困っていてな」

「は、はあ……」

　相も変わらず珍客の多い部隊だ。スワンギルディが仕方なく声をかけようとすると、

「気にしないで。そのコ、俺の同僚だから」

　後からポセイドンギルディも、ホールへとやって来た。

「ポセイドンギルディ殿？」

　そして実に陽キャじみた気軽なスキンシップで、スワンギルディの肩を叩たたく。

「暴れた後はいつもああしてダウナー入っちゃう、めんどっちいコなんだ。オンオフ激しいのが玉に瑕きずなんだよねぇ、ゼッちゃんは。まあ、仲良くしてあげてよ」

「おうさ。しばらくこの基地に身を置く、ゼウスギルディだ。光栄に思え、俗物ども……まあワシはもう死ぬがな……」

　ゼウスギルディはそれまで周りの誰だれもが腫はれ物に触るように少しずつ声をかけても応おうじなかったというのに、ポセイドンギルディの声を聞くやようやく自己紹介をした。

　この寝っ転がっている女性がポセイドンギルディの同僚、つまり

自分たちの上司だということを知った戦士たちは、ますます対応に困っていた。

「しかも、弟子取ってたことまでツインテイルズに得意げに語ってたみたいじゃん？　ゼッちゃんの弟子って、しごきに耐えかねてどこぞの異世界に逐ちく電でんした奴やつまでいるくらいっしょ……組織抜けるぐらい嫌がられるって、よっぽどだよ？」

「うるさいうるさい……フン」

　ポセイドンギルディに先ほどの戦いでの一幕を挙げられて懐疑的な眼まな差ざしを送られ、ゼウスギルディは誤ご魔ま化かすように話題を変えた。

「おうい、スワンギルディとやら。お前がここの隊長であろう？」

「はっ！　暫ざん定ていでありますが、務めさせていただいております!!」

　上司であるゼウスギルディに声をかけられたため、姿勢を正して畏かしこまるスワンギルディ。

「この世界について聞きたいのだが……意図的に属性力エレメーラを遮断する機械なぞが、人間に普及しているのか？」

　一方のゼウスギルディは腹をぼりぼりとかきながら質問をした。

「と、言いますと……？」

「ひどく歪いびつな偽いつわりごとを感じた。属性力エレメーラをわざと秘め隠しているような人間を、何人か見たのだ。そんな機械が普及するほどの科学レベルではないはずだが……どうなのだ？」

「いえ……我われらがこれだけ長く侵攻を続けていても、属性力エレメーラの概念すら一般人には浸透しておりません。この世界の人間が把は握あくしているのは……テイルレッドが可か愛わいい、それだけでありましょう」

　スワンギルディは説明の途中、口にこそ出さなかったものの、フェニックスギルディから与えられた属性力エレメーラの遮断装置について思い出していた。

　あれはアルティメギル最高科学者、ペガサスギルディの謹製だと言っていたが……そんな技術水準のものを、ツインテイルズは一般人にも気軽に配布しているというのだろうか。

「ふーむ」

　ゼウスギルディは寝っ転がったままスワンギルディの顔を眺め、ようやく小さな微ほほ笑えみを浮かべた。そしてごろりと寝返りを打って、ポセイドンギルディを見やる。

「なるほど。ポセイドンギルディ……汝なんじの言うとおりだ。つつけば別の楽しみもありそうだな、ツインテイルズには」

◇

　ゼウスギルディとの戦いの後、俺たちは緊急会議を余よ儀ぎなくされた。

　コンソールルームには俺と愛あい香か、トゥアール、慧え理り那なと桜さくら川がわ先生、仕事帰りのイースナ。それに女幹部コスの母さんが集まってテーブルに座り、皆一様に難しい顔をしている。

「……すまない、トゥアール！　せっかくブレスを作ってくれたのに、使いこなせなかった……観み束つかたちも、いきなり足手まといになって申し訳ない……!!」

　重い口を開いたのは、基地に帰って意識を取り戻した桜川先生だ。

「いいえ、悪いのは私です。どうやらテイルブレスアナザーにはまだまだ問題があるかもしれません。尊みことさんを危険な目に遭わせてしまいました……」

「それを言うならわたくしも……観束君は尊の出撃を止めてくださっていましたのに、はしゃいでしまって……」

　トゥアールと慧理那も、自責で言葉を震ふるわせる。

「誰だれの責任でもないよ。とにかく、ゼウスギルディの強さは驚異的だ。今の一番の問題は、そこだろう」

　俺は二人を気遣う。今日のことは、誰が見ても想定外のことだったからな……。

「……そうですね。陽気なエレメリアンだと思っていましたが……ヴェールの下にとんでもない素顔を隠していたと言うべきでしょうか」

　トゥアールはメインモニターにゼウスギルディの映像を映し出した。

　前回の戦いでは、ヴェールのような頭部パーツの下から透けていた目は黄色だったが……今回、怒りに任せて暴れた時は、はっきりと紅あかに染まっている。

「これまでに対戦した神を自称するエレメリアン……ハデスギルディ、ポセイドンギルディ、アポロギルディは追いつめられても理性的なままでしたが、ゼウスギルディはスイッチが入ると暴走するあたり、アルティメギル側のテイルブルーと呼んでも差し支えないでしょう」

「差し支えあるわよ、あたしがあんな無茶苦茶するわけないでしょ!!」

「じゃあ、会議が終わったらテイルブルー総集編の鑑賞会でも開きましょうか……」

　全てを諦あきらめたような表情で提案するトゥアール。

「あ、あいつは……アルティメギル最強の、火力って、豪語してたんでしょ……？」

「ええ、それが暴走気質だから危険なのです。いわば、導火線に火のついた爆弾ですね」

　イースナの危き惧ぐに同意するトゥアール。

「あいつは他の幹部エレメリアンと違い、早急に倒すべきと判断しました。おびき寄せ、迎撃するぐらい有利な状況を作っておくべきです」

「こういう時の作戦っていえば……結婚属性ブライドを理解するってことか」

「そのとおりです総そう二じ様！　それを今から話し合うことにしましょう。未み春はる将軍！」

「オッケーよー」

　椅い子すにふんぞり返っている母さんが、不意に指パッチンをした。

　また、いい音響かせるなあ……。

「特別ゲストは──現役人妻の、神しん堂どう慧え夢むさんです」

　トゥアールが指し示した入り口から入ってきたのは……理事長だった。



　しゃなりしゃなりと鈴がなるような歩みに合わせ、ツインテールが揺らめく。相変わらず凄すごみを感じさせるツインテールだ。

　理事長がこの基地に来るのって、めちゃくちゃ珍しいな。

「フッ……婿むこ殿と慧え理り那なたちのためです、力になれるのならばなんなりと仰おつしやってくださいましね、はぁはぁ」

　母さんの方をチラッチラと見ながら、理事長は宣言した。

　笑顔で拍手をする慧理那。俺たちもそれにならう。

　娘さんと同じ系統の息遣いに早くもなっているのが、不安を煽あおるんだが。

「これぱっかりは、えむぴーに任せないとねぇ……私は未亡人だから！」

「親父おやじの遺影持ってこないでくれ」

　テーブルの空あいている席に親父の遺影を同席させる母さんに、きちんと釘くぎを刺しておく。放っておくと、また妙な遺影芸を始めかねないからな。

　……自分で言っておいて何だが、遺影芸って何だよ……。

「わたくしから言えることは、一つですわ」

　理事長はこほん、と咳せき払いをすると、着物の胸元から扇子を取り出した。

「人が結婚したいという心、そして何より花嫁への憧あこがれを狙ねらう、不届きな怪人が跋ばつ扈こするとあらば──それに立ち向かい勝利できるのは、同じ心を持った人間でありましょう」

　そして、勢いよく扇子を開き、慧理那へと向ける。

「今すぐ婿殿と結婚なさい、慧理那‼」

「えええええええええええええええっ⁉」

　話し合いが始まって数分でのストレートすぎる作戦の提示に、思

わず声を上げる慧理那。もちろん俺もぎょっとした。

　トゥアールに至っては、白衣の裾すそが浮き上がる程の勢いで立ち上がった。

「そういうアドバイスはいりません！　もっとこう、結婚属性ブライドを理解できるような、結婚っていいな～って思えるようなお話をこんこんと語って、総そう二じ様に自覚を促うながしてもらう感じで!!」

　そしてオーバーアクションを交えながら、アドバイザーにアドバイスを仕返す。

「ほほほほほ、語れと仰るのであれば遠えん慮りよなくつぶさに語り尽くしますわよ？」

「いや、やっぱりいいです慧え夢むさんの夜の生活とか聞きたくないです！　私たちは耐えられても慧理那さんがまた闇やみ落ちしかねないですし……!!」

　相変わらず理事長には話し合いで押し負けるな、トゥアールは……。

「結婚は大切なことですよ！　戦いの道具にするべきじゃないでしょう、理事長!!」

　愛あい香かが正論をぶつけるが、理事長は動じない。

「そもそも慧理那が婿殿と結婚するのは、すでに決定事項！　ツインテールが揺れるのと同じく当然のことです。今回がそのきっかけになるだけで、道具にしてはいませんわ!!」

　むっ……ディスカッションの中にツインテールの喩たとえを織り交ぜることで、一気に信しん憑ぴよう性を高くする……これが大人の話術か。勉強になるぜ。

「まして本人が嫌がっているのならばともかく──慧え理り那な？」

　理事長が問いかけるように視線を向けると、慧理那は顔を真まっ赤かにして俯うつむいた。

「このとおり。二人の婚こん姻いんを阻むものは何もありません

わ」

「ちっ……さすが人妻、説得力だけはありますね……ならば両家の親御さんの前で総そう二じ様に破滅的な痴態を晒さらしていただき、破談にしてくれましょう！　トゥアールちゃんの身体からだで──」

「あんたは少し黙ってなさい、ややこしくなる!!」

　愛あい香かはトゥアールの腰を掴つかむと、ボウリングのダブルハンドスローのようなフォームでトゥアールを投げ飛ばし、天井に突き刺した。

　見事、と言わんばかりに、広げた扇子を口くち許もとに当てる理事長。

「いつ見ても素晴らしき功夫クンフー……うちのメイドに欲しいぐらいですわ。どうですか津つ辺べさん、神しん堂どう家に就職して婿むこ殿の専属メイドになりませんこと？」

「えっ……あたしがそーじの専属メイドに……専属………………はっ！　だ、駄目です!!」

　愛香はしばし考えこんだ後、慌あわてて否定していた。神堂家のメイドさんになりたかったのかな？

「今、絶対……一瞬、想像した……エッチなこと……」

「愛香さんって基本エッチなことしか考えてませんから、誰だれでも正解するクイズですよそれ」

　イースナとトゥアールがひそひそと話し合っている。

　ほんの数十秒前まで天井に刺さっていたトゥアールが、テレポートしたレベルの突然さで普通に着席しているのが恐ろしい。

　映画だったら、誤って必要なシーンをカットしてしまったかと疑うレベルだ。

「とにかく、二人が婚姻関係で結ばれれば、その怪人は引き寄せられるのでしょう。何も反対する理由はありませんわ」

敵の属性を逆手に取る。

それは母さんと違って普段基地でエレメリアンとの戦いを見たりしない理事長でさえ断言するほど、わかりやすい作戦だということだ。

確かに俺たちは、今までも敵の属性を理解し、その成果で誘おびき寄せることもままあった。

だけど……結婚は、たとえフリであろうとも作戦行動のためにするのは躊躇ためらわれる。

「楽しみですわ、婿殿がどんなプロポーズを慧理那に贈ってくださるのか」

それを聞き、愛香はげんなりと肩を落とした。

「プロポーズ……あたし、エレメリアンから何回されたんだろ……」

「そ、それを言ったら、総二さんなんて、ほぼ常に、エレメリアンに……プロポーズ、されてるし……」

イースナが俺を見て含み笑いを浮かべる。冗談半分だろうけど、お前にもされたしな……。

「……未み春はるさんは、どのようなプロポーズを受けたのですか？」

理事長の発言を遮さえぎらないようにか、言葉少なだった桜さくら川がわ先生が……不意に、そんなことを母さんに尋ねた。

「プロポーズかぁ。私ってば、結婚を意識する暇ひまもなくお腹なかに総そうちゃんが宿っちゃったからそのまま済なし崩くずし的に──」

「総ちゃんが宿っちゃったとか総ちゃんの前で言うんじゃねえええええええええええええええええええええええええええええええええええええええ!!」

明け透けな母親を前に、息子は頭を抱かかえてテーブルに突っ伏すことしかできない。

「いいえ、お義か母あ様。こういうことはどんどん総ちゃん様の前で言うべきです！　そして意識していただくのです!!」

「当然そのつもりよ！　……まあもちろん、その後プロポーズっぽい台詞せりふはちょくちょくもらったけどね～。『我わが生命いのち、我が魂たましいの半分をそなたに授ける』とか……」

「くっ……」

　母さんの幸せそうな顔を見ていると、俺もそれ以上は強く言えない。

　そういや、何か不自然な感じがしていたんだが……結婚の話題なのに、桜川先生が全然乗ってこないんだよな。普段、人じん智ちを超越した絶技を駆使してまで婚こん姻いん届とどけを俺に渡してくるほど、結婚を望んでいる桜川先生が。

　やはり、アナザーテイルブルー（真）としての初戦があんな結果に終わってしまったことが、ショックなんだろうか。

　そんなことを考えていると、慧え理り那なが勢いよく挙手をした。

「お母様！　わたくしからも提案ですわ！　実は先ほどの戦い、尊みことも出撃したのですが……」

「まあなんと、尊が!?　それは是非、わたくしも見たかったですわ……!!」

　理事長、桜川先生が戦っているところはまだちゃんと見ていないんだっけ。

「その戦いで、結婚属性ブライドのエレメリアンに尊が素晴らしい結婚への思いを持っていると賞賛されましたの！　ですから──」

「なるほど……私が囮おとりになり、トゥアールがさっき言っていたようにあの敵を誘おびき寄せるのですね！　お任せください、お嬢様!!」

　慧理那の言葉を食い気味に、桜川先生が意気込む。

「……尊……いえ、そうではなくて……」

　汚名返上に燃える桜川先生とは対照的に、慧理那はひどく悲しげに顔を伏せた。

「ふむ……それは頼もしいことですわ。尊、当然あなたも婿むこ殿と結婚するのですわよね？」

　雅みやびに目を細めながら、桜川先生にそう告げる理事長。

「しれっと重婚勧めるのがこの人の恐ろしいところですね」

「法律変えるぐらいやりそうだしね、理事長なら……」

　トゥアールと愛あい香かが歯は噛がみしている。

「それは……ま、まず……お嬢様が観み束つかと結婚なさってからです、奥様」

　理事長の問いかけに、歯切れ悪くそう答える桜さくら川がわ先生。

　……何となく、桜川先生の態度が不自然なのを、みんな感じ取っているようだった。

　特に慧え理り那なは、どこか悲しげな表情で桜川先生を見つめている。最近、彼女のこういう表情をよく見る気がする。

「わたくし、決めましたわ」

　慧理那はおもむろに立ち上がると、俺の方へと歩いてきた。

　まるで先ほど見た理事長のように……ツインテールを楚そ々そと揺らし、凜りんとした面おも持もちで。

　思わずつられて立ち上がった俺の目の前で、慧理那は大きく息を吸い込んだ。そして──

「観束君──わたくしと結婚いたしましょう!!」

　迷いのない瞳ひとみで、はっきりとそう告げた。

一拍遅れて、コンソールルームが絶叫に包まれた——。

属性玉
－設定資料－
06

16 脚属性（レッグ）

持ち主 フリイギルディ

発動した者の脚力を強化することができる。跳躍力などの一点集中に絞れば他の属性玉の方が効果は高いが、こちらは脚力全般に強化の範囲が及ぶため、走力やキック力などオールマイティーな上昇が期待できる。敵と見ればとりあえず蹴るテイルブルーにとっては相性がよく、使用頻度の高い属性玉の一つ。

17 割腹筋属性（シックスパック）

持ち主 シーラカンスギルディ

発動すると、触れた物質を短時間だけ硬化させることが可能になる。敵の攻撃を凌げるような強固な防御壁を生み出せるほどではないため使いどころが難しいが、その分対象範囲が広く使用方法も柔軟だという利点もある。そのためイエローは自分のツインテールを操る際に硬化させるなどして活用している。

18 涎属性（スロバー）

持ち主 チェリーブロギルディ

自分の使用武器の射程を強化することができる。ウェイブランスなら柄が伸びて遠くの敵を攻撃でき、ヴォルティックブラスターなら撃ち出した銃弾の飛翔距離が大きく延びる。この特性が属性玉の重ね掛けにおいては極めて有効で、技の効果範囲を拡大する用途などで、エターナルチェインに覚醒後のブルーが使用することが多い。

第五章

家族のツインテール。

慧え理り那なの突然の結婚宣言に、俺は言葉を失う。

しかし俺に向けられた真しん摯しな眼まな差ざしを見ると、それが冗談だとはとても思えない。

「おい慧理那、作戦でやるにしたって理事長の前で宣言するのはまずいだろ──」

小声で問い質ただすも、慧理那は小さく微ほほ笑えみ返してくるだけ。

ゼウスギルディを倒すという使命感からの行動だろうか……慧理那は意外と頑固なところがあるから、こうなってしまうと、てこでも動かないぞ。

「はい言った！　言った言いましたわ聞きましたわ慧理那が結婚するって確かに聞きましたわー早速式の準備をしますわー!!」

和服美人がコンソールルームを縦横無尽に駆け回る。

理事長、喜びのあまりキャラが崩壊しかけてるぞ!?

さんざん跳ね回った後、理事長は着物の裾すそから携帯電話を取り出した。

「私です……今すぐ神しん堂どう教会に向かい、式の準備を進めなさい。ええ、ええ。披露宴は神堂ドームで……新婚旅行もすぐに行います、神堂空港の整備も速すみやかに」

いかん、まだ知らぬ神堂施設シリーズが怒ど涛とうの如ごとく現れだしたぞ!!

自家用ジェット機の所有はともかく、空港ってポンポン個人で作っていいものだっけ……。

「以上。ああそれと、神堂家専属の産さん婆ばに『ツインテールの間』で待機してもらいなさい」

「最速でも一〇か月は待機させられるわよ、その産婆さん」

　母さんが突っ込んでも気付かないほど、理事長は浮かれている。

　やばいぞ慧理那、これツインテイルズの活動の一環でやったことだからゼウスギルディを倒したら結婚取り消します、なんて言える雰囲気じゃないだろ。

「いやいやいやいやいやいや、そーじはまだ一六歳ですから！　法的には結婚できないんですよ!?」

「そうです！　年齢は改かい竄ざんを許さぬ絶対のもの、全てに勝る真実ですよ!!」

　愛あい香か、トゥアールが矢や継つぎ早ばやに理事長に抗議する。

　同じ女性の立場から、作戦行動の一環として結婚するのを認められないのは当然だ。

「……結婚、か……私、こっちの世界ではできる年じゃないから……慧理那、いいな……」

　最年少のイースナは年齢で悩んでいるくらいで、まだ大人しい方だ。

「今すぐ籍を入れるとは一言も言っていませんわ。将来夫婦となる二人が式を挙げ、新婚旅行へ行く……これらを縛る法律など、どこにもありません」

　あ、そこはさすがに理事長もちゃんと考えてはいたのか……。

「お待ちくださいお母様！　式は──戦いが終わった後にいたしましょう」

「……ふむ、確かに。何の憂うれいも無くなったその時、世界一豪華な結婚式を挙げるのがよいですわね、慧え理り那な。よろしい、式の準備はひとまず保留にします」

　あわあわしていた愛あい香かたちも、それを聞いてひとまずほっとしていた。

「ところでお母様……わたくし、今日は観み束つか君の家に泊めていただこうと思うのですが……」

「何を当然のことを。籍も入れず式も挙げずとあらば、残るは夫婦生活のみ。あなたが今そう言わなければわたくしも今宵こよい婿むこ殿の部屋に泊まり、指南をしていたところです」

　理事長は慧理那の頼もしさが誇らしいのだろう、彼女の肩にそっと手を置いた。

「いずれ婿殿には神しん堂どうの屋敷にお越しいただきますが、それまでは好きなだけ、ここで婿殿に甘えなさい。そしてその模様を母に伝えるのですよ」

「うーむ、同じ母としてえむぴーの気持ちがわかるから、止めることはできないわ……同じ母じゃなくても止める気はないけど……」

　腕組みをしながら満足げに頷うなずく母さん。わかっていたことだが、援護は全く期待できない。

「では明日早速、臨時の全校集会を開いて婚約の発表をいたしましょう」

　広げた扇子を天に掲げ、めでたさを身体からだいっぱい表現する理事長。

「やめて――――――――――っ!!」

　俺は、ギャラリーに囲まれた時のテイルレッドじみた悲鳴をあげてしまうのだった。

◇

　地下基地での会議の後、俺と慧理那、愛香、トゥアール、イースナだけで俺の部屋へと移動した。

「どうする慧理那、理事長のあの喜びよう……あとで冗談でしたじゃ済まないぞ」

「うふふ」

うふふて。

俺の焦しよう燥そうを余よ所そに、慧理那はひどく落ち着いている。

そして俺の勉強机の隣にある犬小屋の前に行き、屋根をそっと撫なでた。

「嫁入り道具は、犬小屋一棟──。古きよき演歌の歌詞のように平凡な幸せが、そこにあるのですわね」

いや、演歌じゃないよロックだよそれ。

愛香はベッドに腰を下ろし、トゥアールは床のクッション、イースナはクローゼットの中にスタンバり、全員がじっと俺を見ている。

「慧理那さん、今回は少し強引ですよ……何な故ぜこんなことを」

トゥアールは少し真剣なトーンで尋ねる。

「もちろん、世界の平和のためですわ！　わたくしが結婚属性ブライドを学べば、それだけゼウスギルディとの再戦も近づく──。今まで何度と試してきた作戦ではないですか」

「駄目だって、ゼウスギルディはあたしが責任持ってブッ倒すから、会長が身体からだを張る必要はないってば!!」

慧え理り那なを気遣っているのだろうが、たまには愛あい香かの口から戦い以外の解決方法を聞いてみたい。

「え、慧理那……いいの……？　作戦の一環で、総そう二じさんと結婚して……」

心配そうな口調で尋ねるイースナ。

「……皆様の困惑はごもっともですわ。けれどどうか今は、わたくしを信じてください」

慧理那は誰だれよりもヒーローに憧あこがれている。そのために正義感、使命感が暴走することもあったが、道に外れることだけはしなかった。

　突然結婚をするなどと言った、本当の理由をまだ隠しているフシがあるが……彼女が信じて欲しいと言うのならば、俺はそれを信じるだけだ。

　ちょうどそこへ、慧理那の様子を見に桜さくら川がわ先生も部屋にやって来た。

「おめでとうございます、お嬢様。観み束つかもよく決心したな」

「してないんすよそれが……」

　俺は力無く答える。

「尊みこと……約束したではありませんか。まずわたくしが結婚した後、あなたも結婚すると。尊ももう立派な、観束君の花嫁さんですわ！」

「そう、ですね……ありがとうございます、お嬢様」

　大人の態度で慧理那の申し出を流す桜川先生。

「しかし、大丈夫か？　さすがに地下基地と違って、ここに全員分の布ふ団とんを敷くスペースはなさそうだが」

　桜川先生は、とりあえず慧理那の分だろう、掛け布団を一枚抱かかえている。しかしこの様子では確かに、地下基地でのお泊まり会よろしく全員ここで寝ることになりそうな流れだ。

「いや尊さん、仮にも新婚初夜に修学旅行気分で雑ざ魚こ寝ねはないでしょう……今夜の総二様のベッドを巡って、私たちがここに結集しているのですよ！」

「え、あ、そうなのか。すまんな」

　トゥアールに何やら今晩の休み方について指摘されたようで、桜川先生が謝っていた。

　いつもならクールに切って返すイメージだったが、主人である慧理那が突然結婚宣言をしたことで、桜川先生も内心動揺しているのかもしれない。

「というわけで今夜は新妻の眼前にて旦だん那なの上で別の女が腰

を振るタイプの新婚初夜になりますご期待くださぶおあああああああああああ!!」

　俺と慧理那に飛びかかってきたトゥアールを、愛香が踵かかと落としで撃墜。桜川先生が持ってきた布団で包んできつく縛ると、廊下に転がした。

「あたし、立ったままでも寝られるから大丈夫」

「わ、私、クローゼットの中で、寝馴なれてますから……」

　愛あい香かとイースナの言葉を意訳すると、今夜はここに泊まるということだろう。

　さすがにそういうわけにもいかず、身体からだの小さい慧え理り那なとイースナに俺のベッドで寝てもらい、俺と愛香は床に布ふ団とんを敷いて寝ることにした。

　てっきり慧理那を見守るために桜さくら川がわ先生も泊まっていくと思ったのだが、神しん堂どうの屋敷へ帰ったようだ。

「ふすー、ふすー、総そう二じさんの、匂い……」

「ふすーですわ……」

　夜の静寂の中……いや、ベッドから寝言は聞こえるし愛香と簀す巻まきトゥアールも廊下で何かもぞもぞやっている気配はするが静寂の中……俺は、様々なことを考えていた。

　慧理那があんなにも燃えているのは、強敵ゼウスギルディに桜川先生が危険に晒さらされたこともあるのだろうか。

　彼女の決意ツインテールに報むくいるために、俺がすべきことは──。

◇

　翌朝、俺たちは速すみやかに登校の準備を整えた。

　さすがに今日ばかりはイースナも後ろツインテール引かれる思いのようだったが、迎えに来たメガ・ネに連れられ仕事へと向かった。

「だから何で処女のままなんですか私は……」

「いくらその台詞せりふ三回目だからって、もっと腹から声出してきなさい、トゥアール……」

　トゥアールを何やら窘たしなめながらも、愛香も大分疲れている様子だ。

　リビングを出ようとしたところで、慧理那が俺に腕を絡めてきた。

「ど、どうした慧理那」

「新婚さんですもの、このぐらいしなければ！」

「いや、その前に俺たち学生だからな!?」

「わたくしは首輪でもかまいませんが──」

　俺は慎つつしんで腕組みを選択させてもらい、奥様をエスコートする。

　愛香とトゥアールが後ろで白目を剥むいているが、慧理那はさらに要求を追加してきた。

「それでは、登校する前に喫茶店に参りましょう！」

「何で!?」

　俺の単純明快な質問をものともせず、慧理那は喫茶店へと突入。

　案の定、お客さんたちの視線がこちらへと集中する。

　しかも、カウンター席には恋れん香かさんの姿もあった。

「あらあら総そうくん……他の女の子と随分密着してるわね」

　にこにこしながら質問してくる恋香さん。

　俺がしばらく答えに窮していると、恋香さんはカウンターテーブルに置かれていたコーヒーカップを手に取り、一気に呷あおる。

「わたくしたち、結婚しましたの」

　俺に代わり、慧え理り那ながその答えを何の躊躇ためらいもなく告げた。

「ブ――――――――――――――ッ」

「お姉ちゃん!?」

　普段は品行方正な姉が綺き麗れいな霧状に珈琲コーヒーを噴き出したのを見て、愛あい香かがぎょっとする。

「……ふふ、ごめんなさい、ちょっとコーヒーが気管に入っちゃって……おじ様大丈夫ですか、おしぼりでフキフキ」

　隣に座っていた外国人の男性に珈琲がかかってしまい、恋香さんはおしとやかに謝罪する。

「何。喫茶店に通っていれば一度は遭遇したいシチュエーションに遭遇できて嬉うれしいよ、お嬢さん」

「プレジデント……三〇分後に会談が……！」

　後ろから近づいてきた知り合いらしき男性に急せかされ、その人は立ち上がる。なおも謝り続ける恋香さんに気持ちのいい笑顔で手を振り、店を出ていった。

　恋香さんがコーヒーを噴きかけ、そして使用済みのおしぼりで顔を拭いた相手の社会的立場が恐ろしく気になるが、今はそれどころではない。

「ところで総くん。結婚したって、本当なの？」

「あ、あはは……色々事情があって……遊びで結婚をしているとい

うか」

　恋香さんに凝視され、俺はしどろもどろで返す。

「ふうん、遊びで結婚。……愛香じゃないのね」

　そう口にしながら、恋香さんの目がカミソリのように鋭くなっているように見える。

　心優しい恋香さんも、遊びで結婚と聞いてはさすがに諫いさめねばと考えたのだろうか。

「そうか総そう二じ君……遊びで結婚を」

「なかなかエキサイティングだね」

　常連客の皆さんの温かな笑いで店内が包まれる。

　っていうか遊びで結婚っていう字面が、破滅的に世間体が悪い。誤ご魔ま化かすにしてももっと言葉を選ぶべきだった。

　喫茶店を出てからも、恋香さんの視線がずっと背中に突き刺さっているような気がして仕方がなかった。

　いつもの通学路が、果てしなく長く感じる。

　腕組みをして歩く俺と慧え理り那なを見て、登校中の生徒たちが二度見は当たり前、三度見、果ては身体からだごと回転まで始めて俺たちを凝視していく。

「ま、まさか慧理那さんがあえて見せびらかすなどということをするなんて……愛あい香かさん、今回は様子を窺うかがっているだけでは一気に突き抜けられるかもしれませんよ……!!」

「あたしとも結婚しよ、あたしとも結婚しよ、あたしとも結婚しよ……」

「練習なんでしょうけど私のすぐ傍そばでウィスパーボイスで連呼しないでください怖すぎますから!!」

　後ろを振り向くと、愛香とトゥアールが何やら言い合っている。

昨夜ゆうべも多分、一晩中小競り合いしてたよな、あの二人。

「あっ……！　尊みこと！」

　笑顔で手を振る慧理那。いつもの合流場所で、桜さくら川がわ先生とメイドさんたちが俺たちを待っていた。

「おはようございます、お嬢様」

　桜川先生は、微ほほ笑えみながら慧理那へとお辞じ儀ぎをした。

「ちょーっとぉ、もしかしてバレンタインの時のおねーさんたちの言葉が効いちゃった～？」

「うんうん、この場にいる全員が、君のメイドさんにもなるんだからね♪」

　後ろで、メイドさんたちがめっちゃニマニマしている……!!

「慧理那、神しん堂どう家の人たちにはうまく誤ご魔ま化かして説明してくれてるよな!?　な!?」

「タブンダイジョウブデスワ」

　俺は仲間たちを固く信頼しているが……何な故ぜだ、慧理那の言葉が死ぬほど嘘うそっぽい……!!

　それでも大丈夫だという慧理那の言葉を信じ学校についた俺だが、

「今日、一時間目を潰つぶして全校集会だそうです～。先生授業しなくて済むから全校集会大好きです」

　ＨＲで臨時の全校集会があることを、担任から聞かされた。

　そしてそれを発案したのが理事長であると知るに及び、全速力で廊下をダッシュ。

　俺は久方ぶりの理事長室襲撃を敢行したのだった。

◇

　アルティメギル基地の一角にある、資料室。

　普段大ホールでわいわいと作戦を立案する戦士たちにはあまり縁のない場所だが、ここにはこれまでの部隊が遺のこした戦闘データが保存されている。

　その部屋の中央で椅い子すに座り、無数に浮かぶ操作スクリーンを指で操作しているのは、ポセイドンギルディだ。

　無言で作業を続ける彼に、背後から声がかけられた。

「おや。アルティメギル一のナンパ男が資料漁あさりとは珍しい」

　振り返ったポセイドンギルディの視界に飛び込んできたのは、入り口に立つハデスギルディだった。

「やー、ちょい気になることがあってさあ。確かに俺が探るのが上う手まいのは、女の子の心だけかな。お目当てが全然見つからないわー」

「本当にただ資料を求めていたとは……これはいよいよ珍しい、さてはツインテイルズとの戦いで何かあったね？」

　そして例によって、視線でポセイドンギルディの全身を走査するハデスギルディ。

「変態値七二万──か。君も、己の中の変態をむくむくと膨ふくらませているようだね」

「うん。むくむくとか勘弁」

　手短にツッコむと、ポセイドンギルディは頭の後ろで手を組み、椅子に深くかけ直した。

「ハッちゃんさぁ、女神ソーラ様がツインテイルズと同じ装そう甲こうをまとう瞬間を見たんだろ？」

「うむ……資料にもあったかもしれないが、素晴らしいツインテールだったよ」

「──じゃあ、他のツインテイルズが装甲をまとう瞬間も、見た？」

　ポセイドンギルディらしからぬ深刻な声こわ音ねに、ハデスギルディもつい苦笑をこぼした。

「ふむ？　どうやら君は、ツインテイルズの素性が気になっているようだね。同じ技術の装甲をまとうテイルブラックならば、彼女の修業時代に何度も見たが？」

　ハデスギルディは、ダークグラスパーとしてアルティメギルに在籍していたイースナを鍛きたえた師匠だ。彼女がグラスギアをまとう瞬間も見ているのだろう。

「あ、そっか。あれ～、じゃあ装甲まとうトコは絶対隠してるわけじゃあないのかなぁ」

「報告はなされていないようだが、彼らが装甲をまとうところを見たエレメリアンも、何体かはいるだろう」

「……報告はなされていないようだが……か。いや、ツインテイルズって装甲の力で色々と見る側の認識を誤ご魔ま化かしてるっぽいじゃん？　なんでかなーって思って」

「それを知ってどうする？　おそらく彼女たちは学生だろうが、通っている学校を突き止めてそこに出撃でもするつもりかね」

「そんなことしねーけど……やっぱそういうのを警戒されてんのかねぇ」

　すっかり肩の力を抜いたポセイドンギルディは、周囲に浮かぶ操作スクリーンを一個一個指で弾はじき、消し始めた。

「ツインテイルズの頭脳ブレインは、かつて我われらアルティメギルに世界を滅ぼされた戦士……それははっきりとわかっている。おそらく彼女の入れ知恵なのだろう」

「なーるほど。別に俺らが日常生活を狙ねらうつもりなくても、一回騙し討ちで故郷滅ぼされてんじゃ、用心深く素性を隠すようにもなるかぁ」

　アルティメギルの常じよう套とう作戦は、ツインテールの戦士を世界の守護者として十分に持ち上げてから、太た刀ち打ちできない

戦力で攻撃を仕掛けること。

　ポセイドンギルディが騙だまし討ちと自じ嘲ちようするのも当然のことだった。

「この世界の守護者たちが突出した力を持っているのも、そういった背景からだろう。アルティメギルとの対戦経験をまるごと他の世界に伝えた者など、彼女以外にいないだろうからな」

「そこ考えてなかったなぁ。やっぱ俺の思い違いかなぁ～？」

　ハデスギルディは、そう嘯うそぶくポセイドンギルディを見て静かに笑った。

　疑念を払ふつ拭しよくしたようには見えなかったからだ。

「究極のツインテールってさ、人間なのにツインテール属性の頂点を極めたって意味じゃ、ある意味もっともエレメリアンに近い人間じゃん？　じゃあエレメリアンが究極に至ろうとする時、まずはどうする？」

　軽い口調ながら、意味深な微笑とともに呟つぶやくポセイドンギルディ。

「個々の差はあれど、最終闘体……進化を志すな」

「……そ。進化……変身するよね、俺ら」

「なるほど。ツインテイルズが装そう甲こうをまとう際に、彼女たちの姿形が極端に変わっている可能性もあると考えたわけか」

　それを聞いたハデスギルディは、深く頷うなずいた。ポセイドンギルディの言いたいことが呑のみ込めたようだ。

「装甲をまとう……ではなく、変身する、と。うむ、なかなか面白い」

「さっすがハッちゃん、理解が早い！　そこに究極のツインテール

の秘密があるのかな～、なーんて。ねえねえ俺、めっちゃ仕事してね？　首領様の楽しみのためにさ～」

「よかろう。私も興味が湧わいてきたよ。協力しようではないか」

　勤勉さを主張されては黙ってはいられないとばかり、ハデスギルディも協力を申し出た。

「さて、ゼッちゃんは再戦する気満々だし、後は……最近アッちゃんが姿を見せなくなったけど、何してんのかねぇ」

　実力者たちが慢心をせず、秘密の核心に迫っていく。

　ツインテイルズにとって最悪の展開が、じわじわと進行していた。

◇

「ただ今帰りましたわ」

「はーい、お帰りなさーい」

　おかしいぞ、慧え理り那なが俺の家に入ってただいまと言って、それを俺の母さんが快こころよく迎えているぞ。

　慧理那のたっての希望で、今日は部室にも行かずに直帰した。

　もちろんこの結婚自体が作戦行動のうちと考えれば、翻ひるがえってツインテール部の活動と言えなくもないだろうが……。

「さあ慧理那ちゃん、今日は一緒に夕ご飯作りましょうね！　これは私から新婚さんへのプレゼントよ!!」

「ありがとうございますわ！」

　胸元に小さく、ツインテールのマークが刺繍された白いエプロンだ。

　へえ、母さん、気が利くな。

　と、感心するのも束つかの間ま──慧理那は、制服のブレザーのボタンを外し始めた。

「待つんだ慧理那」

　俺は仮初めとはいえ夫の風格を精一杯みなぎらせ、慧理那の肩を掴つかんだ。

「エプロンは制服の上からでいいだろう、どうして服を脱ぐんだ！」

「新婚さんはエプロンの下は何もつけないのが正装だと、お母様に教わったのですが……」

　無む垢くな瞳ひとみが、俺を見つめてくる。

　神しん堂どう家の教育は相変わらず特殊だと思ったが、母さんはそれを聞いてけらけらと笑った。

「母さんの新婚の頃ころを思い出すわね～。全裸に魔法使いみたいなローブ一丁でお料理した時期もあったわ～」

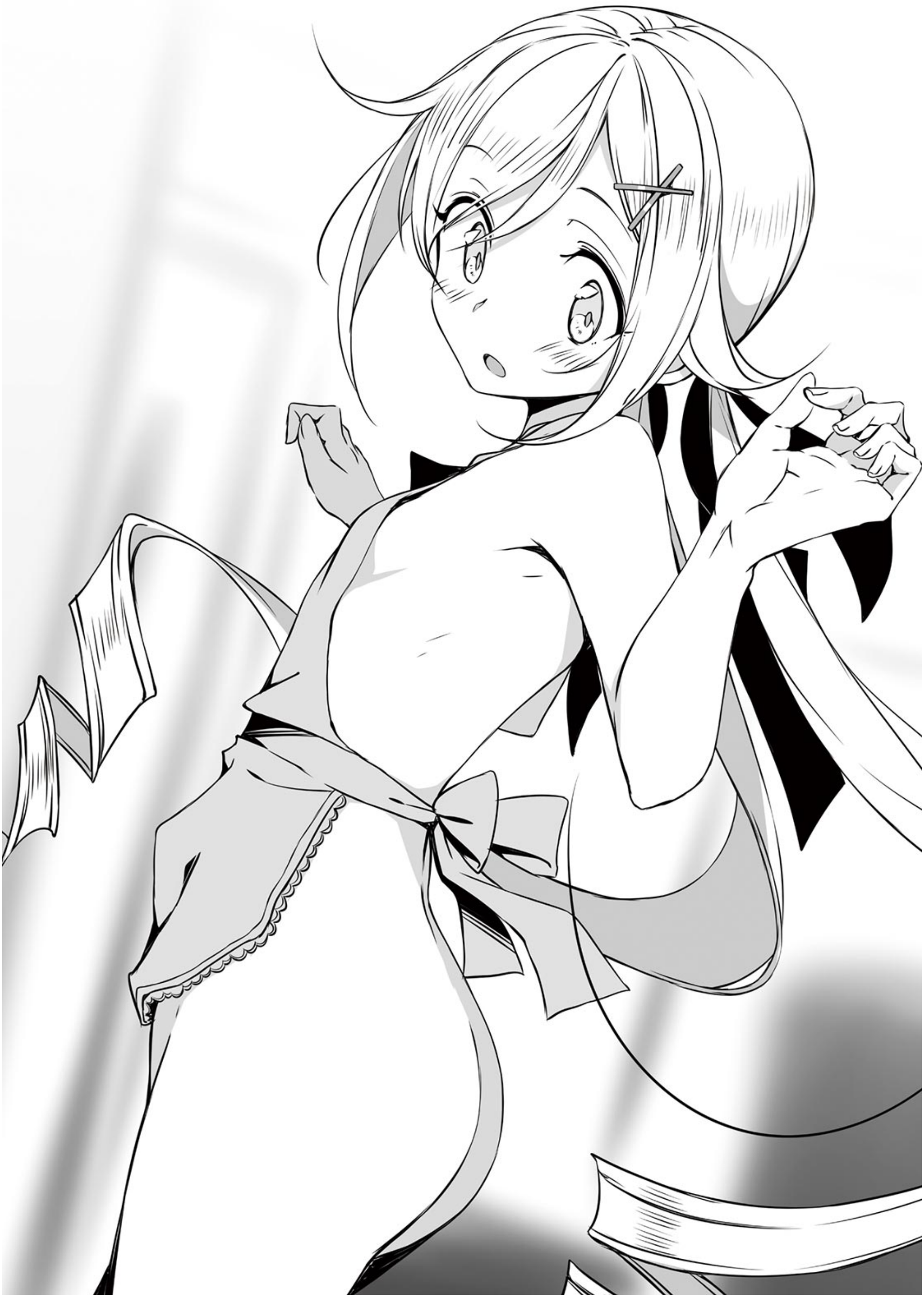
「やめろ今後神の一剣ゴー・デイア・ソードの奴やつらがその格好で出てきた時に思い出しちまうじゃねえかあああああああああああああああああ!!」

「こ、これが新婚さんの正装ですのね……はあはあ……」

　ああ、僅わずかな隙すきを突かれて慧理那に脱衣されてしまった……。

　瑞みず々みずしい白磁の肌を隠すのは、純白のエプロン一枚。

　その頼りない布地は、慧理那の腰──ではなく、ヘソの上までしか隠していなかった。



「短いだろおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

　エプロンが短すぎて、下を全く隠せていない。幼少期の金太郎がしている腹掛けのようになっている。

「うふふ、慧理那ちゃん背が小さいから、それで十分だと思って……私の知らないうちに、成長していたのね……サイズがもうちょい大きな方があるから、こっちを使って」

　慧理那は早速、母さんが差し出した大きいサイズのエプロンと交換した。

　そうそう、ちゃんと腰下まで隠れるサイズのやつで裸エプロンしてくれればいいんだ。

　………………あれ？

　俺、なんか脳が……。

　唐突な目め眩まいの気付けになるかのように、ドタバタと騒々しい音が鳴り響く。

「ぜーはー、ぜーはー……よかった、まだ裸エプロ……いやよくない遅かった!!」

「尊みことさんが私たちの行く手を阻んだせいですよ！　慧え理り那なさんが裸エプロンにテイルオンするシーンを見み逃のがしたじゃないですか!!」

　愛あい香かとトゥアールがリビングへと入って来た。二人とも、やけに息を切らしている。

　下校の途中でいなくなって不思議に思っていたが、後ろから桜さくら川がわ先生が歩いて来ているのを見ると、二人は何な故ぜか俺の家に来るのを妨害されていたらしい。

「二人とも惜しいわね、一分前につけてた裸エプロンの方が面白かったのに」

　母さん、さっきはわざとじゃないような口ぶりだっただろう。まさか。

　慧理那はエプロンの裾すそを摘つまみ、桜川先生へと微ほほ笑えむ。

「尊もしませんか？　裸エプロン」

「えっ……！　いえ、ですので私は裸チョコや裸エプロンはさすがに……」

　桜川先生の答えを聞き、慧理那は眉まゆを顰ひそめたように見えた。

　いつもの慧理那なら、誘いを断ったぐらいで機嫌を損ねたりはしないはずだ。俺の考えすぎかもしれないが……もしかして、慧理那のこの一連の行動は──。

◇

　夕食を食べ終わると、愛あい香かとトゥアールと慧え理り那なは二階の俺の部屋へと上がっていった。

　俺は今夜はリビングで寝ることも視野に入れつつ、のんびり階段へと向かう。

「お願いします！　今日は本当の結婚初夜！　ともなれば、いくら奥手な慧理那さんでも夜の完全脱衣形態フルブラストモードになるのは必至……ですがその前に！　せめて総そう二じ様の童貞だけは……童貞だけは、私にお譲りください!!」

「トゥアールさん、顔をお上げください!!」

「総二様の童貞を奪うことは、私の夢なんです！　ずっとずっと願い続けてきたんです!!」

「ホンットに一番最初に会った時からず────────────っと言ってるからタチが悪いのよあんたは!!」

「そこは総二様をずっと童貞のままにしていた私たちが恥じ入るべきところでしょう!!」

「そうかもしれないけど……いや、違う!!」

　賑やかな声が、階段まで響いてくる。トゥアールたちが何やら言い合っているようだ。

「こんな、総二様に強引に組み伏せられるシチュエーションを一番の夜のセルフバスパワーにしてるぐらい受け身のヘタレ女と違って、私は頑張って夜よ這ばいしてきてそれでも今まで童貞をもらう夢が叶かなわなかったんですう……御慈悲を……御慈悲を……」

「何がセルフバスパワーよ身体からだの電源止められたいのあんた!?」

　俺が部屋に入ると、愛香たちは一斉にこちらを見てきた。

「どうした、いつものことだけどやけに騒がしいな」

「今夜は新婚さんにとって本当に大事な日ですから……私たちも全力で戦わなければならないのです!!」

　拳こぶしを握り締めて力説するトゥアール。

「はあ、そっか。結婚って大変なんだな……」

　俺は小さく溜ため息いきをこぼしてしまう。

「なんでそーじがマリッジブルーになってんのよ……」

　愛香に指摘され、俺はなるほどと思う。この憂ゆう鬱うつを世間では、マリッジブルーと呼ぶのか。

「愛香さんって普段夢見がちな分、マリッジブルーにもマタニティブルーにもガンガンなりそうですよね……おまけにテイルブルーですし」

「あたしはそーいうの絶対にならないから！　めんどくさくないから！　安心してね!!」

「私の顔を見ながらではなく総二様に直接言ってください!!」

　思い返してみると、つい最近これと同じような状態を見たな。

「……そういえば、ゼウスギルディもこんな感じだったな。バーッ

とテンション上げて、急にどんよりしてさ。あいつ結婚属性ブライドだから、マリッジブルーになったりするのか」

「なるほど、興味深い意見ですね。確かにエレメリアンは、自分の属性にまつわる習性を持っていたりしますから……ゼウスギルディが急にテンション下がるのも、それに関係しているのかもしれません。だとすれば、弱点となり得ますが──」

　トゥアールもこの仮説には納得したようだ。

　テンション……ひいては戦闘意欲を長時間持続できないとなれば、それは確かにかなりわかりやすい弱点だ。

　あとはこの情報を、奴やつとの再戦時に活いかせるか、だな……。

◇

　アルティメギル首領の間──。

　一時は足繁く通っていたマーメイドギルディがいなくなった今、この神秘の空間はかつてのような永えい劫ごうの静寂を取り戻していた。

　だが今日は珍しくも、明るく澄んだ声が響いている。

「ほい、今さらだけど友チョコー。ゼウスギルディの分も入ってるよー」

　全エレメリアンを統すべる偉大な首領へ、憚はばからずに〝友〟チョコと告げる胆力を持つ者。

　幼い姫のような煌きらびやかさをまとった戦士、アポロギルディがやって来ていたのだ。

　彼女は首領への贈り物だと、カラフルな包みに覆おおわれた箱を空中に浮かべた。

「フッ……大義であった。余も返礼を授けるに吝やぶさかではない」

　首領は労ねぎらいの言葉をかけながら、聖布ヴエールの奥で腕を突き出した。

　するとアポロギルディの眼前に、ぐねぐねと動く茶褐色の物体が出現する。

「何これ……」

　粘土……いや、顕微鏡で見る単細胞生物のように、不気味に蠢しゅん動どうしている。

　首領はそれが何かを明かさず、アポロギルディへと質問を返した。

「アポロギルディよ、お前が今一番興味を持っているものは何だ？」

「え？　うーん、ち○ちんかなー」

　好奇心も子供のそれであるアポロギルディは、その単語を口くち癖ぐせのようにしている。

「ならば喜ぶがよい。そのチョコは、与えられた者が望む物の形をとるのだからな」

「あ、絶対いらない」

　無邪気な拒否を突きつけられても、首領は動じない。

　茶褐色の塊かたまりが凝固し、形を整えていく。あわやモザイク必至かと思われた、その時。

「あっ……！」

　アポロギルディが見たのは──茶褐色のテイルレッドだった。

　チョコは、アポロギルディの好敵手へと姿を変えたのだ。

　マネキンじみた無機質な笑顔で固まったチョコを見て、首領が笑いを漏もらす。

「──ほう、ちん○んではないようだな？」

　その空々しい言葉を聞き、アポロギルディはようやく悟った──

「……みたいだねぇ」

　首領が、自分を試していたことに。

「首領様も人が悪いや。そのチョコがもし、ちんち○に変わっていたら……僕をどうするつもりだったんだい？」

「異なことを。チョコは○んちんにならなかった……それが全てだ」

「……ふん」

　不機嫌を隠さず、鼻を鳴らすアポロギルディ。直後、チョコテイルレッドは彼女の放った炎に包まれ、原子レベルで湯煎されてしまった。

「ところで……ツインテイルズを示すタロットが、全て正位置を向いたようだ」

　ややもすれば無礼なアポロギルディの行動を咎とがめることなく、首領は話題を変えた。その言葉は、明らかにテイルホワイトの覚かく醒せいを指している。

「自札にするつもりだったカードで相手の役を強くしてあげてちゃあ、世話がないよね。エンジェルギルディも」

　つまらなそうに吐はき捨てるアポロギルディ。

　しかし、続く首領の言葉は彼女の目の色を変えるものだった。

「相手が強力な役を揃そろえた以上、プレイヤーのすべきことは二つだけだ。さらに強力な役を作り上げるか……」

　首領はそこで微笑を挟み、厳おごそかな口調で続ける。

「───切り札ジョーカーを繰り出すか、だ。よいな？」

　首領が予かねてよりタロットを用いて部下たちに忠告し続けた、ツインテイルズ最後の成長。

　それが成しえた今──首領は、組織の長おさとしての最終命令を下したのだ。

「……その命令、しかと了解したよ。首領様」

　今度こそ言外の意味を理解し、アポロギルディは不敵に微ほほ笑えむ。

「それであの問題児のゼウスギルディが動くのも許したワケね……忙しくなりそうだよ」

　踵きびすを返したアポロギルディを呼び止めるように、首領は穏やかに声をかけた。

「期待しておるぞ、アポロギルディよ。頻しきりにこの場を訪れ、余に面白き話を語り聞かせてくれることをな」

「え？　しょっちゅう来るのはやだよ、ここ何もなくてつまんないもん」

　静寂が、神秘の空間を包む。

「………………そうか」

「うん」

「そうか……」

「うん」

　全知全能の首領も、この時ばかりは声こわ音ねに寂寞が滲にじんだのだった。

◇

慧え理り那なたちが二日連続でお泊まりをして、迎えた休日の朝。

珍しいことに理事長たっての希望で、俺たちは地下基地のコンソールルームに呼び出された。

俺に愛あい香か、トゥアール、慧理那。そして早朝の仕事を終わらせ、アイドル衣装のまま駆けつけたイースナと、メガ・ネ。さらに桜さくら川がわ先生と母さん、理事長と、滅多にない大人数だ。

「何で、私は、まだ、処……」

「もういいわトゥアール、さすがに休もうよ……二徹はいくらあたしでもきついって……」

俺の席の隣では、目の下にくまを作った愛香とトゥアールの二人が、二人仲良く肩を寄せてぐったりとしている。

今こうして停戦できるのなら、夜も仲良く安眠すればいいと思うのだが……。

「そう、そのとおりですわ、トゥアールさん！　そのことで、集まっていただいたのです!!」

理事長はツインテールを演舞のように軽やかに舞わせて立ち上がる。

「聞けば、昨夜ゆうべもその前の晩も、あたかも部活動のように皆で健すこやかに仲良く眠っただけというではありませんか！　慧理那、新婚初夜に花嫁が何と不ふ甲が斐いない!!」

「ふぇぇ……」

慧理那は理事長のよくわからない叱しっ責せきを受け、身を縮めている。

ツインテール部の活動の一環なのだから、あたかもではなくて部活動なのだが……。

「ふうむ、よくわからんが、慧理那が不甲斐ないと言われて黙ってはおれぬな」

　ここで親友の窮地に立ち上がったのは、イースナだ。

「よし！　わらわも総そう二じと結婚し、慧理那を助けようではないか！　年齢ガン無視じゃ!!」

　心意気は素晴らしいのだが、イースナのセリフの前後に繫つながりが見み出いだせない……。

「──ほう！　あなたも結婚すると……!!」

　しかし理事長はそれを聞き、嬉うれしそうに扇子を拡ひろげる。

「ホンマかイースナちゃん！」

　晴れ姿を収めようとしてか、メガ・ネはお腹なかの収納箱からカメラを取り出した。

「慧理那の母殿は知らぬやもしれぬが、今回の敵は結婚の属性の奴やつだけではない。もう一体、ハーレムの属性を持った手て強ごわい奴がおるのじゃ。メイドが強力な結婚属性ブライドを秘めているのなら、そちらは任せる。わらわたちは、ハーレムの方を負担しようというわけじゃ」

「えっ……」

　イースナに話を振られ、戸惑う桜さくら川がわ先生。そりゃあそうか……。

「フッ……貧乳にトゥアールよ、お前たちはどうする。結婚もせずにそこで尻しつ尾ぽを巻いて見ておるか？　ん？」

　しれっと言ってるけどすげえ挑発の仕方してるな、イースナ……。

「イースナちゃん、やるぅー♪」

　そんなイースナに、母さんは口笛を吹いて賞賛する。

「残念でしたぁー！　数日前の私を思い出してみなさい、『おかえりなさい、あなた』とかやって完全に新婚さんだったでしょうが！　私はすでに、総そう二じ様と結婚しています!!」

「映画か何かの伏線のように言うでないわ！　でも確かにやっとったな!!」

　イースナとトゥアールの視線は、残る（？）愛あい香かへと向けられる。

　愛香は狼ろう狽ばいしながら二人へ交互に視線を返し、しばらく俯うつむいていたが……

「そ、そーじ！」

　やがて、おもむろに立ち上がる。

「あたしと――結婚してくださいっ！」

　そして、手の平に載せたツインテールの房を差し出しながら、俺にそう言い放った。

「あ、はい……お受けします」

　俺は愛香の差し出したツインテールを受け取り、しっかりと頷うなずく。

　……って、しまった……！　ツインテールが結婚しようと言ってきたように見えて、本能的に即断してしまった！　まさか愛香まで作戦に参加してくるとは……!!

「～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ!!」

　愛香は天井にツインテールがつきかねないほど高く飛び上がり、着地ざまに床をゴロゴロと転がった。

　壁が、モニターの端末が……愛香のローリングタックルで、ひび割れていく。

「……えへへ……プロポーズの練習しててよかった……」

　やがて弛緩しきった表情で立ち上がり、同じく緩んだ声を漏もらす愛香。

「何がえへへですか愛香さん!?　これからアホみたいに強い連中とやり合おうっていう時に、鉄砲玉のあなたがえへへでどうするんで

す!?」

「え……？　いいじゃない、戦いなんて……世界はこんなにも平和なんだからえへへ……」

　トゥアールに肩を揺さぶられながらも、愛香は声でお花畑を表現する。

「これは素晴らしい……いよいよ負けてはいられませんわね、慧え理り那な、尊みこと!!」

「は、はい、お母様！」

　理事長に発奮を促うながされる慧理那たち。

　確かに、武道の極意は脱力にあるが……今の愛あい香かは、人生最高に緩みきっている。もしかすると身体からだ全体で、揺らめくツインテールを体現しているというのだろうか。

「しかし奥様、こんな人数で結婚は、さすがに……」

　さすがに桜さくら川がわ先生は、ノリで進んでいく結婚の連鎖を危き惧ぐしているようだ。

「むう～、さっきからノリが悪いではないか、メイド。わらわたちみんな、今回はお前を頼りにしておるのじゃぞ？　結婚といえば、お前なのじゃからな」

　皆の視線が、桜川先生に集まる。

「色々教えてくれぬか。いざ総そう二じと結婚したはいいが、こっから何をしていけばいいか、全くわからぬ。結婚に邁まい進しんしてきたお前ならば、具体的なビジョンが見えておるじゃろうからな」

「ええ……ええ！　そうですわね、イースナさん!!」

　桜川先生を頼るイースナに、慧え理り那なは心底嬉うれしそうに賛同する。

　こういう時、いつもなら妙に自信たっぷりに「よくわからんが任せろ」と胸を張る桜川先生が……今日は、違った。

「あ、その……」

　桜川先生は立ち上がり、そして後あと退ずさり……

「すみません……すみません！　私では、お役に立てないのです っ!!」

　ついには踵きびすを返し、矢も楯もたまらず走り出す。コンソールルームの出口から飛び出し、そのまま走って行ってしまった。

「ああ……尊みこと……！　尊――――――――っ!!」

　慧理那は驚くほど取り乱した声を上げながら、慌あわてて後を追いかけた。

　ふにゃふにゃになっていた愛香もはっと我われに返り、走り去った二人を見送る。

「うう～……まずった。慧理那とメイドを励ますつもりが……加減を間違ったようじゃ。総二はここで待っていてくれ、ちょっと女同士、込み入った話になるやもしれぬ」

　イースナは決然とした意志の光を神眼鏡ゴツドめがねのレンズにくゆらせ、俺にそう言い残し走り出す。

「ああ……頼むぞ、イースナ」

　イースナに続き、愛香とトゥアールも慧理那たちの後を追う。

　託された以上、俺は信じて待つだけだ。

　どうやらここ数日、俺が慧理那に覚えた違和感は、気のせいじゃなかったようだ。

　そしてイースナはそれが何なのか、はっきりとわかっているみたいだったな……。

　コンソールルームに残ったのは母さん、理事長とメガ・ネ……そして俺。何とも珍しい、保護者組との取り合わせだ。

「大人になったわね……本当は総ちゃんだって、追いかけて行きたかったんでしょ？」

　母さんに言い当てられ、俺は苦笑する。

「それにしても慧理那、どうしてあんなに取り乱して……」

　桜さくら川がわ先生がここのところ悩んでいたのは、わかる。アナザーブルーの初陣で失敗したりもしたし、色々なものが積み重なっての、今回のことなのだろう。

　だがそんな時誰だれよりも先に桜川先生を慰なぐさめるであろう慧え理り那なが、一緒になってパニックを起こしていたのが、気がかりだ。母さんの言う通り、俺も慧理那たちを追いかけ、力になってやりたかったが……。

「仕方のないことなのですわ。慧理那は……誰よりも、尊みことの幸せを望んでいるのですから。尊が我われを失ったことで、慧理那も我わがことのように動揺してしまったのでしょうね……」

　そんな俺の無言の疑念が、伝わってしまったのだろうか。

「婿むこ殿。あなたになら、話しても大丈夫でしょう」

　理事長は切なげにツインテールを揺らしながら、重い口を開いた。

「尊は──慧理那の妹なのです」

「……そうですか…………えっ!?」

　俺は一瞬、自分の耳を疑った。あるいは、理事長の言い間違いかと。

　しかし理事長の真剣な眼まな差ざしを見ると……どうやら、そのどちらでもなさそうだった。

「尊さんも、私たちに教えている年齢が本当じゃないってこと？」

　母さんの質問の「も」って言い方が気にかかるが……今はそれどころじゃないか。

理事長は浅く頷うなずくと、真実を語り始めた。

「慧理那は一七歳、尊は二九歳……それは間違いありませんわ。尊は家庭の事情で、学生の頃ころに神しん堂どう家が引き取り……戸籍上、慧理那の妹として神堂家の養子になったのです」

桜川先生が、神堂家の養子。そういうことだったのか……。

「あまり驚いてはいないのですわね、婿殿」

「十分驚いてますよ……ただ、やっと腑ふに落ちた部分もあります」

俺は、主人の慧理那とメイドの桜川先生という関係に、いい意味で違和感を覚えることがよくあった。

だから今、衝撃の告白を聞いても、「やっぱり」という気持ちの方が大きいくらいだ。

「慧理那と桜川先生って、フレンドリーな主従っていうよりも、何か……本当の家族みたいだなって、ずっと思ってましたから」

理事長は、柔和な微ほほ笑えみを俺に向ける。

「よく、見ていてくださっているのですわね」

むしろ慧理那と桜川先生が姉妹、それも慧理那が姉だと知ってから今までの二人の言動を思い出せば、そのどれもがすっと納得できる。

慧理那がお姉ちゃん気質なのは、自分が子供っぽいことを自覚しているがゆえの反動だと思っていた。

けれど彼女は正真正銘、「お姉ちゃん」だったんだな……。

「長くなりますので、仔細はいつかゆっくりとお話しいたしますが……尊みことを養子とした後も、全てが順風満帆とはいきませんでした。あの子も多くを考え、悩んだことでしょう」

憂うれいを湛たたえた瞳ひとみで虚空を振り仰ぐ理事長。

「神しん堂どうの姓に変えることを辞退したのも、両親への思いと

は別に……七つしか年の離れていないわたくしを母と呼ぶことに、抵抗があったのかもしれませんしね」

　理事長と桜さくら川がわ先生は、姉妹であっても全然おかしくない年齢差だ。養子とした桜川先生とどう接するか……理事長も悩んだであろうことは、想像に難かたくない。

「せやな。ウチはほんまのおかんやないけど、年齢以上に人間とロボットっていう違いがあるから……イースナちゃんにも色々気を遣わせてもうたし……」

　それまで押し黙っていたメガ・ネが、共感したように言った。

「ええ、けれどあなた方は、その壁を超えて絆きずなを深めた、すごい人たちなのだと……慧え理り那なが嬉うれしそうに語っておりましたわ、メガ・ネさん」

「慧理那はんが、ウチらのことを……」

　理事長の口ぶりから、普段慧理那が親友のイースナのことをどんなふうに語って聞かせているのか、それがありありと浮かぶようで……微ほほ笑えましい。

「そうして神堂家で過ごして程なく、あの子は自分からメイドになることを望んだのです。その意志はとても固く、わたくしがどれだけ説得しても変わりませんでしたわ」

　理事長やメガ・ネ……親世代の悩みを聞いたが、それは子の桜川先生も同じなのだろう。

　世界的な富豪である神堂家の次女に、突然なってしまったのだ。俺なんかでは計り知れない苦労と苦悩があったはずだ。

「神堂家のしがらみを嫌ったのかとも思いましたが……メイドを始めてからの方が、尊は嬉しそうでした。それで悟ったのですわ。あの子には確固たる目標や、夢が必要なのだと」

　そういえば慧理那も、目標ややりたいことがないことを、悩んでいた時があった。

　大きな家に育った子供は、平凡な家庭のそれとはまた別の悩みを持つのだろう。

「わたくしはあの子の望みを尊重し、そしてより多くの世界を見て欲しいと思うようになりました。もっとも、本人の望みで慧理那付のメイドへと変わったことで多忙を極め、それも上う手まくはいかなかったのですが……」

　それでか。学園で慧理那や理事長を警護するのに、わざわざ教師も務める必要はないと思っていたが……理事長は桜川先生に、多くのことを経験して欲しかったんだな。

　それが、理事長の「母親」としての愛情だったんだ。

「てことは……尊さんがあんなに結婚にこだわるのも、神堂家に関係アリ？」

　核心を突く母さん。理事長は、項うな垂だれるかのように大きく頷うなずいた。

「尊みことが結婚にこだわるのは……あの子が見つけた目標が……夢が、結婚だったからですわ」

「でもそれって、別におかしいことじゃ……」

　俺は途中で言ってよいか迷い、言い淀よどんでしまう。けれど男女、時代関わりなく、結婚が人生の大きな目標の一つであるということは、普遍のものであると思うのだが……。

「婿むこ殿、覚えていますわよね？　神しん堂どう家の掟……一八歳で結婚しなければならないということを。その掟を……寿退社する先輩メイドが、尊にうっかり話してしまったようなんですの」

　もちろん、はっきりと覚えている。その掟を巡って俺と理事長が言い合ったことが、慧え理り那なとの距離を大きく縮めるきっかけとなったのだから。

　初めは大事に捉えていたその掟も、理事長は慧理那の素行を正すのが目的で発破をかけていただけで、さして乗り気ではなかったようだが……。

「慧理那が一八歳になる年……それが、尊が三十歳になる年なのです。だから尊は、三十歳までに結婚し、自分がその掟を終わらせると……わたくしに宣言いたしました」

「□□□□□□!!」

　俺は思わず息を呑のんだ。

　呪のろい。桜さくら川がわ先生は結婚を冗談めかしてそう言ったこともあったが、自分が因習という名の鎖を絶ち斬きろうと胸に秘めていたのなら……まさしく結婚とは、呪じゅ縛ばくであったのだろう。

「わたくしは元々、婚こん姻いんの掟は自分の代で終わったものと思っていましたので、迷ったのですが……あの子が自分で決断したこと。何より、神堂家の掟を自分の力で終わらせたその時こそ、あの子が真に自分が神堂の子供だと胸を張れると思い、それを了承いたしました」

　桜川先生が、慧理那の望まない縁談話を食い止めていると聞いた時は、大胆なことをするものだと驚かされたものだが……忠誠心だけではなく、使命感がそこに加わっていたのだと知れば、それも納得できる。

「婿殿と出会って、尊は本当に変わりました。神堂家で過ごした十数年はあまりに変化に乏しく……逆にこの一年余り、あの子はこれまで人生で体験したことのない全てを体験できているのです。婿殿に婚姻届を渡す尊は、本当に楽しそうで……今のこの日々があるのならば、あの子が結婚に囚われ続けた十年も報むくわれます」

　それは、俺も思っていた。出会った頃ころの桜川先生は機械的というか、ともかく数をこなそうと婚姻届を配っていたが……いつしか工夫を凝らし、気持ちが込もるようになっていたと。

「あの子は今、この瞬間、学生時代を──青春を過ごしているのですわ」

　桜川先生は、本当に純粋だ。仲間外れを嫌い、慧理那の警護を抜きにしても俺たちと同じことをしようと望んでいた。

　それは理事長の言うとおり……今が、桜川先生にとっての青春だからなのだろう。

「他に楽しいことを見つけたのなら、ずっとこだわっていた結婚でも、一時隅に追いやって構わないのに。尊さんは生き真ま面じ目めすぎるのね……」

「ええ、未み春はる様の仰おつしやるとおりですわ。だから、今の尊みことの悩みは、むしろ喜ぶべきことなのです。幸せすぎて怖い……そういうことなのでしょうから」

　理事長は俺の手を握り、慈愛に溢あふれた微ほほ笑えみを見せた。

「あらためまして──ありがとうございますわ、婿むこ殿。わたくしの、二人の愛まな娘むすめに……幸せをくださって」

　理事長の手を、そしてツインテールを通して、溢れんばかりの愛情が伝わってくる。

「俺こそ……そんな大切なことを教えてくれて、ありがとうございます！」

　厳格なツインテールの掟に縛られた家……慧え理り那なはかつて、神しん堂どう家をそう評していた。

　しかし厳しさで縛られる以上に、慧理那たち家族はツインテールという名の愛情で優しく結ばれている。それを、あらためて実感した。

◇

「──尊」

　慧理那が転送ロッカーを開けると、やはりツインテール部部室には尊の姿があった。

　基地の転送ゲートで尊が自由に行き来できるのは、部室のロッカーだけだ。ここにやって来ているのは自明の理といえるが──たとえそんな推理をしなくても、慧理那は彼女の居場所を必ず探し出していただろう。

「お嬢様……」

　尊は長机にも座らず、部屋の端はしで立ち尽くしている。

いつも凛りんとした佇たたずまいで周囲の羨せん望ぼうを集める大人の女性・桜さくら川がわ尊が、今は捨てられた子猫のように弱々しく、か細く震ふるえていた。

「尊……ごめんなさい。わたくしの独り善がりな行動で、あなたを傷つけてしまいました」

慧理那は尊へとそっと歩み寄ると、心苦しそうに謝った。

「いいえ、お嬢様は何も悪くありません。全ては、この尊の矮小さが招いたこと」

部室の転送ロッカーからは、さらにイースナが、そして愛あい香か、トゥアールがやって来た。

「みんな、すまない。役に立たないどころか、迷惑までかけてしまって……。結婚の属性の敵なのだ、さんざん結婚結婚騒いできた私が中心になって当然なのに……」

すっかり自虐的になった尊を見て、イースナは深く嘆息した。

「……まだわからぬか、メイド。慧理那は、作戦のためではない。お前のためを思って、総そう二じと結婚すると言いだしたのじゃぞ」

「えっ……!?」

イースナの指摘に、複数の驚き声が重なる。

「やっぱ気づいとらんかったのか……ってか、貧乳とトゥアールまで何な故ぜ驚いておる」

「いや、あたしも様子がおかしいな、とは思ってたんだけど……詳しくはわからなくて」

「私は全てお見通しでしたよ、もちろん」

トゥアールは強がっているが、愛あい香かと同じようなものだった。

尊みことに縋すがるような視線を向けられ、慧え理り那なは観念したように口を開いた。

「……きっかけは、尊が観み束つか君に『義理チョコ』を渡す、と言ったことでした」

　そして、自分の行動の意味を語り始める。

「普段、あんなにも観束君と結婚したいと言っている尊が……何な故ぜ、義理チョコなのだろうと。自分の心に嘘うそをついて遠えん慮りよをしているのではないかと、いてもたってもいられなくなり……観束君ともっと親密になるよう、下手っぴなお節介を焼いていたのです……」

　謙けん遜そんではなく、慧理那の助力は拙つたなかった。しかし━━真心のこもった後押しだった。

「桜さくら川がわ先生……あんなに結婚したいって言ってきたのに……どうして」

　慧理那の真意を知った以上、愛香もそう尋ねずにはいられなかった。

「自分がわからないんだ。すごく、嬉うれしいはずなんだ……。作戦の一環とはいえ、結婚ができるんだ。喜ぶべきことなのに……不安なんだ」

　尊は震ふるえる手を見つめながら、そう吐と露ろする。

「これが、マリッジブルーというやつなのか……」

　幸せを目の前にして不安になる。結局幸せになれなかったらどうしようと不安になる。

　敵の習性として話題に出たマリッジブルーに……尊は本当に陥おちいっていたのだ。

「お嬢様……私の身の上を、イースナたちに話してもよろしいですか」

「ええ。是非、尊の口から」

　主人の了解を取り付け、尊は自分の身の上を語り始めた。

　奇くしくも、慧え夢むが総そう二じに神しん堂どう家の秘密を

語っているのと、全く同じ時に。

　愛香たちはたいそう驚いたが……やはり、総二と同じように納得もしていた。

「私の結婚願望の出発点は、神堂家への恩義だ。最初はとにかく結婚できればいいと……幸せな家庭を望むのだから、誰だれでもいいわけではなかったが……無心で婚こん姻いん届とどけを配っていた」

「結婚はゴールじゃない、スタートじゃないですか」

　弱々しく反論する愛香。

「それもわかっている。わかっていた、はずだった……」

　尊は深く頷うなずき、自じ嘲ちょうした。

「あの雷のエレメリアン……ゼウスギルディといったか。あいつの言うとおりだ。私は……結婚したかった。使命感で結婚を急いでいたはずなのに、いつしか本気になっていた……」

「メイド……最近婚姻届を配る頻ひん度どがめっきり減っておったじゃろう」

　いつもツインテール部に顔を出しているわけではないイースナでさえ気づいたのだ。常に尊の傍そばにいる慧理那ならば、さらに容易にわかったことだろう。

「その通りだ。もっと言うならば……私は最近、観み束つか以外に婚こん姻いん届とどけを配っていない」

「メイド、お前は──」

　イースナは尊みことに見つめられ、その言葉の先を止めた。

　誰だれかに言われるのなら──そう決意したかのように尊は頷うなずき、イースナたちへと微ほほ笑えむ。

「──私は、観束が好きなんだと思う」

　それは穏やかで、優しくて……温かな告白だった。

　愛あい香かたちは呼い吸きをも忘れ、部室内が静まり返る。

「こんなおばさんが、何を乙おと女めのようなことを、と笑うだろうが……」

　静寂の意味を勘違いしたのか、尊は恥ずかしそうに頭を掻かいた。

「わ……笑いませんよ！　あたしだって……あたしたちだって、そーじが大好きですから!!」

　愛香は顔を真まっ赤かにしながら告白する。

　トゥアールも慧え理り那なもイースナもつられて赤面し、所在なさそうにしている。

「ああ、わかっている。お前たちがどれだけ観束のことを好きなのか、よくわかっている……だから私が、好きになることは許されないんだ」

「ど……」

「どうしてですかっ！　人を好きになることに、誰かの許しなど必要ありませんっ!!」

　愛香の言葉を食うようにして、トゥアールが身を乗り出す。そして彼女にしては珍しく熱気の籠こもった口調で、長机を両手で勢いよく叩たたいた。

「トゥアール……」

　尊はトゥアールの剣幕に驚き、目を何度も瞬またたかせた。

「……い、いえ、その……尊さんなんてサブヒロインが総そう二じ様にコナをかけようと、メインヒロインである私はノーダメですから、お好きにどうぞ、という余裕で……」

　尻しりすぼみな言葉とともに、すごすごと着席するトゥアール。

「お嬢様はお優しいから、私などに一緒に観束と結婚しようと言ってくださる。私もそれはなんと素晴らしいことだと思っていた……けれどそこに自分の本心が介在してしまうことから、ずっと目を逸らしていた。……観束を好きだという気持ちを。それは、お嬢様への──」

　しかし今度は、先ほどのトゥアール以上の剣幕で捲まくし立てる者がいた。

「たわけ！　なぁーにをいい子ぶっておるのじゃ、貴様!!」

　イースナが、その小さな肩を怒らせて尊へと歩み寄っていく。

「テイルブレスを受け取ったであろう、ええ!?　メイドよ、今やお前も正式なツインテイルズの一員じゃ！　ではツインテイルズとは何じゃ!?　全異世界最強のツインテール変態の総二を筆頭に、錚そう々そうたる変態が集まったチームじゃろう！　いい子などいらぬわ!!」

　ブレスのある尊みことの右腕を掴つかみ、自覚させるように何度も振る。

「慧え理り那なもじゃ！　二、三度お節介を焼いて、この真ま面じメイドに効果がないことはわかったであろう！　だったらその先は、強引に引っ張ってやらぬか！　わらわにそうしたように!!」

　イースナに叱咤され、しっかりと頷うなずく慧理那。

　それでも煮え切らない尊へ、イースナは意を決したように告白した。

「────わらわも孤児じゃ。それも、両親の顔さえ知らぬ」

　愛あい香かと慧理那、尊がはっと息を呑のむ。トゥアールだけが、小さく嘆息した。

　一度見初めた相手に、どこまでもついていくイースナ。彼女の習性の原点は──。

「自分で親おかんを勝手に作った手前、偉そうなことは言えんが……親はいつも口うるさく言うてくるぞ。子の幸せが、親の幸せだとな！」

　転送ロッカーを一いち瞥べつするイースナ。その先の基地にいる、おかんを思い出すかのように。

「メイドよ、お前が自分の心を殺して神しん堂どう家に尽くして……それで慧理那の母殿が、慧理那が喜ぶのかっ！　恩義を返すというなら、むっちゃ熱い恋愛結婚してみせればよかろうっ!!」

　そこまで言い切る頃ころ、イースナの息は荒くなっていた。

「むう、熱くなりすぎた。でもまあ、そういうことじゃ……」

　今まで誰だれにも語らなかった過去を打ち明けてまで、尊を励まそうとしたイースナ。

　苦い過去まで思い出してしまったのか、その肩はか細く震ふるえていた。

「……イースナ、ちょっと……こっち来なさい。ぎゅってしてあげますから……」

　イースナの震えを見て取ったのだろう。トゥアールは座ったまま椅い子すを下げると、自分の胸元へと導くように両腕を拡ひろげた。

「え？　別によいわ。何じゃ急に」

　恥ずかしそうに身をよじり、そっぽを向くイースナ。

「なっ……！　せっかくわざわざいい子いい子してあげようと思ったのに……いつもは喜ぶくせに天あま邪の鬼じゃくな子ですねえ！　この行き場を失った母性をどうすればいいんですか!!」

　抱き締めようと両腕を拡げたまま、視線を彷徨さまよわせるトゥアール。

「ちょっと、こっち見ないでよ！」

　トゥアールの視線と交こう錯さくしてしまった愛香は、身を掻かき抱いだいて一歩飛び退のいた。

「そ、それなんだ……！」

　尊から唐突に手を握られ、ぎょっとするイースナ。

「私も母性なのか、何なのか……いつも、観み束つかを抱き締めたいとか、そんなことばかり考えている。そして何か理由をつけていざ抱き締めると、ずっとそのままでいたいと思ってしまうんだ。……おかしいだろう!?」

　尊は一世一代の告白という雰囲気だが、愛香たちは溜ため息いきをつくほかなかった。

「いや、普通でしょう。好きになった男の子と触れ合いたいなんて……。要するに桜さくら川がわ先生、ピュアなんですよ」

　愛あい香かに優しく指摘され、尊みことは照れがましく苦笑した。

「そうだな。だから結婚属性ブライドのことも、全然わからないんだろうな……」

「多愛属性ハーレムも結婚属性ブライドも、一般的な性癖じゃぞ。エロゲでいったら、アホみたいな大勢を相手にするのが好きか、新妻一人と徹底的にイチャラブするのが好きかってなところじゃろ。チョー簡単なカテゴリ分けじゃ！」

「全然チョー簡単じゃないぞ、ますますわからん……」

「エロゲもやらずに大人になるから、生き真ま面じ目めに凝り固まってしまうのじゃ！　今からでも遅くない、エロゲをやらぬかエロゲを!!」

　胸を張るイースナを見て、その場の全員が笑顔になる。

「……わかった。やってみよう。今度、お前のお勧めのエロゲを貸してくれ」

「うむ！」

　小さな恩人に、尊は深々と頭を下げる。

「……イースナ、すまない。言わなくてもいいことを言わせてしまったな」

「いつも慧え理り那なに世話になっている礼じゃ。……ま、悪いと思うのなら……先ほどの続きじゃ、手本を見せてもらおうかの……のう、慧理那？」

　イースナは慧理那へと視線を送ると、悪戯いたずらっぽく笑うのだった。

◇

　近づいてくるツインテールの気配に、コンソールルームの出口へ視線を向ける。

　慧理那にイースナ、愛香、トゥアール。

　そして……すっかり憂うれいが晴れた、といった感じではないが……桜さくら川がわ先生の姿も。

「……すまなかった、観み束つか。とりあえず私は……もう大丈夫だ」

　無理をして言っているようには見えない。約束通り、イースナが橋渡しをしてくれたんだ。

「それで、だな……観束……後でもう一度、お前にチョコを渡してもいいか。これ以上いらんだろうが……」

「そんな、もちろん嬉うれしいですけど……でも、どうして？」

　俺の問いかけに、言いづらそうに顔を伏せる桜川先生。

「本当は尊……バレンタインのチョコレートを、ツインテールの形で作っていましたのよ」

　そんな彼女をフォローするように、穏やかな声こわ音ねで慧理那が答えた。

「けれどわたくしたちが、同じようにツインテール型のチョコを作っているのを見て……こっそりやめてしまったのですわ。そして

みんなで分けて食べられるぐらい、大きなチョコケーキを作ったのです」

　ということは、あらためてツインテールのチョコを渡すということだろうか。

「色々考えて、色々教えてもらって……私はもっと純粋に、結婚と向き合うことにした」

　桜さくら川がわ先生は最後にもう一度だけ、後ろに立つ慧え理り那な、そしてイースナたちに視線を向けると、不安げな足取りで俺の元へと歩み寄ってきた。

「耳かきをしていいか……？　観み束つか」

　メイド服のエプロンのポケットから、耳かき棒を取り出す桜川先生。

「私の思う、奥さんになって旦だん那なさんにしてあげたいことって……とりあえずそれなんだ。イースナたちに結婚生活のお手本を見せると、約束したんでな……」

　照れくさそうに……しかし、心から嬉うれしそうに微ほほ笑えむ桜川先生。

　少し恥ずかしかったが、俺は素直にその申し出を受けることにした。

　メイド服のスカートは短いので、俺は桜川先生の剥むき出しの太ふと股ももに頭を預けることとなる。

　すべすべで柔らかな感触に戸惑う俺を余よ所そに、丁寧に耳かきをしていく桜川先生。

　愛あい香かたちは三者三様な表情で、俺たちを見守っている。



　やがて耳かきを終え、ふっと優しく耳に息を吹きかける桜川先生。

　そのむず痒い温かさにビクリと身体からだを震ふるわせていると、桜川先生は今度は俺を立ち上がらせ……そっと抱き締めてきた。

「なあ、観束……知らないぞ。お前が思っている以上に、大人の結婚への思いは強いんだ。今受け容いれてしまえば……私はもう、二度と遠えん慮りよせんぞ。これからもっと、婚こん姻いん届とどけを渡すぞ」

「構いません。いくらでも受け取ります。サインをするかは別として」

「……ははは、別とされるんじゃ困るじゃないか！」

　桜さくら川がわ先生にも、笑顔が戻る。

　神しん堂どう家の期待、桜川先生の結婚への憧あこがれ……それらに俺が応こたえられるかはわからない。

　けれど俺は、心からそう思ったんだ。婚こん姻いん届とどけを渡して欲しいと。

「…………ちょっと、もういいでしょう、桜川先生!!」

「ええいうるさい、私のお手本を見ていろ。夫婦はこうして抱き締め合うものなんだ」

　引き剥はがそうとしてくる愛あい香かに抵抗するため、桜川先生はますます俺を抱き締める力を強める。けれどどんなに力を込めても、桜川先生の優しい温ぬくもりは変わらない。

　と、その時。テーブルの上に、とぅあるんが起動した。

「エレメリアン出現──ゼウスギルディとポセイドンギルディ両方です」

　とぅあるんはトゥアールの声でエレメリアン出現情報を伝えるのだが……相手が誰だれであろうと淡々と読み上げるのが、こういう時はかえって空恐ろしい。

「よし、行くぞ、みんな！」

　俺が気合いを入れるまでもなく、全員、ツインテールにやる気をみなぎらせていた。

「尊みことさんは今回、素直に待機していてください。フリじゃありませんからね」

「ああ。観み束つかたちの活躍を見て、勉強をさせてもらうよ」

　桜川先生に頷うなずき返すと、トゥアールは俺たちへ向き直った。

「少々危険ですが、今回は私もついていきます。ゼウスギルディは私に興味を持っていました……それを利用して、隙すきを作れるかもしれません」

　仮面で隠しても、トゥアールの決意に満ちた瞳ひとみが見えるようだった。

「わかった。特にゼウスギルディの攻撃力は桁けた違いだ、十分に離れて用心してくれ」

　俺は仲間たちを見やって頷き合うと、右腕のブレスを構えた。

「「「テイルオン!!」」」

「グラスオン!!」

　四色の光がコンソールルームを包む。

　レッド、ブルー、イエロー、ブラック──四人のツインテイルズの変身が完了する。

　今回はトゥアールが一緒についてくるとはいえ、戦力は求められない。

　重大な戦いに変身を残しておきたいというトゥアールの願いを尊

重するためにも、ここは俺たちが死力を尽くさなければ。

　ハーレムと、結婚。

　対極の関係にある属性を持つ神々との戦いへ、俺たちは身を投じていった。

第六章

束なるツインテール。

　ポセイドンギルディとゼウスギルディが出現したのは、大きな教会──そこでは結婚式の真っ最中だった。

　周囲に群がる戦闘員アルテイロイドたちの黒と対称的な純白のウェディングドレスを着た花嫁が、大勢の招待客とともに右往左往している。

「ッ……許せない……!!」

　花嫁の不安げな顔を見たブルーは、いつも以上に怒りを露あらわにする。

「おっ、早いじゃんツインテイルズ」

　そこでポセイドンギルディが駆けつけた俺たちに気づき、調子よく手を振ってみせた。

「女性にとってこの日がどれだけ大切か、わかっているのですか!?」

「ハーレム好きでありながら結婚式を邪魔するなど、一貫性のない奴やつじゃ!!」

「お嫁はん、幸せの真っ最中やったろうに……!!」

　憤っているのはイエローとブラック、メガ・ネ、そしてトゥアールも同じだ。花嫁とは、多くの女の子にとって永遠の憧あこがれなのだから。

「でも、そこの花婿むこさん、意外とハーレム……まあいいや」

　ポセイドンギルディは招待客たちに視線を送りつつ、意味深な言葉を呟つぶやく。

　やけに女性の招待客の比率が多いような気はするが、新郎新婦で呼ぶ知り合いに偏りがあるのは何もおかしくはないと思うが……。

　もちろん俺も怒りは皆と同じなのだが、もう一つ気になることがあった。

「何でお前だけ、またローブ羽は織おってきてんだよ！」

　ゼウスギルディはすでに正体を晒さらしたまま臨戦態勢だが、ポセイドンギルディの方が神の一剣ゴー・デイア・ソードの正装である白ローブをまとっているのだ。

　母さんが新婚時代に同じ格好だったと暴露された矢先に、同じ格好で現れやがって……!!

　ポセイドンギルディはブーケトスでもするかのように、ローブを空高く放り投げる。

「こうすることで、俺は〝正体〟を晒したわけだよねぇ」

「だからどうした」

　苛いら立だちながら先を促うながすと、ポセイドンギルディは不気味に笑いながら言った。

「テイルレッドもさぁ……ちょっとその鎧よろい脱ぐとこ、見せてくんない？」

　俺はぎょっとして後あと退ずさる。

　何だ、こいつの確信に満ちた目は。さっきわざとらしくローブを投げて見せたのは、俺の隠された正体を疑っているという意思表示なのか!?

『さすがにテイルレッドの正体が男だと気付いたとは思えませんが、何かを疑っているのは確実です。用心してください』

　確かにトゥアールの言うとおりだ。あのナンパ野郎が俺が男だと気付いていたら、あんなに余裕でいられるはずがない。得意げな顔で男をナンパしたってことになるんだからな。

　けれどテイルレッドの何かを疑って、カマをかけてきている可能性は高い。

「ねー、みんなも見たいよねー！」

　ポセイドンギルディはこともあろうに、教会の軒下に固まるように避難する式関係者たちへ同意を求め出した。

だが──

「テイルレッドちゃんが嫌がってんだろ、引っ込めー!!」

「ご祝儀だけ置いて消えなさいよ!!」

人々は声を荒らげ、ポセイドンギルディを糾きゆう弾だんする。

「モケー」

言われるがままに祝儀袋を差し出す戦闘員アルテイロイド。あいつらいつも律儀だよな。

「…………あれえ？　みんな興味ないの？　ってか、何か勘違いされてる？」

人々の批ひ難なんの渦中に晒さらされたポセイドンギルディは、不思議そうに首を傾かしげた。

「ふうむ……崇拝されている戦士に対して、民衆をけしかけようとしても無意味というわけか。テイルレッドもこの世界では女神──我われらと同じ神なのだからな」

黙して成り行きを見守っていたゼウスギルディも、この展開には苦笑を禁じ得ないようだ。

「いや、でも俺イケメンじゃん!?　イケメンが言うことって基本、真実じゃん!?」

神ならぬ身では理解適かなわぬポリシーを口走り、ポセイドンギルディはなおも人々にコールを続ける。そして響きわたるレスポンスは、「帰れ」だ。

「民衆の怒りはわらわたちにとって追い風じゃな。レッド、ちょいツインテールを貸せ」

「わかった、ツインテールだな」

素直にツインテールを差し出した俺に、ブラックが耳打ちしてくる。内容は……気が進まないが、仕方ない。

俺はポセイドンギルディに向き直ると、ブラックに言われたとお

りにしてみた。

「なあテイルレッド～、ちょっと興味あるだけだからさ、見せてよ！」

　ポセイドンギルディのその催さい促そくに合わせるように、俺は心細げに身体からだを抱き締め──

「き、着替えるところ見たいなんて……エッチ……」

　精一杯のか弱い眼まな差ざしで、そう訴えた。

「「────うわ、クッソ可か愛わいい……」」

　ポセイドンギルディと、何な故ぜかゼウスギルディまでハモり、目を血走らせる。

「キモいぞ怪人──────────ッ!!」

「そうだそうだ、何がイケメンだ、このキモい犯罪者が!!」

　俺たちの気持ちを代弁するように、人々がシュプレヒコールを叩たたきつける。

　ポセイドンギルディはたまらず後あと退ずさりをし、

「ち、違う！　俺はキモくない……俺は───────────ッ!!」

　教会の裏にある山の方へと走っていった。

　肩を竦すくめながら、ゼウスギルディがその後を追う。

「ねえ、レッド」

「言うな」

「今までは、半分からかってただけなんだけどさ」

「言うな」

「あんたの女の子仕草、マジでヤバいくらい完かん璧ぺきになってきてんだけど」

「言わないでくれ――――――――――――――――――ッ!!」

　ツインテールを儚はかなくたなびかせ、俺は走り出した。さっきのナンパ男と重なるが、そうするしか他になかった。

　結婚式中の人々の声援が、背中に聞こえてくる。晴れの日を邪魔された悲しみを感じさせない、温かい声だ。

　奴やつらは崇拝されているなんて言ってやがったが、それは違うぜ。この世界の人たちは……強い心を持っているんだ。

　裏山をさらに抜け、かなりの距離を走り――開けた場所に出たら、そこは草木もまばらな荒れ地だった。

　追いついてきたブルーたちが、同じように周囲を見回して、ポセイドンギルディたちの真意を悟る。もちろん、罵ば声せいに耐えかねたのもあるのだろうが――

「思いっきり暴れられる場所に移動したってわけか」

「驕おごるな、幼女。この世界のどこにも、ワシが思い切り暴れて無事で済む場所などない。それは先の戦いで十分知ったはずだが？」

　俺の推測を、ゼウスギルディは胸をそびやかして嘲ちよう笑しようする。

　確かに……向こう数キロメートルは荒れ地が続いているが、それでもこいつの馬ば鹿かげたパワーの癇かん癪しやくを受け止めるのは、まだ心こころ許もとない。

「ポセイドンギルディよ、どうやら汝なんじの予感は〝外れ〟だったようだな。観念して戦うがよい」

「え～、まだ決まったわけじゃないのに……ゼッちゃんが戦いたいだけっしょ」

「お前は逆に少しは腕を振るったらどうだ！　まったく、ハーレム好きは煮え切らんな!!」

「俺は自分の力がやべーってわかってますからー、そう簡単に振るえないワケ」

　ポセイドンギルディとゼウスギルディは、子供のような口喧げん嘩かを始めてしまった。

　俺はブルー、イエロー、ブラックとメガ・ネとトゥアールへ「どうする」とツインテールコンタクトを送る。

　やばいな、あいつら強いくせにマイペースすぎて、こっちが緊張感を維持できないぞ。

「今のうちにやっつけてしまってください、皆さん！」

　トゥアールが煽あおるように言うと、ゼウスギルディが煩わずらわしげにこちらを見やる。

「また来ておったのか、中の人とやら……戦えぬ汝なんじがいては、ワシらは少しの力も出せぬ！　その女をどこぞ目の届かぬ場所に放り投げてこい!!」

　ゼウスギルディが右手で空くうを薙なぐと、彼女の背後から戦闘員アルテイロイドが群れを成して現れた。

「「「モケー」」」

　戦闘員アルテイロイドたちはゼウスギルディの指示どおり、トゥアールを狙ねらい走ってくる。

「俺たちの後ろに隠れろ、えと……テイルホワイトの中の人!!」

　絶対に仮面ツインテールの方が呼びやすかった……！

　心の区切りをつけるために大事な卒業だったとはいえ、仮面ツインテールと呼んでた時代が長すぎて、俺たちも慣れてしまっていたからな。

　どの道無む闇やみに変身できないトゥアールは、安全圏へ避難してもらうしかない。

　そう考え、軽く戦闘員アルテイロイドをあしらおうとした俺は……その攻撃の重さに戸惑った。

「これは……首領の吐息ゴッド・ブレスを使っていないのに、強戦闘員メガアルテイロイドになってやがるのか!?」

　強戦闘員メガアルテイロイドには、強化アイテムである首領の吐息ゴッド・ブレスが埋め込まれているはずなのだが……それがないのだ。

「そんなおもちゃに頼らずとも、戦闘員アルテイロイドなどいくらでも強化できる。もっとも、腕を上げたとはいえ雑兵相手に手を焼くようでは、ワシらに辿たどり着こうなどと一〇年早いぞ」

　早々に答えを明かしてくるゼウスギルディ。あいつらぐらいになれば、戦闘員アルテイロイドの強化ぐらいマーメイドギルディの発明に頼らずに自力でできるってわけか。

　俺とブルー、イエローとブラックが組になり、強戦闘員メガアルテイロイドをあしらいつつポセイドンギルディとゼウスギルディへそれぞれ接近していく。

「すごい数や、こら強戦闘員メガアルテイロイドだけでもかなり難儀するで!!」

　メガ・ネが地面にバルカン砲を撃って弾幕を張り、全員で距離を取る。

「フン、ハデスギルディにアポロギルディめ、よほど加減をしたと見える。この程度の力の戦士に苦戦する道理があるまい……ワシが引いん導どうを渡してくれる!!」

　土煙の向こうで、ゼウスギルディの哄こう笑しようが聞こえる。

　俺たちは、一斉に進化装備エヴォルブアームズを手にし──

「ツインテイルブレス!!」

「エターナルパッド!!」

「アブソリュートリング!!」

「インフィニットコンバイン!!」

　アルティメットチェイン、エターナルチェイン、アブソリュートチェイン、インフィニティチェインへと最強変身チエインエヴオルブ。

　煙が晴れるのを待たずに突き破り、四人一斉に飛び出した。

　まず俺はテイルカリバーの一いつ閃せんで強戦闘員メガアルテイロイドの群れを二つに割り、ポセイドンギルディの元へブルーを先行させた。

　エターナルチェインの能力で脚属性レッグの属性玉エレメーラオーブを瞬間発動し、脚力強化した回し蹴げりをポセイドンギルディに放つブルー。

「俺は戦いなんて、そんな好きじゃないんだよ」

　面倒そうに嘆息しながらも、ポセイドンギルディは同じく回し蹴りを放って真っ向から迎え撃ってきた。奴やつの脚が発光している──強化を施ほどこしているのか!?

　脛同士がぶつかり合い、凄すさまじい音が響く。

「くっ……」

　ブルーは構わずに兎耳属性ラビツトの属性玉エレメーラオーブを発動、空高く跳躍するが、ポセイドンギルディも瞬またたく間に同じ高さまで追いすがった。

　空中でブルーの姿がおぼろになる。邪険属性クルールの気配遮断だろう。

　着地したポセイドンギルディの背後に着地したブルーが蹴りを繰り出すが、なんとポセイドンギルディの姿まで虚うつろになってしまった。

　直後に割腹筋属性シツクスパツクの硬化能力で放った拳こぶしが、やはり同じく硬化させたと思おぼしき拳で切って返される。

　ブルーはその後も次々と属性玉エレメーラオーブを発動していくが、ポセイドンギルディは何な故ぜか全く同じ方法でカウンターを

返してくるのだ。

「ハァ、ハァ……まさか、あんたもあたしたちの能力をコピーしてんの!?」

　肩で息をしながら問い質ただすブルー。テイルギアの能力をコピーした、イビルツインテイルズのことを思い出したのだろう。

「違ちげぇーよ。脚力強化？　ジャンプ力強化？　気配の遮断、拳の硬質化、と……ハハッ、そういう特殊能力なんざ、俺は全部素でできるってだけさ。お前らが倒したエレメリアンの属性玉エレメーラオーブで発動する特殊能力に、どんだけ引き出しがあるかは知らねーけど……確実に俺の方が多いぜ？」

　仮にポセイドンギルディの言葉が本当だとすると、ブルーがどんな能力を発動させているか瞬時に見切っているのは、あいつ自身の手練だ。

「俺は口説いた女の数だけ特殊能力を持ってるのさ……多愛属性ハーレムならではだよねぇ。あまりに多すぎて、一〇〇〇から先は忘れちったよ」

　ようやく本性を見せた、もう一人の神。やはりこいつも、一筋縄ではいかなそうだ……!!

「物は言いようじゃな……先に何百何千と適当に能力を修めた後、口説いた女の数だけ能力があるという肩書きを作ってしまえば、さもたくさんのナンパに成功したように相手に錯覚させてしまう！　叙じよ述じゆつトリック乙じゃ!!」

〈叙述トリックとはちょっと違うんやないかなあ〉

　ゼウスギルディと戦い始めたブラックが、会心のドヤ顔でこちらへビシリと指を突きつけてきた。だが、胸パーツのおかんがやんわりとツッコミを入れている。

「────フッ……さてね」

　……めっちゃ汗ダラダラだぞポセイドンギルディ。トリックがバレて自白する寸前の犯人じゃねーか。

「でもま、やっぱ自分で戦うのってめんどくせーわ。まだまだ元気

有り余ってるみたいだし、あとはテイルブルーにお願いするとすっか」

　ポセイドンギルディは手の平から濁った青色の光線を発射、ブルーに直撃させた。

「ッ……!?　身体からだが、動か、な……!!」

　はっと我われに返るも、時すでに遅し。ブルーは金縛りにあったかのように全身を引きつらせ始めた。

「これが俺のとっておきの口説き文句……〝等しき愛を注ぐア・トランテイス〟さ。この前の戦いで、テイルブルーがその逆サバちゃんに戦意を向けてるのがわかったからねぇ。利用させてもらっちった」

　得意げに説明するポセイドンギルディ。一方のゼウスギルディは露骨な舌打ちをした。

「人間のほんの僅わずかの不安や不満を媒介に術理を行使し、動きを乗っ取る──フン、相変わらず悪趣味な技だ。もうテイルブルーは、ポセイドンギルディの操り人形ということよ」

「なんだと!?　……うわっ!!」

　殺気を感じて上体を反らすと、眼前を蒼あおい斬線が抜けていった。

「よけて、レッド……!!」

　震ふるえる腕でランスを掴つかみ、ブルーが苦く悶もんに震えた声を上げる。

「何が、口説き文句、よ……自分に靡なびかない女を勝手に操るなんて、やっぱあんた、最悪のエレメリアンだわ……!!」

「俺には最初、この操作能力しかなかった。気持ち悪い……そう言われ続けて、俺は強くなった。イケメンに変わった……変身したんだよ」

　ブルーの批ひ難なんに、神妙な声こわ音ねで反論するポセイドンギルディ。気持ち悪いと蔑さげすまれることを極端に嫌う背景が、

少し見えた気がするが……もはや、それどころではない。

「ぐっ……ううううう……みんな、逃げて……!!」

　苦悶の表情を浮かべながら、ブルーは俺のみならず、ゼウスギルディと交戦中のイエローやブラックにまで襲おそいかかり始める。

「おっほぉ～、すっげぇ。なーるほど、一般兵がビビり散らかすわけだ」

　ポセイドンギルディが煽あおるように賞賛してくる。

　何てえげつない技だ……意識を保ったまま仲間を襲わせるなんて、洗脳よりもタチが悪い!!

「レッド！　テイルカリバーの無力装填エクスティンクモードを使え！　あれならば、貧乳の呪じゆ縛ばくを断ち斬きれるはずじゃ!!」

　ブラックに言われ、俺ははっと気がついた。

　ヴァルキリアギルディの精神攻撃を裂斬した、起死回生の技。あの時手助けしてくれたブラックだからこそ、真っ先に思い浮かんだというわけか。

「よし、今助けるぞブルー！　テイルカリバー無力装填エクスティンクモードッ!!」

　俺はテイルカリバーの刀身をハサミ状に展開変形させ、ブルー目掛けーいつ閃せんする。

　以前の発動時と同じように、ブルーを蝕むしばむ波動を絶ち斬った──はずだった。

「────う、ぐっ……!!」

　しかし、ブルーはまたすぐに苦しみだし、ランスをこちらへ突き込んでくる。

　俺は変形を解除したテイルカリバーでランスを弾はじき、周囲に激しい火花を舞い散らせた。

「駄目です！　チョコファウンテンと同じ……ブルーへ水のように絶え間なく能力が注ぎ込まれる以上、一瞬繋つながりを断ち切ってもすぐにまた呪縛が繋がってしまいます!!」

　トゥアールが即座に原因を看かん破ぱする。

「そゆこと。お前も意外と器用な技使うみたいだけど、俺の技の練度は完かん璧ぺきだぜ？」

　小憎らしい笑いを浮かべながら、自慢げに語るポセイドンギルディ。

　それじゃあ、ポセイドンギルディを倒さない限りブルーを元に戻すことはできないのか!?

「中の人、ここは一旦基地に撤退せよ！　わらわたちだけならばまだよい、しかしこのままでは、お前もブルーに攻撃されてしまうやもしれん!!」

「わ、わかりました、ブラック……!!」

　ブラックはグレイブでランスと切り結びながら、トゥアールへと叫ぶ。

「くくく、ワシが手ずから追い出す必要もなかったか、中の人とやら。何をするでもなく、尻しつ尾ぽを巻いて逃げるとはな」

　トゥアールへと侮蔑の視線を送るゼウスギルディだったが、その目がくわっと見開かれた。

「ん……？　いや待て、仮面女……さらなる嘘うそを隠しておるな？」

　踵きびすを返そうとしたトゥアールへ、ゼウスギルディが興味深げに声をかけた。

「お前、仲間には一五……いや一六歳と言っておるが実は、はた──」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

　トゥアールらしからぬ烈はげしい雄お叫たけびが、天を引き裂さく。

「何ッ……この恐ろしいまでの殺気は一体!?」

「ヤベーのに触れちったんじゃねーの」

　そのあまりの迫力にゼウスギルディのみならず、ポセイドンギルディまでも瞠どう目もくしていた。

　トゥアールは、何な故ぜあれ程の怒りを……ゼウスギルディは、何を言おうとしたんだ!?

「ふん、仮面で顔を隠しておいて年齢に触れられたくないとは笑止な！　どうれ、ワシが剥はぎ取ってくれるぞ!!」

　トゥアールのマスク目掛け、轟ごう然ぜんと掌てのひらを突き出すゼウスギルディ。

　その腕は、トゥアールの直前で停止した。トゥアールが、力任せにゼウスギルディの手首を掴つかんだのだ。

　トゥアールの右手には、テイルブレスレボリューションが……そして、二の腕の半ばまで、テイルギアが生成され始めていた。

「テイル――オンッッ!!」

　右腕から全身へ白き閃せん光こうが疾はしり抜け、ついには爆裂する。

「何ッ……うおおおおおおおおおおおおっ!!」

　変身の衝撃波で弾はじき飛ばされたゼウスギルディは、地面に五体をしたたかに打ちつける。

　周囲へ舞い散る、純白の羽根のオーラ。

　ツインテールを白き翼と携たずさえし、真なる天使―テイルホワイト・スペリオルチェインが、ここに降臨した。

「だ、大丈夫なのか変身して……!?」

　俺の危き惧ぐを余よ所そに、ホワイトの全身から莫大な属性力エ

レメーラが噴き上がった。

「貴女あなただけは絶対に許しません──その肉体、原子よりも小さく粉々にしてあげましょう」

　なんだ、あの闘気となってほとばしるかのような凄すさまじい怒りは……！

「ヒェッ……秘密ばらされる怒りであんなことになるとか……やっべーのじゃ……わらわ、常日頃ごろからテイルホワイトに殺されるリスクを背負っておったのか……」

　ブラックが何故か震ふるえている。

「人が生きていく上で、僅わずかな嘘うそは必要なもの。それを曝あばいて得意げになっているあなたは、神なんかじゃない！　誠実という名の自己満足を押しつける、ただの俗物です!!」

「フッ……いいや、ワシは神だ。人の些さ末まつな理ことわりで計るなど烏お滸こがましいわ!!」

　数々のエレメリアンを切って捨ててきたその口上も、健在だ。

　俺とイエロー、ブラックは再び相あい見まみえたホワイトの勇姿に歓喜する。

「へぇ～、それがエッちゃんを倒した幻のツインテールかい。見せてもらえて光栄だね!!」

　ポセイドンギルディが手を振ると、ブルーがホワイトへと突進していった。

　ホワイトはブルーの両手首を掴み、膂りょ力りょくのみで押し合いをする。

「……ごめん……ごめん、ね……」

　操られている無念さで、ブルーの声が震える。

「勘違いしないでください、テイルブルー。私は貴女あなたを助けるためにこの姿になったわけではありません。ゼウスギルディが許せないだけです!!」

言葉とは裏腹……トゥアールは、ブルーを止めるためにホワイトに変身したのだろう。

ブルーを止めるのは自分だと。彼女のツインテールが、不退転の決意をほとばしらせているのがわかる。

「ブルーは私が動物園の檻おりに入れてきます！　その間に、皆さんは能力起点のポセイドンギルディを倒してください!!」

「すまない、ホワイト！」

「任せろ、ゼウスギルディもまとめて片付けてくれるのじゃ!!」

ポセイドンギルディはホワイトへ熱い視線を送りながら、ブツブツと独り言をいっている。

「ツインテールになった以外、姿形は変わらない━━やっぱり、俺たちみたいな変身じゃないのか……!?」

俺たちみたいな変身━━ポセイドンギルディが漏もらした言葉を、俺は聞き逃のがさなかった。

こいつが疑っていることが、おおよそ見えてきたぞ。

「シャイニングッ！　アームドッ!!」

ホワイトはフォースリヴォンに触れて右手に手てつ甲こう型の武装を装着し、拳こぶしをブルーへと突きつける。

「あたしを倒して……ホワイト……!!」

「おやおや、正攻法では私に勝てないと悟って、わざと負けようって魂胆ですか？」

「何、を……」

「あなたっていつもそうですよね。普段は好き勝手大暴れするくせに、自分自身のピンチにはてんで弱気。たまには自分で自分のピンチを切りぬけて見せたらどうです!!」

「……な」

身体操作に抗あらがおうとしてか、ずっと震ふるえていたブルー

から、強こわ張ばりが抜けた。

「別にあなたが本気でも軽くひねってあげますから、泣き真ま似ねはやめてとっととかかってきてくれます？」

「───なんですってえ!?　あんただってペルソナギルディに改造された時、めそめそしながらあたしに縋すがり付いてきたじゃん!!」

「そ、そんな目地の粗すぎるサンドペーパーみたいな胸に誰だれが縋り付きますか！」

　互いに向かい合い、地面を踏み鳴らすように歩み寄っていく両者。

　そして間合いに入った瞬間……同時に、拳を振りかぶった。

「だーから未いまだにちゃんとしたちゅーもできないんですよこの雑娘ザコは!!」

「あんただって、生命いのちの危険に晒さらされたから仕方なくしてもらっただけでしょうが!!」

　石と金属とをぶつけ合うような、重厚な音が絶え間なく反響していく。

　拳こぶしと拳をぶつけ合う乱打戦。

　普段、愛あい香かに投げ飛ばされて天井に突き刺さっているトゥアールからは想像もつかない、とてつもない肉弾の応酬だ。

「ガンアームド!!」

　可変武装であるシャイニングアームドが、手持ちサイズの銃砲へと変形する。

　武装の変化に合わせ、ホワイトの銀色のツインテールにはレイヤーのように黄色のメッシュが差し込まれた。

　槍やりの冴さえ凄すさまじく、発射された光の弾丸をことごとく刺し突とつで叩たたき落としていくブルー。砕けた光弾は地面に着弾し、ブルーの周囲で激しい爆発を巻き起こしていった。

今ホワイトは、ブルーの……愛香の思いを受け止めているんだ。

貴重な変身回数を消費してでも、親友の誇りを救うために。



「あはは、まあまあ君たち！　求めて争わなくても、俺の愛は平等だぜ？」

　口喧げん嘩かと喧嘩を同時に繰り広げるブルーとホワイトに、ポセイドンギルディが呑のん気きに近づいていく。

「「邪魔よ（です）ッッ!!」」

　ブルーとホワイトは、同時に振り返る。

　そして寸分の狂いなく同時に、イケメンの鼻先へと鉄拳を叩き込んだ。

「イケメンッ!!」

　呻うめき声を上げて地面を転がる神など一いつ顧こだにせず、喧けん嘩かは続く。

「サイズアームドッ!!」

　ホワイトはシャイニングアームドを刃やいばを上下対称に二つ並べて枝切り鋏ばさみのように変形させ、ブルーのウェイブランスエクシードの穂先を挟み込む。

「さあブルー、あなたが願い続けた瞬間ですよ！　世界蛮族グランプリ決勝戦、ゴングを鳴らそうじゃありませんか!!」

　サイズアームドで拘束されたランスを放り投げ、再び素手で向かっていくブルー。

「はあああああああああああああああっ!!」

「やあああああああああああああああっ!!」

　魂たましいの咆ほう哮こうを響かせる、ブルーとホワイト。

　大気そのものが弾はじけていくような、凄すさまじい爆裂音が木霊こだまする。

「ほえー、地上最強のキャットファイトじゃ……!!」

　口をあんぐりとさせるブラック。

　キャットファイトって、あんな地面が割れたりする感じのやつだったっけ……。

「まるで闘技場の拳闘士だな。神の無ぶ聊りようを慰なぐさめるには、丁ちよう度どいい捧げ物よ」

　高みの見物を決め込む神の身体からだに、俺はテイルカリバーで渾こん身しんの斬ざん撃げきを叩たたき込んだ。

「ぬうっ……!?」

　胸を押さえてたたらを踏むゼウスギルディ。

「いいや、もう退屈なんかできないぜ、神様……俺たちが、お前を倒す!!」

「面白い、やってみるがいいわァ――――――――ッ!!」

　天を裂さき、雷が迸ほとばしる。降り注ぐ無数の光条が、大地を貫いていく。

　先の戦いと同じく、ゼウスギルディの暴走が始まった。

　こいつの力が尽きるのが先か、俺たちが倒れるのが先か――勝負!!

◇

　神々とツインテイルズの壮絶な戦いを、未み春はると尊みこと、そして慧え夢むは地下基地で見守っていた。

「愛あい香かちゃんが敵の戦力にされるなんて、かなりのピンチね……頑張って……!!」

　口調こそ穏やかだが、未春の頬ほおには冷や汗が伝っている。

「久方ぶりに見ましたが……エレメリアンとは、恐ろしい存在なのですわね。テレビで伝えているのは、本当の侵略者の姿ではないということですか」

　モニターに映る愛まな娘むすめの勇姿を目に焼き付けながら、慧夢は声を震ふるわせた。

　そんな主人の姿を前に、尊は恨めしげに自分の右腕を見つめた。

「面めん目ぼくありません、未み春はるさん……。私が行っても、かえって足手まといになるでしょう……」

　尊みことがアナザーブルーとして対たい峙じしたエレメリアンは皆、一般兵クラス。唯一幹部との戦いは、オーガギルディへと進化する前のトリケラトップギルディ……戦闘力に乏しい特殊能力に全振りしている特殊ケースだ。

　そんな尊にとって、モニターの向こうで展開される大地を抉えぐり割る壮絶な戦いは、自分が割って入れる次元のものではなかった。

「大人として、前に進む子供たちを支ささえると誓ったはずなのに……私は、情けない……」

　尊は無力さに歯は噛がみしながら、モニターを睨にらみ付けた。

「──あの、乗り物……」

　そこで尊は、戦場の彼方かなたに小さな円盤のようなものが浮遊しているのを発見した。

　現場にトゥアールがいて無視しているのだから、大したものではないのだろうが……。

　未春は尊の戸惑いを敏感に感じ取り、声をかけようとしたが……すぐに、取りやめた。

「尊……覚えていますか。慧え理り那なが幼い頃ころ、あなたを守る、と言ってきかなかったことを」

　瞬きもせず見ていたモニターから視線を切り、慧え夢むが尊の元へ歩み寄ったからだ。

「子供たちにあれだけ素晴らしい助言をもらっておきながら、またあなたは自分の心を殺すのですか。迷惑がかかるからと。自分では分不相応だなどと」

　それを聞き、はっとする尊。

「戦いが怖いのなら、無論、母であるわたくしは断固、あなたを止めますとも。けれど役に立たないと思い込んで足を止めているだけならば……あなたも、前へと進みなさい」

　そして今尊に一番必要な言葉を、優しく伝える。

　それは紛まぎれもなく、娘へ愛を注ぐ母の横顔だった。

「危なくなれば、あなたのお姉ちゃんが守ってくれますわ」

　尊の肩を抱いて、慧夢は慈いつくしむような微ほほ笑えみを向けた。

「奥様……」

「あなたは子供を支える大人たろうと気を張っているのかもしれませんが……違いますよ」

　尊の右手首に水色のブレスを認めると、慧夢は彼女の肩に添えた手に力を込めた。

「わたくしにとっては、あなたも慧理那も同じ子供です。だからあなたは、慧理那の隣にいていいのですわ。同じ恋をして、同じ夢を持つ……素敵なことではありませんか」

「ッ……!!」

　堰せきを切ったように、尊の目から涙がこぼれ落ちる。

　大人という立場。子供ではないという一線。

　自ら引いた見えない線を踏み越えるように、一歩踏み出すと……尊は、涙を振り散らしてまなじりを決した。

「さあ、見せてくださいな。あなたが──ツインテイルズとなった姿を」

「……はい……お母さん!!」

　尊みことは、慧え夢むと未み春はるの見守る前で、水色に輝くブレスを構えた。

　いつかの日に、もう一人悩み惑う者が、この基地で決意を口にした。

　期せずして、尊はその戦士と寸分違わぬ位置に立っている。

「わたくしは幸せ者ですわ。二人の娘の晴れの旅立ちを、この場所で見送ることができるのですから」

　ゆえに慧夢の目には、二人の戦士が━━二人の「娘」が、重なって見えた。

　構えた右手が重なり━━ついにはその言葉までも、勇ましく連なり響く。

「━━━テイルオン!!」

◇

　雷轟とどろく戦場で、ブルーとホワイトの戦いは佳境を迎えていた。

「エクストリームウェ━━━━━━━━イブッ!!」

「スペリオルエクスプロード━━━━━━━━ッ!!」

　俺たちの目の前で蒼あおき波は涛とうと白き爆光が正面からぶつかり合い、立ち込める雷さえ吹き飛ばす大爆発を巻き起こした。

　同時に吹き飛び、地面に倒れるブルーとホワイト。

「……気は済みましたか、ばか蛮族」

「あんたもでしょ……ぐっ……」

　ようやく戦いが一段落したというのに、ブルーは操り糸で吊つられるかのように、強引に立ち上がらせられた。

「十分に消しよう耗もうさせた……あと一歩……あと一手なんです……!!」

　ブルーの体力の消耗を狙ねらっていたらしきホワイトが、ポセイドンギルディへ視線を送って歯は噛がみする。

　そして、相手の消耗を狙っていたのは俺たちも同じだ。

「ぐあああっ……！」

　ゼウスギルディの電撃を浴び、俺の全身が激痛に襲おそわれる。

　無尽蔵に雷撃を放ってくる砲台を前に、俺たちは防戦一方。イエローとブラックも著しく体力を消耗してしまっていた。

　だが、その甲か斐いあってゼウスギルディの攻撃も少しずつ勢いを落とし始めている。

「ワシの雷で焦げぬそのツインテール、手入れの行き届いたよい髪だ。丈夫さだけは褒ほめてやろう、テイルレッド……ハハハハハハハハ!!」

「焦げて、たまるか……!!」

「ハハハハ………………あーあ、こんだけやってもあいつらピンピンしてる……」

　ゼウスギルディの声が、急激にトーンを落としていった。

「ワシってもしかして弱いのかな……あー、戦うのめんどい……生きるのしんどい」

　そして崩れ落ちるように座り込み、頭をガクリと垂れる。

　これはもしや……トゥアールの予想していたこいつの弱点、定期的な戦意喪失マリツジブルー!!

　このまま退散される前に、一気にケリをつける！

「今だ！　テイルカリバー究極装アルテイメツトモ……」

　テイルカリバーを完全解放ブレイクレリーズさせようとした俺の前に、ポセイドンギルディが立ちはだかる。そして、へたり込むゼ

ウスギルディへと優しく声をかけた。

「えー、あとちょっとなのにもったいなくね？　もうちょい頑張りなよ、ゼッちゃん」

「────うん……!!」

　しゃっきりと背せ筋すじを伸ばして立ち上がるゼウスギルディ。

「何ッ……復活した!?」

　予想外の事態に驚き、テイルカリバーに集束させたエネルギーが霧む散さんしてしまった。

「旦那さんの声で元気になるとか、本当に現金な奴やつですね……!!」

　再びブルーと戦い始めたホワイトが、こちらを横目で見て呆あきれた声を出す。

「はは、ゼッちゃん今日はやる気あり余ってるみてーじゃん！　オッケーオッケー!!」

　自分の声援で復活したとは露つゆほども思わないポセイドンギルディ。

「そんじゃそろそろお開きってことで。お前らのツインテール属性……いただいちゃってもいいわけだよね？」

　体力の有り余っているポセイドンギルディ、復活したゼウスギルディ。消しよう耗もうに関係なく使役されるブルー。こちらの旗色は、かなり悪かった。

「くっ……レッド、あんたもあたしを攻撃して……!!」

　身体からだへの操作能力を強められたのか、ブルーが懸命に身体を強こわ張ばらせて懇願してくる。

　万事休すかと思われたその時─鮮烈なツインテールの気配に、俺ははっと息を呑のんだ。

「俺の努力勝ちってとこでしょ。めっちゃお前らのこと調べて、テ

イルブルーへの操作能力の練度も上がってたってことね」

　ポセイドンギルディが、勝利を確信した薄笑いを浮かべる。

「そうか……俺たちのことを色々調べたみたいだけど、大事なことを忘れてるな」

　俺は目の前でランスを振りかぶったブルーを見ながら、ポセイドンギルディへと笑いを返した。

「――ツインテイルズにはまだ、頼もしい助っ人がいるだろ」

　意識外からの急襲に、その場の全員の反応が遅れた。

　ただ一人、ツインテールの到来を確信していた俺以外は。

「はあああああああああああああああっ!!」

　裂れつ帛ぱくの咆ほう哮こうが響くと同時、淡い蒼あおの光が飛来する。

　光が弾はじけ飛んだ後に見えたのは、ブルーのランスを蹴けり上げた新たなる戦士の姿だった。

　アナザーテイルブルー。

　水色のテイルギアに身を包んだ、桜さくら川がわ先生が駆けつけてくれたのだ。

「何ッ!?　また色の薄いテイルブルーが来た!?」

　ゼウスギルディは、予想だにしない救援に驚きよう愕がく。

「アナザーテイルブルー、だっけ？　あはは、そういや確かにいたねえ。今さらどしたん？」

　ポセイドンギルディは冷笑を送るが、

「おい、色男。――土産みやげだ」

　不敵な笑みとともに、天を指差すアナザーブルー。

　つられて空を見上げたポセイドンギルディは、ぎょっと目を見開

いた。

「――のわあああああっ!?」

　ポセイドンギルディがは間一髪で飛び退のくも、奴やつが立っていた場所には巨大な物体が降り注ぎ、地面に突き刺さっていた。

　よく見るとそれは、バレンタイン決戦で俺たちが破壊した円盤を小さくしたものだ。

　それでも、数メートルの大きさはあるが……どうやらアナザーブルーがここに到着した時、こちらへとブン投げたらしい。

　まさかこれも、ポセイドンギルディの愛車ってやつの一つか？

「っ……あ、身体からだが……動く!?」

　轟猛と土煙が立ちこめる中、何とブルーは身体の自由を取り戻していた。

「……予想が当たったみたいだな。よかった……」

「アナザーブルー……！　ありがとうございます！　でも、どうやって!?」

　ブルーは礼を言いつつも、不思議そうに尋ねる。

「つ……ブルーが苦しそうにする時、この乗り物が強く光っているのが見えていたんでな」

　戦闘中に本名を呼びかける危なっかしさは、相変わらず健在だ。

「確証は持てなかったが……アルティメギルの乗り物がブルーを苦しめている可能性があるなら、壊しておくに越したことはないだろう」

「あはは、バレちった？　いやー、これ以上外から救援なんて来るとは思ってなかったからなー、あんたやるじゃん、俺の〝等しき愛を注ぐア・トランテイス〟の絡から繰くりを見抜くなんて」

　悪びれずにけらけらと笑うポセイドンギルディ。

「支援機を使って能力を増幅していたんですね……！」

　気づけなかったことを悔くやしがるホワイトだが、無理もない。ナンパ師の本領発揮か……技の数を誇っていたのも、他に補助を使っているなどと思わせないよう思考誘導するための駆け引きだったのだろう。

「やはりそうだったか。気になってやって来てよかったよ」

　確証のない発見一つで戦場に乗り込んでくるなんて、普通はできることじゃない。

　やっぱりあなたはすごいよ、桜さくら川がわ先生……!!

「さて。勇み込んできたはいいが、ここからこんな怪物を相手にどう戦えばいいか、見当もつかん。とりあえず私のことは、盾たてとしてでも使ってくれ」

「好きに使ってくださいとは言いましたが……ムチャしてくれますね。行き遅れの人は、思い切りがよすぎていけません……その調子で、もう少しムチャしてもらいましょうか」

　言葉とは裏腹に嬉うれしそうな顔をしながら、ホワイトが横に並ぶ。

「あたし、盾とか使って戦うの得意じゃないんで……一緒に攻撃してくれる方が助かります」

　ブルーは呪じゅ縛ばくの解けたことを確かめるように腕をぶん回しながら、アナザーブルーへと不敵な笑いを向けた。

「では、そうするとしよう」

　そしてアナザーブルーは、二人に粋な微ほほ笑えみで返す。

　テイルブルーを創つくり、希望を生み出した者。

　テイルブルーを託され、その勇名を轟とどろかせた者。

　テイルブルーを支ささえ、新たな礎いしずえを築いた者──。

　受け継がれてきた、テイルブルーという名の魂たましい。

　その魂は今──ここに結集した!!

「歴代テイルブルー勢せい揃ぞろいってわけね……」

　ブルーが嬉しそうに拳こぶしを手の平に打ちつける。

「さあ。私の大切な仲間を傷つけた罪──贖あがなってもらうぞ!!」

　かつて、どこかで聞いたようなアナザーブルーの啖たん呵かに、横で見守っていたイエローは思わず笑みをこぼした。

「……ではわたくしたちは、ゼウスギルディを！」

「うむ!!」

　イエローとブラックが頷うなずき合う。

　歴代レジエンドテイルブルーがポセイドンギルディに挑むなら、俺たちが戦うはゼウスギルディだ。

「これは壮観だな、六人のツインテイルズか！」

　感嘆の声を上げるゼウスギルディへ、俺とイエロー、ブラックはそれぞれの武装を構え、攻撃を開始した。

　　　◇

　レッドたちと分かれたブルーたちも、猛反撃を始める。

「見たところ、君だけは装そう甲こうを強化してないツインテイルズみたいだけど……大丈夫？　俺、個別に手加減してあげられるくらい器用じゃねーよ？　全員平等がモットーだからさ」

　伊だ達て男よろしくウィンクをするポセイドンギルディだが、アナザーブルーは一いち瞥べつで切って捨てた。

「無用な心配だ。お前の言うとおり若くはないのでな、自分の在あ

り方は弁わきまえているつもりだ」

「へぇ……じゃあいいや。来なよ、あんたもソッコーで口説き落としてやるぜ？」

「それも無用だ。私はプロポーズを待つのはガラではない──自分で婚こん姻いん届とどけを渡すのだ!!」

　フォースリヴォンを叩たたき、ウェイブメイスを引き抜くアナザーブルー。

　アナザーブルーは、まさしく熟練のメイドが箒ほうきを扱うかのような華麗さで攻撃を繰り出していく。

「やーるねぇ……」

　ポセイドンギルディは口笛を吹き、その猛攻を歓迎する。

「男の娘属性ガールズボーイ──」

　アナザーブルーは起動属性である男の娘属性ガールズボーイを使い、属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンを発動させる。

「制限付きとはいえ、満を持しての新型テイルギアですよ！　ブルーたちはバージョンアップで使えるようになった属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンも、アナザーテイルブルーには初めから標準搭載です!!」

　テイルギア開発者にして、今なお前線で戦う戦士、テイルホワイト。彼女は制限ばかりだと恐縮していたアナザーブルーのギアを、初めて誇らしげに解説した。

「お嬢様が一生懸命教えてくれたからな……私でも、このぐらいはできるさ!!」

　このぐらいは──どころか、ブルーの苦手な属性を含め同時発動できるアナザーブルーは十分に独自の強みを持っている。

「母属性マザー、被虐属性マゾヒステイツク──!!」

　空色の残光を大地に残し、アナザーブルーが疾走する。

高速化と身体強化の同時発動は、まさにアナザーブルーにうってつけの力だ。

神しん堂どう家の警護主任メイドとして、十数年鍛きたえ上げた体術。

それは今、主と肩を並べ戦うために発揮され、眩まばゆく輝いていた。

穏やかな瞳ひとみで、その猛襲を歓迎するように小さく頷うなずくポセイドンギルディ。

「おおっ!?」

もちろん、その相手はアナザーブルーだけではない。

鬱うつ憤ぷん晴らしのように激しくランスを繰り出すブルーと、アームドを放つホワイト。

「おっとと、あっちもこっちも……ははは、ハーレムの本懐だねぇ!!」

ポセイドンギルディはアナザーブルーに集中したいのか、追加で強戦闘員メガアルテイロイドを繰り出した。

しかしホワイトとブルーの二人は、鉄拳を同時に放って強戦闘員メガアルテイロイドを屠ほふっていく。

「ホワイト。あんたの武術って、我流？　けっこうサマになってんじゃん」

「むしろ、自分の世界で戦ってる時はもっと適当な力任せでしたよ！　どこかの誰だれかさんがさんざっぱら技をかけてくれたおかげで、自分の身体からだで覚えただけです!!」

「なーるほど、その人はあんたの師匠ってわけね」

ふん、と鼻を鳴らし、ホワイトは皮肉を返す。

「よかったじゃないですか。願いが叶かなって。……私と戦いたかったんでしょう？」

「こんな形じゃなくて、あんたとガチで戦ってみたかったのよ！」

　一方が先に出れば、もう一人がさらにムキになって速度を上げる。さながら子供がかけっこで競い合うような無邪気さで、二人は強戦闘員メガアルテイロイドを吹き飛ばしていった。

「ウェイブランスエクシード……！」

「シャイニングアームド──スピアアームド!!」

　互いに長物の武器を装備してからは、さらに破竹の勢いだった。

　削岩機のように突とつ貫かんし、壁のように連なる強戦闘員メガアルテイロイドを一気に爆砕してゆく。



「ま、これも悪くないわ」

　自らのツインテールへ蒼あおいツインテールを換装したホワイトを見て、ブルーが喜色を湛たたえた声で呟つぶやく。

「これっきりにして欲しいものですね。あなたと肩を並べて戦うなんて、寒気がします！」

　二人は、そのままポセイドンギルディへと猛襲する。

「うーん、ハーレムの重複はいらないかなぁ。テイルレッドがたくさんいるなら嬉うれしいけど、テイルブルーじゃあねえ」

　上空からさらに、先ほどと同じ大きさの二機の円盤が飛来。操術に長たけたポセイドンギルディの真骨頂を発揮し、意志を持ったかのようにブルーとホワイトへ光線を降り注がせる。

「ブルー！」

　ホワイトの声に合わせ、ブルーはランスを彼女へと放り投げた。

　ガンアームドの銃口に装そう填てんされ、猛然と射出されたウェイブランスエクシードが、一機の円盤の横腹へと突き刺さる。

　ブルーは髪紐属性リボンの飛行能力で空高く急上昇し、ランスの柄えを掴つかんだ。

「ぬううあああああああああああああああああああああ……!!」

　勇ましき咆ほう哮こうと共にランスの刃やいばを進ませる。白一色の円盤の横腹へと蒼の斬ざん痕こんが一直線に、深々と刻まれていく。

「――――ああああああああああああっ!!」

　最後は両手に持ち直し、気合い一いつ閃せん。ブルーがウェイブランスエクシードを振り抜ききった瞬間、円盤は上下真っ二つに斬きり分けられる。

　そして今度はホワイトが、背の翼を展開させて猛飛ひ翔しよう。落下中のブルーが組んだ手を踏み台にさらに加速を上乗せし、シャ

イニングアームドの鉄拳でもう一機の円盤を貫通した。

　二機の円盤は揃そろって、空高く大爆発を巻き起こす。

　大地に降り立ったブルー、ホワイトと、アナザーブルーは並び立ち、ポセイドンギルディへと急迫する。

「選り好みする権利があると思っているんですか？　エセイケメンさん」

「たとえお前が嫌だと言おうと──」

「あたしたちツインテイルズの共闘ハーレム──見せてあげるわ!!」

　ホワイト、アナザーブルー、ブルーの三人は、ポセイドンギルディお得意の能力発動も間に合わない、いや発動してもなお追いつかない連撃で、果敢に攻め入っていく。

◇

　ブルーたちのド派手な戦いを横目に、俺もツインテールに活力がみなぎってくる。

「俺たちも負けていられないな──！」

　相手を自分のペースへと引き寄せる。

　それはある意味、人間の些さ末まつな行動になど合わせぬと言う、傲ごう岸がんなプライドがもたらした戦術なのだろう。しかし、ゼウスギルディには一つ、誤算がある。

「むうっ……!?」

　驚きよう愕がくするゼウスギルディ。俺たちが雷を見切り始めたことに、焦あせりを感じたのだろう。

「嘘うそを見抜くと……真実を見抜くと、大層なドヤりようじゃが、井の中の神どもよ！　よいことを教えてやろう!!」

　飛来する雷を軽やかに躱かわし、追撃は放り投げたダークネスウィップを避雷針にやり過ごし。

「わらわの眼鏡めがねは──全てを見通す!!」

　久々の決め台詞ぜりふとともに、ブラックはダークネスグレイブによる痛烈な一いち斬ざんを見舞った。

「うぐう……ワシの雷を見切るか!!」

「俺にも雷をまとって戦う、頼もしい仲間がいるんでな……！　その仲間のツインテールをずっと見続けてきたからこそ、その境地に辿たどり着けた!!」

　ブラックだけではない、俺だってこれだけ食らい続ければ、活路は見えてくる。

　電撃を放たれ、たとえそれが直撃しようと──ツインテールをアース線に使えば、致命的なダメージを負う前に身体からだを抜けていく。俺は、その刹せつ那なのタイミングをものにした。

「簡単に言いよるわ！　電撃が身体に到達する前に吹き散らすなど……その刹那を見切った自分が、どれほどの高みにいるか気づかぬか……!!」

　確かに人類は、遥はるかなる太古より、雷を恐れて生きてきたのかもしれない。

　だが、そんな恐怖の歴史なんて……ツインテールの優しさが、塗り替えてくれるさ!!

「ぬっ……おっ……!!」

　攻撃を捌さばききれなくなり、狼ろう狽ばいし出すゼウスギルディ。

「しっかりと結ばれた俺たちのツインテールは……決してほどけはしない！」

　そうして俺たちツインテイルズは、幾多の戦いを共に潜くぐり抜けてきたんだ……！

「俺のツインテールは──集束たばなりだ!!」

　集め束ねたツインテールの房は、天上の神にさえ届く。

「先の戦いと、まるで力が違う！　こちらが強くなればなるほど……テイルレッドも追いすがってくる！　この強さの根源は、一体何だ!?」

　やがてゼウスギルディははっと息を呑のみ、俺をまじまじと見つめてきた。

「──ツインテール……そうか、ツインテールか！　相手がツインテールであれば、汝なんじは強くなる……だからワシが本気を出すほど強くなってゆくのだな、テイルレッド!!」

　ゼウスギルディが言うことは要領を得ない。あいつはツインテール属性じゃないはずだからな……。だがツインテールだから強い、と言われれば、そのとおりだ。

　俺は究極のツインテールだから強いんじゃない、ただどこまでもツインテール好きだからこそ、無限に強くなれるんだ!!

「まずいな……その特性、あまりにまずい！　貴様は、首領様の元へも辿たどり着いてしまう!!」

　俺の信念を分かち合うかのように、イエローたちの攻撃もヒットし始めた。

「絶対脱衣形態アブソリユートブラストモード────!!」

　ツインテールを空間そのものにアンカーと打ち込み、最大砲撃の超圧力に耐えるイエロー。

「おおおっ……何たる極限！　汝なんじのその姿……もはやほぼ全裸であろう!!」

　その果ての脱衣を見たゼウスギルディは、イエローの肌色に驚きよう愕がくする。

　装そう甲こうを合体させた超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンの雷光を背に受けたイエローは、ゼウスギルディへと猛追。

「コズミックジャッジメントッ……ミ――ティアッ!!」

　さらにお転婆属性トムボーイの属性玉エレメーラオーブを発動し、蹴けり込みに猛烈な回転を負荷した。

「ぐううううおおおおおおおおおおおおおっ!!」

「ほんの数日ですが……花嫁の心を学びました……あなたに負けないために!!」

「ぬ、ぐ……！　それでここまでの力を……いや！　この気迫、それだけでは……!!」

「何より……わたくしたち姉妹はもう互いに守り、守られる関係ではない……やっと、肩を並べて戦えるようになった！　だから今日のわたくしは―いつも以上に強いのですわっ!!」

　いかな雷神といえども、電撃と廻転かいてんの両方を止めることはできない。

　踵かかとで地面を抉えぐりながら、じわじわと後退していく。

「インフィニットッ！　バニッシャ――――――――――ッ!!」

　イエローの蹴り足に合わせるように、ブラックも必殺の矢を放つ。

「ぬあああっ!!」

　二つの衝撃で空高く弾はじき飛ばされるゼウスギルディ。

「今じゃ、レッド!!」

　神のエレメリアンを倒すには、ゴッドブレイザーしかない。

　二人の作ってくれたチャンスを逃のがさず撃ち抜くため、テイルカリバーを構えた俺に……

「レッド！　私のテイルギアは、リアルタイムで追加プログラムを走らせられる仕様です！　絆装填ネクサスモードで、ゴッドブレイザーを放つ瞬間私に接続してください!!」

　ホワイトが、火急の要請をしてきた。

　おそらく兼ねてから、この瞬間についてシミュレーションしていたのだろう。

「ゴッドブレイザーの攻撃システムを、擬似的に共有させてもらいます!!」

「そうすれば、あたしたちでもあいつらに決定的なダメージを与えられるってわけね!!」

　ホワイトの考えを阿あ吽うんの呼吸で理解し、ブルーもその一瞬へ備える。

「わかった！　テイルカリバー！　超越究極装填ハイパーアルティメツトモードッ!!」

　黄金に染まった刀身へ、さらに虹にじ色のオーラがほとばしっていく。

　神々との戦いに終止符を打つべく、俺は渾こん身しんの力で極大剣を振り抜いた。

「ゴッドッ！　ブレイザ――――――――――――ッ!!」

「ぐぅあああああああああああああああああ……!!」

　ゼウスギルディへとゴッドブレイザーが直撃した、その瞬間。俺はホワイトの言うとおり、テイルカリバーを強引に再変形させた。

「テイルカリバー、絆装填ネクサスモード!!」

　凄すさまじい負荷に、身体からだが悲鳴を上げる。

　しかし俺のツインテールは、まだいけると檄げきを飛ばす。

「シャイニングアームド―ソードアームド!!」

　俺とリンクするためか、俺のツインテールの色である赤のツインテールに換装し、ソードモードのシャイニングアームドを構えるホワイト。

　俺のツインテールと結び合ったことを確信したのか、ホワイトが号令をかけた。

「今です、皆さん!!」

　元より、ホワイトは俺とトゥアールのツインテールが溶け合い生まれたテイルギアをまとっている。ならば技そのものの特性を分け与えることができるのは道理だ──!!

「「「完全解放ブレイクレリーズッ!!」」」

　ウェイブランスエクシード、ウェイブメイス、シャイニングアームド──三人は武器を一つに重ね、その切っ先をポセイドンギルディへと向けた。

「「「トライアードビロウズ!!」」」

　歴代レジエンドテイルブルーの力が結集した、蒼あおと水色と白が織り成す光の渦うず。

　波を以もつて人間を諫いさめるべき海神は、その暴虐の代償に人間の作り上げた大波によって裁きを受けることとなる。

「おいおい、ハーレムの女の子たちが仲良く力を合わせるって……そりゃ……強いだろおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

　叫びもろとも、螺ら旋せんを描く怒ど涛とうに呑のみ込まれていくポセイドンギルディ。それはゼウスギルディを取り巻くエネルギーをも巻込み、さらに巨大化した。

　都つ合ごう、ゴッドブレイザー二発分が炸さく裂れつしたその大爆発はおそらく、成層圏からでさえ観測できただろう。

　噴き上がっているのは炎なのか、水なのか、雷なのか……あらゆる要素エレメントが綯ない交まぜになった絶対的な破滅がドーム状に広がり、周囲の全てを飲み込んでいく。

　そして俺たちは、二体の神のエレメリアンが爆発の中に消えていくのを──確かに見た。

◇

　神のエレメリアンとツインテイルズ双方の、大火力を振り絞った一大決戦。

　その余波はあまりに大きく、地形が完全に変わってしまった。

　来た時には数キロ四方の平野だったはずが、今ではその面積のほぼ全て、深々とクレーター状に陥没している。

「すみませんレッド……あなたに負担をかけすぎました」

「とんでもない。ホワイトがいなけりゃどうなっていたか」

　六人のツインテイルズは息を乱しながら仲間たちを見つめ、それぞれの健闘を讃たたえ合う。

「……ありがとうございます。来てくれて本当に助かりました！」

　そして俺はあらためて、アナザーブルーに感謝を伝える。

「お前たちの手助けになれればと思っただけだ。これは、今までどおり変わらなくてもいいことだろう？」

　アナザーブルー……桜さくら川がわ先生は、晴れやかな笑顔とともにツインテールを風に靡なびかせた。

「こういう感じで、テイルギアは好きな時に使ってくれて結構ですから。私もそうします」

　ホワイトの言葉には、心からの安あん堵どが滲にじんでいる。

〈！　まだや!!〉

　ブラックの胸パーツとなっているメガ・ネの目が、何かを発見したかのように断続的に点滅する。

　直後。見渡す先の地面が爆裂し、土砂が間欠泉のように噴き上がった。

「……！　あいつら……!!」

　俺は、噴き上げた土砂を浴びながらよろめく二体を視認した。完

全に消滅したと思っていた二体は、土砂に埋まって姿が隠れていただけだった。

「「ぐっ……!!」」

　ポセイドンギルディ、そしてゼウスギルディは、ほぼ同時に大地に片膝ひざをつく。

　一大破壊劇の終演の後、立っていたのは──俺たちツインテイルズだ。

「か、神殺しのツインテール……仲間にも共有シエアするなんて、大したもんだよ、テイルレッド……君のツインテールは、ハーレムにおいても究極だ」

　胸を押さえて全身を放電させながらも、ポセイドンギルディは愉快げに賞賛してきた。

「だから、その物騒な呼び方はやめろっての……!!」

　テイルカリバーを杖代わりにして身体からだを支ささえながら、俺は何とか言い返した。

「ああ……核の一つが……やられた……ああもう、しんどい……死ーのうっと」

　鬱うつ々うつとした態度で、地面に大の字で寝転がるゼウスギルディ。やはりその全身は、ダメージを物語るかのように放電を断続的に繰り返している。

　ここにきてようやく、テンションが急激にダウンしたようだ。

「そんなダウナー入んなくていいっしょ。むしろ、楽しみが増えると思えばさぁ」

「……楽しみ？」

　満まん身しん創そう痍いのはずのポセイドンギルディ。その口から漏もれ出た不穏な一言を、俺が訝いぶかしんでいると──

「ほーら、見たことか。ツインテイルズは中々やるだろー？」

無邪気な声が、空高く響きわたった。

ゼウスギルディの背後に、いつの間にか立っていたのは──

「アポロギルディ、ハデスギルディ……!!」

俺たちツインテイルズが死闘の末に撃退した、神のエレメリアン二体だった。

その二体が歩みを進めると、ポセイドンギルディ、ゼウスギルディ両名もまた、ゆるりと起き上がった。

アポロギルディたちは、傷ついた仲間を迎えに来ただけなのだろうか。

戦意を感じないことに少しだけ気を抜き、身体からだの力を抜いた瞬間。

「うぐっ……！」

見えない衝撃波が、俺の全身に叩たたきつけられた。

アポロギルディ、ポセイドンギルディ、ゼウスギルディ、ハデスギルディ。

こいつら四体が、同時に同じ場に立った。それだけで、この星の全てが震ふるえるような強大なエネルギーがほとばしり始めた。

ブルーも、イエローも、ブラックも、ホワイトも、アナザーブルーも……全員、吹き飛ばされまいと身体を強こわ張ばらせる。

奴やつらは何もしていない……闘気すら解放していない。ただ、立っているだけだというのに。

「うん、やっぱお前ら強いよ！　……並のツインテールの戦士じゃ、僕たちが四体揃そろったのを見ただけで正気じゃなくなるからな」

あたかもテストの合格を告げるかのように、アポロギルディは賞賛してきた。

「今さら改めて言うことじゃないかもだけど……隊長のアポロギル

ディだ、よろしくね」

「そんなの、俺たち全員気付いてる……！　マーメイドギルディが部隊を乗っ取る時に押しのけた元隊長ってのが、お前だろ!!」

「あぁ、神の一剣ゴー・デイア・ソードのことじゃあないよ。もちろん元神の一剣ゴー・デイア・ソードの隊長ってのは合ってるんだけどさ……別の仕事ができたから、部隊ごとあいつにくれてやっただけさ」

　別の仕事。アポロギルディが気軽に言ったその言葉に、俺は胸騒ぎを覚えた。

「今こそ名乗ろう。我われら四体こそ、アルティメギル最強最後の部隊」

　ハデスギルディはそう前置きすると、続きを促うながすようにアポロギルディへ頷うなずきかけた。

　アポロギルディは不敵な笑みを浮かべ、その名を天に轟とどろかせる。

「――――終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカー」

エピローグ

切り札の神たち。

　アポロギルディの宣言に呼応するように、彼方かなたの暗雲から雷鳴が轟とどろく。

　その光に照らされるまでもなく、四体の神のエレメリアンは、後光のごとき輝きをまとっている。

「ジョーカー……切り札……!?　お前たち、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士じゃなかったのか!?」

　俺は、胸に湧わく困惑をそのまま口にした。

「それに、零番部隊じゃと……そんなもの、わらわも聞いたことがないぞ!!」

「神の一剣ゴー・デイア・ソードが最後の部隊ではなかったのですか!?」

「あんたら、またそうやって後から後から戦力投入して、あたしたちを精神的に消しよう耗もうさせようっての!?」

　ブラック、イエロー、ブルーも、矢や継つぎ早ばやに当惑をぶつけていく。

「勘違いをするな。神の一剣ゴー・デイア・ソードが最終部隊であることに偽いつわりはない。私たちは今でも表向き、その神の一剣ゴー・デイア・ソードに所属しているのは事実なのだからね」

　ハデスギルディはブルーたちの意見を穏やかに窘たしなめ、真実を明かした。

「あまりにも超越した戦闘力を持ったため、まさしくアルティメギルの守護神としての裏の顔……密命を帯おびることとなった存在。それが、私たちなのだよ」

　そしてホワイトへ視線を向けると、穏やかな口調で賞賛を送る。

「テイルホワイト──見事だ。全てを失いながら這はい上がり、それだけの力と仲間を手にした君は……人間という個の極致。心から賞賛するよ」

　賛辞など、トゥアールにとっては侮辱にしかならない。

「私の故郷を滅ぼした仇かたきの化け物どもが、上から目線で何を言っているんです。今さら軍団名を名乗るなんて、回りくどい負け惜しみですか？」

　彼女の怒りを受け流すように、ポセイドンギルディが笑い声を上げる。

「やあやあ我われこそは──なんて高らかに名乗れるのは……これから長いお付き合いをしていきましょうね、ってのんびり挨あい拶さつできる格下軍だけに許されるゆとりだって。せいぜい、四し頂ちよう軍ぐんまでのねー」

　四頂軍を──格下呼ばわりだと⁉

「今だからこそ名乗れるのだ、テイルホワイト。汝なんじらはワシら四体全員の核の一つを破壊した──すなわち、ワシらが本気で戦うに値する相手と認められたのだ」

　ゼウスギルディもまた、誇らしげな言葉を口にする。

「僕たちがこの名を名乗るのは、相手を倒す、その時だけだ。もっとも──ツインテールの戦士に軍団名を名乗ったのは、君たちが初めてだけれどね」

　少しだけ茶化すように、アポロギルディが続けた。

「それはすなわち君たちが、偉大なるアルティメギル首領様へ謁えつ見けんする資格を勝ち取ったということ」

　ハデスギルディは、熱の籠こもった声で語り出す。

「首領様は、あまりにも強くなりすぎた……。その強さはいつしか孤独となり、今や常に〝敵〟を求めておられる。だから私たちはお約束いただいたのだ。人間の戦士にお会いになるのならば、私たちに認められた者のみにして欲しいと」

　こんな緊迫した時だというのに、俺は笑いそうになってしまった。

　テイルレッドと付き合うなら、全人類の面接を受けてもらう……

そんな冗談をニュースで聞いたが、エレメリアンたちの首領も、おんなじように過保護にされてたってのかよ。

「受け取りたまえ、テイルレッド」

　ハデスギルディは、俺に何かを投げ寄よ越こしてきた。

　俺は乱暴にキャッチし、それを睨にらんだ。

　厚めのＣＤのような形をした、黒い円盤だ。これはまさか──

「──この世界のアルティメギル侵攻部隊、その母艦へのゲートディスクだ。それを展開すれば、転送ゲートが……基地への一本道が完成する」

「!!」

　俺たちは一様に息を呑のんだ。こういったアイテムに疎うといアナザーブルー……桜さくら川がわ先生ですら、その言葉の意味するところがはっきりとわかったのだろう。

「少なくとも、俺たち四体はもうこの世界を侵略しないよ。まあ末端のコたちには好きにさせるけど、ね」

「ワシらは全員、残存軍の基地で待つ──心の準備ができたらいつでも来い」

　ポセイドンギルディ、ゼウスギルディが、挑発めいた眼まな差ざしを送ってくる。

「それは首領様が是非に、と仰おつしやってね。君たちの敢かん闘とうへの御報償なのだろう。基地において君たちがまかり間違って私たちを倒せば……後は、首領様自ら戦われる、ということだろうね」

　いささか不服そうに補足するハデスギルディ。

「僕たちがアルティメギルの切り札ジョーカーなら、お前たちツイ

ンテイルズは全異世界にとっての切り札ジョーカーだ。決着をつけるには申し分無いだろー」

　そしてアポロギルディは涼しい表情で、前言どおりの宣戦布告を遂げる。

「ツインテイルズ──これが神の一剣ゴー・デイア・ソードとの真の……そして、最後の戦いだ。僕たち終の零星フオー・ヴアリス・ジョーカーが……神の名において、ツインテール神話を覆くつがえすぜ」

　四体の背後に巨大な転送ゲートが形成された。

「まどろっこしいこと言ってんじゃないっての。今この場でケリをつければいいでしょ」

　勇み立つブルーを制し、俺はゲートへと入っていく四体へと宣言した。

「基地への招待状、確かに受け取った。首を洗って待ってろ、終の零星フオー・ヴアリス・ジョーカー」

「ああ。待ってるぜ──お前もツインテールをよく洗っとけよ、テイルレッド」

　アポロギルディは最後にもう一度だけ振り返ると、俺に不敵な笑みを投げかける。

　そして終の零星フオー・ヴアリス・ジョーカーの四体は全員、極彩色のゲートの中へと消えていった──。

◇

　大いなる宣戦布告を終え、基地へと戻った終の零星フオー・ヴアリス・ジョーカーの四体は、これからのことについて語っていた。

「……まったく、私に伝えれば渋ると思ったのだろう。アポロギルディに直接、終の零星フオー・ヴアリス・ジョーカーの出撃許可を

下されるとは……首領様も御人が悪い」

　ツインテイルズとの会話の中でも見せていたが、ハデスギルディは今でも不服そうにしている。それだけ首領の身を案じているのだろう。

「そういや、随分とツインテイルズのことを調べてたみたいじゃん。何かわかったのかい？　ポセイドンギルディ」

　ハデスギルディの小言を受け流し、楽しげに話題を振るアポロギルディ。

「……ああ、何となくね。他のツインテイルズのメンバーは単に装そう甲こうをまとっているだけかもしれないけど……やっぱりテイルレッドには、何かがあるよ。ちょっと普通じゃない」

　さんざんツインテイルズの真実を見抜こうとしていたポセイドンギルディだが、出てきたのはそんな曖あい昧まいな回答だ。

「テイルレッドは人間でありながら、限りなく首領様に近い存在だとわかった。それだけでも十分だ……装甲の下に何が隠れていようとも驚くまい。次に会う時が楽しみだ」

　ゼウスギルディは、早くも闘志を新たにしている。

　一瞬の静寂が訪れた廊下に、アポロギルディの笑い声が木霊こだまする。そして──

「ちん○ん」

「むう、突然どうしたね、アポロギルディ」

　アポロギルディの脈絡のない放言に驚くハデスギルディ。不意打ちの下ネタに、少し喜んでいるようでもあったが。

「……何でもない。ちょっと、言ってみただけ」

　そう返しながら、アポロギルディは蠱こ惑わく的な微ほほ笑えみ

を浮かべるのだった。

◇

　終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーが帰った後、俺たちはようやく安あん堵どの溜ため息いきをこぼした。

　ホワイトはむっとした表情でブルーに詰め寄る。

「ホンッット喧けん嘩かっ早いですね、ブルーは……私もう変身限界時間なんですよ！　変身解除した途端に第二ラウンド開始されたら、どうすればいいんです！」

　ホワイトのテイルギアが放電している。変身を維持できる限界時間が近いのだ。

「あ、ご、ごめん……」

　そのことを考えていなかったのだろう、ブルーは素直に謝った。

「準備を整える時間をくれるってんなら、ありがたくもらっておけばいいさ」

　俺のツインテールが、武者震ぶるいをしている。

　その全ぜん貌ぼうをただの一度も見ていない敵の本拠地への、思わぬ片道切符。

　そこで終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーを滅ぼせば、アルティメギル首領が姿を現す。

　全異世界のツインテール属性を奪わんとする首しゆ魁かい。最強のエレメリアンが。

　俺は渡されたディスクを握り締め、虚空を睨にらみ付けた。

「アルティメギル基地……そこが、決戦の場所か」

全てのツインテールの命運を懸けて。

俺たちツインテイルズの最後の戦いが……始まろうとしていた。

テイルギア設定資料16

アナザーテイルブルー（真）



桜川尊がテイルブレスアナザーによって変身した姿。核がエンジェルギルディのツインテール属性だからか、動作が不安定。単体では出力を賄えず、愛香もブレスをしている時にしか変身できないこと、そもそも変身回数自体もトゥアールのブレス同様に限りがあることなど、弱点が多い。一方でこれまで愛香から借りていたブレスと違い、最初から尊に合わせたチューンナップが施されており、通常形態のみのテイルギアだが戦闘力はなかなかに高い。従来のテイルブルーと違いパーソナルカラーが水色になっており、装甲がやや簡略化されているが、逆にアンダースーツの面積が増えて露出度がかなり抑え目になっている。

ANOTHER TAILBLUE (TRUE)



武器：ウェイブメイス
必殺技：ストライキングウェイブ
トライアードビロウズ

歴代テイルブルー LEGEND TAILBLUE

他のツインテイルズのテイルギアが事実上オンリーワンの運用をされているのとは真逆に、テイルブルーのギアは装着者が三人も存在する。言わずもがな現役で戦っていた頃の初代ブルー、トゥアール。初戦の相手がパンチ一発で沈んだ原体験から、徒手空拳で戦うことが多くなった。続いて現在のテイルブルー、愛香。旧式で性能限界と思われていたブルーのギアを独自に進化させるなど、もっとも使いこなしていると言っても過言ではない。そして旧アナザーブルー、尊。愛香の代打を務めるのが変身のきっかけだったためか、彼女が苦手とする属性玉や戦法を駆使して戦った。初号作ゆえに性能自体はギアの中で最も低いブルーのギアだが、その分汎用性が高く、多くの戦闘経験を蓄積した。重ねられてきたテイルブルーの歴史が、今回の真なるアナザーブルー誕生に繋がったのだ。



▲旧アナザーテイルブルー。
愛香が戦えない時の助っ人だった。

あとツインテールがき

　今回も、イラストの春日かすが様や担当の濱はま田だ様、完成と出版に携たずさわる全ての方、そして読者の皆様に、感謝とツインテールを！（先出し）

　さて、今回から『俺、ツインテールになります。』最終章開始です。

　これまで、色々なエレメリアンが登場しました。動物、魚、虫、植物、絶滅生物と古代生物に、神話の生物、さらには神など……。

　多くの敵キャラが、長きにわたって物語を支ささえてくれました。

　そんなエレメリアンたちの情報が、ツインテイルズと一緒にいつか図鑑のような、ひとまとめの本になれば素敵だなと常々思っています。

　そういえばこのシリーズを刊行しているガガガ文庫は、通販サイトで「図鑑」で検索すると真っ先に出てくるでお馴な染じみの図鑑の大手、小学館様のレーベルなのですね。

　いえ、だから別にどうというわけではないのですが、風の噂ではガガガ文庫は二〇一九年三月現在、オフィシャル通販ショップで売る商品のアイディア募集しているみたいですね。

〒１０１-８００１　東京都千代田区一ツ橋２-３-１

小学館　第四コミック局　ガガガ文庫編集部

「俺ツイの設定資料本出してください」係

水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。俺ツイは４月開始なので一般的なヒーローものとは時期がずれているのですが、今回はいわゆるクリスマス商戦シーズンの雰囲気を意識して書きました。最終戦間近で一見ほのぼの日常回なのにヤバい敵が出てきて、じゃあこっちも販促……もとい出せる戦力出しまくって戦おうぜ、というアレです。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。17

２０１９年３月19日　電子書籍版発行

著　者　水沢　夢

発行人　立川義剛

編集人　星野博規

編　集　濱田廣幸

発行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

底　本　２０１９年３月24日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451776-7



GAHO
ガ報
No.143
ガガガ文庫
3月刊
絶賛発売中!!!
サクラサク季節に、
ががは早くも
満開咲き!!
俺らしレッド!
最強最後のエレメリアンたち
アルティメギル首領の
名の下に侵攻を開始する
最強最後となる
神のエレメリアンたち。
そして彼らは、
思わぬところから
テイルレッドの正体へと
近づいていく……
決戦の時は近い。
ついにツインテール最終章へ!
定価:本体630円+税
著者コメント
決戦が近づく17巻。今回は物語がここまで来たからこそのドリームマッチもありますので、お楽しみに!!
[俺、ツインテールになります。17]
著:水沢 夢 イラスト:春日 歩


生徒会長選挙が近づくなか、
業平はエリアスと大福の両方から
応援演説人を頼まれる。
困った業平だが、同時に
現生徒会長から選挙への
出馬を依頼されて……?
波乱の幕開けな
残念系異能力者の
青春未満
ラブコメ第6弾!
残念系異能力者、
生徒会長に立候補!?
定価:本体593円+税
著者コメント
友達が(ほぼ)いない主人公が諸事情で生徒会長選挙に立候補します! 生き様を見てやってください!
[物理的に孤立している俺の高校生活6]
著:森田季節 イラスト:Mika Pikazo


ヨゴレ仕事ばかりを請け負う、
うだつのあがらない脚本家・竹田雲太。
ある日彼のところに「金を返せ」という
少女が押しかけてくる。
だが、その理由には彼女の大事な
思いがこもっていた。
クリエイター再起の物語!!
大きな仕事。
されどそいつは
曰わく付き！
定価：本体574円＋税
ますもとたくや
ILLUST. 裕
きゃくほんかのセリフ!
著者コメント
ほぼフィクションです。ほぼ。
［きゃくほんかのセリフ!］
著：ますもとたくや　イラスト：裕（ゆう）


新メンバー選抜合宿がスタート!
そこに現れたのは、
宿敵である生徒会長の妹・藤桐希理。
一見アイドルと無縁な彼女には、
ある秘めた想いがあって?
冴えない彼女と目指す
トップアイドル育成ラブコメ第2弾!
夏だ！ 合宿だ！ オーディションだ！
定価:本体611円+税
著者コメント
夢と希望、汗と涙がつまったオーディション合宿だよ。「歌!ダンス! 温泉! 水着! とにかく走れ!」な感じだよ。
［NGな彼女。は推せますか? 2］
著:海津ゆたか イラスト:前屋 進



風奉ハルが、消える――？
定価:本体593円+税
魔法少女さんだいめっ☆3
栗ノ原草介
イラスト:風の子
著者コメント
魔法少女を継がされてしまった少年の物語が完結します。最後まで見届けていただけると幸いです！
再来したシナモンは、
なんとコロネを元の姿に戻してしまった！
最強の悪魔と化したコロネに、
防戦一方の満咲たち。さらに、ハルが
スプリング・ウィンドから
戻れなくなってしまい――？
［魔法少女さんだいめっ☆3］
著:栗ノ原草介　イラスト:風の子


その剣が断ち切るものは——!!
ガガガブックス
GAGAGA BOOKS
定価:本体1,200円+税
元将軍のアンデッドナイト3
UNDEAD KNIGHT
of Former General
III
猫子
晩杯あきら
GAGAGA BOOKS
コミカライズ
企画進行中
!!!!!
著者コメント
蘇った大英雄ランベールの物語、第三巻です! 今巻も、これでもかというくらいの強敵と、自分の思う最高に格好いい主人公像を書いていきましたのでお楽しみに!
「笛吹き悪魔」の八賢者が一人、
マンジーを倒したランベールは
次なる街へと向かう。
レギオス王国に仇為す「笛吹き悪魔」を
根絶やしにするために向かった先で、
再び戦いの血風が吹き荒れる!!
[元将軍のアンデッドナイト3]
著:猫子 イラスト:晩杯あきら

『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』アニメ３期制作決定記念企画

原作完結間近!! & アニメ3期制作決定!!

「俺ガイル」声優陣!からのメッセージ!!!!

青春ラブコメの金字塔「俺ガイル」がもうすぐ完結!「祭りじゃ〜!!」な一方で「俺ガイル」ロスが心配なみんなにも朗報!! **アニメ3期が制作決定いたしました!!** ということで今回は、「俺ガイル」の世界にどっぷり浸かってきたキャスト さん達に熱いコメントをいただきました!!!

❶原作完結にむけて
❷アニメ3期への意気込み!



比企谷八幡役

江口拓也さん

①ついに完結ですか。まずは、渡先生お疲れ様です。思い返すと僕自身、八幡には20代前半の頃からお世話になっています。**彼のおかげで今の僕があると言っても過言ではありません。**そんな作品の完結。**見たいような見たくないような、でもやっぱり見たい。**彼らがどんな答えに辿り着くのか。1ファンとして楽しみにしたいと思います。
②**また八幡に声を当てられる。そして、俺ガイルの世界と関われる。こんなに嬉しいことはありません。**作品を書き続けてくれた先生、応援し続けて下さったファンの皆様に感謝です。どんな台本になるかまだ全然わからないですが、**受け取ったものを全力で演じたいと思います。**今からとても楽しみです!



雪ノ下雪乃役

早見沙織さん

①**感慨深いです。**八幡をはじめ、皆がここまで歩んできた道のことを思うと尚更です。1期の頃から定期的に俺ガイルメンバーとは集まっているのですが、**時が流れるのはあっという間だなあ、としみじみ思います。**
②再び雪乃として皆様と掛け合いができるなんて…! 本当に嬉しいですし、今からどきどきしています。**既に俺ガイルの世界に入っている方もこれからの方も、アニメを見てぎゅっと俺ガイル色に染まってくださいませ!**



由比ヶ浜結衣役

東山奈央さん

①「いよいよこの時がやってきたんだ」とラストが気になる一方で、結衣を演じる私としては、**この先を知るのがちょっと怖い気持ちもあります。**いやいや本当に分からないのですけどね! よく「俺ガイル飲み」をしていても、結末の話はしたことがないので! ただアニメ2期のラストは、かなり複雑な心境な結衣だったので、このまま奉仕部がどうなってしまうのか…。今はまったく結末が想像できませんが**「本物」を手に入れることができるのか、絶対に見届けたいと思います!**
②初めて3期のことをうかがったときは、**大きな声で驚いてしまいました(笑)。**また結衣と日々を過ごせることを嬉しく思います! それと同時に、大好きで大切すぎるゆえに、結衣を演じるにはアフレコまでの準備や心の助走にも、かなりエネルギーを必要とする毎日だったので、今から心して挑みたいと思います。**俺ガイル、完結まで変わらぬ応援をぜひよろしくお願いいたします!**



一色いろは役

佐倉綾音さん

①**この作品を最後まで見届けられるのは、嬉しいような寂しいような、もう少しこのキャラクターたちと一緒にお芝居していたいなぁとやっぱり寂しい気持ちになっています。**何はともあれ渡先生、お疲れさまでした!… と言いたいところですが、3期に向けてまだお仕事が残っていると思うので引き続き頑張ってください!
②いよいよ第3期、これもひとえに応援してくださった皆さまのおかげです。**原作のあんなシーンやこんなシーンがどこまで映像で見られるのか、ぜひ楽しみにお待ちください。**



みなさん、ありがとうございました! 原作⑭巻、アニメ3期もご期待ください!

イラスト:ぽんかん⑧

GAGAGA headline

ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し原作とは異なる魅力を発信中!
このコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

アニメ　コップクラフト DRAGNET MIRAGE RELOADED

メインビジュアル、キャスト&スタッフが解禁!

今夏放送予定のTVアニメ『コップクラフト』。そのメインビジュアルと、キャスト&スタッフ情報を公開!



[CAST]
ケイ・マトバ:津田健次郎
ティラナ・エクセディリカ:吉岡茉祐

[STAFF]
監督:板垣 伸
シリーズ構成:賀東招二
キャラクターデザイン:木村博美
アニメーション制作:ミルパンセ

アニメ　やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。

アニメ第3期制作決定!



待望のアニメ3期が制作決定!! いよいよ完結を迎える原作の、あのシーンやこのシーンがアニメではどう表現されるのか？ ますます目が離せない！

コミックス　レイロアの司祭さま

コミカライズ企画進行中!

「小説家になろう」にて2800万PVを突破した人気作がついに漫画化! 手がけるのは期待の新鋭shimazaki氏! 待望の原作最新4巻も「ガガガブックス」から今秋発売予定! せちがらゆるい異世界冒険活劇に今後も要注目!



原作:朧丸
キャラクター原案:野崎つばた
漫画:shimazaki

コミックス　物理的に孤立している俺の高校生活

今春よりコミカライズ連載開始!

大人気青春未満ラブコメのコミカライズ連載が、ウェブコミックサイト「MAGCOMI」にていよいよはじまる! 大注目の漫画版「物理的孤立」から目が離せない!



原作:森田季節
キャラクター原案:Mika Pikazo
漫画:らま


いま、リアル世代にもっとも
支持される青春ラブコメ。
初の特装版!!
「このライトノベルがすごい!」
(宝島社刊)
3年連続
TOP10&
10代後半の得票率
第1位!
イラスト／フライ

書店員さんとガガガくん

GAGAGA
ガガガくん

「俺ガイル」をはじめとして、ますます盛り上がりを見せる青春ラブコメ！ これを機にガガガの青春ラブコメを一気読みもどうカナ?!

今月の書店員さん



GAGAGA SUPPORTER SHOP

アニメイト津田沼 松坂幸和さん

住所:〒275-0026 千葉県習志野市谷津1-16-1モリシアビルレストラン5F 電話番号:047-403-2424
営業時間:10:00〜21:30 定休日:なし(年末年始短縮営業あり) URL:https://www.animate.co.jp/shop/tsudanuma/

売り場は話題の多い作品を目立つ展開にしています。さらにスタッフのお手製おすすめPOPでお迎えいたします！

松坂さんのオススメ本



［弱キャラ友崎くん］

弱キャラな主人公が美少女指南の下、リア充を目指します。この春リア充を目指す方は1冊いかがでしょうか？



▶新旧取り揃えてぎっちり詰まったガガガ文庫の棚に、大迫力の面陳と愛ある手書きPOP!! 至れり尽くせりダネ!!

編集後記

・温泉行きたい！ 温泉行きたい！ 温泉行きたい！（☆）
・人間ドックで悪玉コレステロールが多いといわれた！ 減らす方法ググり中。（湯）
・この年で料理の楽しさに目覚めました！（濱）
・珈琲ハイボール、私気になります。（岩）
・応援している人が幸せになっていく過程をみるのは楽しい。（小）
・新人賞も決まり、担当作は例年以上に充実のラインアップ！ そして仕事量も…フフ…タスケテ…。（田）
・最近、ジムでめちゃ喘ぐ筋トレマンと二人きりになるので、怖い動画見て笑わずに耐えてます。（林）

編集部への質問もこちら!!

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○（作者名）宛